

京都滋賀 体育学 研究

創立 60 周年記念号

京都滋賀体育学会 60 年のあゆみ
専門分科会の歩みと思い出

学会の思い出

60 周年記念行事

60 周年記念講演要旨

中井誠一：熱中症の根絶をめざして

京都マラソンシンポジウム講演録

論文

松永 敬子他：京都マラソンにおけるボランティアの参加動機構造

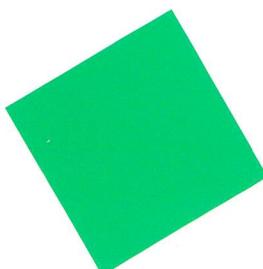
長積 仁他：京都マラソン開催の社会的インパクトに対する市民の認識
と大会開催意図との関係

二宮 浩宏他：ランニングの専門試行化からみたスポーツ消費者行動：
京都マラソン 2012 の参加に伴うランナーの消費支出

60 周年記念大会報告（短報）

磯崎 大二郎他：傾斜坂が走り高跳びの踏切動作に与える即目的効果

大桐 将他 半構造化面接法による歩行の動作観察の比較検討



京都滋賀体育学会

第 29 卷
第 2 号
平成 26 年 2 月

目 次

挨拶・祝辞

60周年を迎えて	岡本 直輝	1
京都滋賀体育学会 60周年に寄せて	山西 哲郎	2
お祝いのことば	川合 英之	3
「京都滋賀体育学会 60年のあゆみ」の発刊を祝して	森田 育孝	4

京都滋賀体育学会 60年のあゆみ

芳田 哲也	5
-------	---

専門分科会の歩みと思い出

発育発達専門分科会の歩み	大山 肇	44
運動生理学分科会の歩み	来田 宣幸	45
バイオメカニクス専門分科会の歩み	野村 照夫	46
体育社会・心理専門分科会の歩み	藤田 登	47
体育指導部会の歩みとよもやま話	増田 洋	48
体育原理・歴史専門分科会の歩みと思い出	岡尾 恵市	49
体育経営管理専門分科会の歩み	中 比呂志	49

学会の思い出

地方学会の活動に期待する	寺田 光世	84
新制大学誕生プレ前夜「アメリカ教育視察団来校」	小野 桂市	84
京都滋賀体育学会へ発展の節目にあたり	八木 保	89
京都滋賀体育学会 60周年に思う	藤田 登	90
日本体育学会第38回大会の取り組み	岡本 直輝	91

60周年記念行事

60周年記念講演要旨

熱中症の根絶をめざして	中井 誠一	94
京都マラソンシンポジウム講演録		100

論文

京都マラソンにおけるボランティアの参加動機構造		119
松永 敬子 他		
京都マラソン開催の社会的インパクトに対する		127
市民の認識と大会開催意図との関係		
長積 仁 他		
ランニングの専門試行化からみたスポーツ消費者行動:		137
京都マラソン 2012 の参加に伴うランナーの消費支出		
二宮 浩宏 他		

60周年記念大会報告（短報）

傾斜坂が走り高跳びの踏切動作に与える即目的効果		145
磯崎大二郎 他		
半構造化面接法による歩行の動作観察の比較検討		149
大桐 将 他		

編集後記

広告



60周年を迎えて

京都滋賀体育学会会長 岡本 直輝
(立命館大学)

京都滋賀体育学会が60周年を迎えたことを心からお慶び申し上げます。現理事会は先輩方が築かれた歴史の重みを感じながら、学会運営に取り組んで参りました。

その活動の中で、京都体育学会から京都滋賀体育学会へと名称を改める大きな決断を致しました。本学会は京都府はじめ滋賀県で勤務する会員で構成されており、日本体育学会の地域(支部)として会員の活動を支援する業務を担っています。近年、滋賀県で活躍するびわこ成蹊スポーツ大学や立命館大学スポーツ健康科学部の会員が増えている状況です。さらに平成25年8月(平成25年)に日本体育学会第64回大会が立命館大学びわこくさつキャンパス(滋賀県草津市)で開催されることが決定したこともあり、京都府ばかりでなく滋賀県を含めた地方会であることを全国に発信すべきだと考え学会名称の変更に至りました。

平成24年度の京都滋賀体育学会大会が142回を迎えました。現在の大会は年間1回の開催ですが、十数年ほど前までは年間2回、3回と開催し活発な研究発表が行われてきました。1980年代後半からは、体育からスポーツへと名称を変更していく大学授業のあり方や一般教養としての必修化の課題等についても活発に議論されていました。またスポーツ・健康・栄養といったコースや学科をはじめ学部の設置などの情報共有の場としても役割を担ってきました。

少子高齢化を迎えた現在、新しい視点で学会のあり方を議論する必要があると考え2007年から役員選挙制度の改革をし(郵送による投票)、会長推薦理事制度を設け若い先生方の意見も積極的に取り入れる仕組みを作っていました。また学会大会において「若手研究奨励賞」、京都滋賀体育学研究の中から「奨励論文賞」の選定、「研究基金学術研究の募集」や「研究集会の推進」など研究推進の取り組みを行ってきました。さらに他の地方学会に魅力を打ち出すために、京都府や京都市との連携事業なども積極的に進めてきました。これも会員のご理解の賜と感謝申し上げます。

今後さらに小学校・中学校・高等学校で勤務されている先生方やスポーツに関わる方々が、本学会に魅力を感じて頂くような取り組みを京都府や滋賀県の教育委員会や体育協会等と連携しながら進めていく必要があると考えています。3月に開催した60周年記念シンポジウムでは、地域連携を発展させる期待を込めてスポーツビジネス界の方々や行政の方々とともに「京都マラソンシンポジウム」を開催してきました。マラソン参加者や行政の方々そして市民と共に活発な議論できたことを大変喜んでいます。さらに本学会を飛躍させていくことが我々会員の責務かと考えています。

体育・スポーツ・健康に関する多くの学会が運営されていく中で、京都滋賀体育学会は一般社団法人日本体育学会の地域(支部)としての活動ばかりでなく、京都・滋賀のスポーツ活動に貢献していく新たな地方学会のあり方を議論し実践しなければなりません。2020年に開催される東京オリンピックに向けた京都府や滋賀県の取り組みへの支援、そして2024年に開催が決定した滋賀国体への地域連携等が益々求められることでしょう。

今後ともぜひ京都滋賀体育学会の発展のために会員の皆様方のご支援を賜りますよう何卒宜しくお願い致します。

京都滋賀体育学会 60周年に寄せて



第31代日本体育学会会長 山西 哲郎

歴史は過去から現代、そして未来の希望の光を示すもの。これは京都滋賀体育学会の60周年の歩みからこの言葉が浮かんできました。長年にわたって貴学会活動の発展と継続され多大な学問研究成果をあげられた会員の皆様に日本体育学会を代表して感動と感謝のお礼を述べさせていただきます。

さて、私たちが日本体育学会のこれから道をいかに進むべきか検討するなかで、貴学会のこれまでの学会活動の歴史を振り返ると、大きな提言と力を授かるのです。それは日本体育学会の発足からわずか2年で創設され、発足当時から貴学会活動は本学会と連動、いや先行するほど、専門分科会の設立や学会大会の開催、研究紀要の発刊などの事業によって行われ他の支部の模範となってきたことから知ることができます。

また、日本体育学会60年記念史によれば、これまで貴学会が成果を上げながら発展してきたのは、京都・滋賀が歴史と学問と文化の豊かな風土であったからであり、そこで理系と文系、実践と理論という調和がとれた体育・スポーツの研究、教育によって多くの会員を輩出されたのではと思えてきます。1970年代に開催されていた京都マラソンはまだエリートの大会でしたが、私は学生とともに京都の町を多くの観衆に声援されながら走った時、大会の運営や市民の支援に質的な高さを感じていました。やがて、2001年から京都シティーマラソンの前日に貴学会が市民ランナーのための講演会を開催され地域貢献活動を鑑みることができました。

現在、スポーツ・体育界は国民の健康体力、東日本震災活動、学習指導要領、スポーツ基本法、暴力や体罰、オリンピックなどに関する多くの課題を抱え、その解決に日本体育学会は努力していますが、それらを解決するには至ってはいません。それは日本体育学会の60年の経過のなかで、各専門分科会は独立学会を設立するほど研究活動は進みスポーツ科学は発展をしてきましたが、このような課題を学術的に解決することが困難になっていると考えられます。そこで、本学会が本来の総合的学問の本質に戻って、地域、専門領域の共通するミッションを抱き、専門領域の学際的研究や社会貢献するための「公益性」と「公共性」を持てる研究の展開、そして、体育・スポーツ系学術連合、健康・スポーツ科学関連分科会の連携活動の中核になるといった目標をもって進まなくてはなりません。その目標の一つに旧支部である地域学会の活性化があり、それを京都滋賀体育学会が全国のリーダーシップ的存在になって諸課題解決のための活動していただくよう期待しています。

今年、行われる日本体育学会第64回大会のテーマは「未来に生きる体育・スポーツ・健康」。この言葉が過去から現代、そして未来への体育・スポーツの新なる道と信じ、この夏、貴学会の方々にお会いすることを楽しみにしています。

2013年の春風を感じつつ記す

お祝いのことば

京都府教育府指導部
保健体育課長 川合 英之

このたび京都滋賀体育学会が創立60周年を迎えられ、その歩みをまとめられた学会誌記念号を発刊されますことを心からお喜び申し上げます。

貴学会には、日頃から京滋のスポーツ振興、とりわけスポーツ科学の発展に大きく寄与いただいておりますことに深く感謝申し上げます。

また、学会員の皆様には、京都府の学校における保健体育科教育をはじめ、生涯スポーツの振興、競技力向上等の様々な分野で御指導・御支援いただきており、重ねて厚くお礼申し上げます。

平成24年に文部科学省で策定された「スポーツ基本計画」では、スポーツの意義や価値が広く国民に共有され、より多くの人々がスポーツの楽しさや感動を分かち互いに支え合う「新たなスポーツ文化」の確立を目指すとされています。

我々スポーツ振興に携わる者として、人々にスポーツの意義や価値を伝え実践していただくには、それまでの経験から伝えることも大切ですが、科学的根拠を持って運動・スポーツの効果や成果をしっかりと示していく必要があると考えております。

その中核となるのが、様々な体育・スポーツ分野で研究を重ねていただいている貴学会であり、今後より一層それぞれのお取組を充実させていただき、京滋のみならず我が国のスポーツ科学の発展、ひいてはスポーツの振興に寄与されますことを期待しております。

終わりに、このたびの創設60周年を契機とされ、京都滋賀体育学会がますます充実・発展されますことを祈念しお祝いのことばといたします。

「京都滋賀体育学会60年の歩み」の発刊を祝して

京都市教育委員会体育健康教育室
体育課長 森田 育孝

このたび京都滋賀体育学会の皆様が、学会創設60周年という輝かしい年を迎えて、特別記念号として「京都滋賀体育学会60年のあゆみ」を発刊されますことを心からお祝い申し上げます。

昭和27年の学会発足よりこの方、大学体育関係者の先人の皆様方の並々ならぬご努力とご苦労が結実し、京都ならではの先駆的な気風と創意あふれる学術研究の不動の要衝となるまでに隆々発展しつつ、京都滋賀体育学会は全国をリードする様々な活動の充実・活性化を図ってこられたと伺っております。

わが国でスポーツ振興法が制定されるより10年も早く、貴学会独自の特色ある活動の胎動が育まれ、とりわけ発育発達専門分科会をはじめ様々なテーマの専門分科会による活動も盛んに行われるなど、体育分野での学術・知見の深化・発展に大きく貢献してこられており、今日、スポーツ基本法やスポーツ基本計画が定められ、国民における体育・スポーツ活動の意義が大きく位置づけられる中で、京都滋賀体育学会の皆様の役割がますます重要となってきているものと確信するものであります。

ご承知のように、現代社会における体育活動は、世界共通の人類の文化として、まさに人々が幸福で豊かな生活を営むための、全ての人々の権利として位置づけられ、次代を担う青少年の体力向上や他者を尊重し協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な思考力や判断力を育むなど、人格形成に大きな影響を及ぼすものとして意義づけられるようになりました。

しかしながら、京都市においても子どもたちの体力低下や運動習慣の二極化の課題や、小学校から中・高等学校等の体育活動における課題をふまえた、日々の体育科の授業改善はもとより、小学校大文字駅伝大会や中・高校における運動部活動の活性化をはじめ、体力向上等に向けた取組の一層の充実が求められております。

このような中、京都滋賀体育学会の皆様の学術研究の一端をお伺いする中で、子どもたちの体力とは何か、様々な課題の多い今日の生活環境下における体育・スポーツ活動のあり方、将来社会における学校体育のあるべき姿とはどのようなものか、…等々に思考を巡らせ、多くの刺激をいただいたところであります。今後、本市の子どもたちの体力の現状や学校体育のあり方などに対する専門的な観点からの分析・評価等も加え、子どもたちの健康と生涯スポーツの基盤づくりに向けた、未来志向の新たなパースペクティブを探ることも極めて重要ではないかと考えるところであります。

京都滋賀体育学会の皆様方におかれましては、今後とも本市学校体育に対するご指導・ご協力を賜りますとともに、この60周年を機に、各分野でのご研究はもとより、専門分野の境を越えた実践的なテーマでの研究・発表の活性化や、大学院生など若手研究者の論文投稿奨励などを通して、広く市民・国民の体育・スポーツ活動のための確かな礎を築かれ、その振興に向けて一層ご活躍されますことを祈念申し上げ、発刊のお祝いとさせていただきます。

京都滋賀体育学会60年のあゆみ

1983 年から 2013 年までの 30 年を中心に

京都滋賀体育学会副会長 芳田 哲也
60 周年記念行事実行委員会委員長
(京都工芸繊維大学)

1. はじめに

昭和25(1950) 年の日本体育学会設立から 2 年後の昭和27(1952) 年に「日本体育学会京都支部(京都体育学会)」は創設され、本学会は設立より 60 年が経過した。この間、大学の新設や移転による滋賀県在住の学会会員が増加したので、平成24 年(2012 年)に「京都滋賀体育学会」として名称を変更し、平成25 年 3 月には60周年記念大会を開催した。親学会である「日本体育学会」は平成22(2010) 年に60周年を迎える際、「日本体育学会60周年記念誌」に「～京都支部58年のあゆみ」

の執筆を依頼され寄稿したのは、当時庶務理事であった芳田(京都工芸繊維大学)である。これが発端か否かは明らかでないが、京都滋賀体育学会60周年記念行事実行委員会を本学会の理事を中心に組織し、その委員長として記念行事のお世話をさせて頂いた。本学会では昭和57(1982) 年に設立30 年を記念して「京都体育学会30 年のあゆみ」を発刊している。そこで本稿では1983 年から2013 年までの30 年を中心に、毎年発行している「学会たより」を参考に本学会の活動を回顧する。

2. 京都体育学会(日本体育学会京都支部)の設立

京都では昭和23(1948) 年に「関西スポーツ学事研究会(会長: 笹川久吾京都大学教授)」や文部省主催の第 2 回運動医学講習会が開催されるなど、体育・スポーツに関する学問的研究の素地が芽生えつつあり、「京都体育学会」を設立しようとする機運が高まっていたようである。そこで昭和26(1951) 年 2 月に日本体育学会京都支部設立準備世話人会(川端愛義〔京都大学〕・木村静雄〔立命館大学〕・塚本齋之助〔同志社大学〕・横川

隆範〔京学大学〕)が行われ、翌年の昭和27 年 7 月 5 日、川端愛義氏(京都大学)が初代会長となり「日本体育学会京都支部」発足の総会ならびに第 1 回研究発表会が京都大学吉田分校で開催された。この研究会では一般演題10題、特別講演 2 題(川端愛義、健康と健康度; 福田精〔岐阜大学〕、スポーツのユニフォーム)が発表された(「京都体育学会30 年のあゆみ」より)。

3. これまでの学会大会・総会および学会員数

昭和27(1952) 年～昭和34(1959) 年は学会大会および総会を毎年 1 回開催していたが、昭和35(1960) 年以降は各年度に学会大会を 2 ～ 3 回開催している。学会大会・総会は昭和27(1952) 年～昭和36(1961) 年まで 12 回開催され、昭和36(1961) 年の第 12 回学会大会・総会が第 1 回研究会になっている(「京都体育学会30 年のあゆみ」

より)。60周年を記念した平成24 年度の第 142 回大会(平成25(2013) 年 3 月)は第 1 回研究会から数えた回数であり、昭和27(1952) 年～昭和36(1961) 年までの 11 回の大会を加算すると、第 142 回大会は学会創設より第 153 回目の学会大会(研究会・研究発表会)となる。1 年に複数回開催された学会大会では演題数が少なく(表 1 :「学会

たより」には第76回大会(昭和56(1981)年)より第122回大会(平成9(1997)年)まで学会会員による発表者の所属の記載無し)、総会は年度末の3月に実施していたが、参加者が少數であった。そこで平成14(2002)年より学会大会を年1回とし、当時に総会を実施するように変更した結果、発表演題数は増加し(図1)、特にびわこ成蹊スポーツ大学にて実施された平成23年度の第141回大会(平成24(2012)年3月)では35題の発表が

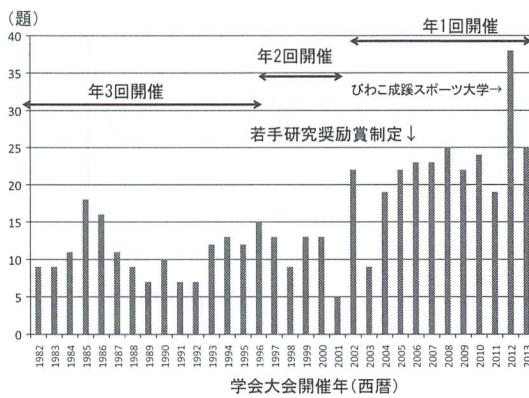


図1 学会大会における年間発表演題数

同志社大学	6	京都府立大学	3
京都大学	5	滋賀大学	3
京都教育大学	5	平安女学院大学	3
京都工芸繊維大学	5	池坊短期大学	2
大谷大学	4	京都産業大学	2
京都光華女子大学	4	同志社女子大学	2
京都女子大学	4	佛教大学	2
立命館大学	4	京都芸術短期大学	1
龍谷大学	4	京都薬科大学	1
京都外国语大学	3	びわこ成蹊スポーツ大学	1
京都ノートルダム女子大学	3		

図3 第77回(1982)～142回(2013)までの学会開催大学一覧と開催回数

あった。第141回大会では初めてポスター発表を取り入れ、発表内容に関するショートスピーチも行ったユニークな大会となった。参加者についても近年では60名を超える学会大会になっている(図2の空欄は資料が見当たらなかったため、参加人数が不明)。学会大会における発表要旨(200字)は87回大会(昭和60(1985)年)より日本体育学会京都支部活動報告として「体育の科学」(杏林書院)に掲載され現在に至っている。第133回

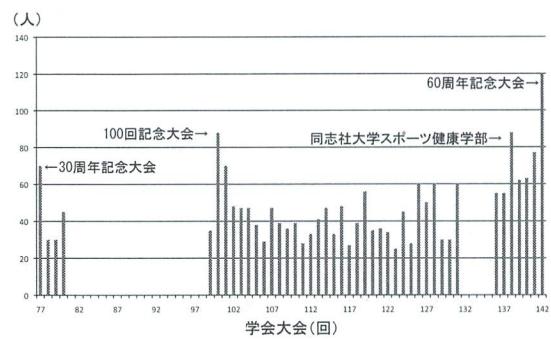


図2 学会大会参加者数

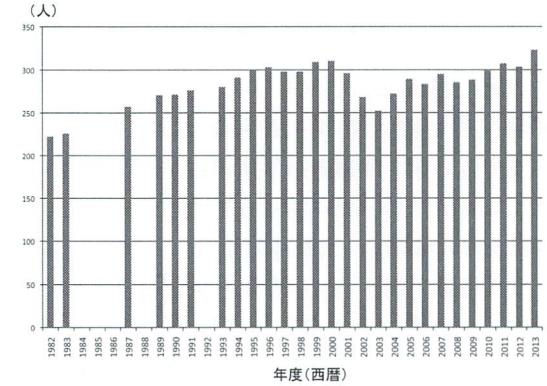
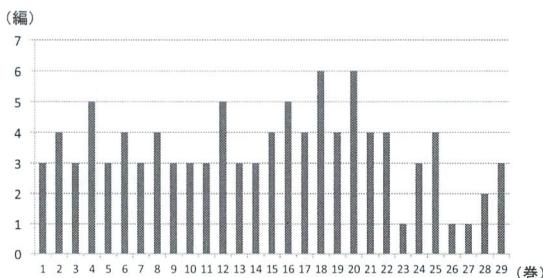


図4 年度別正会員数

図5 京都(滋賀)体育学研究の掲載論文数
(原著・資料・報告)

大会(平成16(2004)年)まで学会大会の発表抄録には一定の形式を定めていなかったが、第134回大会(平成17(2005)年)より日本体育学会の発表抄録に準じて抄録集を作成し、企業広告を掲載して大会運営資金の一部を得るようになった。また学会大会の担当は各大学の輪番にて実施されていたようであるが、最近では学会役員(理事)を勤めている大学を優先して理事会にて推薦し、第134回大会(平成17(2005)年)より大会長を決めて開催している。第77回(昭和57(1982)年)~142回(平成25(2013)年)の学会大会開催大学は同志社

大学(6回)が最も多く、次いで京都大学・京都教育大学・京都工芸繊維大学(いずれも5回)となっている(図3)。学会員数については昭和62(1987)年より250名を超えて増加傾向にあったが、平成15(2003)年には会員名簿を整理したために一時的に減少した。その後再び増加し平成25(2013)年には323名となり過去最高の会員数を記録した(図4の空欄は資料が見当たらなかったため、会員数が不明)。

4. 講演会・シンポジウム・日本体育学会の開催

講演会やシンポジウムは理事会の担当者や専門分科会等の世話人が地方公共団体や他の学会と協賛し、または海外の著名な研究者を招いて学会大会とは別の日に開催していた。近年では学会大会に組み込まれて開催される場合が増えている(表2)。昭和62(1987)年には第38回日本体育学会を立命館大学にて開催し(別ページに報告有り)、平成元(1989)年には100回大会記念の講演やシンポジウムを同志社大学が担当してホリディ・イン京都にて開催した。平成13(2001)年~16(2004)年には京都シティーハーフマラソン前日に一般市民向け講演会を開催し、平成17(2005)年~19(2007)年には京都市教育委員会と共同で「子どもの体力を考えるシンポジウム」を開催した。さらに平成19(2007)年度より中学・高校の指導者が現場の体育指導に関する取り組みや問題点を紹

介し、学会会員と共に論議する「実践研究会」を学会大会時に開催している。平成25(2013)年3月に開催した60周年記念シンポジウムでは「京都マラソン」を題材に取り上げ、多方面からシンポジストを招き多くの協賛を得て充実したシンポジウムを開催した。また同日には60周年記念講演会として中井誠一氏(京都女子大学)に「熱中症の根絶をめざして」と題して、長年の熱中症予防研究について熱弁して頂いた。また同日開催された第142回大会(60周年記念大会)では「60周年記念パーティー」(懇親会)が開催され、学会の名誉会員や顧問の先生方をご招待してご挨拶を賜り、昔話で盛り上がった。さらに、平成25(2013)年8月28~30日に立命館大学びわこ草津キャンパスにて第64回日本体育学会が開催された。その活動報告については次巻以降の掲載が待たれる。

5. 学会の会則や規程の改訂

京都滋賀体育学研究第29巻1号の末尾に掲載されている会則の改正記録を見ると昭和27(1952)年7月5日の制定施行以来、14回の改正が実施されている。以下は近年の新しい規程の制定や会則の改正内容である。

学会賞：平成17(2005)年3月に「京都体育学会賞」を制定し、学会大会の中で若手研究者(40歳未満)の優秀な発表には出席者の投票により「若手研究奨励賞」を、「京都体育学研究」に掲載

された研究論文の中から今後の発展が期待できる論文について「奨励論文賞」を選定し、原則として総会時に表彰および副賞を贈呈している。第142回大会(平成25(2013)年3月)は60周年記念大会であったため、懇親会時に初めて「若手研究奨励賞」の発表と表彰を行った。「奨励論文賞」については掲載論文数が少ないために当該年度の受賞者に「該当なし」が多く見られるが、「若手研究奨励賞」は平成16(2004)年~平成24(2012)年

度までの9年間に13名の若手研究者が受賞している(表3、表4参照)。いずれの賞も学会の活性化を目的として制定されたもので、近年、大学院生による学会大会の研究発表や参加者が多く、これには「若手研究奨励賞」の制定が大きく寄与していると思われる。

役員：平成19(2007)年以前では、2年任期による役員の改選は総会の出席者による投票で選出していた。このような選挙制度では学会会員の意見が反映されにくいので、平成20(2008)年度より学会会則を改訂し、役員改選は選挙権を有する会員全員を対象とした郵送による投票とし、さらに会長推薦理事を数名選出することにした。従来、本学会では「会長」は学会の代表者、「理事長」は理事会の代表者と位置づけてきたが、理事会のメンバーに会長や副会長が存在するために本学会の最高責任者は誰なのか?不明瞭であるとの指摘を郵便局等から受けている。そこで、平成25(2013)年には「理事長」を「常務理事」に名称変更し、「会長は会を代表して会務を総括する」、「常務理事は会及び理事会を運営する」など、役員の役割を会則に明記した。

研究助成：学会員の研究活動を奨励援助し、学会の活性化と社会貢献を目的として平成21(2009)年に「京都体育学会研究基金に関する規程」を制定し、京都滋賀体育学研究や学会ホームページに掲載して学会員に広く公募し、理事会の

審議を経て研究費を助成する制度を開始した。現在までに8件の研究課題が採択されている(表5参照)。採択された研究については翌年の学会大会に発表し、さらに京都滋賀体育学研究に報告書として論文投稿することを義務づけている。したがってこの制度は学会大会の発表数や論文投稿数の増加に貢献しているので、研究助成の目的の一つである「学会の活性化」は達成できていると思われる。

専門分科会：本学会では昭和39(1964)年に①発育発達、②運動生理、③キネシオロジー専門分科会(昭和54(1979)年にバイオメカニクス分科会に名称変更)、昭和40(1965)年に④社会体育・心理学専門分科会、昭和41(1966)年に⑤指導部専門分科会、昭和47(1972)年に⑥体育原理・体育史分科会、昭和57(1982)年に⑦体育経営管理専門分科会が発足し、体育・スポーツに関する分野別研究が積極的に実施されてきた(専門分科会の欄参照)。しかし近年では講演会や研究発表会を開催している専門分科会が限定されるようになり、未開催の分科会がみられるようになった。そこで専門分科会のあり方について理事会で数年に渡って議論した結果、平成24(2012)年より「専門分科会規程」を廃止し、代わりに若手研究者を中心とする「研究集会規程」を制定して、広く学会員に公募し補助金を助成している。

6. 「京都(滋賀)体育学研究」

毎年1回(または2回)発刊している本学会の機関誌「京都(滋賀)体育学研究」は昭和61(1986)年2月に第1巻が発刊され平成25年度で第29巻となる。この間、第14巻と15巻のみ平成11(1999)年に2回発刊し、29巻は60周年記念号として第2号が発刊された。学会会員の投稿論文はもとより、「奨励論文賞」の対象となる研究や助成金の報告論文、講演会や学会大会の研究発表等を広く掲載している(表6：雑誌の表紙より開始ページ、論文の種類、著者名、タイトルを抜粋した)。掲載される論文数(図5)は3～5編程度で

あるが、23巻以降は1編のみの巻もあり、今後、学会会員の積極的な投稿が期待される。本学会の専門分科会や研究集会の活動内容、会計報告や総会・理事会の議事録等を纏めた「学会たより」はNo.22(平成18(2006)年)より京都体育学研究の巻末に記載されるようになり、平成25(2013)年ではNo.36となる。「学会たより」は本学会の歴史を紐解くには必要不可欠な資料である。個人情報保護の観点から、2年ごとに掲載していた会員名簿および住所録は第20巻を最終として廃止した。

7. ホームページの開設と今後の展望

本学会では、長年の懸案事項であった京都滋賀体育学会のホームページ「<http://kyoto-taiiku.com/>」が当時の庶務・広報担当理事の尽力により平成23(2011)年2月5日に開設された。現在では学会大会の案内や助成金、研究集会の公募要領等が掲載されている。また学会活動を広く公開するための「学会たより」もNo.34(平成23(2011)年)より公開しているが、学会会則や規程及び京

都(滋賀)体育学研究に掲載された過去の研究論文等も、随時掲載・更新する必要がある。情報化社会ではそのセキュリティーを保つつ、学会が所有する情報をより早くより多く公表することが学会活動の活性化に繋がると思われる。今後、このホームページを有効活用できる様に努めるべきである。

8. 終わりに

京都滋賀体育学会60周年記念行事実行委員会は以下の先生方のご尽力により運営され、1)記念号(京都滋賀体育学研究第29巻2号)の作成・編集、2)記念講演・記念シンポジウムの実施、3)記念パーティー(懇親会)を開催した。ここに記して深甚なる謝意を示す。

委員長：芳田哲也(京都工芸繊維大学)

副委員長：岡本直輝(立命館大学)、野村照夫(京都工芸繊維大学)

委員：金森雅夫(びわこ成蹊スポーツ大学)、来田宣幸(京都工芸繊維大学)、竹田正樹(同志社大学)、南和広・寄本明(滋賀県立大学)

表1.1981～2013年までの学会大会における発表内容

開催年度	年月日	回数	開催大学	
	発表様式	演題名	発表者(所属)	
1981	昭和56年11月27日	76	京都女子大学	
	一般口演	体育指導者の養成について—特に社会体育領域について—	蜂須賀弘久、舛岡義明、浅野理々	
	一般口演	心拍数測定器の開発とデモンストレーション(R波を音声として導出)	辻田純三	
	特別講演	ABS合成洗剤の用途上のその「効と害」について	平田一士	
	特別講演	喫煙被害の保健衛生的寄与危険度について	平田一士	
1982	昭和57年3月9日	77	京都教育大学	
	記念講演	総会と30周年記念シンポジウム「健康と体力の今日的課題」		
1982	昭和57年6月26日	78	同志社女子大学	
	一般口演	運動選手の発汗反応の特徴について	辻田純三	
	一般口演	運動文化としての柔道に関する一考察 ～特に柔道の試合審判規定の“効果”について～	横山勝彦	
	一般口演	戦後武道の禁止と復活過程の検討～SCAP資料に基づいて～	草深直臣	
	一般口演	後藤新平の衛生論～医療の近代化とのかかわりで～	三浦正行	
1983	昭和57年11月20日	79	京都工芸織維大学	
	一般口演	ジムナストラーダ'82チューリッヒ見学	安田祐治	
	一般口演	硬式テニスボールのコンプレッションと操作性について	佐竹敏之・東隆暢	
	一般口演	後藤新平の“職業衛生法”	三浦正行	
	一般口演	体育学習における問題を持つ児童の行動変容に関する研究	浜崎博・横山一郎	
1983	昭和58年3月19日	80	大谷大学	
	特別講演	動物行動学と人間	日高敏隆(京都大学 理学部教授)	
1983	昭和58年6月25日	81	光華女子大学	
	一般口演	都市生活者の運動・スポーツ活動の意識と実態 —吹田市民のスポーツ調査から—	岡尾恵市	
	一般口演	泳ぎの起源を求めての試論—日本古代を中心として—	中森一郎	
	一般口演	成人女子の血液性状に関する一考察	田中信雄	
	一般口演	身体運動およびたん白栄養の妊婦に及ぼす影響について	山田敏男	
1983	昭和58年11月12日	82	平安女学院短大学	
	一般口演	京都市民のスポーツに関する意識	宮田和信	
	一般口演	武道とスポーツの葛藤	村山輝志	

一般口演	喘息と剣道に関する研究	綾井弘文
一般口演	物理的刺激による筋力への影響	三浦敏弘
昭和59年3月10日 83 京都産業大学		
一般口演	京都にふさわしい国体を求めて	樹岡義明
一般口演	虚血性心臓病の長期運動療法における郊外プログラムの検討	綾井弘文
一般口演	ボールゲームの色彩規定に関する一考察	宮田和信
特別講演	健康の自己管理 一ささやかな私の体験より一	柏祐賢(京都産業大学学長)
1984 昭和59年6月16日 84 龍谷大学		
一般口演	福知山藩の水術について	中森一郎
一般口演	虚血性心疾患患者の水泳指導	青戸公・浜崎博・川初清典・神原啓文
一般口演	卓球選手の体力医学的研究	田阪登紀夫
昭和59年11月10日 85 池坊短期大学		
一般口演	戦後保健行政の展開に関する一考察 — GHQ/SCAP、PH & W 資料による—	三浦正行
一般口演	一般体育における1500m走の記録の変化と考え方	小野桂市・佐路清隆
一般口演	勤労者の体力	平賀正治
一般口演	イギリスのサマースクール受講(Rugby coaching course)及び資格(Preliminary award)取得について	中村櫻
昭和60年3月16日 86 同志社大学		
一般口演	武道の思想的背景と柔道	横山勝彦
一般口演	戦後初期の国民栄養調査に関して — GHQ/SCAP、PH & W 文書にみる栄養改善対策の基礎的活動について—	三浦正行
一般口演	米国における女子格技練習者の実態調査	岸本裕行・Elinor Kishimoto
一般口演	正課保健体育実技の授業について	東隆暢
一般口演	運動時の脈拍の回帰分析とその指標について	大塚恭子
特別講演	スポーツ選手の腰部障害について	市川宣恭(大阪体育大学教授)
1985 昭和60年6月22日 87 滋賀大学 教育学部		
一般口演	現場体育教師のダンスに対するイメージ分析 —ダンス男子履修を基準として	吉田瑞穂
一般口演	一般体育における1500m走の記録の変化と考え方 II	佐路清隆他
一般口演	マット運動の観察に関する研究	小林明子
一般口演	心臓病スポーツ療法へのスキーの導入	青戸公他
一般口演	体育・スポーツ運動のVTR・コンピューター分析について	三浦幹夫

昭和60年12月7日 88 京都府立大学		
一般口演	頸部の最大屈曲筋力と最大伸展筋力の特徴について —トレーニング効果について—	岡本直輝他
一般口演	武道の思想的背景としての「道」思想について	横山勝彦
一般口演	大学女子少林寺拳法練習者の実態調査	岸本裕行他
一般口演	バスケットボールの障害	富井富
一般口演	バレーボールにおけるゲーム分析のプログラミング	三浦幹夫
一般口演	負荷強度に伴う機械的効率	河端隆志他
一般口演	心臓病スポーツリハビリテーションへの水泳の導入 一臨海プログラムから一	下村雅昭他
一般口演	生活時間調査からみた女子大生の身体活動量	中井誠一
昭和61年3月14日 89 立命館大学		
一般口演	最大無酸素パワー値と競技成績の比較	河端隆志他
一般口演	心臓病スポーツリハビリステーションの社会体育的アプローチ	浜崎博他
一般口演	紹介「パソコンのTPP端末としての利用」	沢田和明
一般口演	環境温の無気的作業閾値に及ぼす影響	辻田純三
一般口演	光呈示による四方向への全身反応時間について	岡本直輝他
一般口演	大学女子少林寺拳法練習者の月経に関する研究	塙見浩二
1986 昭和61年6月28日 90 京都外国語大学		
一般口演	少年少林寺拳法教室に対する社会的期待	深田昭一他2名
一般口演	主成分分析による生理学的年令の評価	中村栄太郎
一般口演	新規格槍とその投法について	林幸信
一般口演	亜熱帯地方(沖縄)の中高年者の体力について	田口貞善他1名
昭和61年10月25日 91 佛教大学		
報告	フランス留学記	山下謙智
一般口演	少林寺拳法の反応練習が全身反応時間に及ぼす影響について	井上哲夫他2名
一般口演	虚血性心疾患リハビリテーションにおける水泳の適用 —プール指導と臨海プログラムから—	下村雅昭他2名
昭和62年3月14日 92 京都大学 楽友会館		
一般口演	コンピューターを利用した栄養・休養・運動のアドバイス	平賀正治
一般口演	新しい健康概念 ウエルネスについて	神崎清一他3名
一般口演	尿中蛋白質代謝物質に与える運動の影響	芳田哲也他1名
一般口演	スポーツ選手の分離推弓の発現率	富井富他1名
特別講演	健康と法	片岡昂

1987	昭和62年 7月 4日	93	京都女子大学
	一般口演	虚血性心臓病患者の長期運動療法における冬期ハイキングの検討 —春秋期ハイキングと比較して—	榎本かおり他 6名
	一般口演	大学体育授業研究 一硬式テニスの実践一	宮田和信
	一般口演	近大英國陸上競技の形成課程	岡尾恵市
昭和62年11月 7日			
94 同志社女子大学田辺校地			
	一般口演	1才児の発達における直立二足歩行の獲得について —歩行運動形態と認知・言語機能との構造連関—	田中真介
	一般口演	スポーツマンの分離推弓について	富井富
	一般口演	柔道のスポーツ化について	浜口義信
昭和63年 3月 26日			
95 京都教育大学			
	一般口演	柔道選手の頸部筋力特性について	松井勲
	特別講演	臨教審の答申からみたこれらの体育・スポーツの動向	蜂須賀弘久
1988 昭和63年 6月 25日			
96 大谷大学			
	一般口演	京都国体の概要	川北智世
	一般口演	第24回全国身体障害者スポーツ大会の意義	芝田徳造
	一般口演	塩分濃度と脱水回復過程の解析	奥野直
	一般口演	戦後保健行政の展開と PHW の果たした役割 —学校給食に関わる PHW 文書を中心に—	三浦正行
	昭和63年11月19日		
97 光華女子大学			
	一般口演	「保健科教育」成立過程に関する若干の検討 — GHQ / SCAP 文書をもとに	三浦正行
	一般口演	スポーツ障害と医療機関について第 1 報 —新体操選手の障害と医療機関—	三浦正行・真田民樹
	一般口演	骨格筋線維組成(ラットヒラメ筋)に及ぼす長期間低圧暴露の影響	伊藤一生他 4 名
平成元年 3月 18日			
98 オムロン研修センター			
	一般口演	交叉適応について	東隆暢
	一般口演	西ドイツにおける「トレーニングのプランニングとコントロールのための血中乳酸濃度活用」に関する基本的な考え方	里見潤
	特別講演	廃用性萎縮の常識	万井正人
1989 平成元年 7月 8日			
99 平安女学院短期大学			
	一般口演		三浦哉他
	一般口演		小野伸一郎他
	一般口演		平賀正治
	一般口演		武内ひとみ

平成元年11月11日 100 ホリディイン京都(同志社大学)		
経過報告	100回までの経緯	伊藤一生
記念講演	社会変化と体育・スポーツの科学的研究	松田岩男(日本体育学会会長)
シンポジウム	「“こころ”と“からだ”」	横山勝彦、藤田登、小田伸午、野原弘嗣、宮田和信、八木保、小野桂市
平成2年3月17日 101 京都産業大学		
一般口演		芳田哲也
一般口演		福田潤他
特別講演		柏祐賢氏
1990 平成2年7月7日 102 滋賀県立スポーツ会館(滋賀大学教育学部)		
一般口演		研究発表 4題：斎藤昌久、岡尾恵市、里見潤也、野村照夫他
紹介		2題：豊田一成、牧野健士
平成2年11月17日 103 ノートルダム女子大学		
一般口演		研究発表 4題：加藤元和、横山勝彦他、田阪登記夫他、浜崎博他
紹介		1題：木村静雄
平成3年3月30日 104 立命館大学		
一般口演		研究発表 4題：小野桂市他、和田尚、下村雅昭他
特別講演		花房秀朗
1991 平成3年7月6日 105 池坊短期大学		
一般口演		研究発表 2題：広中主司他、浜崎博他
平成3年11月16日 106 京都府立大学		
一般口演		研究発表 2題：下村雅昭他、野崎康明他
平成4年3月21日 107 京大会館(京都大学)		
シンポジウム		松村道一、小田伸午、野原弘嗣
特別講演		久保田競
1992 平成4年7月25日 108 龍谷大学深草学舎		
一般口演		研究発表 3題：上田滋夢、浜崎博他、村田健三郎他
平成4年10月17日 109 佛教大学		
特別講演		山口信治(佛教大学)
一般口演		研究発表 3題：三浦敏弘、浜崎博他、小田修司他

	平成 5 年 3 月 27 日	110	京都女子大学	
	一般口演			研究発表 4 題：吉村雅文他、浜崎博、田阪登記夫他、藤沢義彦他
1993	平成 5 年 7 月 3 日	111	同志社女子大学田辺校地	
	一般口演			研究発表 3 題：富居富他、山下高行、中村榜
	平成 5 年 12 月 11 日	112	京都外国語大学	
	一般口演			研究発表 5 題：江田英雄、下村雅昭他、野崎康明、小畠友紀雄他、中嶋大輔他
	平成 6 年 3 月 26 日	113	京都教育大学	
	一般口演			研究発表 3 題：吉村雅文、呂桂花、上田滋夢
1994	平成 6 年 7 月 9 日	114	光華女子大学	
	一般口演			研究発表 3 題：岡尾恵市他、広中主司他、小畠友紀雄他
	話題提供			2 題：村田健三郎（龍谷大学）、小野桂市、芳田哲也（京都工芸繊維大学）
	平成 6 年 10 月 29 日	115	京都芸術短期大学	
	一般口演			研究発表 5 題：水島克己他、植田佳子他、菅原拓也他、鈴木康史、中森一郎
	平成 7 年 3 月 25 日	116	大谷大学	
	一般口演			研究発表 5 題：浜崎博他、谷口博志他、山形敏明他、植田佳子他、川畑愛義他
1995	平成 7 年 7 月 8 日	117	平安女学院短期大学	
	一般口演			研究発表 3 題：村川健一他、北尾岳夫、中比呂志
	平成 7 年 12 月 2 日	118	京都工芸繊維大学	
	一般口演			研究発表 4 題：山村康夫、井街悠也、斎藤昌久、芳田哲也他
	平成 8 年 3 月 23 日	119	同志社大学新町校舎	
	一般口演			研究発表 4 題：竹田正樹、村川健一、田口貞善、木村静雄
1996	平成 8 年 6 月 29 日	120	滋賀大学	
	一般口演			研究発表 5 題：岡本進他、中村栄太郎、村田健三郎他、中井誠一、杉本厚夫
	平成 8 年 12 月	121	ノートルダム女子大学	
	一般口演			研究発表 6 題：芳田哲也他、山村康夫他、井上辰樹他、浜崎博他、小河繁彦他、小田伸午

	平成9年3月15日	122	立命館大学衣笠学舎	
一般口演				研究発表 4題：棚山研、中村美也、吉武康栄他、村田健三郎他
特別講演	「京都のまち 一健康都市から元気都市へー			折坂義雄(京都市市長室室長)
1997	平成9年11月29日	123	京都府立大学	
一般口演	運動性ミトコンドリア形態の増大			千家弘行(京都大学)他
一般口演	Cistanche Salsa(肉荳)の骨格筋繊維の形態および酸素活性に与える影響			李西華(京都大学)他
一般口演	慢性維持期にある虚血性心疾患患者の「生きがい度」に影響を与える要因の検討			下村雅昭(京都女子大学)他
一般口演	水泳選手の体力テストの現状と問題点			野村照夫(京都工芸繊維大学)
	平成10年3月25日	124	京都大学	
一般口演	身体活動量低下による体重および筋重量の変化			米田祐子(同志社女大学)
一般口演	中年期に至るまでの身体活動水準と生活習慣病との関連性			山崎先也(京都大学)他
一般口演	運動療法における歩数と体重変化について			浜崎博(京都薬科大学)他
一般口演	運動習熟の神経機構について			河内山隆紀(京都大学)他
一般口演	筋出力の増大・減少局面における筋電図活動			来田宣幸(京都大学)他
1998	平成10年12月5日	125	龍谷大学	
一般口演	古代ギリシアと近代スポーツ 一現代スポーツ解釈のひとつの試みー			渡部憲一(龍谷大学)
一般口演	エリアスにおけるスポーツ			坂なつこ(立命館大学)
一般口演	体育授業における走幅跳びの助走に関する研究			角明(北桑田高校)
一般口演	上肢の両側性多関節動作における最大エキセントリック筋力と速度の関係			長谷川裕(龍谷大学)
	平成11年3月25日	126	京都大学	
一般口演	関節トルクと筋電図からみた持ち上げ動作の解析			伊坂忠夫(立命館大学)
一般口演	膝関節最大の伸展力及び下肢筋群の働きが股関節動作から受ける影響			金尚憲(高の原スポーツ研究所)他
一般口演	健全なる肉体に健全なる精神が宿るか			川畑愛義(日本生活医学研究所)他
一般口演	京都市内小学生の活動量調査について			浜崎博(京都薬科大学)
一般口演	夏期スポーツ活動時の運動能力低下に及ぼす脱水量閾値の検討			芳田哲也(京都工芸繊維大学)
一般口演	競技種目および技量レベルの違いからみた単純反応時間と選択反応時間の関係			来田宣幸(京都大学)
一般口演	中心視野と周辺視野における反応時間の比較			安藤創一(京都大学)
一般口演	脳機能イメージングを用いた運動学習研究			河内山隆紀(京都大学)
1999	平成11年12月4日	127	同志社女子大学	
話題提供	「トップアスリートの生活サポート ~サポート内容と様々な疑問~シドニー五輪、女子マラソンメダル候補選手の場合」			河合美香(立命館大学)
一般口演	やり投げの助走について(競技会の実態調査から)			安岡貞夫他(綾部高校)

一般口演	Jリーグの課題と展望	望月慎之他(同志社大学)
一般口演	京都市内21コースのウォーキングコースについて、消費カロリーおよび運動強度の検討	浜崎博他(京都薬科大学)
一般口演	ウエイトリフターにおける筋左右差と競技力	伊坂忠夫他(立命館大学)
平成12年 3月18日	128 京都女子大学	
一般口演	体育授業観察の「深さ」に関する研究	北川隆(京都女子大学)
一般口演	生活時間調査からみた女子学生と身体運動量と身体状況	新矢博美他(京都女子大学)
一般口演	米国のエイズ教育、地域社会と学校現場の連携について	成山公一(京都文教大学)
一般口演	呼気中一酸化炭素濃度と喫煙習慣の関係	長谷川豪志他(京都産業大学)
一般口演	低圧曝露に対する肋間筋線維の組織化学的応答	馬場倫行他(京都大学)
一般口演	一侧肢の筋力発揮が引き起こす反対側肢の motor overflow	宮本直和他(京都大学)
一般口演	着地動作に着目したドロップジャンプのバイオメカニクス研究	小西嘉典他(京都大学)
一般口演	跳馬に踏切中の学力量の変化について	金尚憲(高の原スポーツ研究所)
2000	平成12年12月16日	129 京都外国語大学
一般口演	英国におけるスポーツ観戦動機について	辻浅夫他(京都外国語大学)
一般口演	北海道における観海流の伝播に関する研究 —黎明期の創成高等小学校を中心として—	中森一郎(大谷大学)
一般口演	南アフリカのラグビー	中村櫟(花園大学)
一般口演	利用者特性からみた公共スポーツ施設の現状	清田美絵(京都教育大学)他
一般口演	「日本マラソンの強さの根拠」—過去20年間の世界・日本レベルの記録返還の分析から—	岡尾恵市(立命館大学)
話題提供	プレオリリンピック会議とオリンピック	野村照夫(京都工芸繊維大学)
平成13年 3月17日	130 京都教育大学	
一般口演	高校運動クラブにおけるメンタルコンディショニングに関する事例研究的アプローチ: チーム・個人別にみた指導プランと関連性	川合英之(京都府立鳥羽高校)他
一般口演	体育教師 生徒間に見られる社会的影响過程の分析: 教師の社会的勢力を規定する諸要因	岡菜補子(京都教育大学)
一般口演	柔道原理に関する問題点について	徳田眞三(京都教育大学)
一般口演	公共スポーツ施設利用者の利用状況: 利用者の満足度からの分析	清田美絵(京都教育大学)
	力学量から見た後転倒立	金尚憲(高の原スポーツ研究所)他
2001	平成14年 3月16日	131 京都光華女子大学
特別講演	生涯体育とその実践活動	万井正人(京都大学名誉教授)
一般口演	クロールのプル後半動作筋力が泳力に及ぼす影響	岡田寛(京都府立西城陽高校)、寺田光世(京都教育大学)
一般口演	四肢の運動量からみたランニングのメカニズム	石原靖彦・野原弘嗣(京都教育大学)

一般口演	トルクからみた蹴上り	金尚憲(高の原スポーツ研究所)
一般口演	大伸身跳び 一1995年世界体操選手権大会からの考察一	野原弘嗣(京都教育大学)、山下謙智(京都工芸繊維大学)、武井義明(北イリノイ大学)
一般口演	骨折にともなう筋線維の形態的・酸素化学的变化	矢澤真幸・橋本建志・山崎先也・田口貞善(京都大学)
一般口演	心筋梗塞に対する心筋および骨格筋の乳酸輸送担体の表現の変化	橋本建志・矢澤真幸・増田慎也・米田祐子・山崎先也・田口貞善(京都大学)
一般口演	遅発性筋痛における静的ストレッチングの効果	山浦可奈子・森谷敏夫(京都大学)
一般口演	筋音図、筋電図に見られる筋温度低下時の神経・筋伝達機構及び筋収縮特性の変化	木村哲也・浜田拓・上野リンダ正子・森谷敏夫(京都大学)
一般口演	球技経験がキー押しとサッケード眼球運動による周辺視野反応時間に与える影響	國部雅大・安藤創一・来田宣幸・小田伸午(京都大学)
一般口演	運動時の体温調節反応に及ぼすフェンシングユニフォームの影響	新矢博美(京都女子大学)、芳田哲也(京都工芸繊維大学)、中井誠一(京都女子大学)
一般口演	心拍数から見た大文字山登山の運動強度	中井誠一(京都女子大学)、小田伸午(京都大学)、新矢博美(京都女子大学)、芳田哲也(京都工芸繊維大学)
一般口演	心拍数から1日の消費エネルギー量を算出する問題点の検討	芳田哲也(京都工芸繊維大学)、中井誠一・新矢博美(京都女子大学)
一般口演	これから バレーボールメソット 一夙川学院短期大学公開セミナーより一	藤島みち(夙川学院短期大学)
一般口演	観戦者からみたバスケットボールリーグの経営課題(1) —観戦者特性に焦点をあてて—	中比呂志(京都教育大学)、穂積豊(朱雀高校)、山中博史(滋賀女子短期大学)、沼田宏文(松下電器)
一般口演	観戦者からみたバスケットボールリーグの経営課題(2) —観戦者のリーグ経営に対する意識—	穂積豊(朱雀高校)、中比呂志(京都教育大学)、山中博史(滋賀女子短期大学)、沼田宏文(松下電器)
一般口演	公共スポーツ施設における初期利用者の定着化に関する研究 —施設サービスに対する期待に着目して—	清田美絵(京都府体育協会)、中比呂志(京都教育大学)
一般口演	運動療法においてコンプライアンス良好な症例について	浜崎博・青戸公一(京都薬科大学)、赤龍知里(京都府立芸術大学)、下村雅昭(京都女子大学)
一般口演	大学ウエイトリフターの競技力と筋力左右差の推移	伊坂忠夫(立命館大学)、和田匡史(徳島文理大学)
一般口演	女性スポーツ界の祖 Alice Millon Milliat(1884~1957)の業績	岡尾恵市(立命館大学)
一般口演	エアロビクスダンスおよびステップエクササイズにおける心理的、生理的応答	井上恵子(立命館大学)
一般口演	大学生のスポーツ活動が食生活と骨密度に与える影響	大西晴子・井上文夫(京都教育大学)
2002	平成15年3月1日 132 大谷大学	
	特別講演 「いまどきの若者」の心理	谷口奈青理(大谷大学)
	一般口演 2002ワールドカップサッカーの観戦動機に関する研究 —英国と日本の競技場観戦者の比較—	辻浅夫(京都外国語大学)、中桐伸吾(大谷大学)
	一般口演 高校体育における三段跳び授業の実践報告	高安和典(京都教育大学附属高等学校)
	一般口演 「マラソン競走」の距離が42.195kmに設定されるまでの経過と微細史	岡尾恵市(立命館大学)

一般口演	骨折に伴うヒラメ筋のMHCアイソフォーム変化について	矢澤真幸・橋本健志・田口貞善(京都大学大学院人間・環境学研究科)、山崎先也(第一福祉大学)
一般口演	老齢ラットにおける筋周膜単位毎の筋線維の組織化学的特性と形状について	増田慎也・矢澤真幸・橋本健志・田口貞善(京都大学大学院人間・環境学研究科)
一般口演	運動が周辺視野の反応時間に与える影響	安藤創一・木村哲也・浜田拓・國部雅大・森谷敏夫(京都大学大学院人間・環境学研究科)、小田伸午(京都大学総合人間学部)
一般口演	B I 値による四肢筋量推定法をもちいた大学競技選手の身体特性	山田陽介・小田伸午(京都大学総合人間学部)、増尾善久(マッスル・ラボ研究所)、三谷仁志(㈱アートヘブンainer)
一般口演	等速性筋力において筋出力・筋量関係が高速テストで顕著になる現象について	寺田光世(京都教育大学)、高山優子(京都工芸繊維大学)、井上辰樹(龍谷大学)
2003	平成16年3月6日 133 立命館大学びわこ草津キャンパス	
特別講演	『剛性が調節できる軽量機械要素を用いたトレーニング装具』	満田隆(立命館大学)
一般口演	M I ラットに対するA C E阻害剤投与時における運動トレーニングの役割	橋本健志(京都大学大学院人間・環境学研究科)、神原直樹(京都大学大学院医学研究科)、野原隆司(田附興風会医学研究所)、田口貞善(京都大学大学院人間・環境学研究科)
一般口演	協同筋の腱切断に伴うヒラメ筋ジストロフィンの動態	増田慎也・田口貞善(京都大学大学院人間・環境学研究科)
一般口演	垂直跳動作における二関節筋の役割について	小西嘉典・小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
一般口演	両手同時ポインティング動作中の眼球運動制御	國部雅大・小西嘉典・小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
一般口演	3ヶ月の運動実践が中高年者の身体面へ及ぼす効果	河野洋允(有)パーエクト・トレーナーズ)、伊坂忠夫(立命館大学)、東山明子(関西福祉大学)、平石貴補・谷村幸英(㈱アートヘブンainer)、永尾賢二・佐藤允美(㈱ニューレックス)、清田源・山本百合(有)パーエクト・トレーナーズ)
一般口演	運動教室への継続参加が中高年者の精神面へ及ぼす影響	東山明子(関西福祉大学)、河野洋允(有)パーエクト・トレーナーズ)、伊坂忠夫(立命館大学)、平石貴補・谷村幸英(㈱アートヘブンainer)、永尾賢二・佐藤允美(㈱ニューレックス)、清田源・山本百合(有)パーエクト・トレーナーズ)
一般口演	六甲全山縦走による心筋疲労 一登山愛好家の健康に対する問題提起一	上 英俊・伊坂忠夫(立命館大学)
一般口演	横断歩道での加齢に伴う歩行速度の変化	岡本直輝(立命館大学)
一般口演	携帯型ジョギング支援システムを活用した長距離トレーニング	伊坂忠夫・西山建人・牧川方昭(立命館大学)
一般口演	自己技能の観察・分析による陸上競技の授業	野原弘嗣・寺田光世(京都教育大学)、沖花彰(京都教育大学・理学)
一般口演	森林浴、温泉浴がヒト自律神経活動並びに脳波に与えるリラクセーション効果	森谷敏夫・田口貞善(京都大学大学院人間・環境学研究科)

一般口演	心筋の筋線維タイプ分類の試み	野原真・橋本健志・西森未和・田口貞善(京都大学大学院人間・環境学研究科)
一般口演	競技者の有酸素運動時における心拍出量と動静脈酸素較差の関与	野村隆敏・芳田哲也・銘苅貴徳・常岡秀行(京都工芸繊維大学)
一般口演	筋線維タイプⅡAの異種筋毎の特性の比較	西森未和・野原真・田口貞善(京都大学大学院人間・環境学研究科)
一般口演	「第1回オリンピック・アテネ大会」(1896年)を再考する	岡尾惠市(立命館大学)
一般口演	日本プロ野球選手の投球側と打撃様式の推移(1950-2002)	中山悌一(医療法人 城見会)
一般口演	バスケットボール観戦者の試合に対する評価 —JBLスーパーリーグを対象として—	中比呂志(京都教育大学)
一般口演	女子マラソン記録と年齢～2004大阪国際女子マラソンから～	田口貞善(京都大学大学院人間・環境学研究科)
2004	平成17年3月5日 134	京都工芸繊維大学
特別講演	『膝前十字靱帯損傷についてーその問題点とスポーツドクターへのかかり方ー』	常岡秀行(京都工芸繊維大学)
若手発表	トップドレマーのステッキングは何が優れているのか?～最速タッピングの間隔と力の解析～	藤井進也(京都大学総合人間学部)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	Mechanomyogramによる筋張力(muscleforce)の評価	宮本直和・小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	眼球運動の方向および順序が両手ポインティング動作の正確性に与える影響	國部雅大・小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	ステップを伴う左右方向へのリーチングのバイオメカニクス分析	進矢正宏(京都大学総合人間学部)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	バレエダンサーの日常生活におけるエネルギー出納	河野結(山口文子バレエ研究所)、新矢博美・中井誠一(京都女子大学)
若手発表	学習者の意識の変容からみたボールルームダンス学習の有効性に関する研究 —小学生と中学生による継続した調査からの検討—	—小学生と中学生による継続した調査からの検討—
若手発表	つま先立ち動作における姿勢調節様式と先行随伴活動の関係 —非運動選手とバトントワラーとの比較—	佐々木敏道(京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科)、伊藤太郎(英知大学)、東隆史(京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科)、野村照夫・山下謙智(京都工芸繊維大学)
若手発表	スポーツメンタルトレーニングを実施する際には現場の指導者(コーチ)が果たす役割にも注目すべきであるという提案	来田宣幸(京都大学大学院)、西貝雅裕(大成学院大学高等学校)、田口耕二(大商学園高等学校)
若手発表	脂質・糖質代謝の異常に亢進したモデル動物の組織化学的解糖能について	野原真・田口貞善(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	寒さ適応の基礎研究-骨格筋のミオシン解析から-	西森未和・田口貞善(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	骨格筋の収縮特性と骨格タンパク質の発現との関連について	増田慎也・田口貞善(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	代償性過負荷に伴う骨格筋内ニューレグリン発現の変化	稻嶋修一郎・佐久間邦弘(京都府立医科大学)
若手発表	足底圧刺激が及ぼす人体への効果検証	近藤菜保子・小野直哉・鈴木雅雄・白川太郎(京都大学大学院医学系研究科)

一般口演	エアロビックダンスの構成と運動強度	藤松典子(びわこ成蹊スポーツ大学)、新矢博美・中井誠一(京都女子大学)
一般口演	クラシックバレエの運動強度	新矢博美(京都女子大学)、河野 結(山口文子バレエ研究所)、中井誠一(京都女子大学)
一般口演	キッズのスポーツ環境…特に人工芝の表層温度に焦点をあてて	青木豊明・松田保・豊田一成(びわこ成蹊スポーツ大学)
一般口演	動きのコツ獲得過程	野村照夫・山下謙智(京都工芸繊維大学)
一般口演	大学スポーツ選手におけるサプリメントの利用実態と利用に対する意識	中比呂志(京都教育大学)
一般口演	高校生における運動・スポーツ活動の実施とライフスタイル	穂積豊(京都府立朱雀高校)、中比呂志(京都教育大学)
一般口演	ケニア人長距離選手の走動作の特徴	榎本靖士(京都教育大学)、阿江通良(筑波大学体育科学系)
一般口演	運動開始時の重心位置の違いが先行随伴活動と運動成果に及ぼす影響について	東隆史(京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科)、伊東太郎(英知大学)、山下謙智(京都工芸繊維大学)

2005	平成18年3月4日 135	京都薬科大学	
特別講演	ゲノムとその応用-ゲノムから何がわかる?	後藤直正(京都薬科大学)	
若手発表	200mバタフライの競技記録、ラップタイムおよび年齢の関係	赤井聰文(京都工芸繊維大学大学院)、野村照夫(京都工芸繊維大学)	
若手発表	運動時酸素摂取量の決定要因に与える競技種目の影響	綱島宏(京都工芸繊維大学大学院)、芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学)	
若手発表	運動初期の体温調節反応に与える環境温度の影響	出町耕一・芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学)	
若手発表	自転車運動におけるビンディングペダルの効果	牧道太郎・芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学)	
若手発表	アメリカンフットボール競技者における無酸素性POWERの決定因子	三浦優児・芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学)	
若手発表	早くかつ高く跳ぶ動作におけるバイオメカニクス研究	勝原洋二(京都大学総合人間学部)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	打者の有無、立つ位置が投球分布、投球の正確性に与える影響	土屋真司(京都大学総合人間学部)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	自転車運動における運動負荷と運動野の脳活動との関係	安藤創一(大阪体育大学大学院)	
若手発表	高齢者における身体活動記録表及び3軸加速度計を用いた身体活動量推定方法の妥当性	則安梨才(京都大学総合人間学部)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	中高年者に対する健康教育プログラムが介入後の効果持続に及ぼす影響	坂手誠治・寄本明(滋賀県立大学大学院)	
若手発表	高齢者の身体活動量と栄養摂取量の実態	井口香苗(大寿会病院)、中井誠一(京都女子大学)	
若手発表	世紀転換期のアルゼンチンにおける武道の普及 —非エリートによる柔術の普及と受容の様態—	藪耕太郎(立命館大学大学院)	
一般口演	屋外スポーツサーフェスの太陽光反射スペクトルと表面温度の関係	青木豊明(びわこ成蹊スポーツ大学)	
一般口演	卵巣摘出後の持久性トレーニングがラットの骨格筋酵素活性に及ぼす影響	米田祐子(同志社女子大学)	

一般口演	京都パープルサンガ・サッカー教室に子供を通わせる保護者の期待と満足度に関する調査	今泉直史(立命館大学大学院)、高本詞史・福田拓哉(京都パープルサンガ)、久保和之(龍谷大学)、岡本直輝(立命館大学)
一般口演	京都パープルサンガ・キッズスクールにおける園児の表情分析による練習プログラムの評価	加藤祐貴子・横谷亮・高本詞史(京都パープルサンガ)、水谷文香・岡本直輝(立命館大学)
一般口演	スポーツメンタルトレーニングの手法を応用し、大学および専門学校における体育・スポーツ科学関連の授業改善をはかる	来田宣幸(京都大学大学院人間・環境学研究科)
一般口演	大学連携型地域スポーツクラブの可能性 ～大学コンソーシアム京都スポーツクラブの活動から～	望月慎之・横山勝彦(同志社大学)、佐藤善治・岡本直輝(立命館大学)
一般口演	『眠りの森』事業における運動・栄養指導プログラムの評価-その1 体力・形態面での効果-	河野洋允(有)パーエクトトレーナーズ)、上英俊(立命館大学)、山内恵美・清田源(有)パーエクトトレーナーズ)、伊坂忠夫(立命館大学)
一般口演	『眠りの森』事業における運動・栄養指導プログラムの評価-その2 栄養面での効果-	同道正行(京都医療センター)、成田厚子・佐藤允美(株)ニューレックス)、河野洋允・清田源(有)パーエクトトレーナーズ)、伊坂忠夫(立命館大学)
一般口演	『眠りの森』事業における運動・栄養指導プログラムの評価-その3 心理面での効果-	東山明子(関西福祉大学)、河野洋允(有)パーエクトトレーナーズ)、上英俊・伊坂忠夫(立命館大学)
一般口演	京都府における総合型地域スポーツクラブにむけた分類系統について	岩本麻子(京都府広域スポーツセンター)、川合英之(京都府教育庁指導部保健体育課)、松岡宏高(びわこ成蹊スポーツ大学)

2006	平成19年3月3日	136	京都大学総合人間学部
特別講演	筋疲労のメカニズム最新トピックス	森谷敏夫(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	運動時の熱放散反応に与える下半身冷却の影響	出町耕一・芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)	
若手発表	漸増負荷運動における筋音図応答	木村哲也(京都大学大学院人間・環境学研究科)、安藤創一(大阪体育大学・日本学術振興会PD)、森谷敏夫(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	加齢・身体機能低下に伴う骨格筋変化の非侵襲的評価 ～57～96歳までの健常・要介護高齢者の下肢筋の特徴～	山田陽介・横山慶一(京都大学大学院人間・環境学研究科)、木村みさか(京都府立医科大学看護学科)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	持久性と瞬発性競技者による運動能力決定因子の差異	綱島宏・芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)	
若手発表	ゲーム分析からみたラクロスの競技特性	上羽弘剛・岡本直輝(立命館大学)	
若手発表	大学アメリカンフットボール選手によるポジション別運動能力の特性	田中頤真(京都工芸繊維大学)、芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)	
若手発表	2006年度同志社大学アメリカンフットボールにおける筋力とポジションからの怪我の分析	井口順太(同志社大学スポーツ支援課)	

若手発表	アメリカンフットボール選手の練習・試合における外傷と障害について —某大学チームの 5 年間の調査結果から—	河村育美(立命館大学経済学部)、東伸介(立命館大学学生部スポーツ強化センター)、岡本直輝(立命館大学)	
若手発表	京都大学の体育実技科目によるライフスキル向上の可能性	山本剛(京都大学総合人間学部)、山田陽介(京都大学大学院人間・環境学研究科)、来田宣幸(京都工芸繊維大学)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	スポーツ実習の受講生を対象としたライフスキルの検討	来田宣幸(京都工芸繊維大学)、山本剛(京都大学総合人間学部)、山田陽介・小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	子どもの組織的なスポーツ活動参加に及ぼす母親の影響—スポーツ活動に対する母親の意識に着目して—	藤堂研介(京都教育大学附属高校非常勤講師)、中比呂志(京都教育大学)	
若手発表	フィットネス業界における顧客創造とその定着	東塚武大・山本麻友美(立命館大学経営学研究科)、岡本直輝(立命館大学)	
若手発表	ドラム奏者の片手最速スティッキング課題における前腕筋群の表面筋電図活動	藤井進也・進矢正宏(京都大学大学院人間・環境学研究科)、工藤和俊・大築立志(東京大学大学院)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	左右方向へのステップを伴う選択リーチング動作における予備ホップの効果	宇津亮太(京都大学総合人間学部)、進矢正宏・小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	注視時の焦点距離が周辺視野反応時間に与える影響	國部雅大(京都大学大学院人間・環境学研究科)、安藤創一(大阪体育大学・日本学術振興会 P D)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	歩行中の予測不可能な踏み外しに対する姿勢制御活動	進矢正宏・小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	バント動作における打球方向と強さの制御～バットを押すのか、引くのか～	伊藤慎哉(京都大学大学院人間・環境学研究科)、来田宣幸(京都工芸繊維大学)、向井公一(四条畷学園大学リハビリテーション学部)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	サッカー競技におけるキック動作からパフォーマンスを考える—「動的」・「静的」キックの頻度、諸局面での使い分けに注目して—	中村泰介(京都大学非常勤講師)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)、河端隆志(大阪市立大学)	
若手発表	スピード持久力に優れる800mランナーは接地中の身体重心水平方向移動距離が長い	岡本英也(京都大学総合人間学部)、山田陽介・小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	倒立振り子モデルを用いた方向転換動作のバイオメカニクス的研究	鈴木雄太(京都教育大学大学院)、榎本靖士(京都教育大学)	
一般口演	屋外スポーツ・サーフェスのアルベトと表面温度の関係	青木豊明(びわこ成蹊スポーツ大学)	
一般口演	運動意欲とスポーツ条件が中学生のスポーツ活動に及ぼす影響	中比呂志(京都教育大学)、榎本靖士・簸根敏和(京都教育大学)、橋本雅子・山口孝治(京都教育大学附属京都中学校)	
2007	平成20年3月1日 137 龍谷大学深草学舎		
	若手発表	体育授業における生徒の内省と学習成果	富山唯(京都教育大学大学院)、山下秋二(京都教育大学)、有山篤利(京都教育大学大学院)、金山千広(聖和大学短期大学部)

若手発表	しなやかさは高齢者の歩行を安定させるか? —歩調ゆらぎと体力・体組成の検討—	横山慶一(京都大学大学院人間・環境学研究科、京都医健専門学校)、山田陽介・進矢正宏・岡本英也(京都大学大学院人間・環境学研究科)、松村吉浩(松下電工株式会社)、木村みさか(京都府立医科大学看護学科)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	野球のベースランニングにおけるターンスキルの研究	渡邊純也(京都工芸繊維大学)、赤井聰文・来田宣幸・野村照夫(京都工芸繊維大学大学院)
若手発表	障害者シンクロナイズド・スイミングにおける動作のバリエーションとその組み合わせ	君田真理・赤井聰文・来田宣幸・野村照夫(京都工芸繊維大学)
若手発表	大学アメリカンフットボール部における怪我の実態とその原因について—閉眼片足立ちによるバランスと怪我の関連性—	井口順太(同志社大学スポーツ支援課)、木村みさか(京都府立医大)
若手発表	立位姿勢の安定性向上にインソールの装着は効果的か?	矢野涼子(立命館大学経営学部経営学科)、伊坂忠夫(立命館大学理工学部ロボティクス学科)
若手発表	マッサージのむくみ除去効果の科学的実証	林祐介・赤松真美・飯嶋奈桜・平林相子・山本政徳(京都医健専門学校)、山田陽介(京都医健専門学校、京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	ピンチング動作中に与えられた機械的外乱による運動干渉の検討	市河大輔・伊坂忠夫・川村貞夫(立命館大学)
若手発表	相撲の立合いにおける衝突の動作分析	中林哲郎・白土男女幸・久米雅・大西明宏(京都工芸繊維大学)、服部祐兒(東海学園大学)、芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)
若手発表	一侧肢での最大下筋力調節が他肢の最大筋出力に及ぼす影響	早矢仕侑治・伊坂忠夫・川村貞夫(立命館大学)
若手発表	リリースタイミングは投球到達位置にどのような影響を与えるか?	土屋真司・山田陽介・福田岳洋(京都大学大学院人間・環境学研究科)、瀬尾和弥・松井知之(京都府立医科大学附属病院リハビリテーション部)、森原徹(京都府立医大大学院運動器機能再生外科学)、北條達也・長谷斎(京都府立医科大学附属病院リハビリテーション部、京都府立医大大学院運動器機能再生外科学)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	なぜディフェンスはオフェンスになす術もなく抜き去られるのか —荷重割合と姿勢制御の関係—	進矢正宏・山田陽介(京都大学大学院人間・環境学研究科、日本学術振興会)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	バスケットボールのドリブル動作における運動制御	勝原洋二・小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	急激な皮膚の冷却が運動時の体温調節反応に与える影響	出町耕一・芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)
若手発表	ピンディングペダルの使用が自転車運動時の下肢筋活動に与える影響	牧道太郎・芳田哲也・川崎太志・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)
若手発表	瞬発性競技者における運動能力特性 —有酸素・無酸素能力の横断的及び縦断的検討—	田中顕真・芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)

若手発表	腕立て伏せ時の荷重位置が筋放電量に与える影響	若山雅文(京都工芸繊維大学)、芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)
若手発表	利き脚によらない右キックと左キックの特徴	深谷興士(京都大学総合人間学部)、中村泰介(聖トマス大学人間学科)、河端隆志(大阪市立大学都市健康・スポーツ研究センター)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	競泳におけるスタート動作の力学的特性 —グラブスタートとトラックスタートの比較—	赤井聰文・野村照夫・来田宣幸(京都工芸繊維大学大学院)、松田有司(京都大学大学院)
若手発表	異なる角度の方向転換走における方向転換角度と走速度との関係	鈴木雄太(京都教育大学大学院)、榎本靖士(京都教育大学)
若手発表	サッカーのトラップ・アンド・パスのバイオメカニクス研究	櫻場厚浩(京都大学総合人間学部)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	競技レベルの違いによるテニスのフットワークの安定性の違い	亀谷亮輔(京都大学総合人間学部)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
一般口演	体育授業と動きの感性 一指導の違いが学習者の感覚に及ぼす影響について一	有山篤利(京都教育大学大学院・京都府教育庁指導部保健体育課)、山下秋二(京都教育大学)、金山千広(聖和大学)、富山唯(京都教育大学大学院)
一般口演	筋音図法におけるセンサー間の再現性比較検討	木村哲也・森谷敏夫(京都大学人間・環境学研究科)
一般口演	筋体積に占める筋細胞の割合が高齢者の固有筋力個人差をうまく説明する	山田陽介・岡本英也(京都大学大学院人間・環境学研究科)、木村みさか(京都府立医科大学看護学科)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)

2008	平成21年3月7日	138	同志社大学スポーツ健康学部
若手発表	脊髄運動ニューロン興奮性と血圧変動の相互相關解析	木村哲也・神崎素樹・森谷敏夫(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	テーピングの実践型授業のための教材開発と効果 —学習支援ツールとしてのミクストリアリティの活用—	佃文子(びわこ成蹊スポーツ大学)、近藤智嗣(独立行政法人メディア教育開発センター)	
若手発表	繰り返し自転車漕ぎ運動の出力パワーに与える活動筋温の影響	池田大起(京都工芸繊維大学)、芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)	
若手発表	夏季輻射熱を再現した運動時の衣服と運動強度が温熱ストレスと体温反応に与える影響	溝辺宜之・近澤祐樹・芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)	
若手発表	速いスプリンターの動作は左右対称なのか?	片山拓・岡本英也・小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	選択反応サイドステップにおける方向転換 —いかにフェイントに備え、いかに対応するのか—	宇津亮太(京都大学大学院人間・環境学研究科)、進矢正宏(京都大学大学院人間・環境学研究科、日本学術振興会)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	

若手発表	Lacrosseにおける非利き腕での投動作の正確性	荒木真徳(京都大学総合人間学部)、山田陽介・小田伸午(京都大学高等教育研究開発推進センター)
若手発表	西洋古典歌唱における発声時の頭部、頸部、胸部の姿勢変化	鈴木茉莉緒(京都大学総合人間学部)、進矢正宏(京都大学大学院人間・環境学研究科、日本学術振興会)、高橋徹(京都大学大学院情報学研究科)、糸山克寿(京都大学大学院情報学研究科、日本学術振興会)、奥乃博(京都大学大学院情報学研究科)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	歩行中踏み外す可能性を知っている際の "proactivestrategy"	進矢正宏(京都大学大学院、日本学術振興会)、小田伸午(京都大学大学院)
若手発表	野球選手と一般学生の打球予測に対する判断の違い	池田良輔・来田宣幸・赤井聰文・野村照夫(京都工芸繊維大学)
若手発表	オーバーハンドスローにおけるボール初速度に關係する要因の検討—準備動作が与える影響に着目して—	玉浦亘・榎本靖士(京都教育大学)、杉本和那美(京都教育大学大学院)
若手発表	走高跳における踏切動作のバイオメカニクス的研究 一身体の内傾角と後傾角の関係に着目して—	新島隆雄・榎本靖士(京都教育大学)、鈴木雄太(筑波大学大学院) 杉本和那美(京都教育大学大学院)
若手発表	接地中の膝・足関節の屈伸動作と中長距離パフォーマンス、走動作、下肢筋厚の関係	岡本英也(京都大学大学院人間・環境学研究科)、山田陽介(京都大学高等教育研究開発推進センター)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科、京都大学高等教育研究開発推進センター)
若手発表	バスケットボール熟練者のドリブル走動作における肩と腰の回転	藤井慶輔(京都大学総合人間学部)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)
若手発表	リバウンドジャンプにおけるパワーの発揮と動作の変動性との関係	村上祐一・榎本靖士(京都教育大学)、杉本和那美(京都教育大学大学院)
若手発表	繰り返し自転車漕ぎ運動の出力パワーに与えるパワー系トレーニングの影響	松尾英樹(京都工芸繊維大学)、芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)
若手発表	リバウンドジャンプの踏切時間を短縮するトレーニング方法の検討	岩橋真代(阪堺病院)、岡本直輝(立命館大学)
若手発表	身体に障がいを持つ勤労者のスポーツ参加に影響を及ぼす要因～スポーツ意識、スポーツ条件、サポートの有無に焦点を当てて～	山口拓(同志社高等学校)、中比呂志(京都教育大学)、穂積豊(京都教育大学院生)
若手発表	児童期における基礎的運動スキルの獲得に関する研究—第1報 基礎的運動スキルを評価するための運動課題の検討—	中比呂志・榎本靖士(京都教育大学)、野村照夫(京都工芸繊維大学)、有山篤利(聖泉大学)
一般口演	大学と地域の連携による総合型地域スポーツクラブの提案 一京たなべ・同志社スポーツクラブを例に一	竹田正樹・坂井智明・高橋仁美・横山勝彦(同志社大学スポーツ健康科学部)
一般口演	高校生における運動部活動が体力及び学力に及ぼす影響	穂積豊(京都教育大学大学院)、中比呂志(京都教育大学)
一般口演	介護保険制度における要介護状態区分と高齢者の体力について	西口初江・東海林丈修(京都工芸繊維大学大学院)、木村みさか(京都府立医科大学)、芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)

2009	平成22年3月6日	139	京都教育大学
若手発表	ラクロス競技におけるクロスを用いた走動作	金澤悠(京都大学総合人間学部)、山下大地・藤井慶輔・荒木真徳・小田伸午(京都大学大学院)	
若手発表	サッカーのインサイドキックにおける助走速度がボール速度制御に与える影響	櫻場厚浩・小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	接地位置の制約によるステップ動作のリズム変化	山下大地・山本真史(京都大学大学院人間・環境学研究科)、山田陽介(福岡大学)、進矢正宏(京都大学大学院人間・環境学研究科、日本学術振興会)、小田伸午(京都大学高等教育開発推進センター)	
若手発表	アメリカンフットボールにおける片腕ボール保持が走動作におよぼす影響	中原賢一・野村照夫・来田宣幸・赤井聰文・谷川哲朗(京都工芸繊維大学)	
若手発表	輻射環境下における四肢の露出が運動時の体温調節反応に与える影響	近澤祐樹・芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)	
若手発表	座位姿勢の違いが自転車運動中の筋活動とエネルギー消費量に与える影響	良川諒介(京都工芸繊維大学)、芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)	
若手発表	注意の分散は着地時の衝撃吸収を乱す 一二重課題実験による検討—	進矢正宏(京都大学大学院人間・環境学研究科)、和田治・山田実・市橋則明(京都大学大学院医学研究科)、小田伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科)	
若手発表	認知情報と動作の対応関係が球技選手の左右選択反応の早さに与える影響	亀谷亮輔・藤井慶輔(京都大学大学院)、進矢正宏(日本学術振興会、京都大学大学院)、小田伸午(京都大学大学院)	
若手発表	負荷変化時の自転車運動に与えるビンディングペダルの効果	小村太朗・芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)	
若手発表	大学バレーボール選手のオープントスと平行トスにおけるスパイク動作の比較	奥野玲子・角谷龍史・榎本靖士(京都教育大学)	
若手発表	バレーボールスパイクにおけるボール加速要因の検討	角谷龍史・奥野玲子・榎本靖士(京都教育大学)	
若手発表	角運動量からみたトスの緩急に対応するためのスイング技術	千月俊輔・榎本靖士(京都教育大学)	
若手発表	宙返りからの着地動作における下肢の緩衝動作の特徴	大宜見壯・榎本靖士(京都教育大学)	
若手発表	フィンスイミングのレース分析 —世界選手権および日本選手権における100m ビーフィンの比較—	谷川哲朗・赤井聰文(京都工芸繊維大学大学院)、中原賢一・来田宣幸・野村照夫(京都工芸繊維大学)	
若手発表	一流長距離選手のキック動作の事例的研究—レース中の走動作の変化の検討—	関口梨華・榎本靖士(京都教育大学)	
若手発表	泳動作の自己および他者評価の検討	赤井聰文・谷川哲朗・来田宣幸・野村照夫(京都工芸繊維大学大学院)、松田有司(京都大学大学院)	
若手発表	小学生児童のランニングジャンプにみられる下肢の神経—筋機能の発達	杉本和那美(京都教育大学大学院)、榎本靖士(京都教育大学)	
若手発表	子どもに適用できる精度の高い身体活動量評価方法の提案	山田陽介(福岡大学)、藤林真美(京都大学)、中江悟司・海老根直之(同志社大学)、伊藤陽一・諫佐準一・池田利勝(金閣小学校)、小田伸午(京都大学)、木村みさか(京都府立医科大学)	
一般口演	野球のティーバッティングにおける打球速度計測	来田宣幸(京都工芸繊維大学)、赤井聰文・谷川哲朗(京都工芸繊維大学大学院)、野村照夫(京都工芸繊維大学)、末常拓司(京都府立乙訓高等学校)	

一般口演	体力概念図の成立とその検討	別所秀夫(京都教育大学大学院)
一般口演	学校教育における保健分野の内容と系統性 一小・中・高等学校の12年間を通して一	浅井千恵子(京都教育大学附属京都小学校)、中比呂志・井上丈夫(京都教育大学)
一般口演	跳躍動作にみられる小学生児童の体力の発達	榎本靖士(京都教育大学)、杉本和那美(京都教育大学大学院)
一般口演	児童期における基礎的動作スキルの獲得に関する研究 —第2報 水泳運動スキルの検討—	野村照夫(京都工芸繊維大学)、中比呂志・榎本靖士(京都教育大学)、有山篤利(聖泉大学)、京都府教育委員会保健体育課
一般口演	児童期における基礎的動作スキルの獲得に関する研究 —第3報 陸上運動を対象とした基礎的動作スキルを評価するための項目の選択—	中比呂志・榎本靖士(京都教育大学)、野村照夫(京都工芸繊維大学)、有山篤利(聖泉大学)、京都府教育委員会保健体育課
2010 平成23年3月5日 140 京都女子大学		
若手発表	運動開始時における一過性の食道温低下と皮膚温の関係	出町耕一(京都工芸繊維大学大学院)、久米雅(京都文教短期大学)、芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)
若手発表	活動部位の冷却・加温が自転車運動時の生理的反応と作業能力に与える影響	松尾英樹(京都工芸繊維大学大学院)、久米雅(京都文教短期大学)、芳田哲也・常岡秀行(京都工芸繊維大学大学院)
若手発表	温熱負荷時における体温調節反応の季節差に与える生活習慣の影響	良川諒介(京都工芸繊維大学大学院)、中井誠一・野々村真美(京都女子大学)、芳田哲也(京都工芸繊維大学大学院)
若手発表	サイドステップのエネルギー消費	山下大地(京都大学大学院)、進矢正宏(UniversityofAlberta)、川上淳・藤井慶輔・山本真史・小田伸午(京都大学大学院)
若手発表	球技における防御者が意思決定に用いる情報とは何か倒立振子モデルによるアプローチ	藤井慶輔(京都大学大学院)、進矢正宏(UniversityofAlberta)、山下大地・小田伸午(京都大学大学院)
若手発表	人差し指の動作調節に及ぼすノイズ刺激の効果	長田かおり・神崎素樹(京都大学大学院人間・環境学研究科)、萩生翔大(京都大学総合人間学部)
若手発表	球技選手の敏捷性評価における505テストの有効性	田中潤・岡本直輝(立命館大学)、山本剛史(滋賀短期大学)
若手発表	異なる助走速度のスパイクジャンプにおける跳躍高に対する左右脚貢献度の変化	徳永貴仁(京都教育大学)、榎本靖士(筑波大学体育センター)、鈴木雄太(筑波大学大学院)、杉本和那美(京都教育大学)、大宅和幸(京都教育大学大学院)
若手発表	小学校体育におけるタグラグビーの指導に関する課題の分析	山本忠昭(立命館大学大学院)、深田直宏(桐生市立川内小学校)、大友智・山浦一保・小沢道紀・長積仁(立命館大学)
若手発表	一過性レジスタンス運動による代謝応答と長期的トレーニングによる身体適応との関係	松谷健司・佐藤幸治・家光素行・浜岡隆文・栗原俊之・藤田聰(立命館大学)
若手発表	長期間のトレーニングはアキレス腱の形態や特性の変化を引き起こすか?	佐々木竜一・栗原俊之・伊坂忠夫(立命館大学)
若手発表	技能レベル及び打球方向の違いによる捕球動作での足の運びの検討	長谷川弘実(京都工芸繊維大学)、谷川哲朗・和田一宏(京都工芸繊維大学大学院)、来田宣幸・野村照夫(京都工芸繊維大学)

若手発表	学校体育における剣道の指導パターンの分析 —体育目標との関係の検討通过对—	橋本祐貴(立命館大学大学院)、大友智・長積仁・小沢道紀・山浦一保(立命館大学)
高校生発表	音楽とスポーツ	小池亮太(京都府立向陽高等学校)
高校生発表	中心軸動作によるトラップと二軸動作によるトラップ	森川裕基(京都府立洛北高等学校)
高校生発表	女子400mにおけるレース構成とトップ選手との比較	西田貴和美(京都府立鳥羽高等学校)
研究助成報告	高校水泳選手の推定エネルギー必要量の策定に関する実践的研究	宮崎志帆(京都栄養医療専門学校)・岡田寛(京都府立西城陽高等学校)・野々村真美・中井誠一(京都女子大学)
一般口演	バスケットボールの選手の性格をとれたコーチングの検討	山本剛史(滋賀短期大学)・岡本直輝(立命館大学)・穂積豊(京都教育大学)
一般口演	児童期における基礎的動作スキルの獲得に関する研究—第4報 基礎的動作スキルの獲得と体力・運動能力との関連—	中比呂志(京都教育大学)・榎本靖士(筑波大学)・野村照夫(京都工芸繊維大学)・有山篤利(聖泉大学)・京都府教育委員会保健体育課
2011 平成24年3月3日 141 びわこ成蹊スポーツ大学		
若手発表	連続跳躍運動が小学生高学年の疾走動作に与える即時的效果について	九鬼靖太・小山宏之・磯崎大二郎・奥村将太・山口拓哉(京都教育大学)
若手発表	チューブによる牽引跳躍トレーニングが疾走動作に及ぼす影響—女子選手による効果の検証—	森本隆太・志賀充(びわこ成蹊スポーツ大学)
若手発表	短距離走における認識に関する指導が技能成果及び情意成果に及ぼす影響—論理的認識と身体的認識に着目して—	薮田祐輝(立命館大学)、深田直宏(桐生市立川内小学校)、大友智・山浦一保・大塚光雄・小沢道紀・長積仁・種子田穂・伊坂忠夫(立命館大学)
若手発表	短期間のトレーニングが中高年者の短距離疾走能力に及ぼす影響—公開講座『全力疾走に挑戦』に関する研究—	西田佳織・志賀充・岩井雄史(びわこ成蹊スポーツ大学)
若手発表	水平方向のジャンプ能力と加速区間の疾走能力との関連性について —女子選手に着目して—	大磯一樹・志賀充(びわこ成蹊スポーツ大学)
若手発表	エリートシンクロナイズドスイミング競技選手の股関節屈曲角度の再現性	矢野幸子・小森康加・川合結万・藤永朋子・中村康雄(同志社大学)
若手発表	エリートシンクロナイズドスイミング競技選手の股関節屈曲角度の再現性 —フィードバック方法からみた即時効果の比較—	川合結万・小森康加・矢野幸子・藤永朋子・中村康雄(同志社大学)
若手発表	野球のゴロ捕球における時間的分析	長谷川弘実(京都工芸繊維大学大学院)、来田宣幸・野村照夫(京都工芸繊維大学)
若手発表	野球の外野手におけるキャッチング動作の研究	中山祥祐己・田中潤・垂脇匡宏・岡本直輝(立命館大学)
若手発表	ソフトテニス・グラウンドストロークにおけるラケットヘッドの速度生成への各関節の貢献度の検討	奥村将太・小山宏之・杉本和那美・大宅和幸・磯崎大二郎・九鬼靖太・山口拓哉(京都教育大学)
若手発表	スピードウォーキングが背筋にあたえる効果	岩井雄史(びわこ成蹊スポーツ大学)

若手発表	女子走高跳に関するバイオメカニクス的研究—短助走に着目して—	磯崎大二郎・小山宏之・大宅和幸・田中康夫・奥村将太・九鬼靖太・山口拓哉(京都教育大学)
若手発表	つま先立ち時の立位制御ダイナミクス—静止立位との比較—	田辺弘子・藤井慶輔・神崎素樹(京都大学)
若手発表	温熱負荷時における体温調節反応の季節差に与える運動習慣の影響	良川諒介(京都工芸繊維大学大学院)、殿北将太(京都工芸繊維大学)、芳田哲也(京都工芸繊維大学大学院)
若手発表	フラクタル解析による運動単位発火のゆらぎの定量	吉井裕八・長田かおり・神崎素樹(京都大学大学院)
若手発表	身体活動量および強度の違いが動脈スティフネスに及ぼす影響	茂山翔太(滋賀県立大学大学院)、南和広・吉田龍平・山田明・福井富穂・高山博史・寄本明(滋賀県立大学)、寺村康史・矢野秀樹・林進(彦根市立病院)
若手発表	温熱負荷時の温冷感上昇と運動習慣及び性差との関連性	殿北将太(京都工芸繊維大学)、良川諒介・芳田哲也(京都工芸繊維大学大学院)
若手発表	ノイズ印加による動作調節・運動単位の変調	長田かおり・神崎素樹(京都大学大学院)
若手発表	バスケットボール女子学生初心者のセットシュートの習熟過程	山口拓哉・小山宏之・磯崎大二郎・奥村将太・九鬼靖太(京都教育大学)
若手発表	バスケットボールフリースローにおける質的分析を用いたコーチングの事例研究	垂脇匡宏・山中祥祐己・山本剛史・岡本直輝(立命館大学)
若手発表	第64回全日本フェンシング選手権大会における攻撃動作に関する研究	荒金翔平・小森康加・藤澤義彦(同志社大学)
若手発表	大学野球選手のバント利用法についての意識・実態調査の報告	西純平・山中祥祐己・垂脇匡宏・岡本直輝(立命館大学)
若手発表	大学生スポーツ選手における競技活動中の視力矯正状況に関する調査—種目特性からみた競技間差異—	藤永朋子・小森康加・川合結万・矢野幸子(同志社大学)
若手発表	失敗時における指導者の懲罰に対する認知が選手の学習行動に与える影響—選手と指導者の関係性に着目して—	合谷徹平(立命館大学大学院)、長積仁・山浦一保・大友智・小沢道紀・種子田穣(立命館大学)
若手発表	個人種目アスリートの自己調整を促す要因の検討 —指導者のリーダーシップ行動と目標志向性の観点から—	笠川佳子(立命館大学大学院)、山浦一保・佐久間春夫・長積仁・大友智・小沢道紀・種子田穣(立命館大学)
若手発表	ヒューマンカロリメーターを用いた簡易エネルギー消費量測定法の妥当性の検討	山本満(同志社大学大学院)、田中美沙妃・野村仁志・海老根直之(同志社大学)
若手発表	食事がスポーツドリンクの吸収速度に与える影響 ～安定同位体を用いたアプローチ～	田中歌(同志社大学)、下山寛之(福岡大学大学院)、山田陽介(京都府立医科大学)、桧垣靖樹・田中宏暉(福岡大学)、海老根直之(同志社大学)
若手発表	高等学校における武道領域(剣道)の体育授業に関する研究 —観点別評価及び伝統的な行動の仕方の分析を通して—	橋本祐貴(立命館大学大学院)、元塙敏彦(皇學館大学)、大友智・山浦一保・長積仁・小沢道紀・種子田穣・佐久間春夫(立命館大学)
若手発表	インターンシップによる社会人基礎力の獲得 —スポーツ系大学生に焦点をあてて—	深津達也(びわこ成蹊スポーツ大学)
若手発表	体育大会が学級に与える影響について	川村亮輔・谷川尚己・金森雅夫(びわこ成蹊スポーツ大学)

若手発表	体育科における態度に関する検討 —学習指導要領における内容と評価規準における観点から—	南島永衣子(びわこ成蹊スポーツ大学)、大友智(立命館大学)
若手発表	復興ボランティアが大学生の環境配慮意識・行動に及ぼす影響—びわこ成蹊スポーツ大学生を例として—	井上望(びわこ成蹊スポーツ大学)
若手発表	北アルプストレッキングにおける免疫能・心理状態の変化に関する研究	林綾子・金森雅夫(びわこ成蹊スポーツ大学)
若手発表	スポーツ NPO におけるタスク・コンフリクトが組織市民行動に与える影響 —目標の受容に着目して—	與那安貴(立命館大学大学院)、長積仁・山浦一保・大友智・小沢道紀・種子田穣(立命館大学)
若手発表	ランニングクラブの価値共創における顧客のオペラント資源の適用がベネフィットの享受に与える影響	辻本哲郎(立命館大学大学院)、長積仁・山浦一保・大友智・小沢道紀・種子田穣(立命館大学)
一般口演	運動時の脱水率と尿量および尿色調の関係	藤松典子(びわこ成蹊スポーツ大学、滋賀県立大学大学院)、宮田真希(大阪薬科大学)、寄本明(滋賀県立大学大学院)、中井誠一(京都女子大学)
研究助成報告	中学校武道必修化に向けての教育実践プログラムの開発	黒澤寛己(京都市立塔南高等学校)、横山勝彦(同志社大学)、有山篤利(聖泉大学)
研究助成報告	生徒からみたスポーツ系卒業研究の意義と課題 —公立 A 高等学校における実践に基づいて—	千代恭司(京都府立向陽高等学校)、来田宣幸(京都工芸繊維大学)
2012 年度	平成25年 3月9日 142 京都工芸繊維大学(ノートルダム館)	
若手発表	短期間のマーク走トレーニングが小学生児童の疾走能力に与える影響	斎藤壮馬・志賀充(びわこ成蹊スポーツ大学)
若手発表	スポーツ大学における短距離チームの継続的なコントロールテストの分析についてジャンプ能力とパフォーマンスに着目して	田中秀忠・志賀充(びわこ成蹊スポーツ大学)
若手発表	再現性の高い運動負荷試験についての検討	奥野鮎太郎・山本満・石原達朗・田中歌・海老根直之(同志社大学)
若手発表	静止立位における、足関節周りの粘弾性と姿勢動搖との関連	徳川貴大・神崎素樹(京都大学)
若手発表	ハイ・クリーンとスクワットの個人差がパフォーマンスに与える影響 —下肢のキネティクスに着目して—	田中康雄・小山宏之・磯崎大二郎・大月菜穂子・小宗真・柴田篤志・野上大介・水口善文・山田朋花(京都教育大学)
若手発表	筋シナジーに基づく多方向への姿勢制御の解明	川端あずさ・神崎素樹(京都大学)
若手発表	ストレッチボールエクササイズによる姿勢と身体機能の変化	佐々木勇治・佃文子・村田祐樹(びわこ成蹊スポーツ大学)
若手発表	傾斜板が走り高跳びの踏切動作に与える即時の効果	磯崎大二郎・小山宏之・田中康雄・大月菜穂子・小宗真・柴田篤志・水口善文・山田朋花(京都教育大学)
若手発表	視聴覚情報が姿勢動搖に及ぼす影響	岡野真裕・神崎素樹(京都大学)
若手発表	半構造化面接法を用いた歩行の動作観察についての比較検討 ～膝関節疾患における検討～	大桐将(山田整形外科病院)、山田勝真(蘇生会総合病院)、弓永久哲(関西医療学園専門学校)、来田宣幸(京都工芸繊維大学)
若手発表	静止立位に自律神経系が与える影響について	横井郁・神崎素樹(京都大学)
若手発表	中高齢女性を対象とした 6 週間低負荷パワートレーニングが転倒骨折リスクに及ぼす影響	浜口佳奈子・戸田遙子・佐藤幸治・栗原俊之・藤岡正子・大塚光雄・家光素行・浜岡隆文・真田樹義(立命館大学)

若手発表	月経周期とコンディション変動	森山侑希・佃文子(びわこ成蹊スポーツ大学)
若手発表	スポーツ系大学生の脳震盪発生状況	近藤由依・村田祐樹・佃文子・金森雅夫(びわこ成蹊スポーツ大学)
若手発表	人の身体動作に見られる阻害現象と痛みの自覚症状の特徴との関係についての考察	杉本歩・肥田嘉文・増田清敬・寄本明・南和広(滋賀県立大学)
若手発表	等尺性収縮時の大腿直筋およびその中央腱膜の三次元構築およびその動的変化	方城素和・神崎素樹(京都大学)
若手発表	食行動の総合的代謝評価	石原達朗・山本満・田中歌・海老根直之(同志社大学)
若手発表	女性スポーツ選手のトレーニング期における温熱負荷時の体温調節反応	佐藤琢磨(京都工芸繊維大学)、久米雅(京都文教短期大学)、常岡秀行・芳田哲也(京都工芸繊維大学)
若手発表	野球のゴロ捕球における空間制御球—捕球体勢とフットワークから—	長谷川弘実・神谷将志・来田宣幸・野村照夫(京都工芸繊維大学)
若手発表	野球打撃におけるバスター動作指導法の研究	西純平・岡本直輝(立命館大学)
若手発表	フィールドホッケーにおけるスクープの動作分析	山堀貴彦(聖泉大学)
若手発表	テニスにおける新サービストレーニング方法が即時にコントロール能力へ与える影響フラットサービスに着目して	飯塚賢太郎・志賀充(びわこ成蹊スポーツ大学)
若手発表	重りを利用した鉄棒振り上げ運動の即時的な動作影響について	小早川理・志賀充(びわこ成蹊スポーツ大学)
研究助成報告	中学及び高校水泳部活動における傷害実態とフィジカルケアサポート	三瀬貴生(医療法人南谷クリニック)、宇野慎也(京都文教高校)、野村照夫(京都工芸繊維大学)
一般口演	女性における水平方向への跳躍能力の特性 —跳躍運動の脚動作と疾走速度の関係から—	志賀充(びわこ成蹊スポーツ大学)

表2. 1984年～2013年の講演会・シンポジウム等の内容

開催年度	年月日	場所(参加者)等		
		タイトル(テーマ)等	演題名	発表者(所属)
1984	昭和59年4月16日	立命館大学 末川会館 特別講演	国際平和におけるオリンピック運動	Dr. Anthong Donald (英国 アベリー・ヒルカレッジ)
1989	平成元年11月11日	ホリデイ・イン京都 第100回記念大会記念講演 第100回記念シンポジウム 「こころ」と「からだ」	社会変化と体育・スポーツの科学的研究 武道における“こころ”と“からだ” スポーツ技術習得と無意識(の世界) スポーツにおける“こころ”と“からだ” スポーツ実践の喜びとバイオメカニクス研究 すべての人がスポーツを享受できる条件つくりを 心と身体と体育学 真理探求を中心とした正課体育の研究	松田岩男(日本体育学会会長) 横山勝彦(同志社大学) 藤田登(同志社大学) 小田伸午(京都大学) 野原弘嗣(京都教育大学) 宮田和信(京都教育大学) 八木保(京都大学) 小野桂市(京都工芸繊維大学)
1997	平成10年3月11日	京都大学(参加者40名) 活性酸素と運動 —スポーツはからだに悪いか—		樋口満(国立健康・栄養研究所 健康増進部 室長)、井街悠 (京都大学)、荻野由信(立命館 宇治高)
1998	平成10年11月7日	京都大学(参加者50名) 21世紀の市民社会におけるス ポーツの展望 —とくに女性スポーツのありか たを通して—		Jennifer Hargreaves (Professor of Sociology of Sport. Center for Sport Development Research. School of Sport Studies Roehampton Institute London)
1999	平成11年10月12日	京都大学 参加者60名	運動中の血圧調節	Peter B. Paven 教授(アメリカ 合衆国北テキサス大学)
2000	平成12年7月27日	京都大学 参加者50名	“Substrate Utilization in man” ~ the Lactate Shuttle ~	George A. Brooks 教授
	平成13年3月10日	みやこめっせ (学会会員30名、一般市民170名参加) ミレニアム京都の健康と運動セ ミナー	生活習慣病における運動の役割	森谷敏夫(京都大学)

		京にみる散歩道、心とからだのリフレッシュ・鴨川河畔	田口貞善(京都大学)
		栄養で予防できる生活習慣病、地球を歩いて見つけた長寿の秘訣	家森幸男(京都大学)
2001	平成13年12月7日	京都大学(参加者50名)	
		人間は何故スポーツに魅せられるのか～東洋観と西洋観～	Prof.Herbert Plutschow Ph.D.East Asian Language & Cultures, UCLA
	平成14年3月9日	京都大学	
	京都の健康と運動セミナー	記録を上げる体重・下げる体重	小野伸一郎(舞鶴工業高等専門学校)
		京に見る健康散歩道(その2)一大文字山の健康登山－	小田伸午(京都大学)
		体重を変える知恵と運動－内科の最前線から－	吉田俊秀(京都府立医科大学)
2002	平成14年12月5日	京都大学	
		動きにみる美しさの法則	宮崎興二(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)
2003	平成15年11月8日	京都教育学部教育学部附属教育実践センターと共催	
		我が国における体育のこれまでとこれから	高橋健夫(筑波大学教授)
	平成16年3月13日	みやこめっせ(京都市共催、一般市民の参加)	
	健康と運動セミナー	水泳・水中運動と健康	宮下充正(東京大学名誉教授、放送大学教授)
		水泳競技の現状と科学的トレーニング	若吉浩二(奈良教育大学教授)
		誰にでもできる健康のための水泳運動	尾陰由美子(有限会社アクオスペース企画代表取締役)
2004	平成17年2月20日	京都府スポーツセンター会議室(参加者20名)	
		二軸動作ー押す動作と引く動作ー	小野伸午(京都大学大学院人間・環境学研究科助教授)
		国立スポーツ科学センターにおける競技力向上のための研究支援	船渡和男(国立スポーツ科学センタースポーツ科学研究班副主任)
2005	平成17年6月12日	京都リサーチパーク(株)西地区バズホール	
	今夏の天候と熱中症に関する講演会	熱中症の発生実態と環境温度	中井誠一(京都女子大学)
		京都の夏は暑い	小谷純久(読売テレビ・気象キャスター)
		熱中症の予防	中村純友(中村診療所、所長)

	平成17年11月13日	京都市総合教育センター「永松記念ホール」		
	「子どもの体力を考えるシンポジウムー子どもたちにとって体力は必要か」	気になる子どもの姿から 子どもの体力とは何か? 体力が子どもにもたらすものとは?	佐藤真一(京都市教育委員会体育健康教育室指導主事) 芳田哲也(京都工芸繊維大学) 和田尚(京都教育大学)	京都市教育委員会と合同開催、協賛:財団法人京都青少年育成スポーツ財団、後援:京都スポーツ少年団
2006	平成18年11月12日	京都大学大学院 人間・環境学研究科地下大講義室 (参加者180名)		
	「子どもたちにとって体力は必要か?脳と運動のメカニズム」	基調講演:今日から実践!脳のきたえ方・育て方 ~体を動かして頭もよくしよう~ シンポジウム:「子・ど・も・版 能力アップの近道って!?」	久保田競(日本福祉大学大学院教授・京都大学名誉教授) 久保田競(日本福祉大学大学院教授・京都大学名誉教授) 浜崎博(京都薬科大学教授) 佐藤真一(京都市教育委員会体育健康教育室 指導主事)	主催:京都体育学会・京都市教育委員会;協賛:(財)京都青少年育成スポーツ財団 後援:京都市スポーツ少年団
	平成18年11月12日	キャンパスプラザ京都 第4講義室		
		体育における政策、パフォーマティビティ、説明責任 一体育カリキュラムと政策ー	ジョン・エバンス氏(英国 ラーフバラ大学スポーツ・運動科学部教授、教育社会学博士)	主催:日本スポーツとジェンダー学会・京都体育学会
2007	平成19年11月11日	京都外国语大学 7号館42室(参加者:約180名)		
	『第3回 子どもの体力を考えるシンポジウム:子どもたちにとって体力は必要か?』	基調講演:子どもは動作の天才だ! シンポジウム 「子どもの体力の可能性」	小田伸午(京都大学教授) 小田伸午(京都大学教授) 木村みさか(京都府立医科大学教授) 和田英明(京都教育委員会体育保健教育室 指導主事)	コーディネーター:浜崎博(京都薬科大学教授)
	平成20年3月1日	龍谷大学		
	第1回実践研究会	野球指導における選手評価の事例報告 体のしくみや動かし方を理解し、運動実践につなげる体育学習:高大連携の取り組みを通して 京都教育庁と京都体育学会と連携について	末常拓司(京都府立乙訓高校) 中村和雄(京都府立向陽高校) 川合英之(京都府教育庁指導部保健体育課)	司会 岡本直輝(立命館大学)
	平成20年3月7日	同志社大学スポーツ健康学部(磐上館3階多目的室)		
	第2回スポーツ実践研究会:中学生のスポーツ指導を考える	亀岡中学校における運動部活性化の取り組み アメリカンフットボール中高大一貫指導の事例紹介	白方淳史(亀岡私立亀岡中学校) 橋詰功(立命館宇治中学校・高等学校)	司会 岡本直輝(立命館大学)

2009	平成22年3月6日	京都教育大学(F棟1階F16講義室)		
	第3回スポーツ実践研究会：京都を代表する高校スポーツ指導者の取り組み	鳥羽高校水泳部の科学的取り組み 洛南高校バスケットボール部の科学的取り組み	岩佐隆之(鳥羽高校水泳部) 吉田裕司(洛南高校バスケットボール)	司会 竹田正樹(同志社大学スポーツ健康科学)
2010	平成23年3月5日	京都女子大学(J棟5階J525教室)		
	第140回大会記念講演	京都体育学会のあゆみ	芳田哲也(京都工芸繊維大学)	
2011	平成24年3月3日	びわこ成蹊スポーツ大学(第2講義棟・大ホール)		
	教育講演	野外スポーツの目指すもの	飯田稔(びわこ成蹊スポーツ大学)	
	シンポジウム：コーチング—現場からのメッセージ(びわこ成蹊スポーツ大学)	なでしこジャパン ワールドカップ優勝のキセキ! 育成大国を目指す 大学テニスの役割 勝つためには？勝ち続けるためには？ びわこ式スポーツコーチングの変革—BCCSコーチングコースの取り組み	望月聰(びわこ成蹊スポーツ大学) 松田保(びわこ成蹊スポーツ大学) 植田実(びわこ成蹊スポーツ大学) 渋谷俊浩(びわこ成蹊スポーツ大学) 佐々木直基(びわこ成蹊スポーツ大学)	
2012	平成25年3月9日	京都工芸繊維大学60周年記念館		
	記念講演	熱中症の根絶を目指して	中井誠一(京都女子大学)	司会 芳田哲也(京都工芸繊維大学大学院)
	京都滋賀体育学会60周年記念シンポジウム：3月10日は京都マラソン！大会関係者が語るマラソンブームの裏側と未来	京都マラソンの動向 近年のマラソン文化の動向<広告代理店から見た市場動向> 近年のマラソン・スポーツ用品の動向 京都のマラソン、駅伝を支える立場から 京都市の新たなスポーツ文化を考える	松永敬子(龍谷大学経営学部准教授、京都マラソンマネジメント・リサーチ・チーム) 坂牧政彦(株式会社電通スポーツ局スポーツ1部専任部長) 岡智恵子(株式会社ワコールウェルネス事業部) 佐竹敏之(京都光華女子大学准教授、一般財団法人京都陸上競技協会常務理事) 下間健之(京都市文化市民局市民スポーツ振興室京都マラソン担当部長、京都マラソン実行委員会事務局長)	主催：京都滋賀体育学会、 共催：京都マラソン実行委員会、後援：京都新聞社、協力：株式会社ワコール、

表3. 若手研究奨励賞受賞者一覧

回数	年度	受賞者(所属)	タイトル
1	2004(平成16)	来田宣幸(京都大学大学院)	スポーツメンタルトレーニングを実施する際には現場の指導者(コーチ)が果たす役割にも注目すべきであるという提案
2	2005(平成17)	安藤創一(大阪体育大学大学院)	自転車運動における運動負荷と運動野の脳活動との関係
3	2006(平成18)	山田陽介(京都大学大学院)	加齢・身体機能低下に伴う骨格筋変化の非侵襲的評価: 57-96歳までの健常・要介護高齢者の下肢筋の特徴
4	2007(平成19)	中林哲郎(京都工芸繊維大学)	相撲の立合いにおける衝突の動作分析
5	2008(平成20)	片山拓(京都大学大学院)	速いスプリンターの動作は左右対称なのか?
6	2009(平成21)	進矢正宏(京都大学大学院)	注意の分散は着地時の衝撃吸収を乱す -二重課題実験による検討-
7	2010(平成22)	出町耕一(京都工芸繊維大学大学院)	運動開始時における一過性の食道温低下と皮膚温の関係
		藤井慶輔(京都大学大学院)	『球技における防御者が意思決定に用いる情報とは何か? 倒立振子モデルによるアプローチ?
8	2011(平成23)	田辺弘子(京都大学)	つま先立ち時の立位制御ダイナミクス-静止立位との比較-
		田中歌(同志社大学)	食事がスポーツドリンクの吸収速度に与える影響~安定同位体を用いたアプローチ~
9	2012(平成24)	最優秀賞 川端あずさ(京都大学)	筋シナジーに基づく多方向への姿勢制御の解明
		優秀賞 横井郁(京都大学)	静止立位に自律神経系が与える影響について
		優秀賞 西純平(立命館大学)	野球打撃におけるバスター動作指導法の研究

表4. 奨励論文賞受賞者一覧

回数	年度	受賞者(所属)	タイトル	備考
1	2004(平成16)	該当なし		
2	2005(平成17)	該当なし		
3	2006(平成18)	該当なし		
4	2007(平成19)	該当なし		
5	2008(平成20)	鈴木雄太(京都教育大学大学院)、 榎本靖士(京都教育大学)	サイドステップおよびクロスステップにおける身体重心速度と地面反力との関係	京都体育学研究24巻、p1-12、 2008
6	2009(平成21)	亀谷亮輔・宇津亮太・進矢正宏・ 小田伸午(京都大学大学院)	技能レベルの違いから見たテニスのフットワークの空間制御の比較	京都体育学研究25巻、p1-10、 2009
7	2010(平成22)	該当なし		
8	2011(平成23)	該当なし		
9	2012(平成24)	該当なし		

表5. 研究助成採択課題一覧

回数	年 度	代表者(所属)	タ イ ル
1	2008(平成20)	来田 宣幸(京都工芸繊維大学)	スピードガンを用いたティーバティングの打球速度計における信頼性および妥当性の検討
		山田 陽介(京都大学)	子供に適用できる精度の高い身体活動量評価方法の提案
2	2009(平成21)	宮崎志保(京都栄養医療専門専門学校)	高校水泳選手のエネルギー必要量の策定に関する実践的研究
3	2010(平成22)	黒澤寛己(京都府立塔南高校)	中学校保健体育科「武道必修」に向けた柔道指導案の作成—「体育の武道」をめざして—
		千代恭司(京都府立向陽高校)	生徒からみた京都府立高校III類(体育系)における卒業研究の意義と課題—これまでに実施された卒業研究の分析および卒業研究の過程を通じた高校生の変化—
4	2011(平成23)	三瀬貴生(医療法人南谷クリニック)	中学および高校水泳部活動における傷害実態とフィジカルケアサポート
5	2012(平成24)	高安和典(京都教育大学附属高等学校)	高等学校におけるICTを活用した体育授業にはどのような事例が考えられるか
		黒澤寛己(京都市立塔南高等学校)	中学校保健体育科「武道(柔道)」の安全な指導方法の開発及び普及について

表6. 京都体育学研究(2012年より京都滋賀体育学研究)の内容

卷	発刊年 (西暦)	年 月	種 類	タ イ ル	著者名
1	1986	昭和61年2月	序文	現象から真実へ 一刊行のことばにかえてー	竹内京一
			原著	観海流の伝播に関する一考察 一京都府(尋常)師範学校における場合ー	中森一郎
			原著	現場体育教師のダンスに対するイメージ分析 一男子ダンス履修を基準としてー	吉田瑞穂
			原著	大学正課体育実技における1500m走の記録の一回生・二回生の差について	佐路清隆
2	1987	昭和62年2月	原著	創作ダンスに対して体育教師がいだく意識構造の計量分析	吉田瑞穂
			原著	本態性高血圧症患者に対する定期的な身体運動の効果について	岸本裕行他
			原著	運動選手の血液性状に関する研究 一長距離ランナーの安静時の赤血球数についてー	東隆暢
			原著	相撲の「弓取式」と散楽	山田知子
3	1988	昭和63年2月	巻頭	故 山岡誠一先生を偲んで……付略歴	蜂須賀弘久
			原著	スポーツの楽しさに関する考察 一する立場からの分析ー	和田尚
			原著	全身反応時間のトレーニング効果について	石川俊紀他
			資料	バレーボールの図書にみられる「基本・基礎」について	宮田和信
4	1989	平成元年2月	原著	体育教師の社会学的アンビバランス	杉本厚夫
			原著	ダンスにおける創作能力と創造的思考能力との関係	吉田瑞穂
			原著	一過性の重量挙げ運動が尿中蛋白質代謝関連物質に与える影響	芳田哲也他
			原著	漕艇運動中の呼気ガスパラメーターの動態からみたラストスパートの評価	岡本直輝
			資料	競泳ターンの分析的研究	武部吉秀他

5	1990	平成 2 年 2 月	特別講演	社会変化と体育・スポーツの科学的研究	松田岩男
			報告	100回記念シンポジウム：体育・スポーツにおける“こころ”と“からだ”	
			原著	大学生のサッカーに対するイメージについて	
			資料	幼児における手の操作能力と運動能力の関係	
			資料	女子長距離ランナーの等速性脚筋力に関する研究(第 1 報)	
6	1991	平成 3 年 2 月	原著	インパクトハンマー法による筋収縮時の体表振動に関する基礎的研究	寺田光世他
			資料	幼児における調整力および手の操作能力の発達についての研究	松浦範子他
			資料	大学ラグビー選手のトレーニングが体格・体力に与える影響	芳田哲也他
			資料	関西女子大学バレーボールリーグ戦の成績順位と身長および攻撃技術との関連についての考察	藤島みち
7	1992	平成 4 年 2 月	巻頭	故高木公三郎先生を偲んで…付略歴	伊藤稔
			原著	幼児における“まりつき”技能の発達についての研究	松浦範子他
			原著	女子大学の正課体育実技における至適運動強度と運動効果に関する研究	宮村茂紀
8	1993	平成 5 年 2 月	原著	クロスカントリースキー選手の最大下「腕+脚」運動時にみられる心肺応答の特性	三浦哉他
			原著	幼児の“まりつき”技能の発達についての研究(第 2 報)	松浦範子他
			原著	女子サッカー選手の社会意識に関する研究(1)	宮村茂紀
			資料	T. D. Wood の体育論の展開に関する研究	新野守
9	1994	平成 6 年 2 月	原著	身体重心移動からみた野球の打撃における時間的調節	小田伸午他
			原著	水泳における未熟練者のスタート動作パターン分析	野村照夫他
			原著	表現者と感知者の認知の一一致を高める教材 一色をテーマとした幼児の身体表現の場合ー	古市久子
10	1995	平成 7 年 2 月	原著	高校男子生徒のハードル走指導における至適インターバルの導入について	山村康夫
			原著	サッカーのミニゲームにおけるプレーヤーの移動に関する情報のフィードバックの影響についての研究	呂桂花
			原著	オノマトペ刺激が幼児の身体表現活動に与える影響について	古市久子
11	1996	平成 8 年 2 月	原著	“踏海流遊泳術”に関する一考察	中森一郎
			原著	日本・英国・香港の大学生男女のサッカーに対するイメージの計量的分析	中桐伸吾他
			原著	高校生のハードリング技能に関する技術的要因	高安和典他
12	1997	平成 9 年 2 月	原著	ヒトの“生物学的活力”的推定とその評価方法	兼高明生他
			原著	受動的トルクの履歴現象からみた中高年女性の動的柔軟性に関する研究	寺田光世他
			原著	女子高校駅伝選手における体格と 3000 メートルレースの成績との関係について	小野伸一郎他
			原著	FIRO-B によるサッカー部集団の相互人間関係の分析的研究—縦グループにみる両立性について(2)	村川健一他

		資料	スポーツ活動の実施状況に関する国際比較調査	北川隆他
13	1998	平成10年2月	卷頭	故木村静雄先生を偲んで……付略歴
			総説	両側性筋出力の制御メカニズム
			原著	実践に埋め込まれた理論を抽出する試み
			原著	85歳以上の高齢者の若・中年期の身体活動水準と冠動脈症候群危険因子との関連性
14	1999	平成11年2月	原著	幼児におけるダンス模倣の発達的研究
			原著	ノルベルト・エリアスにおけるスポーツ
			資料	黎明期における女性陸上競技および女性中長距離・マラソンに関する略年表
15	1999	平成11年7月	原著	夏期スポーツ活動時の脱水および飲水が大学柔道選手の運動能力および温冷感に与える影響
			原著	サッカー選手と一般学生における中心視野と周辺視野の反応時間
			原著	ヒトの“活力年齢”の推定と“活力年齢”に及ぼすライフスタイルの影響
			原著	肉従蓉(Cistanche salsa)と持久性運動が筋代謝に及ぼす影響
				京都体育学会だより No.22
			活動報告	京都体育学会主催 講演会報告
			活動報告	運動生理分科傍聴余談
16	2000	平成12年5月	原著	幼児の豊かな心の育ちを考えた身体表現活動の教材研究 一運動会までのプロセスを通して一
			原著	記録水準の異なる男女槍投げ選手の競技会試技におけるクロスステップおよび投擲動作の分析
			原著	大学ボート選手の新人期におけるトレーニング効果
			原著	4週間の禁煙が有酸素性作業能力および心臓自律神経活動動態に与える影響
			資料	ボールジャグリングの技能習得に伴うモデルデモンストレーションに対する見方の変容 一事例 研究一
				京都体育学会だより No.23
				話題提供
				京都体育学会企画シンポジウム
17	2001	平成13年5月	原著	等尺性筋力の増大および減少局面における筋・神経系活動
			原著	安静時呼気中一酸化炭素濃度と禁煙週間の関係
			原著	女子大生の身体活動量と体構成および筋力の14年間における変化
			資料	筋電図による吊輪のプレスの倒立の解析
				京都体育学会だより No.24
				話題提供
				活動報告

18	2002	平成14年5月	原著	模擬高地におけるラットの水泳トレーニングに対する代謝適応	田口貞善他
			原著	クロールのパフォーマンスとストロークのプル後半動作筋力との関係	岡田寛他
			原著	宮古島(沖縄県)住民のライフスタイル、体型と高血圧の関連性	山崎先也他
			原著	女子エリートリフターのスナッチ技術とパワー	伊坂忠夫他
			原著	BMI別にみた高校女子長距離選手の競技記録に関する縦断的研究	小野伸一郎他
			原著	大伸身飛び：第1飛躍及び馬接手期の技術と第2飛躍の“物理的大きさ(雄大さ)”の関係	武井義明他
			京都体育学会だより	No.25	
			活動報告		
19	2003	平成15年5月	原著	高校水球選手の膝および肩関節筋力発揮特性－ハンドボール選手との比較から－	井上恵子
			原著	骨折とともに老齢ラットの骨格筋線維の形態的・酵素化学的変化	矢澤真幸他
			原著	スポーツ経営におけるサービス戦略とサービスの品質：日中フィットネスクラブの分類	山下秋二他
			原著	間欠的短時間激運動における無酸素性パワーの持続条件	山本憲志他
			京都体育学会だより	No.26	
			活動報告		
20	2004	平成16年8月	原著	後肢無重力環境におけるヒラメ筋と長指伸筋のタンパク質質量変化の相違	米田祐子他
			原著	中年女性における縄跳びのトレーニング効果について	岡本直輝
			原著	高齢者におけるパークゴルフの生理学的運動強度	山本憲志他
			原著	クラシックバレエの立位姿勢における身体重心動搖の制御	佐野奈緒子他
			実践研究	3ヶ月の運動教室への自発的参加が中高年女性の身体面へ及ぼす効果	河野洋允他
			資料	日本プロ野球選手の投球側と打撃様式の推移(1950—2002)	中山悌一
			京都体育学会だより	No.27	
			活動報告		
			20巻記念特集		
21	2005	平成17年9月		故川畑愛義先生を偲んで	八木保
			原著	立位姿勢における安定限界の足圧中心分析	佐野奈緒子他
			原著	青年期以降の運動意欲、社会的スキルそして孤独感とそれらの関連性	石倉忠夫
			実践研究	学習者の意識の変容からみたボールルームダンス学習の有効性に関する研究	山口孝治他
			実践研究	中高齢者における継続的なテニストレーニング中の運動強度	和田匡史他
			京都体育学会だより	No.28	
22	2006	平成18年9月	原著	一流選手のローチェ演技におけるバイオメカニクスからみた成功要因モデルと演技得点の関係について	武井義明他

			原著	野球の投手の投球はどのような分布になるのか?	土屋真司他
			実践研究	バスケットボールのディフェンス時における有効な飛躍方法に関するバイオメカニクス研究	勝原洋二他
			実践研究	現場の指導者が果たす役割に注目したスポーツメンタルトレーニングの実践研究	来田宣幸他
				京都体育学会だより No.29	
23	2007	平成19年9月	資料	スポーツのグローバリゼーション所論におけるスポーツ構成的視角の位置に関する試論 京都体育学会だより No.30	松島剛史
24	2008	平成20年9月	原著	サイドステップおよびクロスステップにおける身体重心速度と地面反力との関係	鈴木雄太他
			原著	立位姿勢の安定性向上にインソールの装着は効果的か	矢野涼子他
			実践研究	トレーニングの実施順序が筋力および有酸素性能力の発達に及ぼす影響 第1回 体育・スポーツ実践研究会報告 野球指導における選手評価の実例報告 京都府立向陽高校第Ⅲ類体育系の取り組み 競技力向上や体育授業の実践の場と京都体育学会との連携について	森井秀樹 末常拓司 中村和雄 川合英之
				京都体育学会だより No.31	
25	2009	平成21年9月	原著	技能レベルの違いから見たテニスのフットワークの空間制御の比較	亀谷亮輔他
			原著	水泳練習時の発汗量、飲水量、脱水量と環境温度との関係	佐竹敏之他
			実践研究	障害者シンクロナイズド・スイミングにおける動作のバリエーション	君田真理他
			資料論文	D大学アメリカンフットボール部2006年度シーズンにおける外傷とその原因についての分析 第2回 体育・スポーツ実践研究会報告 亀岡中学校における運動部活性化の取り組み アメリカンフットボール中高大一貫指導の事例紹介	井口順太 白方敦史 橋詰功
				京都体育学会だより No.32	
26	2010	平成22年12月	資料論文	野球のティーバッティングにおける打球速度計測 第3回 体育・スポーツ実践研究会報告 鳥羽高等学校水球部の科学的取り組み 洛南高等学校バスケットボール部の科学的取り組み	来田宣幸他 岩佐隆之 吉田裕司
				京都体育学会だより No.33	
27	2011	平成23年12月	原著	高校水泳選手の推定エネルギー必要量の策定に関する実践的研究 京都体育学会だより No.34	宮崎志帆他
28	2012	平成24年7月	原著	小中学生における3軸加速度計内蔵活動量計の妥当性の検討ならびに身体活動量が自律神経機能に与える効果	山田陽介他

		原著	野球のゴロ捕球におけるフットワークの基礎的研究 一着地および捕球位置に着目して一 京都滋賀体育学会だより No.35	長谷川弘実他
29 2013 平成25年 7月		資料	スポーツによる地域活性化—女性のスポーツ活動に着目して—	内田和寿他
		資料	京都府立向陽高等学校における体育・スポーツ系卒業研究の意義と課題	千代恭司他
		資料	中学校武道必修化に向けての柔道指導プログラムの開発	黒澤寛己他
			京都滋賀体育学会だより No.36	

専門分科会の歩みと思い出

発育発達専門分科会の歩み

京都滋賀体育学会顧問

大山 肇

(京都外国语大学名誉教授)

1. 日本体育学会と京都滋賀体育学会発育発達専門分科会との関係

日本体育学会発育発達専門分科会、そして日本発育発達学会は、昭和37年、発足したところの京都発育発達研究会からはじまっている。その経過等については京都体育学会「三十年のあゆみ」に八木 保氏(京都大学名誉教授)が記している。このようなことから日本体育学会発育発達専門分科会の世話役・事務局は京都体育学会発育発達専門分科会が長らく行って来た。

日本体育学会(会員数約6500名)の専門分科会は現在(平成25年)25専門分科会あるがその大部分の世話人・事務局は関東地区である。この京都での世話人・事務局は平成17年(2005年)開催の日本体育学会(筑波大学)まで続いていた。

その後、日本体育学会発育発達専門分科会は平成14年(2002年)に日本体育学会の専門分科会から独立して日本発育発達学会(会長・小林寛道 東京大学名誉教授)へと発展していくのである。

この時の日本発育発達学会の発起人として当時の京都体育学会から次の四名の会員が参画している。八木 保氏(京都大学名誉教授)、中村栄太郎氏(京都大学名誉教授)、中神 勝氏(京都ノートルダム女子大学教授)、木村みさか氏(京都府立医科大学教授)。

この日本発育発達学会第1回大会は2002年12月東京大学駒場キャンパスで開催されたが京都体育学会会員から次の二名が一般研究で口頭発表している。

①中村栄太郎(京都大学)

「共分散構造分析による老化の指標の探索的

研究」

②木村みさか(京都府立医大)

「農村地域小学校の高学年児童の身体活動量と栄養摂取に関する調査」

2. 京都滋賀体育学会発育発達専門分科会について

近年、高齢社会を迎える高齢者の健康・運動・QOL等への関心が国民の間で高まると共に少子化もあいまって子供の発育発達に関する多くの研究発表がなされている。京都滋賀体育学会発育発達専門分科会は例年6000円の補助金を京都滋賀体育学会からの予算で活動している。

この30年間の京都滋賀体育学会は前述したそれまでの活動の継続から八木 保氏(京都大学名誉教授)が1983年~1997年の長期間にわたりて世話人を務められた。八木 保氏は日本体育学会発育発達専門分科会の世話人、そして当時の京都体育学会役員をされながら京都大学楽友会館や京大会館などで精力的にこの発育発達専門分科会の研究会を開催された。八木保氏の研究主題は健康・体力・児童生徒の発育発達で、それに関係する論文は多数にわたる。日本体育学会、日本発育発達学会名誉会員である。

1998年~2000年の世話人は中村栄太郎氏(京都大学名誉教授)である。中村栄太郎氏は人間の老化についての数的評価に多数の論文がある。2012年に早逝する間際まで熱心に研究活動をしていた。

2000年~2005年の世話人は小島広政氏(京都産業大学名誉教授)である。小島広政氏は日本体育学会発育発達専門分科会から選出されて日本体育

専門分科会の歩みと思い出

学会評議員そして当時の京都体育学会理事も歴任された。度重なる海外渡航経験から「フィンランドの教育と子供の生活」や「インド人のライフスタイルと健康」等の海外での人間の発育発達についての研究が目立った。

2005年～2006年の2年間の世話人は大山肇氏(京都外国语大学名誉教授)であった。大山肇氏は勤務校の仕事の都合で世話を短期間でやめて

次の木村 みさか氏(京都府立医大教授)が世話人になった。大山 肇氏は高齢者の健康をテーマに理論と実践を論じた。15年にわたり高齢者のスポーツ大会である「ねんりんピック大会」参加者への健康調査を行い、その結果を研究会や学会に報告する内容もあった。

そして、現在は前述したように木村みさか氏が世話人となっている。

研究会での一コマ（京都外国语大学八号館前）



左から 大山 肇 (京都外国语大学) 小島広政 (京都産業大学)
Pete E Lestrel 夫妻 (UCLA 名誉教授・人類学)
大槻文夫 (東京都立大学) 八木 保 (京都大学)

運動生理学分科会の歩み

来田 宣幸
(京都工芸繊維大学)

運動生理学分科会は京都大学の田口貞善先生、小田伸午先生が中心となって世話をつとめ、1983年から2011年までの間に27回の研究会や講演会が開催された。内容としては、海外からの研究者による研究会や関連分野の国内研究者による講演会、若手研究者による研究発表会など最先端の研究から医学や運動指導などの現場との連携を図るなど幅広い取り組みであった。

海外の研究者による最先端の知見の紹介としては、P.B.Raven 教授によるセミナー(1983.9.20)、コロンビア大学の Bernard Gutin 教授による

「Weight control の科学」(1985.4.20)、ユニバーサルリハビリサービスセンターの Michael Pollock 教授による「アメリカにおける心疾患患者の最新運動療法とその効果」(1985.4.20)、マックススター大学の Oded Bar-Or 教授による「無酸素的エネルギー供給機能とその評価法ならびに子供のトレーナビリティーについて」(1985.4.20)、ストックホルム大学の G. ボーグ教授による「主観的運動強度の関する心理・生理学的研究成果とそのスポーツ科学、臨床医学、労働科学への応用」(1990.7.27)、スタンフォード大学のバッヘンバー

ガー教授による講演(1991.11.28)、St. George's Hospital Medical School, London の Brian. J. Whipp 教授による「Oxygen uptake profiles and exercise tolerance」(1995.3.28)、The Pennsylvania State Univ'USA の James A. Pawelczyk 博士による「無重力に対する生体適応～宇宙飛行士、Dr. Pawelczyk のスペースシャトル実験から～」(1998.9.24)などであった。

関連分野の国内研究者による講演会としては、当時奈良女子大学の大築立志教授による「運動の巧みさ」(1991.12.14)、科学技術庁放射線医学総合研究所の福田俊博士による「Hypokinesis、放射

線と骨粗鬆症」(1996.2.11)、京都大学の松村道一教授による「運動学習と中枢性制御」(1998.3.18)、東京大学の八田秀雄教授による「運動による乳酸輸送担体の発想の変化」(2001.12.11)などであった。

また、特記すべき点としては、他の団体と連携した取り組みも多く企画され、日本体育学会大阪支部や大阪体育学会運動生理分科会との共催研究会(1986.7.5、1990.7.14、1990.7.27)や京都体育学会バイオメカニクス分科会との合同研究会(2005.4.16、2008.12.26、2009.12.23、2010.12.23、2011.12.23)など多様な研究会が開催してきた。

バイオメカニクス専門分科会の歩み(1982年～2013年)

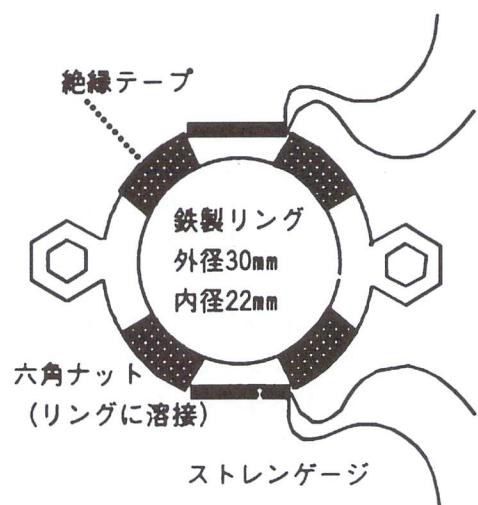
野村 照夫
(京都工芸繊維大学)

この30年間、当分科会の世話を人、熊本水頼(京都大)、野原弘嗣(京教大)、野村照夫(京工織大)、榎本靖士(京教大)が担当してきた。継続的に活動を続け、運動動作の分析や力学情報の計測デバイスの開発などの研究発表に加え、当専門分科会全体として行ってきた活動は、およそ大きく3つに大別される。

1) 世界的視野に立った活動:Pierre Rabischong (Institut National de la Santé et de la Recherche Médicale) (1983、1985) や Keith R. Williams (Univ. of California, Davis) (2007) のセミナーによる外国人研究者との交流、山下謙智の INSERM (1986)、野原弘嗣の Univ. of Iowa (1986)、武井義明の Northern Illinois Univ. (1989) や野村照夫の Ball State Univ. (1995) 等の海外での研究・研修報告を通じて、国際的のバイオメカニクス研究動向の把握および情報交換を行った。それによって、京都滋賀が世界に直結しているという研究の場づくりに有意義であった。

2) バイオメカニクスを応用する活動:川合寛明(水球)や呂桂花(サッカー)による体育指導や

コーチングに応用できるリアルタイムゲーム分析(1993)や三橋利彦(バドミントン)によるスポーツスキルの評価(1993)等、現場の指導者によるバイオメカニクスを応用した実践的な研究発表について議論を深めた。また、京都府内の体育系高校生(普通科III類)の卒業研究発表会と連携し



実践的研究活動としての工作実習
簡易力量計の作成(野原・藪根, 1994)より

専門分科会の歩みと思い出

(1998)、斬新な視点や問題解決法について聴講・質疑応答によっての視野を広げることができた。さらに、野原弘嗣・藪根敏和によるストレンジージを金属製リングに張り付けた簡易力量計の作成(1993)、小堀(高山)優子による表計算プログラムを使った合成重心算出の実習(1994)や野村照夫によるバイオメカニクスへのモデル関数の適用に関する実習(2001)等の研究に応用できるノウハウの共有を推進した。それに加え、バイオメカニクスをどのように教育するかをテーマに、野原弘嗣による教員養成課程におけるバイオメカニクス教育(2000)、常岡秀行による医用バイオメカニクスの教育(2000)、野村照夫による教養教育におけるバイオメカニクスの教育実践(2000)等、バイオメカニクス教育の現状や方向性を探る情報の共有を図った。

3) 他領域と連携した活動：医用バイオメカニクス、運動制御、運動学習、体力等程度の差こそあれ様々な領域と連携した研究が増えてきたことが近年の特徴である。当専門分科会はキネシオロジー研究会からの発展組織であって、運動生理学との関係は深い。したがって、小田伸午、来田宣幸らと協議し、運動生理分科会と合同で拡大的活動を行った(2008、2009)。そして、体育、スポーツ、健康科学等を研究の対象とする学生や大学院生が複数の大学に増えつつある昨今、学部生および大学院生レベルで研究交流の場を設けることは、学習意欲の向上、知的レベルの引き上げ、広い視野の獲得、新しい知見の共有等の可能性が期待され専門分科会単独の活動よりも、学生の教育・研究に有効であると判断できる。このような



若手研究交流会 2012 における集団思考

経緯を踏まえ、専門分科会を発展的に解消し、若手研究交流会(2010、2011、2012)を企画するに至った。この研究交流会は、同一会場で4～5演題同時進行で、発表者が自分の取り組んでいる研究課題についてアイデアや進捗状況を2回ずつ発表する。聴衆は興味のある発表を2つ選択できる。発表に対してブレインストーム形式で意見を出し合い、最終的によりよい問題解決の糸口を得ようとする集団的思考の場となる。自由な雰囲気で、闊達な議論が飛び交い、演題数が24、参加者が50名を超える規模に成長してきた。

このような当専門分科会30年の歩みを総括すると、国際標準を知ることによる研究水準の向上、知見・経験の共有による研究基盤の拡大、持続可能な研究体制構築のための若手研究者育成が行われてきた。研究者個人としての点を研究集団として線とし、他領域や現場との連携によって面を作り、それを継続することで体積を増やすように、質的、量的、時間的成長がこれからも続くことを期待する。

体育社会・心理学専門分科会の歩み

日本体育学会・京都滋賀体育学会名誉会員

藤田 登

(同志社大学名誉教授)

体育社会・心理学専門分科会は竹内京一(京都

学芸大学)と日比野朔郎(京都府立大学)が発起人

となり昭和40年に発足された。当時の資料(京都体育学会30年のあゆみ)によると、個人研究をたてまえとして、例会では1演題を発表するか、もしくは話題を提供し、お互いが研究討論して各年4回開催していたようである。開催場所は同志社大学が多く、大谷大学でもしばしば開催されている。

昭和46年には「運動文化と民族性の関係について(仮称)」を研究テーマとして設定して共同研究を開始した。昭和51年より藤田登氏(同志社大学)が世話人となったが、その頃から例会の参加者が少なくなり、例会の開催回数も減少している。昭和59年以降は年1回の開催になっている

が、藤田氏が中心となり、大阪や奈良から研究者を招き、積極的に研究会や話題提供を実施している。その後、世話人は平成11年より横山勝彦氏(同志社大学)が受け継ぎ平成14年を最後に例会の開催は途絶えている。

近年、京都滋賀地域においても体育社会・心理学を研究している研究者は少なく、情報交換や論議には中央(東京等)に出向く必要があり、研究成果の向上には苦労されているようである。時間をかけた地道な調査的研究も必要である。今後は積極的に研究集会を開催し、体育社会・心理学を専門とする若手研究者の育成を願いたい。

体育指導部会の歩みとよもやま話

増田 洋

(京都嵯峨芸術大学教授)

記録によりますと、1983年6月横山一郎先生を世話人として体育指導部会が発足したようです。以後年2、3回のペースで部会が開催され、1988年に小野桂市先生に受け継がれました。1994年には部会としての研究テーマ(「生活様式が幼児、児童、生徒の活動や身体に与える影響」)を定め、1996年からは濱崎博先生を中心に、2003年まで毎年、体育学会や体力医学会で発表を重ねました。2004年以降は私が引き継ぐことになりますが、大学教員の退職や公務繁忙等の影響により部会開催数は減少し、2008年度から休会を余儀なくされ、誠に申し訳ない限りであり、深くお詫びするしかありません。

私は20数年前の春、京都工芸繊維大学にて授業をしていたおりに、「体育指導部会の集まりがあるから参加してみませんか。」という小野桂市先生のお誘いを受けましたが、当時この部会がどの

ようなことをしているのか、何も分からぬままの参加でした。部会では先生方の取り組まれているご研究や授業方法の紹介等、私の専門以外の情報が多く、それがたいへん新鮮で参考になることばかりであったと記憶しています。そしてこの部会の特徴は、何といっても小・中・高校の先生方の参加が多く、大学の教員数を上回っていたことでしょう。当時は大綱化によって大学体育が必修から選択にという流れの中にあり、大学体育の授業の中身が問われていた時期もありました。そのような中で小・中・高校の先生方の具体的な授業の取り組みを紹介していただき、学ぶべき点が数多くあったことを記憶していますし、現在の授業に影響を与えてることは明らかです。

近年、大学ではFD活動がさかんに行われています。体育指導部会発足当時ではFDという言葉は存在しませんでしたが、授業内容・方法を改

専門分科会の歩みと思い出

善、向上させることを目的として活動していましたし、単に授業内容の改善や方法に留まらず、広く教育改革として捉え、学生、生徒、児童等の学

習意欲向上を図り、教育の質的向上を目指した活動であったことは自負できるものであったと思われます。

体育原理・歴史専門分科会の歩みと思い出

京都滋賀体育学会顧問
岡尾 恵市
(立命館大学名誉教授)

定例研究会は、1984年に竹内京一先生(京都教育大学)と中森一郎先生(大谷大学)のお世話で始まった。毎年1回～2回定期的に研究発表や分科会が実施された。1984年から1992年までは、中森先生のお世話で、主として大谷大学で開催され、1992年以降は、岡尾(立命館大学)が世話人を担当した。

とくに1992年4月3日～4日に、立命館大学国際学術交流研究会の主催で、英国スタンフォード大学ジェリィ教授とホーン助教授による「形態社会の批判的再評価」および「レジャーおよびスポーツ社会学におけるグラムシニズムとウェーバー・リアニズム」についての講演と研究交流会を会員に呼びかけ開催した。さらにその後、立命館大学スポーツ社会学・国際シンポジウムなどの共同主催で研究会を実施した。これらの研究会は、スポーツ史学会にも呼びかけて行われた。

さらに、1998年11月には、英國ロンドン大学ハーフィング教授を招き「21世紀の市民社会におけるスポーツの展望—女性スポーツのありかたを通じて—」の講演会を持ち、2000年の研究会には「長野冬季五輪開会式の内容分析(山下高行・立命館大)」、「1883年～1944年までの英文陸上競技文献集について(岡尾恵市・立命館大)」の発表があり、2001年3月には「近代ドイツ結社(有賀郁敏・立命館大)」、「創設以来の国際オリンピック委員会(IOC)委員名簿一覧(岡尾恵市)」の報告が行われた。

京都滋賀には多くの原理・歴史分野の研究者が、所属しておられて活発な研究会が行われてきた。当時の日本体育学会や京都体育学会大会においても、本領域の発表が多かったことが思い出される。

体育経営管理専門分科会の歩み

中 比呂志
(京都教育大学)

体育経営管理専門分科会は、京都体育学会が創設され31年目を迎えた昭和57年(1982年)に発足した。それから平成23年度(2011年度)までの30年間の間に、研究発表会を中心に、研究会や講演会などを開催してきた。

最初の世話人は舛岡義明氏であり、昭和59年2月(1984年)に最初の研究発表会が行われている。昭和59年度(1984年度)～昭和61年度(1986年度)は、蜂須賀弘久氏が世話人となり、英國や西ドイツのスポーツ事情、京都府の中学生や高校生

の体力・運動能力の現状に関する発表や京都府公立高校普通科3類体育系の現状と課題についての研究報告が行われている。この時期の会場として国体局3階会議室が使用されており、昭和63年(1988年)の全国二巡目最初の京都国体開催に向けて準備がなされていた様子がうかがえる。その後、昭和62年度(1987年度)～昭和63年度(1988年度)は川北智世氏に世話を引き継がれ、この時期にはアメリカの体育事情や京都国体開催に関する研究発表が行われている。平成元年度(1989年度)～4年度(1992年度)の時期は、宮田和信氏が世話を引き継いでいる。この時期の研究発表としては、国体の歴史や国体参加選手の追跡調査等、国体後の京都府のスポーツ施策をにらんだ研究が見られる。平成元年11月に、京都府体育協会のポスト国体検討委員会が「21世紀を展望した本府スポーツ振興について」を建議しており、京都国体後のスポーツ振興のあり方が議論されていたことがうかがえる。その後、平成5年度(1993年度)～平成7年度(1995年度)は山中博史氏へと世話を引き継がれていく。この期間の活動としてはスポーツ指導者のライセンスの現状や役割に関する講演会が行われている。昭和62年に文部大臣認定「社会体育指導者の知識・技能審査事業」(文部大臣認定制度)が導入され、この制度の普及が図られている時期である。この期間には、京都府体育協会が主管するスポーツ指導者研修会に会員がオブザーバーとして参加し、生涯スポーツ指導者の役割について、一般のスポーツ指導者とともに討論を行う形で研究会が開催されている。平成8年度(1996年度)からは、中が世話を引き継ぎ、卒業論文や修士論文等の研究を中心に研究発

表会を開催した。当初は京都教育大学の学生や院生を中心とした研究発表会であったが、平成17年度(2005年度)の研究発表会からは、びわこ成蹊スポーツ大学も参加し、その後、同志社大学、立命館大学、龍谷大学も加わり、複数の大学の体育・スポーツ経営学を学ぶ学生や院生が参加する合同研究発表会という形式で開催されていく。この時期から発表演題数も大幅に増え、多い時には20演題前後の発表が行われている。社会的にもスポーツビジネスやスポーツマネジメントに関心が集まるようになり、各大学においても体育・スポーツや健康を専門に学ぶ学部・大学院が設置され、体育・スポーツ経営学を専門とする教員が京都滋賀地区に集結してきたことが大きく影響していると考えられる。この時期の研究発表では、学校体育に関する研究発表から、Jリーグや総合型地域スポーツクラブ、スポンサーシップなど、様々な視点から体育・スポーツのプロダクトを検討しようと試みた研究発表が数多く見られるようになった。

京都体育学会の専門分科会は平成24年3月に発展的解消されることとなるが、その後の体育経営管理専門分科会の活動は、京都滋賀体育学会の研究集会へと引き継がれていく。平成24年度(2012年度)は中比呂志・長積仁氏と中が世話をとなり、京都教育大学を会場に体育経営管理研究集会が開催され、学生や院生による21演題の研究発表が行われている。ここ数年の研究発表会では教員間はもとより、学生や院生間においても大いに交流が図られる会となっており、今後さらなる発展が期待されるところである。

発育発達専門分科会の歩み

開催 年度	年月日	場所(大学)		
	形式	演題名・内容など	発表者(所属)	備考
1983	昭和58年12月24日			
	セミナール		福田潤(福田小児科医院)	全国発育発達分科会事務局を兼ねる
1984	昭和60年3月28日	京都大学教養部		
	研究会	特定労作時における敏捷性、筋力発揮機能およびそれらの年令に伴う変化	万井正人・八木保他	「発育・発達専門分科会通信第12号」を6月に発行
1985	昭和61年3月31日	京都大学楽友会館		
	研究会	課題 「大学入学後の身体の発育発達」		発育発達分科会通信 NO.13 (発行5月)
		I回生からII回生にかけての京大生体格、体力の変化	八木保(京都大学)	
		京都外大入学後3ヶ月の体力の変化	大山肇(京都外国语大学)	
		ノートルダム女子大学学生の体力	北村映子(ノートルダム女子大学)	
1986	昭和61年4月	京都大学楽友会館		
	研究発表準備			発育発達専門分科会通信第14号 作成(61年4月)
1987	昭和62年5月			
		見え出す能力と授けられた能力	渡辺俊男 他3編	発育発達専門分科会通信第15号 発行(62年5月)
	昭和62年6月			
	話題提供	フィンランドの教育と子どもの生活	小島広政(京都産業大学)	
1988	昭和63年7月2日			
	研究会	児童・生徒の体位・体力・知力の時代的発育発達の諸相	瀬戸進(大谷大学)	発育発達専門分科会通信 No.16号
	平成元年3月23日			
	話題提供	手指骨の成熟ならびに骨幹部の長育、幅育との体位との関係	吉岡文雄	
		スカンジナビア地域の子どもたちの発育	小西博喜 ほか	
		22世紀に備える研究課題	万井正人(京都大学)	
1990	平成2年3月3日			
	研究会	長期観察によるフルマラソンと発育発達との関係について	田房豊彦	会誌: 1.6.1「分科会通信」No.17 発行
	研究会	ライフスタイルと健康	岩井浩一	記事: Auxolgy 国際会議より (八木保)他
	平成2年7月17日	大阪工業大学		
	研究会	測定値の分布にみられる体格・体力の加齢変化 他3題	八木保(京都大学)	会誌: 2.5.31「分科会通信」 No.18発行

1991	平成3年6月29日			
	研究会	学生の生活行動と体力 成長ホルモンが老化を遅らせる効果 (D. Rudman et al)	小島広政(京都産業大学) 八木保(京都大学)	会誌「発育発達研究」第19号の発行 (3.6.1)
1992	平成4年6月1日			
	話題提供	モンゴルの体育事情 他6篇掲載	野崎康明	会誌「発育発達研究」第20号の発行 (4.6.1)
1993	平成5年6月1日			
	話題提供	筋電図反応時間の短縮と見越しの姿勢調節との関係 他論文7編を掲載	山下謙智(京都大学)	会誌「発育発達研究」第21号を発行した。(5.6.1)
1994	平成6年6月11日			
		第41回近畿学校保健学会に開催協力をし、一般研究発表及び特別講演に参加した。		会誌「発育発達研究」第22号を発刊した。(平成6年7月)
1995	平成7年11月29日	京大会館		
	講演	Biological Aspects of Human Growth	Dr. R. C. Hauspie	平成7月6月 会誌「発育発達研究」第23号を発刊した。
1996	平成8年5月28日	京都産業大学体育教育研究センター		
	セミナー	健康の維持に有効な条件を見出すための方法	松浦義行	平成8年に、会誌「発育発達研究」第24号を発刊した。
1997	平成9年7月31日			
	話題提供	児童・生徒の身長に関する国際比較の研究 一日本・スイスの場合一、ほか	小西博喜 ほか	平成9年7月31日に、会誌「教育発達研究」第25号を発刊した。
1998	平成10年10月8日			
	講演	The Clinical Approach of Overweight and Obesity	Dr. Alex F. Roche (Wright State University, School of Medicine)	京都府医師会と合同開催
1999	平成12年2月17日			
	セミナー	ライフスタイルと健康	森本兼曩	・京都産業大学の現代体育研究所および体育教育研究センターと共に開催 ・平成12年7月1日に会誌「発育発達研究」第27号を発刊した。
2000	平成12年7月4日	京大会館		
	講演	ヒトを含む霊長類の老化現象における指標の縦断的評価	中村栄太郎(京都大学)	

2001	平成13年 7月14日	京大会館	
研究会	骨成熟とスポーツ	大槻文夫(都立大名誉教授)	
	学生のライフスタイルと不定愁訴 一男女間の比較一	小島廣政(京都産業大学)	
2002	平成15年 1月31日	京都外国語大学	
講演	旧街道を歩く 一江戸期の体力・現代の体力一	八木 保(京都大学名誉教授)	
2003	平成16年 2月27日	京都外国語大学	
研究会	老化は測定できるのか	中村栄太郎(京都大学)	
	年輪ピックでの10年間の健康調査	大山肇(京都外国語大学)	
	個体発育の諸相	八木保(元京都大学)	
	学生の睡眠形態と健康との係わり	小島廣政(京都産業大学)	
2004	平成17年 2月25日	京都外国語大学	
研究会	少子化時代と子ども	小島廣政(京都産業大学)、八木保(元京都大学)、大山肇(京都外国語大学)	
2005	平成17年 8月 8日	京都外国語大学	
講演	人類形態学(主に頭部)から発育発達への提言	Pete E Lestrl(UCLA 名誉教授)	質疑応答そして同教授夫婦を囲んで懇親会を開催する。
2006	平成18年12月12日	京都府立医科大学	
講演	ヒトを測る ~ Anthropometry & Kinanthropometry ~	香川政春博士(クイーンズランド工科大学・オーストラリア)	

運動生理専門分科会の歩み

開催年度	年月日		場所(大学)	演題名・内容	発表者(所属)	備考
	形式					
1983	昭和58年9月20日					
	セミナー				Dr. P. B. Raven	
1984	昭和60年11月26日					
	セミナー				宮村実晴(名古屋大学)	
1985	昭和60年3月30日	京都大学楽友会館				
	セミナー	筋疲労の電気生理学的解明			森谷敏夫(京都大学)	
1986	昭和60年4月20日	京都大学楽友会館				
	特別講演	Weight control の科学			Bernard Gutin 教授(コロンビア大学)	
		アメリカにおける心疾患者の最新運動療法とその効果			Michael Pollock 教授(ユニバーサルリハビリサービスセンター)	(大阪運動生理分科会と共に)
1988	昭和61年7月5日	京都大学楽友会館		無酸素的エネルギー供給機能とその評価法ならびに子供のトレーナビリティについて	Oded Bar-Or 教授(マックスター大学)	(大阪運動生理分科会と共に)
1989	平成元年2月23日	京都大学教養部		セミナー 運動中の体温調節にかかる中枢神経機構	小林茂夫(京都大学)	
1990	平成2年7月14日	京都大学教養部		講演 カロチンスカ研究者における運動生理学研究の現況	森谷敏夫(京都大学)	
1991	平成2年7月27日	京大会館		セミナー 作業強度および温度が遊離脂肪酸に及ぼす影響 女子学生における無酸素性作業閾値と筋電図疲労閾値との関係について 運動の脊髄反射と脳波に及ぼす影響	森井秀樹(京都大学部教養非常勤講師) 松本珠希(京都大学教養部研究生) 見正富美子(光華女子大学)	
1992	平成3年11月28日	楽友会館		特別講演 主観的運動強度の関する心理・生理学的研究成果とそのスポーツ科学、臨床医学、労働科学への応用	G. ボーグ博士(ストックホルム大学教授)	大阪支部運動生理分科会(世話人 大阪体育大学 金子公宥教授)との共催
1993				特別講演 ライフ・スタイル、健康、栄養の観点	バッヘンバーガー教授(米国スタンフォード大学) 久保田競(京都大学教授) 中村榮太郎(京都大学助教授)	大阪体育学会運動生理分科会と共に

	平成3年12月14日	京都大学楽友会館	
講演	運動の巧みさ	大築立志(奈良女子大学助教授)	
1993	平成5年3月30日	京都大学総合人間学部	
講演	運動中の連続血圧測定装置の開発	井街悠(京都大学)	
研究発表	クーリングダウン条件について	田中邦彦(京都教育大学院生)	
	運動イメージにおける事象関連脳波	内藤栄一(京都大学院生)	
1994	平成6年4月21日	京都大学楽友会館	
講演会	心拍変動スペクトルによる自立神経活動の評価	森谷敏夫(京都大学)	
	心拍周期の新しい解析法の試み	筧田映一(京都大学院生)	
	糖尿病性起立性低血圧の心拍変動スペクトル解析	樹田出・林達也・中尾一和(京都大学第二内科)	
1995	平成7年3月28日	京都大学楽友会館	
研究発表	随意的な運動コントロールに関する最近の話題	船橋新太郎(京都大学)	
	両側性筋出力発揮時における左右の交互作用	小田伸吾(京都大学)	
	Non-invasive determination for muscle respiratory capacity in exercising man	吉田敬義(大阪大学)	
特別講演	Oxygen uptake profiles and exercise tolerance	Dr. Brian J. Whipp (St. George's Hospital Medical School, London)	
1995	平成8年2月11日	京都大学楽友会館	
講演	Hypokinesis, 放射線と骨粗鬆症	福田俊(科学技術庁放射線医学総合研究所)	世話を人の交代: 平成8年4月から小田伸午(京都大学)に交代。
1996	平成9年3月21日	京都大学楽友会館	
研究会	ラット運動時の体温調節能に及ぼす体液量の影響	河端隆志(大阪市立大学)	
	体温調節能に与える運動能力の影響	芳田哲也(京都工芸繊維大学)	
1997	平成10年3月18日	京都大学大学院人間・環境学研究科	
講演	運動学習と中枢性制御	松村道一(京都大学総合人間学部)	
1998	平成10年9月24日	京都大学大学院人間・環境学研究科	
特別講演	無重力に対する生体適応 ~宇宙飛行士、Dr. Pawelczyk のスペースシャトル実験から~	Dr. James A. Pawelczyk (The Pennsylvania State Univ. USA)	
1999	平成12年3月24日	京都大学大学院人間・環境学研究科	
セミナー	テーマ「運動と体温」		
	スポーツ現場における体温研究	中井誠一(京都女子大学)	

	運動時体温上昇に与える着衣の影響	芳田哲也(京都工芸繊維大学)	
	体温調節能の発育・老化特性	井上芳光(大阪国際女子大学)	
平成12年3月28日	京都大学大学院人間・環境学研究科		
セミナー	テーマ「肥満と運動」		
	最新肥満の科学	松本珠希(四天王寺国際仏教大学)	
	中年肥満者における運動トレーニングの効果	天野真佐理(京都大学)	
	生活習慣病における運動の役割 ~新しい体育の提言~	森谷敏夫(京都大学)	
	運動療法の実践指導	鴨田佳津子・梅田陽子(京都大学)	
2001	平成13年12月11日	京都大学大学院人間・環境学研究科	
	特別講演 運動による乳酸輸送担体の発想の変化	八田秀雄(東京大学)	
2002	平成15年3月28日	京都大学大学院人間・環境学研究科	
	講演 巧みな動きと脳の働き -動きの知覚研究より-	内藤栄一(京都大学)	
2005	平成17年4月16日	京都大学大学院人間・環境学研究科	
	研究会 動きのコツを探る ー他競技から学ぶー	バイオメカニクス分科会と合同開催	
2006	平成18年4月15日	京都大学大学院人間・環境学研究科	
研究会	テーマ「高齢者体力研究の現状と未来」		
	フィールドテストによる高齢者の体力	木村みさか(京都府立医科大学)	
	地域における運動プログラム形成と中高年者の体力	寄本明(滋賀県立大学)	
	高齢者の日常生活レベルを探る新たな研究手法の開発	山田陽介(京都大学大学院)	
2008-2011	運動生理・バイオメカニクス合同開催となった。		

バイオメカニクス専門分科会の歩み

開催 年度	年月日		場所(大学)		発表者(所属)	備考
	形式		演題名・内容など			
1983	昭和58年11月16日					
	セミナー				Dr. ピエール・ラヴィション	
1985	昭和60年4月5日		京都大学楽友会館			
	研究談話会	ISB およびヨーロッパにおける研究の動向について		熊本水頼(京都大学)		
		アメリカ合衆国における研究の動向について		森谷敏夫(京都大学)		
	昭和60年8月3日		京都大学楽友会館			
	セミナー	事故や障害による下半身麻痺患者の歩行機能回復術の紹介		ピエールラビション博士(モンピエリエ大学医学部教授)	大阪、奈良、京都支部合同でセミナーおよび懇親会を行った。	
1986						
	報告	フランス国立健康医学研究所およびパリ南大学、昭59.7～62.3		山下謙智(京都大学)		
		アイオワ大学 昭61.3～62.1		野原弘嗣(京都教育大学)		
1987	昭和63年2月13日		京都教育大学			
	報告	最近の研究について(1)		山下謙智(京都大学)		
		最近の研究について(2)		京都教育大学体育研究室		
1988	平成元年2月25日		京都教育大学			
	話題提供	動作の三次元解析について		田中進治(東香里病院)		
1989	平成2年3月29日		京都府立医科大学			
	熊本水頬先生を閉む会	バイオメカニクスの足どりと今後について 映像を用いた3次元解析の実習			昨年はこのテーマで理論について研修したので、今年は実際にについて相互研修の場を持った。	
1990	平成2年8月7日		尼崎市			
	講演会	体操競技のバイオメカニクス的研究		武井義明(ノーザンイリノイ大学)	関西体操競技研究会と共に	
1991	平成4年3月27日		京都教育大学			
	研究会	テーマ バイオメカニクスの実践的研究			内容は会員の研究成果をもとに意見交換するもので、分科会会員はもとよりスポーツ・体育指導にも参加を呼びかけ、スポーツ・体育指導と研究的連携を促進させている。	
1992	平成5年2月13日		京都教育大学			
	研究会	テーマ 身体運動現象の計量化の工夫				

	飛板飛込の踏切の計量化の工夫 リアルタイムの水球ゲーム分析について サッカーにおける移動距離の測定 バトミントン技能評価に関する一考察 小型加速度計を用いた身体局部の動きの計測 水泳中のアクティブ・ドラッグ決定の工夫	小堀優子(京都精華大学) 川合寛明(京都府立鴨沂高校) 呂桂花(京都教育大学院生) 三橋利彦(京都府立落水高校) 山下謙智(京都大学) 野村照夫(京都工芸繊維大学)	
1993	平成6年3月10日	京都教育大学	
	研究会	テーマ バイオメカニクスを利用する 予測性姿勢調節と運動成果との関係 表計算ソフトによる身体重心算出マクロ 表計算プログラム利用の工夫 簡易力量計の試作	研究会の内容を「バイオメカニクス分科会研究第2号」としてまとめ、会員に送付した。
1994	平成6年11月19日	高津ガーデン(大阪府教育会館)	
	研究会	北田敏恵選手の日本記録(100m)誕生の背景 高校生のハードル走のパフォーマンスに及ぼす要因 競技用のヤリのバイオメカニクス 棒高跳びにおける日本と世界の比較	伊藤章(大阪体育大学) 高安和典(京都教育大学附属高校) 前田正登(神戸大学) 淵本隆文(大阪体育大学)
	平成7年3月18日	京都教育大学	
	報告	米国研修報告	野村照夫(京都工芸繊維大学)
1995	平成8年3月16日	京都教育大学	
	研究会	「始めの一歩」の解析 小学生の走り幅跳びの空中作動 競泳のレース展開の評価	山下謙智(京都大学) 岸本吉史・野原弘嗣(京都教育大学) 野村照夫(京都工芸繊維大学)
1996	平成9年3月22日	京都府スポーツセンター	
	研究発表	スポーツセンターの筋力測定システムや動作解析システムの紹介、及び「京都府による競技力向上へのスポーツ科学利用の試み」	小堀優子(京都工芸繊維大学)
1997	平成10年2月24日	京都テルサ	
	研究会	第10京都府立高等学校第三類体育系卒業研究発表会を聴講し、発表後、発表者や指導教官らと意見交換を行う活動内容であった。高校生の視点から体育、スポーツ、健康をとらえた研究は、体験を通して得られた問題を検討する新鮮なもの多かった。	
1998	平成11年3月16日	京都工芸繊維大学	

研究会	筋放電測定及び動作解析からみた前方と後方への股上げドリルの検討	山田剛・野原弘嗣(京都教育大学)	
	力量計モニタリング・プログラムの開発	野村照夫(京都工芸繊維大学)	
	多目的筋力測定装置の利用	山下謙智(京都工芸繊維大学)	
1999	平成12年3月30日	京都工芸繊維大学	
研究会	テーマ：バイオメカニクスの教育		
	教員養成過程におけるバイオメカニクス教育	野原弘嗣(京都教育大学)	
	大学院における医用バイオメカニクス教育	常岡秀行(京都工芸繊維大学)	
	教養教育におけるバイオメカニクス	野村照夫(京都工芸繊維大学)	
2000	平成13年3月26日	京都工芸繊維大学	
研究会	テーマ：バイオメカニクスの研究動向		
	移動開始機構解析のための実験方法の工夫	山下秀輝・梶谷宙志・山下謙智(京都工芸繊維大学)	
	動きに関する主観的情報の研究	野村照夫(京都工芸繊維大学)	
2001	平成14年3月29日	京都工芸繊維大学	
研究会	「バイオメカニクスへのモデル関数の適応」研究発表およびPCを用いた実習	野村照夫(京都工芸繊維大学)	
2003	平成16年3月24日	京都教育大学	
研究会	体操競技における動的姿勢制御に関する研究	西田慎・野原弘嗣(京都教育大学)	
	生体に及ぼすリフレクソロジーの生理学的效果	近藤菜保子・山下謙智(京都工芸繊維大学)	
	歩行スピード、ステップ長、歩調からみたウォーキングの分析	藤堂研介・野原弘嗣(京都教育大学)	
	歩様の変化が歩行に及ぼす影響	中西真古・野村照夫(京都工芸繊維大学)	
2005	平成17年4月16日	京都大学大学院人間・環境学研究科	
研究会	動きのコツを探る ー他競技から学ぶー		運動生理分科会と合同開催
2007	平成19年3月18日	大阪体育大学	
講演	「Researsh methods in Biomechanics ~Data Acquisition and Analysis~」(バイオメカニクス研究法～データ収集と解析法～)	Dr.Keith R.Williams(University of California,Davis)	
2008-2011	運動生理・バイオメカニクス合同開催となった。		

運動生理・バイオメカニクス専門分科会共同開催の歩み

開催年度	年月日	場所(大学)		
	形式	演題名	発表者(所属)	備考
2005	平成17年4月16日	京都大学大学院人間・環境学研究科		
	研究会	動きのコツを探る —他競技から学ぶ—		運動生理とバイオメカニクスの分科会が初めて合同開催
2008	平成20年12月26日	京都工芸繊維大学		
	研究会	フェイント刺激の確率が、左右選択反応ステップ動作に与える影響 体感速度と実際の球速の関係 西洋古典歌唱における姿勢制御と歌声の関係について リバウンドジャンプにおけるパワー発揮と動作の変動性との関係 バスケットボールのランニングドリブル動作における運動制御 同議題における自己決定と集団決定について各々に至る判断基準と両者の差異 介護保険制度における要介護状態区分と高齢者の体力について 走高跳における踏切動作のバイオメカニクス的研究 —身体の内傾角と後傾角の関係に着目して—		宇津亮太(京都大学) 平田太陽(京都工芸繊維大学) 鈴木茉莉緒(京都大学) 村上祐一(京都教育大学) 藤井慶輔(京都大学・4回) 角北由衣(京都工芸繊維大学) 西口初江(京都工芸繊維大学) 新島隆雄(京都教育大学)
2009	平成21年12月23日	京都大学大学院人間・環境学研究科		
	研究会	異なる飛び降りからの着地動作におけるバイオメカニクス的研究 競泳における主観的時間と客観的時間の差に関する研究 高音発声におけるパフォーマンス向上のための姿勢に関する研究 トレーニングの期分けを考慮したスプリント走における主観的努力度と客観的出力との対応関係 主観的強度と客観的出力の違い ～サッカーのインステップキックのスピードと正確性に着目して～ 競技の熟練度が認知・行動連関に与える影響 大学生の基礎運動能力と健康に関する調査及び考察 小学生児童の踏み切り動作に見られる下肢の神経 —筋機能の発達的特徴 サッカーのインサイドキックにおける助走速度がボール速度調節動作に与える影響 運動が主観的时间に及ぼす影響に関する考察」 サキソフォン奏者の吹奏時の腹圧の分析 バレーボールスパイクにおけるボール加速要因の検討 障害者シンクロナイズドスマイミングにおける演技の特徴の抽出		大宣見壯(京都教育大学) 百瀬弘裕(大阪教育大学) 豊田紋子(京都工芸繊維大学) 常深貴之(大阪教育大学) 小林敦史(大阪教育大学) 亀谷亮輔(京都大学) 中村大輝(京都工芸繊維大学) 杉本和那美(京都教育大学) 桜場厚浩(京都大学) 大西弘裕(大阪教育大学) 半井智之(京都工芸繊維大学) 角谷龍史(京都教育大学) 君田真里(京都工芸繊維大学)

	運動休息時における主観的時間に関する研究	中澤利哉(大阪教育大学)	
	テニスのサービスにおけるスタンスの違いが予測正確性に与える影響	馬越友紀(京都大学)	
	長距離走における走動作の変化の要因の検討	関口梨華(京都教育大学)	
	バットの角運動量から見るスイング技術	千月俊輔(京都教育大学)	
	上肢挙上時における肩甲帯の動作解析	宮坂淳介(京都大学)	
	硬式テニスにおける主観的努力度と客観的出力度の対応関係	西光雄士(大阪教育大学)	
	アメリカンフットボールにおける片手ボール保持運動が走動作に及ぼす影響	中原賢一(京都工芸繊維大学)	
	レペティショントレーニングの完全休息期における顔面冷却がパフォーマンスに及ぼす影響	三輪雄輝(大阪教育大学)	
	サッカーのペナルティ・キックの軌道予測	小門勇登(大阪教育大学)	
	ラクロス競技におけるクロスを保持した走動作について	金澤悠(京都大学)	
2010	平成22年12月23日	京都工芸繊維大学60周年記念館	
研究会	倒立振子モデルを用いた方向転換走における観察者の予測メカニズムの推定	藤井慶輔(京都大学)	
	200mバタフライのレース中におけるストローク動作の水中期・空中期所要時間の変化	繆尚樹(大阪教育大学)	
	捻転動作の学習が他の投動作に及ぼす影響	大宅和幸(京都教育大学)	
	大学新入生における健康度の実態調査	大前みなみ(京都工芸繊維大学)	
	ラクロスの投球動作における上肢のキネマティクス的研究	荒木真徳(京都大学)	
	競泳200mバタフライにおけるレース中の呼吸頻度とパフォーマンスの関係	園田玲子(大阪教育大学)	
	時間への注意回数が主観的時間に及ぼす影響について —安静時と運動時の違いに着目して—	田村晃大(大阪教育大学)	
	走運動における曲線の影響と曲線走行時の姿勢の評価	和田一宏(京都工芸繊維大学)	
	到達把持運動開始時の指間距離および対象物までの距離が把持運動の再組織化に与える影響	山本真史(京都大学)	
	陸上競技の曲線路スプリント走における主観的努力度とパフォーマンスの対応関係	豊島陵司(大阪教育大学)	
	バスケットボールにおけるパスの正確性について	大森勇(大阪教育大学)	
	気泡が競泳スタートに与える影響	谷川哲朗(京都工芸繊維大学)	
	横方向における移動運動の生理学特性と様式変容の関連性	山下大地(京都大学)	
	月経と水泳に関する知識と意識の現状 —月経と水泳の講義の重要性について—	川西英里香(大阪教育大学)	

野球の守備におけるゴロ捕球でのフットワークについて	長谷川弘実(京都工芸繊維大学)	
ラクロス競技における道具を用いた走運動	金澤悠(京都大学)	
サッカーのキック時における視線の方向と正確性について ～インサイドキックに焦点をあてて～	藤原篤史(大阪教育大学)	
無意識におけるラテラリティと陸上競技におけるラテラリティとの関連	森洋貴(大阪教育大学)	
部活動とリーダー意識～中学生～	宮脇希(京都工芸繊維大学)	
Internalloop と Externalloop に着目した雑音環境下における発話の変化の検討	鈴木茉莉緒(京都大学)	
「サッカーのドリブル走における主観的努力度と客観的計測量の関係について」	鳥尾広輔(大阪教育大学)	
「少年ラグビーにおけるタックルの様相について」	石井悠太(大阪教育大学)	

2011 平成23年12月23日 京都工芸繊維大学60周年記念館

研究会	水中・水上同期撮影による水球投動作の画像解析 —速投と正確投の比較—	小林達也(愛知教育大学)	
	野球のゴロ捕球動作における重心の軌跡とま先着地座標の分析 —熟練者と未熟練者の違いに着目して—	細井哲也(愛知教育大学)	
	剣道の正面打ちにおける動作分析	石川芳樹(愛知教育大学)	
	フットサルにおけるトーキック動作の熟練者と未熟練者の違いについて	山田佳祐(愛知教育大学)	
	ソフトテニス・グラウンドストロークにおけるラケットヘッドの速度生成への各関節の貢献度の検討	奥村将太(京都教育大学)	
	女子走高跳に関するバイオメカニクス的研究 一短助走に注目して一	磯崎大二郎(京都教育大学)	
	連続跳躍運動が小学生高学年の疾走動作に与える即時の効果について	九鬼靖太(京都教育大学)	
	バスケットボール女子学生初心者のセットシュートの習熟過程	山口拓哉(京都教育大学)	
	野球のゴロ捕球における時間的分析	長谷川弘実(京都工芸繊維大学)	
	各状況における打撃結果 —第93回全国高校野球選手権大会公式記録より—	松尾幸治(京都工芸繊維大学)	
	過去や現在の生活習慣が、現在の身体状態にどのような影響を与えるか	大塚翔仁(京都工芸繊維大学)	
	曲線走における走パラメーターを用いたパフォーマンス向上のための基本的研究	和田一宏(京都工芸繊維大学)	
	アロマテラピーと自律神経	高野奈津子(京都工芸繊維大学)	

視覚および聴覚刺激による身体の反応	藤井陸(京都工芸繊維大学)	
ストリートダンス実施中の気分(乗り)と動作について	小島理永(京都工芸繊維大学)	
特定の感情を効果的に伝えることができる言葉とは	高橋元(京都工芸繊維大学)	
陸上競技のスプリント走における単独走と競走の差異 —疲労時の競走効果に焦点をあてて—	豊嶋陵司(大阪教育大学)	
Arm—LegCoordination 指標を用いた平泳ぎにおけるストローク動作の評価 —ストローク頻度の変化と疲労が与える影響に焦点をあてて—	大西弘祐(大阪教育大学)	
走幅跳におけるファウルの発生要因の抽出	熊野陽人(大阪教育大学)	
スポーツ場面におけるプレッシャー下での不安記述が、運動パフォーマンスに及ぼす影響	加藤健太(大阪教育大学)	
平泳ぎのストローク頻度と疲労が呼吸動作に及ぼす影響	百瀬弘祐(大阪教育大学)	
青年海外協力隊におけるスポーツ隊員の事例的研究 —帰国後の定着と技術移転に着目して—	斎藤沙季(大阪教育大学)	
競技スポーツを行なうことにより何を得て何を失うか	玉木壽成(大阪教育大学)	
障害者スポーツの環境について —シッティングバーボールを事例に—	本城梨紗(京都ノートルダム女子大学)	

体育社会・心理専門分科会の歩み

開催年度	年月日		場所(大学)	演題名・内容など	発表者(所属)	備考
	形式					
1984	昭和59年6月19日		近畿大学会館			
	研究発表	自己中心空間の異方性に関する一考察			荒木雅信(大阪体育大学)	
	昭和59年11月27日		近畿大学会館			
	研究発表	性格と体格をめぐる調査より			森脇勤(近畿大学)	
	昭和60年2月16日		同志社大学			
1985	昭和61年2月22日		同志社大学			
	研究発表	日本における野球の普及、定着の要因について			藤田登(同志社大学)	
1986	昭和62年2月23日					
	研究発表	道思想と武道のかかわり			横山勝彦(同志社大学)	不定期に会員有志によるそれぞれが関心をもっている問題について意見交換、自由討論を行つている。
1987			同志社大学			
	研究発表	日本の野球に見られる日本文化的特質について			藤田登(同志社大学)	

1988	話題提供	日本における野球の観衆(応援者)に関する一考察	藤田登(同志社大学)	
		1988年度も昨年度と同様、話題提供者(発表者)の発表要旨を小論文にまとめてもらい、分科会会員全員に送付し、会員の研究活動に資してもらうと同時に、その論文についての批判、意見、感想等を提出してもらい、それを発表者に提供し、発表者の今後の研究の何等かの糧にしてもらう、という方法を採った。		
1989	平成2年3月12日 同志社大学田辺校地			
	話題提供	アマチュアリズムの社会的視察 アマチュアリズムの史的観察を通して、今日のアマチュアリズムの概念の存在意義等について検討を行った。なお有志による研究集会的会合は2回行っている。	藤田登(同志社大学)	
1990		1990年度の活動としては、諸種の事情で研究会を開催することができなかった。そこで、一つの方法として、会員の研究論文を会員全員に送付し、各会員がその論文に対して論評を行うということを行った。送付した論文は、「日本の野球と米国の野球に関する考察」(藤田登同志社大学)である。なお、有志数人による任意の研究懇親会的な会合は数回行った。		
	研究発表	野球試合における観衆(ファン)の期待的自己忘却的現前性の構造について	藤田登(同志社大学)	
1991		1991年度の分科会活動は、研究発表者の発表内容を論文形式にして分科会会員に配布(送付)し、それを会員がそれぞれ研究領域との関連において検討を行う方法で実施した。		
研究発表	スポーツとスポーツマンの社会的態度—日本のスポーツと欧米的スポーツの比較	小島廣政(京都産業大学)	研究ノートを配布し、会員の研究活動の参考資料として活用してもらった。	
1993				
	研究発表	ライフル射撃場射競技における心拍数変動と撃発の関係についての一考察	星野聰子(奈女大院生)	研究成果を会員に送付し、取れに対する質疑や批評を当事者と直接する手立てをとり、会員の相互研修の一助とした。
1994				
	研究発表	テーマ「劇場としての甲子園」 一大イベント的、また日本の社会での年間行事ともなっている夏の甲子園大会に対する見解を拝聴し、意見交換をした。現代社会のあり方に深い検討が要請されていると同様に、近代スポーツのあり方についても検討が必要であるというコンセンサスが得られたような感触を強く受けた。	杉本厚夫(京都教育大学)	
平成7年3月18日 同志社大学田辺校地				
	研究発表			

1995			
	本年度の分科会活動は、去る1月28日に大阪で開催された『「国際オリンピックシンポジウム1996」新スポーツ文化の構造に関する一考察、一オリンピズムを考えることを通してー』の場において、関係研究者の発言を参考資料にして、オリンピズムについての考察を行い、そのまとめを会員全員に送付し、会員からの意見・批判を求める、という形式で実施した。		
1996	平成8年11月30日	同志社大学今出川校地	
	研究発表	からだの動きを科学する試みについて	古市久子(大阪教育大)
1997	平成10年3月20日	同志社大学	
	研究会	宮本武蔵の「五輪書」に見られる表現的行動について 今後の社会において要求されるであろう表現的行動について、体育社会学分野の関連者で意見交換等を行った。	古市久子(大阪教育大) 1998年度から、世話を横山勝彦(同志社大学)に交代。
1998	平成11年1月6日	同志社大学	
	研究会	「学校教育におけるスポーツ政策－日本型スポーツの国際的展開を中心の一」 中等教育におけるスポーツの取り組みと現状、学校教育における国際的スポーツの交流のしくにとそのあり方などを論点にした活発な論議がなされた。	田中英一(鳥羽高校)
1999	平成12年3月1日	同志社大学今出川校地	
	講演	日本におけるスポーツ	山崎浩子
2000	平成13年3月5日	同志社大学今出川校地	
	講演	プロ野球における選手契約について	宮本好宣(横浜ベイスターズ編成部スカウト)
2001	平成14年3月13日	同志社大学今出川校地	
	講演	実業団チームからクラブチームへの移行に伴うコンセプトと今後の課題	金哲彦(特定非営利活動法人ニッポンランナーズ)

体育指導専門分科会の歩み

開催年度	年月日	場所(大学)		
	形式	演題名・内容など	発表者(所属)	備考
1983	昭和58年6月18日			
	研究会		瀬戸進・谷口博志	
	昭和58年10月15日			
	研究会		横山一郎・安田祐治・金丸富可夫	
	昭和59年2月18日			
1984	昭和59年11月2日	京都教育大学		
	講演	西独におけるスポーツ教育と体育	イーバーボルスト博士(ポップム大学)(西独)	
	研究発表	チームの動きを分析し、自ら戦術を用いて追究してゆく学習指導	藤井千明	
		体育学習における児童の行動変容に関する研究	浜崎博(京都薬科大学)	
	昭和60年2月2日	京都教育大学		
1985	研究会	小学校における45mハードル走の指導	長江秀夫	
		体育の授業における教師の経験年数の違いによる指導言語の比較研究	徳地守	
		体育授業における教師の性別による指導言語の比較研究	坂田美穂	
		保育児の水遊びの指導	安田裕治	
	昭和60年6月15日	京都教育大学		
1986	研究会	体育授業の教材別コミュニケーションに関する研究	横山一郎(京都教育大学)	
		リレーの学習についての工夫	田口博志(市立横大路小学校)	
	昭和60年11月2日	京都教育大学		
	研究会	一般体育における1500m走の記録の変化	小野桂市(京都工芸繊維大学)	
		幼児体育の指導法について	安田裕治	
1986	昭和61年3月8日	京都教育大学		
	研究会	良寛の人生と手まり	宮田和信(京都教育大学)	
		器機運動の授業へのVTRの導入と自己診断の効果について	森一巧(京都教育大学)	体育指導研究 VOL 3 -NO.1、NO.2、NO.3の発行
	昭和61年6月14日	京都教育大学		
	研究会	正課体育実技後の体重減少についての一考察	小野桂市(京都工芸繊維大)	
		わが国における中等教育の体育教員の養成と教師教育に関する研究	横山一郎(京都教育大学)	
		けあがりについてのエネルギー等による力学的考察	上村守(京都教育大学)	

	昭和61年12月 7日	安田研究庵	
研究会	ヨルバの子供の遊び	遠藤保子(京都教育大学)	
	子供たちが自由的に取り組む授業をめざして……主に小学校 中・高学年の体育授業におけるつまづき場面の分析を中心として……	今井敏子(聖母女学院小学校)	
	昭和62年 2月28日	京都教育大学	
研究会	体育ぎらいの生徒の体育学習における非言語活動の研究	今井雅紀(京都教育大学)	
	高校生女子の体育授業の意識について	高橋直美(京都教育大学)	
	「ギムナストラーダ」「子供の遊び」など	安田裕治	
1987	昭和62年 6月13日	京都教育大学	
研究会	子供たちが自主的に取り組む授業を目指して	横山一郎(京都教育大学) 今井敏子(聖母女学院小学校)	
	バスゲームからゴールゲームへ向かう手立て	谷口博志(京都教育大学附属京都小学校)	
	ヨーロッパの体操	安田裕治	
	天橋立臨界訓練の記	宮田和信(京都教育大学)	
	昭和62年11月14日	京都教育大学	
研究会	ギムナストラーダ(ビデオ)	安田裕治	
	集団行動	沢田和明(滋賀大学)	
	大学生男子1回生の自転車労作計による ALL OUT まで	小野桂市(京都工芸繊維大学)	
	昭和63年 2月20日	安田研究庵	
研究会	小学校における集団行動について	谷口博志(京教大付属京都小学校)	役員改選 1987年度指導部会会長に小野桂一先生(京都工芸繊維学)を選出。
	ギムナストラーダ(ビデオ)	安田裕治	研究誌の発刊 Vol.5 No.2 62.6.13、Vol.5 No.3 62.11.14、Vol.6 No.1 63.2.20
1988	昭和63年 6月22日	京都教育大学	
研究会		遠藤保子、東原幹人、安田祐治	63年度より世話人の交代—横山一郎(旧)、小野桂一(新)
	昭和63年11月 5日	京都教育大学	
研究会		小田修治、浜崎博、安田祐治	
	平成元年 2月 4日	安田研究庵	
研究会		藤井千明、小野桂市、安田祐治	
1989	平成元年 5月27日	京都教育大学	
研究会		長江秀夫他	

平成元年11月11日			
研究会		小野桂市(京都工芸繊維大学)	京都体育学会第100回記念大会 発表研究冊子 Vo.7 No.2、Vo.7 No.3、Vo.8 No.1
平成元年11月4日	京都教育大学		
研究会		横山一郎他	
平成2年2月3日	安田研究庵		
研究会		北尾岳夫他	
1990	平成2年5月26日	京都教育大学	
研究会		浜崎博、古市久子	
平成2年11月24日	京都教育大学		
研究会		小田修治、小野桂市	
平成3年3月2日	安田研究庵		
研究会		遠藤保子、沢田和明、安田祐治	研究冊子 Vo.8 No.2、Vo.8 No.3、 Vo.9 No.1
1991	平成3年5月25日	京都教育大学	
研究会	ビデオによる研修も行い、ヨーロッパにおける体操や特にモンゴルの 体育事情について安田祐治氏より報告を受けた。	山口孝治、武富博文、谷口博志、田尻茂隆	
平成3年11月9日	京都教育大学		
研究会		武富博文、河合留美子	
平成4年3月7日	安田研究庵		
研究会		横山一郎、山口孝治	
1992	平成4年5月30日	京都教育大学	
研究会	今後の体育学習のあり方	谷口博志	
	ポールゲームの授業評価に関して	川瀬晃	
平成4年11月14日	京都工芸繊維大学		
研究会	卓球のハンディキャップゲームの報告	小野桂市(京都工芸繊維大学)	
	心疾患患者の日常活動調査について	浜崎博(京都薬科大学)	
平成5年3月20日	安田研究庵		
研究会	修士論文	武富博文	
	修士論文	太田成勇	
1993	平成5年5月15日	京大会館	
研究会	中央、東アフリカの舞踊	遠藤保子(京都教育大学)	
	英国 RECMAN 93' の会議報告	横山一郎(京都教育大学)	
平成5年9月13日	京都教育大学		

研究発表	高等学校における楽しい体育授業とは ～ソフトバレーの適用～	田尻茂隆	
平成 6 年 2 月 19 日	京都教育大学		
研究会	組織的観察法による体育授業について	田尻茂隆、横山一郎	
	リサーチ活動としての体育学習	谷口博志	
	心肺蘇生法実習 一心肺蘇生法教育人体モデルを使って～	小畠有紀雄	
1994	平成 6 年 6 月 25 日	京都工芸繊維大学	
研究会	体育指導分科会ではこれまでに34回の例会を重ねてきたが、近年例会への参加者が減少し、分科会のあり方について見直しが必要になった。		それぞれ意見を出し合い、分科会としてのテーマを持ち、全員で調査・研究を分担して行う。・学会発表および論文投稿を最終目標とする。
平成 6 年 12 月 3 日	京都工芸繊維大学		
検討会	テーマの決定「生活様式が幼児、児童、生徒の活動性や身体に与える影響」		
平成 7 年 3 月 11 日	安田研究庵		
検討会	上記テーマについて、小学生を対象に調査した結果の報告および検討をした。		
1995	平成 7 年 6 月 24 日	京都薬科大学	
検討会	昨年度に決めたテーマ「生活様式が幼児、児童、生徒の活動性や身体に与える影響」について、幼稚園、高校、大学別に調査を実施し全員で検討した。		世話人の交代：平成 8 年 4 月から浜崎博（京都薬科大学）に交代。
平成 7 年 10 月 21 日	京都薬科大学		
検討会	同上		
平成 8 年 2 月 25 日	安田研究庵		
検討会	同上		
1996	平成 8 年 6 月 15 日	京都薬科大学	
検討会	同上		
平成 8 年 10 月 19 日	京都薬科大学		
検討会	テーマ「生活様式が幼児、児童、生徒の活動性や身体に与える影響」について、幼稚園、高校、大学別に調査を実施し検討した。		
平成 9 年 2 月 15 日	安田研究庵		
検討会	同上		
	検討会	テーマ「生活様式が幼児、児童、生徒の活動性や身体に与える影響」について、幼稚園、高校、大学別に調査を実施し検討した。	
1997	平成 9 年 5 月 31 日	京都薬科大学	
	検討会	同上	

	平成9年10月18日	京都薬科大学		
	検討会	同上		
	平成10年3月予定	安田研究庵		
	研究発表	「京都市内の小学生～大学生の活動様式および身体活動」 第2報		第48回日本体育学会にて発表
1998	平成10年6月20日	安田研究庵		
	検討会	京都市内の幼稚園から大学生までの身体活動量と身体組成に関する実態調査などについて活発な論議を重ねた。		
	平成10年10月24日	京都薬科大学		
	検討会	同上		
	平成11年2月20日	安田研究庵		
	検討会	同上		
1999	平成11年6月19日	京都薬科大学		
	報告	京都市内の幼稚園から高校生までの活動量と身体組成に関する実態調査の経過報告		
	平成11年10月23日	奈良教育大学		
	報告	1) 小学生の日常活動(歩数)についての実態調査について 2) 日本体育学会での発表報告		
2000	平成12年7月15日	安田研究庵		
	検討会	1) 京都市内小学生から高校生までの活動量と身体組成に関する実態調査 2) 今後の活動方針		
	平成12年9月21日	富山		
	検討会	児童の活動量は休日に減少する		
	平成12年10月9日	奈良女子大学		
	検討会	体育授業の削減は児童の活動量を低下させる		
	平成13年3月24日	安田研究庵		
	検討会	1) 児童・生徒の活動量の総括について 2) 今後の活動方針		
2001	平成13年9月	仙台		
	研究発表会			
	平成13年11月17日	京都薬科大学		
	検討会	1. 京都市内の小学校から高校生までの活動量と身体組成に関する実態調査 2. 今後の活動方針について 3. その他		

	平成14年 2月16日	安田研究庵	
話題提供	1. 高校生男子の跳び箱運動授業についての研究 2. 今後の活動方針について	田尻茂隆(立命館大学) 増田洋(京都嵯峨芸術大学)	
2002	平成14年 6月15日	滋賀大学教育学部付属幼稚園	
検討会	(1) 幼児教育と現状と課題 参加者 7名		
平成15年 2月22日			
検討会	(1) 児童の活動量と体内脂肪率との関係 (2) 大学改革と体育 その現状と課題		
2003	平成15年 7月 5日	京都嵯峨芸術大学	
研究会	発達段階に合わせた学習の工夫(5年バスケットボール) 本学女子学生の体格・体力の現状と健康科学体育	谷口博志、柴田明美 増田洋(京都嵯峨芸術大学)	
平成15年11月30日	奈良女子大学		
研究会	本学女子学生の体格・体力の現状と健康科学体育 アイランドボール体験	増田洋(京都嵯峨芸術大学) 小野桂市(京都工芸繊維大学)	
平成16年 2月28日	安田研究庵		
研究会	活発に遊ぶ子どもたち(ビデオ) ソフトバレーボールの高校授業 ミニ発表	安田祐治 田尻茂隆(立命館大学) 小野桂市(京都工芸繊維大学)	
2005	平成17年 7月 9日	京都薬科大学	
研究会	欲の喚起動機づけ・・・・FD フォーラム発表から グループダイナミックスにおけるコンセンサス形成過程	小野桂市(京都工芸繊維大学) 浜崎博(京都薬科大学)	
平成17年12月17日	嵐山 まつ屋		
研究会	女子学生における過去の運動習慣が骨密度に及ぼす影響 今、体育科教育に問われること	間瀬知紀 沢田和明(滋賀大学)	
平成18年 2月18日	安田研究庵		
話題提供		小田修司	
2006	平成18年10月 7日	京都薬科大学	
研究会	エチオピア社会と舞踊 中国杭州、黃山 紀行	遠藤保子(立命館大学) 安田祐治	
平成19年 3月11日	安田研究庵		
研究会	「スポーツと人権」「e-learning を用いた講義」「総合型地域スポーツクラブ、滋賀シンポ」 遊びと学ぶ—エチオピア南部コエグの人々から学ぶもの—	澤田和明(滋賀大学) 遠藤保子(立命館大学)	

体育原理・体育史専門分科会の歩み

開催 年度	年月日		場所(大学)		発表者(所属)	備考
	形式	演題名・内容など				
1983	研究会				竹内京一(京都教育大学)	季間誌「しづく」発行
1984	昭和59年12月15日	大谷大学				
	研究発表	遊びと信仰 古代人のおよぎに関する研究、その1、縄文時代(中間報告)			竹内京一(京都教育大学) 中森一郎(大谷大学)	有志による秀刊「零」年4回発行
1985	昭和60年2月29日	京都外国語大学				
	研究発表	体験と言葉－宗教体験を中心として－			竹内京一(京都教育大学)	
1986	昭和60年11月30日	立命館大学				
	研究発表	イギリス陸連成立過程と初期のアマチュア規定制定の経過			岡尾恵市(立命館大学)	有志による秀刊「零」を年4回発行した
1987	昭和61年6月7日	大谷大学				
	研究発表	スポーツ記号論をめざして			杉本厚夫(京都教育大学)	
	昭和61年12月6日	大谷大学				
1988	研究発表	滋賀県諸藩における武芸教育に関する研究－膳所藩の武芸教育について－			村山勤治(滋賀大学)	
		定時制高校における体育授業について			西村考七(鴨沂高校)	
1989	昭和62年11月28日	立命館大学				
	研究発表	「道」の思想と日本の運動文化に関する一考察(武道を中心として) スポーツの定義の諸問題について			横山勝彦(同志社大学) 浜口義信(同志社女子大学短期大学部)	
1989			1988年度は、分科会における研究報告会を行わなかった。しかし、しばらく滯っていた分科会「研究紀要」第7号の原稿を募集(平成元年2月28日締め切り)したところ、応募者があり、平成元年末日発刊の予定。			
	平成元年7月22日	大谷大学				
		京都体育学会100回記念大会シンポジウムの専門分科会代表候補者選出の為の集会開催。				
1990	平成2年2月20日	大谷大学				
	研究発表				中桐伸吾、中森一郎	研究発表後、総会(会計報告等)を行う。

			山田知子、辻浅夫、中桐伸吾、 中森一郎	前年度発刊予定であった「研究 紀要」第7号、近日発刊
1990	平成3年3月1日	大谷大学		
	研究会	竹野町内の力石	山田知子(大谷大学)	「研究紀要」第7号発刊 2.10.1
		資料紹介—陸上競技の資料について	岡尾恵市(立命館大学)	
		体育とスポーツのイメージ測定の尺度作成の試み	中桐伸吾(大谷大学)	
1991	平成4年2月29日	大谷大学		
	研究発表	郷土新聞から見た黒田清光による神統流の復興・伝承過程について —戦前—	中森一郎(大谷大学)	世話人の交代 平成4年の世話人として、岡尾恵市氏にお願いすることになった。
1992	平成4年4月3・4日			
		1992年度の分科会活動はできなかつたが、4月3日～4日にかけて、立命館大学国際学術交流研究会主催で、英国スタンフォード大学ジェリイ教授とホーン助教授による「形態社会の批判的再評価」および「レジャーおよびスポーツ社会学におけるクラムシニズムとウエーバーリアニズム」についてのレクチャーと研究交流会が開催されので、全員参加を呼びかけた。		
1993	平成6年3月29日	立命館大学末川会館		
	講演		Peter Donnelly 教授(カナダ、マクマスター大学)	通訳：平井肇(滋賀大学)
1995				
		世話人の外国出張にともない、実質的な活動ができなかつた。		
1996				
		体育原理、体育史別談話会を行つた程度で、分科会活動は実施せず。		
		日本体育学会体育史専門分科会のワークショップ・シンポジウム①「近代文化と民衆娯楽」②「近代のテクノロジーと運動会」を後援し、参加。		
	平成9年3月26-28日	立命館大学		
	討論会	上記に行われた「スポーツ社会学・国際シンポジウム」に参加を呼びかけ、関連テーマについて討論を行つた。		
1997	平成9年5月14・15	立命館大学		
		上記に行われた「日本体育学会1997年度体育史専門分科会春の定期研修会(テーマ『英国と日本における体育・スポーツ史研究』)に参加要請の案内を出し、後援費を支出した。		
	平成9年11月29・30	立命館大学		
		上記に行われた「第11回スポーツ史学会」に参加を呼びかけた。		
		1997年度は、専門分科会独自の研究会を開くに至らなかつた。		

1998	平成10年11月7日	京都大学大学院人間・環境学研究科		
	講演会	21世紀の市民社会におけるスポーツの展望ーとくに女性スポーツのありかたを通してー	Jennifer Hargreaves (Professor of Sociology Sport.Center for Sport Development Researsh. School of Sport Studies Roehampton Institute London)	京都体育学会主催の左記講演会に参加を呼びかけた。
1999	平成12年3月25日	立命館大学衣笠学舎		
	研究会	長野オリンピック開会式の内容分析 1883年から1944までの陸上競技邦書文献について	山下高行(立命館大学) 岡尾恵市(立命館大学)	
2000	平成13年3月24日	立命館大学衣笠学舎		
	研究会	近代ドイツの結社について 創設以来の国際オリンピック委員会(IOC)名簿一覧について	有賀郁敏(立命館大学) 岡尾恵市(立命館大学)	

体育経営管理専門分科会の歩み

開催年度	年月日		場所(大学)	発表者(所属)	備考
	形式	演題名・内容など			
1983	昭和59年2月20日				
	研究発表			伊藤良一、岡尾恵市、宮田和信	京都府民の健康・体力・スポーツ意識調査に協力。世話人舛岡義明
1984	昭和60年2月28日	国体準備局			
	研究発表	英国の体育事情について		岡尾恵市(立命館大学)	世話人蜂須賀弘人
	昭和60年3月27日～29日	伏見稲荷参集殿			
	合宿研究会	スポーツクラブについて 社会体育における事業の量と質のとらえ方 スポーツ施設の経営形態について 児童、生徒の対外運動競技について 学校体育館をめぐる諸問題について			日本体育学会専門分科会と合同の合宿研修
1985	昭和60年11月15日	国体局3階会議室			
	研究会	英国のスポーツ事情(その2) 西ドイツのスポーツの現状		岡尾恵市(立命館大学) 舛岡義明(国体局)	
	昭和61年2月20日	国体局3階会議室			
	研究会	国民体育大会の競技得点について 京都女子駅伝の選手の特性とトレーニングについて		浅野賢一(国体局) 原田明正(平安女子短期大学)	

1986	昭和62年 1月29日	国体局 3階会議室	
研究会	京都府の高校生の体格・体力・運動機能の実態について(昭和42年度から60年度までの約20年間にわたる経年的考察)	中嶋知彦(京都教育大学)	第38回日本体育学会(京都大会)の体育管理専門分科会の運営について打合せを行った。
	京都府中学生のスポーツテストの経年的考察 —昭和42年度から60年度までの結果の分析—	奥市安弘(京都教育大学)	
	昭和62年 3月 7日	国体局 3階会議室	
研究会	京都府公立学校普通科第3類体育系の現状と課題 生徒の意識、学校比較、進路について	田中節(京都教育大学)	
	入学理由と生徒の意識について	中村憲三(京都教育大学)	
1987	昭和62年 4月16日	佛教大学	
打ち合せ	日本体育学会第38回大会の専門分科会にかかる事務打ち合せを行った。		
昭和62年 9月12日	立命館大学		
	日本体育学会管理部総会(立命館大学)に参加 懇親会(堀川会館)に参加		
昭和63年 3月 7日			
研究会	アメリカの体育事情	野原弘嗣(京都教育大学)	
	公共体育施設の委託事情	小西智	世話人の交代—蜂須賀弘久(旧)、川北智世(新)
1988	平成元年 1月21日	おおたや会議室	
研究会	「京都国体を終えて」 国体史上2巡目初回大会の意義と主な特徴について	舛岡義明(府国体局)	
	「国体2巡目以降のサッカー競技の運営と審判員の養成」 競技運営上試みられた成果について	瀬戸進(大谷大学)	
1989	平成元年12月 7日	平安会館	
研究会	大学における養護体育の現状と課題	宮田和信(京都教育大学)	
	資料交換と討議		保育審答申、府体協のポスト国体検討委員会の建議、府民のスポーツ意識等の調査。世話人宮田和信
1990	平成 3年 3月23日	京都教育大学	
研究会	国民体育大会の歴史について	宮田和信(京都教育大学)	
	国民体育大会参加選手の追跡調査について	岡尾恵市(立命館大学)	
1991	平成 4年 3月15日	京都教育大学	
研究発表	生涯スポーツコンセプトに関する研究	内貴律子(京都教育大学)	
資料提供	体育専攻学生の「体罰」意識	宮田和信(京都教育大学)	

1992	平成5年3月17日	大谷大学	
	テーマ 第6回全国福祉祭の開催について	長谷川隆彦(京都府総合府民部全国健康福祉推進室室長)	
1993	平成6年3月9日	大谷大学	
	講演 テーマ 体育指導者育成の現状 一ライセンスと活動の状況一	南条良樹氏(京都体育協会主事)	
1994	平成7年3月11日	大谷大学	
	講演 テーマ スポーツ指導者ライセンスの現状 —生涯スポーツ指導者の役割等—	細川磐氏(大阪体育大学)	
1995		本年度の研究会は、会員が日本体育協会主催京都体育協会主管のスポーツ指導者研修会にオブサーバーとして参加し、生涯スポーツ指導の役割について、一般のスポーツ指導とともに討論を行う形で実施した。	
1996	平成9年2月9日	京都教育大学	
	研究会 運動部活動の運営に対する指導者と部員の意識について	今井洋(京都教育大学)	世話人の交代: 1996年4月から 世話人は中比呂志(京都教育大学)に交代
	中学生の運動部活動へ参加動機及び問題意識について	鳥羽弘行(京都教育大学)	
	体育授業に対する学生の態度からみた体育教材の特性	中比呂志(京都教育大学)	
1997	平成10年2月8日	京都教育大学	
	研究会 大学生の運動部活動に対する意識に関する研究	鹿間啓徳(京都教育大学)	
	公共スポーツ施設におけるスポーツ教室の運営に関する研究	鈴木鈴太郎(京都教育大学)	
	ひとのライフスタイル・マネジメントに関する研究	高野博司(京都教育大学)	
	学校体育におけるニュースポーツ導入の問題点と効果に関する研究	山岡道太郎(京都教育大学)	
	公共スポーツ施設に対する利用者の満足度及び要望度に関する研究 一施設運営形態の違いに着目して一	井口大作(京都教育大学)	
1998	平成11年2月7日	京都教育大学	
	研究会 これらの障害者スポーツの課題 ～指導者講習会受講者の視点から～	谷幸子(兵庫県立総合リハビリテーションセンター体育指導員)他	
	公共スポーツ施設における利用者の特性 ～K施設の利用者を対象として～	清田美絵(オージースポーツ加古川ウェルネススポーツ事業所)他	
	学校運動部活動の運営に関する一考察 ～教員志望学生の視点から～	伊達裕史(京都教育大学体育学科 特修体育専攻)他	
	高校生の運動部活動に対する意識	中比呂志(京都教育大学)他	

1999	平成12年 2月11日	京都教育大学	
研究会	障害者スポーツ振興施策について ～海外遠征選手の支援施策～	谷幸子(兵庫県立総合リハビリテーションセンター体育指導員)	
	スポーツ少年団の活動に対する意識 ～団員・保護者・指導者の視点から～	赤木朋子(京都教育大学)	
	バスケットボール観戦者の特性について	松田卓巳(京都教育大学)	
	中学生の運動部活動に関する意識について	山田浩司・立花美保(京都教育大学)	
	運動部活動に対する意識～高校生を対象として～	小柳文彦(京都教育大学)	
2000	平成13年 3月 4日	京都教育大学	
研究会	スポーツ観戦者とリーグ運営 ～バスケットボール及びバレーボールの日本リーグを対象として～	松田卓巳(京都教育大学)	
	大学におけるスポーツ傷害の特徴及び健康管理体制に関する研究	立花美保(京都教育大学)	
	地域に根ざした運営を模索はじめた市民チームの現状とその問題点	山田浩司(京都教育大学)	
	公共スポーツ施設における利用者満足と利用状況	清田美絵(京都教育大学)	
2001	平成14年 4月13日	京都教育大学	
			開催内容の記載なし
2005	平成18年 2月11日	京都教育大学	
研究会	バレーボールの商品価値・メディア価値を高めるために行われた方法	星川貴洋(京都教育大学)	京都教育大学・びわこ成蹊スポーツ大学合同研究発表会
	スポーツ施設の運営について ～ラウンドワンのボウリング施設を手本に～	岸本真(京都教育大学)	
	日本バスケットボール界の現状と今後の課題：企業スポーツからプロスポーツへ	山下大輔(京都教育大学)	
	Jリーグ観戦者のスタジアムサービスに対する意識：京都パープルサンガのホームゲームにおける調査報告	びわこ成蹊スポーツ大学 スポーツマネジメント研究室	
	Xリーグ所属クラブのマネジメントの現状：イワタニサイドワインダーズの活動に関する事例報告	びわこ成蹊スポーツ大学 スポーツマネジメント研究室	
	日本サッカーの選手育成システムの現状と今後の課題	市田喜大(京都教育大学)	
	子どもの身体的認知的発達と学校体育に関する現状と今後の課題	水嶋啓子(京都教育大学)	
	大学女子陸上競技選手における月経異常と摂食障害の実態及びその影響要因	後藤直美(京都教育大学)	
	小学生児童における日常生活習慣及び遊び・スポーツの現状	三木章嗣(京都教育大学)	

		小学校体育授業における視覚的教材導入の効果：6年生ハードル走を対象として 子どものスポーツ活動の今、そして未来に向けて 地域と融合した学校運動部活動 ～高校を拠点とした総合型地域スポーツクラブの創設を目指して～	村上絵里(京都教育大学) 藤堂研介(京都教育大学) 長谷川博征(京都府立西城陽高等学校)
2006	平成19年1月28日	びわこ成蹊スポーツ大学	
	研究会	小学校水泳授業における指導体系の構造と視覚的教材の作成 子どもの体力向上を目指した介入研究の試み—幼稚園における簡易な全身運動遊具を用いたプログラムの可能性 総合型地域スポーツクラブ会員のクラブに対する帰属意識 総合型地域スポーツクラブが「ヒト」と「マチ」に与える影響に関する研究 —特に富山県のクラブについて— 地域の安全性に対する保護者の不安が子どもの身体活動に及ぼす影響 運動意欲とスポーツ条件がスポーツ活動に及ぼす影響：中学生を対象として 小学校体育授業における実技映像の即時フィードバックの有効性：4年生跳び箱運動を対象として 子どもの「する」スポーツと「みる」スポーツの関わりについての研究 スポーツ実施と観戦の関連性について フィットネスクラブの女性会員の意識調査：特に女性会員の健康、美に対する意識について 四国アイランドリーグにおける観戦者のサービス評価に関する研究 四国アイランドリーグにおける観戦者の特性に関する研究：特に香川オーリブガイナーズファンの動機について 観戦動機からみたバスケットボール観戦者の類型化と試合に対する評価 スポーツスponsershipにおける出資企業のメリットの関する研究：特にJリーグと四国アイランドリーグについて Jリーグとスポンサー企業とのイメージの適合性に関する研究 企業が利用する男性プロスポーツ選手のイメージに関する研究 企業が利用する女性スポーツ選手のイメージに関する研究	大西裕貴(京都教育大学) 田辺浩之(京都教育大学) 平松知洋(びわこ成蹊スポーツ大学) 高長祐輔(びわこ成蹊スポーツ大学) 早川達也(京都教育大学) 水嶋啓子(京都教育大学) 市田喜大(京都教育大学) 三輪亮介(びわこ成蹊スポーツ大学) 中右健一(びわこ成蹊スポーツ大学) 艸川万以子(びわこ成蹊スポーツ大学) 松本康宏(びわこ成蹊スポーツ大学) 武田麻理子(びわこ成蹊スポーツ大学) 山下大輔(京都教育大学) 三田茜(びわこ成蹊スポーツ大学) 太田明(びわこ成蹊スポーツ大学) 花房和美(びわこ成蹊スポーツ大学) 塙田久美子(びわこ成蹊スポーツ大学)

		ウェイクボードに関する研究：ウェイクボード実践者の活動現状について J クラブユース選手のキャリアデザインに関する研究 一特に将来構想、サッカーへの関わりについてー ¹ 日本における障害者スポーツ研究の現状と課題	齋藤真由子(びわこ成蹊スポーツ大学) 梅本祥子(びわこ成蹊スポーツ大学) 山口拓(京都教育大学大学院)
2007	平成20年 2月11日	びわこ成蹊スポーツ大学	
	研究会	スキー場の利用に影響を与える要因 スポーツ用品の購買理由の比較分析 女子ラグビー日本代表選手の競技環境に関する研究 JFA キッズプログラムの現状とコーチの意識に関する研究 企業が利用する女性スポーツ選手と女性芸能人のイメージの違いに関する研究 幼児をスポーツ教室に通わせる保護者の意識—動機や期待、地域の安全性に対する不安に着目して— 小学校水泳授業における視覚的教材の作成 児童における動作の発達と評価項目に関する研究 学校体育授業で取り上げられる運動課題の達成状況 ～附属京都小・中学生を対象として～ 中学校体育授業における実技映像の即時フィードバックの効果～器械運動を対象として～ bjリーグの観戦動機について、 京都サンガの観戦者の意識調査	小松亜紀(びわこ成蹊スポーツ大学) 横江優希(びわこ成蹊スポーツ大学) 山田陽子(びわこ成蹊スポーツ大学) 宮沢悠生(びわこ成蹊スポーツ大学) 上林知世(びわこ成蹊スポーツ大学) 日下部愛(京都教育大学) 大西裕貴(京都教育大学) 河野恵美(京都教育大学) 田辺浩之(京都教育大学) 日下道太郎(京都教育大学) 天川陽介・渡邊 史子・田中真悟・松浦 貴紀(びわこ成蹊スポーツ大学) 尾野亮真・垣内佑弥・杉本 真・森田慶太(びわこ成蹊スポーツ大学)
2008	平成21年 2月 8日	京都教育大学	
	研究会	ビーチバレーの観戦者行動について テニスの観戦者の動機について bjリーグの観戦者の動機に関する研究	尾野亮真(びわこ成蹊スポーツ大学) 田中真悟(びわこ成蹊スポーツ大学) 森田慶太(びわこ成蹊スポーツ大学)

女子大学生のプロ野球に対するイメージについて	田中奈緒子（びわこ成蹊スポーツ大学）
インターネットとファンタジースポーツの現状と普及に関する研究	村上収（びわこ成蹊スポーツ大学）
自然環境の悪化が健康・スポーツ活動に与える影響に関する一考察	橋本拓哉（京都教育大学）
身体に障害を持つ勤労者のスポーツ参加に影響を及ぼす要因 ～スポーツ意識、スポーツ条件、サポートの有無に焦点を当てて～	山口拓（京都教育大学大学院）
高校生における運動部活動が体力・生活習慣及び学業成績に及ぼす影響	穂積豊（京都教育大学大学院）
中学生硬式野球の指導者のリーダーシップに関する研究	伊藤巧（びわこ成蹊スポーツ大学）
小・中学校の体育授業に対する態度と要望	山下星（京都教育大学）
シンクロマット運動が学習意欲及び技能に及ぼす影響 ～小学校5年生の体育授業を対象として～	関勇太（京都教育大学）
中学校体育授業における実技映像の即時フィードバックの効果 ～器械運動を対象として～	日下道太郎（京都教育大学）
障害者スポーツの歴史的変容と施策面での課題	近藤孝徳（京都教育大学）
基盤組織ごとに見た総合型地域スポーツクラブの運営課題	小畠弘道・草間 ゆかり（京都教育大学）
中学校ダンス授業における基本技能の構造の検討 ～現代的なリズムのダンスに焦点をあてて～	林原茉美子（京都教育大学）

2009 平成22年2月13日 大阪成蹊学園セミナーハウス		
研究会	運動部所属大学生における問題飲酒行動と上下関係	上田勝也（京都教育大学）
	障害者スポーツの振興と施策に関する研究 ～海外の障害者スポーツ振興から日本における障害者スポーツを考える～	近藤孝徳（京都教育大学）
	小学生の浮き趾及び偏平足と体力・運動習慣の関係	草間 ゆかり（京都教育大学）
	発達段階を考慮した陸上運動の基本技術とその系統性 ～小学校体育授業を対象にして～	富井裕平（京都教育大学）
	大学生のヘルスリテラシーに関する研究	押川真理（京都教育大学）
	大学生の新聞購読意欲に関する研究 ～書字方向に着目して～」	長澤いづみ（びわこ成蹊スポーツ大学）
	スポーツクラブの会員は誰に対してロイヤリティを築くのか」	太田恵莉（びわこ成蹊スポーツ大学）
	スイミングクラブの児童会員の継続に影響を及ぼす要因～保護者を対象としたアンケート調査～」	久郷剛基（びわこ成蹊スポーツ大学）

	プロサッカーカラーブのエンブレムおよびマスコットに対するファンの好意的態度がクラブイメージに及ぼす影響について	高橋絵美子(びわこ成蹊スポーツ大学)
	プロサッカーカラーブの地域貢献活動が観戦者のクラブイメージに及ぼす影響	小林直人(びわこ成蹊スポーツ大学)
	Jリーグ参入が観戦者及び地元住民に与える心理的影響	岡田友(びわこ成蹊スポーツ大学)
	Jリーグにおけるサービスクオリティ評価に関する研究	細井泰人・草間美帆・村尾佳祐・本橋徹也・山口美穂・山本翔平(ヴィッセル神戸スポーツビジネスカレッジ)
	Jリーグの場外イベントの参加者の特性と消費者行動に関する研究	一瀬友軌(びわこ成蹊スポーツ大学)
	Jリーグにおける観戦者特性とチーム運営に関する研究	谷口圭司(びわこ成蹊スポーツ大学)
	プロスポーツクラブ職員の職務満足に関する研究	内藤香菜子(びわこ成蹊スポーツ大学)
	地域サッカーカラーブの選手及び保護者の満足度に影響を及ぼす要因に関する研究	中川優(びわこ成蹊スポーツ大学)
	高校生年代におけるサッカー指導者のリーダーシップに関する研究	原田浩光(びわこ成蹊スポーツ大学)
	Vリーグの組織とリーグ運営の現状に関する研究	寺田雅紀(びわこ成蹊スポーツ大学)
	総合型地域スポーツカラーブの理想的な運営方法と現実との比較に関する研究 ～S県の総合型カラーブに着目して～	玉置拓也(びわこ成蹊スポーツ大学)
	女子水球のナショナルチームにおけるチームマネジメントの国際比較に関する研究	木村陽子(びわこ成蹊スポーツ大学)
2010 平成23年2月12日	京都教育大学	
研究会	中学校運動部員の部活動ストレスに関する研究	柴田奈生子(京都教育大学)
	小学校の陸上運動における系統性を重視した指導内容の検討	富井裕平(京都教育大学)
	小学校器械運動における指導内容の系統性に関する研究 —技の指導体系と段階的指導の視点から—	田中奏来(京都教育大学)
	スポーツアスリートのブランド価値 —消費者ベースのブランド価値モデル—	大田祐輝(びわこ成蹊スポーツ大学)
	スポーツファンとブランド・コミュニティ —プロスポーツのファン・コミュニティに着目して—	國井祐利(びわこ成蹊スポーツ大学)
		京都教育大学・びわこ成蹊スポーツ大学合同学生・院生研究発表会

	「スポーツボランティアの継続 —社会的アイデンティティと職務満足に着目して—」 スポーツオンラインカスタマイゼーション — NIKEiD に着目して— びわこ成蹊スポーツ大学サッカー部と KIRIN のスポンサーシップパートナーシップについて サッカーマガジンにみる W 杯日本代表に関する報道の変化について J リーグ観戦者のホームタウン活動に対する意識 —ヴィッセル神戸に着目して— 京都への地域愛着とプロスポーツの認知度に関係はあるのか? —ソーシャルメディアを用いたインターネット調査— 都市型市民マラソンのデスティネーション・イメージ研究 —奈良マラソン2010 参加者調査—	高井啓伍(びわこ成蹊スポーツ大学) 田中翔子(びわこ成蹊スポーツ大学) 本田陽一(びわこ成蹊スポーツ大学) 久末純可(びわこ成蹊スポーツ大学) 左子義則(ヴィッセルカレッジ) 石井貴大・森恵太・森永純平・中塚さゆり・大森友莉(同志社大学) 増田彩乃・浮田瞳・河村真也子・辻田晃平・宮川敬史(同志社大学)
2011 平成24年2月12日	大阪成蹊学園びわこセミナーハウス	
研究会	女子プロ野球観戦者の観戦行動とマーケティング戦略に関する研究 大学生におけるスポーツ用品の消費行動特性に関する研究 ～DIADORAに注目して～ カレッジスポーツへの観戦行動と大学へのコミットメントに関する一考察 ～龍谷大学の学生に注目して～ 「新聞記事からみた東日本大震災後のスポーツにまつわる動き 女子ラグビーにおける競技の普及に関する研究 ～競技の採用過程と採用が組織にもたらす効果に着目して～ 失敗時における指導者の懲罰に対する認知が選手の学習行動に与える影響 ～選手と指導者の関係性に着目して～ スポーツ NPO におけるタスク・コンフリクトが組織市民行動に与える影響 ～目標の受容に着目して～ 高校生からみた部活動の意義 ～中学校・高等学校の部活動キャリアパターンの視点から～ 学校運動部活動における顧問教員が抱える問題 ～中学校・高等学校顧問教員調査を通して～ 児童・生徒の運動有能感を高める授業実践の類型化	武真梨子(龍谷大学) 伊藤遊野(龍谷大学) 岡本麻以(龍谷大学) 有好孝平・相原恵・奥野邦彦・竹川泰考(同志社大学) 和田由佳子(立命館大学大学院) 合谷徹平(立命館大学大学院) 與那安貴(立命館大学大学院) 田中茜衣(京都教育大学) 松尾智美(京都教育大学) 上田美結(京都教育大学)

教員志望学生の ICT 活用力の実態	加藤春奈(京都教育大学)
教育実習の効果とその課題～これまでの研究成果を吟味して～	楠本恵理(京都教育大学)
日本スポーツ界の環境保全活動の現状と課題	戸井田明(京都教育大学)
学校体育における持久走・長距離走の授業実践と課題 ～効果的な持久走・長距離走の授業に着目して～	中村真悠子(京都教育大学)
京都府下小学校高学年における動作スキル獲得状況についての調査報告	鈴木勝雄(京都教育大学)
スポーツウェアの購買に対する意識相違からのアプローチ	内海沙織(びわこ成蹊スポーツ大学)
eスポーツとリアルスポーツの実施動機に差異はあるのか	芦田悠(びわこ成蹊スポーツ大学)
個人競技種目における理想のリーダーシップとは	中上琴恵(びわこ成蹊スポーツ大学)
ブランド拡張によるサブブランドが企業ブランドに及ぼす影響 —スポーツブランドのブランド価値—	上原花奈恵(びわこ成蹊スポーツ大学)
テレビ番組によるプロスポーツ選手のイメージ形成 —種類の異なるテレビ番組間の比較—	大久保美希(びわこ成蹊スポーツ大学)
bjリーグとJBLの統合—bjリーグ試合観戦者の態度形成に着目して—	阿墨大介(びわこ成蹊スポーツ大学)
スポーツブランドにおける消費者パーソナリティとブランドパーソナリティの関係性—ファッショントとして着用するウエアに着目して—	野田和宏(びわこ成蹊スポーツ大学)
Jリーグクラブのファンクラブへの入会意図 —特別待遇サービスとグッズ特典に着目して—	森田香綾(びわこ成蹊スポーツ大学)

学会の思い出

地方学会の活動に期待する

京都滋賀体育学会顧問
寺田 光世
(京都教育大学名誉教授)

本年、京都体育学会(旧称)が発足して60年の節目を迎えたことを会員皆様とともに心からお祝いいたします。

遠い昔のことですが、京都体育学会の活動を知ったことがその後の私の進路を決定付ける契機であったような気がします。学会に専門分科会が発足した昭和37年当時、私は体育を専攻する一学生でした。スポーツ漬けの日々を送っていて、当学会の活動など知りませんでしたし、まして体育分野における学会活動については考えたこともありませんでした。ただ、当時毎日のように研究に没頭されている指導教官の姿を見るにつけ、体育にもこのような研究世界や学会活動があるということに驚きと憧れを感じたわけです。このことが私自身の研究生活の始まりでもありましたので、京都体育学会が体育専攻の一学生の進路に大きな影響を与えてくれたような気がします。

私の指導教官は運動生理学を専門にしていましたが、学会の役割について、「日本体育学会とその支部である京都体育学会の役割は自から異なるはずである。京都の学会は全国学会では取り上げられ

ないような課題、つまり京都という地域に密着した研究課題を取り扱うべきである」と言っていたことを今でもよく思い出します。まさにその通りだと現在でも感じています。数十年後、私が京都体育学会の役員をお引き受けしたときにはこのことを思い出し、京都府市や体協との共催事業を企画した次第です。このような共同の事業は機会があれば今後も続けてもらいたいし、さらに地域的な研究課題も取り上げてもらいたいと願っています。

大学卒業後間もない頃、某近畿地方学会に私の拙い研究の一端を発表したことがあります、初めての経験ということもあり、その時の緊張と新鮮な感動は今でもよく覚えています。この時の経験が大きな刺激となり、その後も研究に興味を一層強く抱くようになりました。

今日、当学会は、研究奨励賞・論文賞の創設、研究助成事業、役員選挙方法改定などを取り入れるとともに、さらに京都滋賀体育学会と改称されたことを機に、益々活動が充実してきたように思います。当学会が若き学生の研究意欲を高める刺激になることを心から願うものです。

新制大学誕生プレ前夜「アメリカ教育使節団来校」

京都滋賀体育学会顧問
小野 桂市
(京都工芸繊維大学名誉教授)

はじめに

昭和24(1949)年に新制大学は誕生した。京都滋賀体育学会はその新制大学誕生を受けて発足し

た。その学会が60周年を迎える記念誌を発行するという。研究誌発刊時に理事であった筆者は慶祝に堪えない。創立と発刊と継続は、各時代の研究

者(仲間)が価値を認めた結果である。初期に在籍した者として、新制大学一般教育誕生にも強い関心を持っている。旧制大学には存在のなかった「体育」が新制大学に学科目として存在するようになった経緯は日本体育学会60年記念誌にまとめられている。一般体育成立の研究もある(唐木、1972)。筆者は新制大学発足以前に入洛した米国教育使節団について滋賀奈良京都での資料の若干を提供して責を果たしたい。機会を与えられたことに感謝する。

本 論

敗戦後の昭和21(1946)年3月5日に来日し3月30日付で提出された米国教育使節団の報告が外からの理念による設置要求「占領軍の間接統治下の改革」(大崎、1999)として作用した。実践的研究(草深、2001)も存在する。ここではその第一次米国教育使節団が昭和21(1946)年3月16日から19日まで行った奈良京都視察に対しての奈良京都側反応を部分的資料であるが示すことである。日程は京都新聞および中外日報によれば第1表の如くである。京都帝大総長鳥養資料に“KYOTO TRIP”とある。戦後を扱った小説(井上、1999)にも記述がある。

第1表 米国教育使節団視察日程表

3月15日(金)	東京発夜行列車で京都へ
3月16日(土)	
○午前、西本願寺見学、龍谷大学視察(龍谷大学長による「日本人の生活と教育における仏教の意義」という講演) ^{*1} 知恩院見学	
○午後、金閣寺、龍安寺、嵐山、桂離宮などを見学	
○夜、琵琶湖ホテルにて、奈良の名所や宝物についての説明、起草委員会は報告書大要草案を作成、琵琶湖ホテル泊	
3月17日(日)	
○午前、奈良帝室博物館、奈良公園見学	
○午後、奈良女子高等師範訪問 ^{*2} 、春日神社、三月堂、東大寺見学	

- 夜、京都祇園にて日本舞踊鑑賞、琵琶湖ホテル泊
3月18日(月)
- 午前、京都ホテル入り、総会^{*3}のあと、委員会別に日本人教育者と会談^{*4}
- 午後、京都帝国大学訪問、同大学総長主催歓迎会^{*5}、茶会
- 夜、能楽鑑賞、祇園にて日本舞踊鑑賞
3月19日(火)
- 午前、委員会ごとに京都市内の学校を視察、第一委員会(府立一高女^{*6}、生祥国民学校^{*7}、市立一商^{*8})、第二委員会(男子師範^{*9}、桃薙国民学校^{*10}、平安女学院^{*11})、第三委員会(府立一中^{*12}、三高^{*13}、美術専門学校^{*14})、第四委員会(同志社大^{*15}、大谷大学^{*16}、織維専門学校^{*17})
- 午後、平安神宮、京都御所、二条城見学
- 夜行列車で東京に向けて出発 以下略

考 察

表1の各校の反応および若干のコメント

* 1 : 龍谷大学に資料閲覧を依頼するも非発見の回答。後述のように当該使節団が仏教系大学訪問を希望し、京都帝大鳥養総長が龍谷大学や大谷大学への訪問を設定した可能性もあり、使節団への当該講演内容(羽溪学長)は見出したいものである。なお、本願寺新報第1041号(昭和21年3月25日)に当日9時10分来山。倪下御挨拶後、羽溪龍谷大学長の「日本国民生活に及ぼせる佛教の影響」について講義これについて討議研究あり、飛雲閣に抹茶の手前を見て退出した、尚当日は大谷派、真言宗、臨済宗、浄土宗、天台宗其他の各宗から代表者が出席した、とあるが内容の記述はない。

* 2 : 奈良女子高等師範学校。現奈良女子大学には筆者が調査したなかで、最高の資料が図書館に残されている。以下に掲載の許可を得て記す(實際は縦書きである)。鳥養資料57にはmotorcadeとあり8th Armyの車で移動したのかもしれない。

昭和21年3月13日 水曜 曇
教官会議 来ル十七日アメリカ教育使節団来校ニツキ教官会議開催(午後1時10分)
昭和21年3月14日 木曜 曇
午後0時40分ヨリ生徒一同講堂ニ集合
米国教育使節団来校ニ関シ内藤校長ヨリ話アリ
昭和21年3月17日 土曜 曇
午後校舎内外大掃除
昭和21年3月18日 日曜 雨後曇
アメリカ教育使節団一行来校
午後1時30分来校(講堂ニテ歓迎ノ辞及学校ノ内容ニツキ説明アリ)
別シテ各室及附属高女、附属国民学校並ニ寄宿寮参観(高女及国民学校ニテハ授業ス)
2時30分ヨリ講堂ニテ教官トノ懇談会アリ
本省ヨリ次官及学校教育局長来校
3時終了

当時の様子が髣髴とされ本論中の第一級資料で、奈良女子大学の努力を多とする。

* 3 : 総会、未調査

* 4 : 委員会別に日本人教育者と懇談、未調査

* 5 : 鳥養資料239β-2。敗戦の痕 京都帝国大学総長鳥養利三郎(仁友会代表)記 昭和43年1月序に、この内容は京都大学を中心とした、戦後処理の経過を記録したものであり、幹部職員として勤務していた五人、鳥養利三郎総長、本田弘人事務局長、内藤敏夫庶務課長、横田実会計課長、宮田尚之保健診療所長とそれを補佐した三人の備忘録である、としている。48頁に教育使節団の項があり、横田の発言として「使節団が入洛して、京都大学に来たのは三月十八日でした。京都大学では一応使節団との間で、討議が行なわれたが、それとは別に十分に歓迎してくれ、と文部省から頼んできていた。その歓迎について---。」本田がそれに応じて「東京滞在中の鳥養先生から、電話があって、何しろ焼野ヶ原の東京において、たしか上野の精養軒とかで、レセプションを催した。ところが出席の

連中が、まるで日本を植民地か何かのように考えて、あまり尊重していない。戦災を受けない京都で、日本のよさを見せてくれ、日本の日本らしさを見せるように、という注文なんです。そこでいろいろ相談の結果、日本のよさというのに重点を置き、京大の清風荘でレセプションをやろうということになった。まずお茶の裏千家先代(淡々斎)の千宗室宗匠に頼みに行つたところ、早速賛成してくれて、私自身が出かけます。というご好意を示してくれた。そして裏千家先祖代々の、桃山時代の名器まで運んでくれた。清風荘の二階の床が非常にいい。この床には普通の掛物じゃ位負けする。相阿弥の蒲湘八景、そして花器は伊賀の何とかでなければいかぬ、というぐあいにだんだんむずかしくなり、お菓子までが、また選定に苦労させられた。何しろむずかしづくめで、とにかく日本最上の品々を集めました。」以下略するが、55頁まで歓待の詳細が続く。

学制改革の話題に続いて69頁に「教養課程について」の項があり、鳥養「東京大学の教養学部は独特の性格を持っている。」本田が応じる「京都大学ではずいぶん議論したが、結局のところ、教養課程の中には、基礎科目と、語学、体育のような予科的なものがある。」とあって、以下略するが、体育は予科的であるという理解が述べられている。予科であれば教育に重点がおかれて、その成果が評価されねばならぬ責があったと筆者は考える。本書は本会名誉会員武部吉秀先生よりご教示頂いた。{註：大学予科とは、旧制大学に附属する高等教育機関で、専門教育を行う大学本科、すなわち学部に進学する前段階としての予備教育を行う機関であり、大綱化前の大学の教養課程に相当する。戦後の学制改革によって、新制大学の教養部や学部に改組されて一部の例外を除き廃止された。したがって、予科的とは教養教育を行う性質をもつものと考えられる。}

* 6 : 府立一高女、京都府立鴨沂高校、「鴨沂高校の歩み」に中村保雄、京都府立鴨沂高等学校旧教

職員の会事務局代表 清水弘方、2010.1.1は1頁に、「鴨沂高校は、旧制の府立第一高女・第一中学・嵯峨野高女の三校が合併し、新制高校として昭和23年秋に発足した。これは進駐軍の指令により新制中学を充実させるためにとられた統合処置である。」と記した。同書の48頁、秋田宗平(昭和23年度卒)は「草創の頃 私の鴨沂高校の原点は、一九四五年(昭和二十年)八月十五日、日本降伏に続く新制高校という点にあります。その時、私は十五才で中学三年生でした。翌年三月に来日した『米国教育視察団』の報告に基づいて、教育民主化の名の下に、私どもの中学校は、昭和二十三年、明治三年(一八七〇年)にはじまる歴史を閉じ、新しい名前の高校に変わり、六ヶ月後、再編成ということで解体され、私は鴨沂高校三年生になります。伝統あるわが国を代表する中学が、われわれの駐留米軍に対する反対運動にもかゝわらず(ママ)なくなった口惜しさを抱きながら、高校三原則 - 総合制、小学区制、男女共学制 - を新教育の方針とする新制高校に移つて行ったわけです。」と記している。

* 7 : 生祥国民学校 :『生祥110年』73頁、1946(昭和二一年)一二・一〇 第一軍団より新教育実験校に指定され、近畿実験学校協会を結成とあるが、3月19日に視察団来訪の文字はない。『生祥100年』26頁の初代のPTA会長革島貞吉は「敗戦後教育界に六三制とPTAとの二大旋風が吹き荒れた事はご存知の通りです。所でPTA等聞いた事もありません。唯両親と教師の会であって、從来の保護者会や父母会とは性質の違うものだということでした。中略 その上生祥校は(一部の方々にはモデルスクール(模範学校)と誤解されたようでしたが)トライアル(実験学校)と指定されました。PTAはアメリカでも実験の段階だったそうです。当然私達多くの本質的な困難な問題に突当りました。新教育とかいうものをやらされる先生方も大変でした。」と記す。27頁に元教頭の清水末太朗は「生祥校がアメリカ駐留軍第一軍団民間情報教育局から新教育実験校の指定を受けたのは昭和21年度の

ことである。終戦直後の混乱した社会情勢の中で、新教育へのとりくみは決して生やさしいことではなかった。中略 京都で指定を受けていたのは生祥、桃山附属、桃薙の3カ校で、近畿では他に5カ校があり、近畿実験学校協会を結成したのであるという。京都市学校歴史博物館に於いて当該資料紹介を受けた。

* 8 : 市立一商、未調査

* 9 : 京都教育大学体育・特修体育学科沿革史、京都教育大学体育学科25周年・特修体育学科15周年記念事業会、昭和49(1974)年4月 32-33頁によれば「昭和21(1946)年3月、米国教育視察団員(ママ)としてアイオワ大学教授 C. H. McCloy 博士等一行が京都師範学校を視察した。低い天井で、しかもリング・ネットさえも取付けていない体育館でのバスケットボールの授業を見、また中国語に翻訳したカリキュラムの提出(註、McCloy 博士は中国に十数年間滞在し、中国体育の近代化を指導した)の要求には当惑した。後日、『保健体育は小学校において重大な欠点があるように思う。そこでは生理も衛生も實際にはほとんど教えていないと同様である。----学校の保健体育は----細菌学、生理学、公衆衛生処置の基本および実行上の要旨も併せて教授しなければならない----身体を強壮にし、調整し、身体の技術を教授するほかに、スポーツマンシップと協力の精神とが有する個有(ママ)の価値を学校は認識すべきである。しかも身体の調節価値をもつ運動競技を強力、発達せしむべきである----教師訓練の方法は、保健、体育および休養に関する近代的知識に照らして展開すべきである。----保健衛生教育および体育の計画は教育全計画の基礎となるものである。身体検査、栄養および公衆衛生についての教養、体育と娯楽、厚生計画を大学程度の学校にまで延長し、またできるだけ速やかに諸設備を取り替えるよう勧告する----』との米国教育使節団報告書(昭和21.4.7. 発表)を管見して赤面せずにはいられない思いである。」とある。中国語に翻訳したカリキュラム提出等の指令にはさぞ戸惑ったことで

あろう。どのように対処したのか、直接お聞きしたかったものである。

*10：桃園国民学校：桃園校百年史58頁に記述がある。

○訪日アメリカ教育使節団の来校

昭和二十一年三月十九日、日本の教育改革に大きな役割を果たしたアメリカ教育使節団は来日わずか二週間後の三月十九日本校に来校した。同年四月七日使節団の一一行は報告書を発表して教育を地方に委譲し、歴史並びに地理教科書をかきなおす必要を指摘し、義務教育を六・三制（九年制）に改善する改革案を出した。京都市学校歴史博物館に於いて当該資料紹介を受けた。

*11：平安女学院：平安女学院八十五年史に、アメリカ教育使節団来校の記録は見出せないが、180頁に「学校教育における宗教の取扱は從来公立諸学校においては国家主義的な神道に基く行事の外は修身科（公民科）に於いて敬神崇祖を説く外宗教的な色彩の濃いものは之を禁じてきた。只キリスト教、仏教等特定の教派によって建てられた学校は夫々その宗教に基づく精神教育を施し、また課外に宗教的行事を行ったりする事を認められて今日に至った。

然るに昭和廿年（1945）十月十五日、文部省は訓令を以て私立学校に於ける宗教々育の在り方について指示する所があった。

文部省訓令第八号

私立学校ニ於ケル宗教々育ニ關スル件

私立学校ニ於テハ自今明治三十二年文部省訓令第十二号ニ拘ラズ法令ニ定メラレタル課程ノ外ニ於テ左記条項ニ依リ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フヲ得」以下略 とあり、続いて「昭和廿一年（1946）学園内漸次諸般にわたり整備につとめ」とある。

特定の教派により建てられた学校の反応は、大谷大学を除いて詳らかでない。

*12：府立一中、未調査。ただし鴨沂高校卒業生秋田氏の思い出の中に言及がある。

*13：三高：三高百年史141頁「日本の新教育体制樹立のため、連合軍最高司令官マッカーサーの招きによりニューヨーク州教育長官ストダートを

団長とする二十七名の教育使節団が来日し、三月十九日には三高にも来校し、帰国にあたり報告書を提出した」とある。

*14：美術専門学校、未調査

*15：同志社大学100年史に記載なし。図書館に調査を依頼したが、当該教育使節団の来訪の記録は見当たらないと回答を得た。なお、『同志社山脈』に正課体育誕生時の同学の理念と工夫とが塚本、田淵両氏の記載にある。塚本簫之助氏は本会設立準備委員の一人であり、田淵潔氏は本会第2代会長である。

*16：大谷大学百年史441頁 「教育基本法の制定には、米国教育使節団による日本国内の教育事情の視察報告が基調となっている。同使節団は仏教教育についても視察を行っている。一九四六年（昭和二一）年三月十八日に京都大学を訪れた同使節団との直接協議には鈴木大拙教授が赴いた。同月十九日には、使節団ヴァージニア・C・ギルダースカーヴ氏（ニューヨーク、バーナード大学講師）、デヴィット・H・スティーヴンス博士（ロックフェラー財團理事）、トーマス・V・スマス教授（シカゴ大学）ら七人が大谷大学を來訪している。図書館二階の貴賓室で学長が応接にあたり、鈴木大拙が通訳を担当して、仏教教育について好感を与えることができたという。」と記載がある。なお、鳥養京帝大総長資料メモ中（鳥養、1946）には、当該 AMERICAN MISSION が京都の仏教系大学学長に会いたい、とあるので、先の龍谷大学と同様に鳥養総長が設定したものかもしれない。

*17：七十年史：京都工芸繊維大学繊維学部七十年史記念会昭和46年発行138頁

「繊維専門学校時代（1944-1949）第5節終戦とその直後の記録から」の日付順の全記載は以下の通りである。

昭和21年3月14日 教官会議

○米国教育視察団の来校にそなえての打合せを行なう。少しでも軍国的色彩の残滓を払拭するのに努力したい。

○第1回米国教育視察団のうち本校班は3月19

日(火)午前本校見学。

昭和21年3月16日 評議員会議

昭和21年4月23日 外地引揚者転入詮衡会議
とある。つまり、上記のような記載のみで、
実際の3月19日来校についての記述はない。大学
事務局に願って記録書庫まで入れてもらいた
時の記録を検索したが筆者は未発見である。文
書館設置が待たれる。

まとめ

米国教育使節団の奈良京都訪問に対する初期反
応についての研究は未完である。

蛇足を加えれば、新制大学体育担当者に「予
科」という位置からスタートしたという認識が
あったかどうか疑問である。あれば必修体育に値
する教育成果を世に発信するという姿勢が強くと
られたはずである。正課体育という制度に守られ
て安住し、教育成果を発信することなく、自己の
研究を遂行することで代替し、責任を果たしたと
錯覚したのではないか、と筆者は考える。大綱化
こそ、体育は「本科」に位置づいたのであって、
ここでは新しいことの発見・追及・解釈の成果が
他の科学と同様に問われているのである。本学会
の飛躍を期待するところである。

文献

井上ひさし 東京セブンローズ、文芸春秋社、
1999、pp714-716
大崎仁、大学改革1945-1999、有斐閣選書、1999、p2
「鴨沂高校の歩み」、京都府立鴨沂高等学校旧教職員

の会事務局代表 清水弘方、2010 p1、p48-49

大谷大学、大谷大学百年史、2001、pp440-442

唐木國彦、一橋論叢、1945-55年における大学体育の
確立とその問題点(1)、68(4)1972

京都教育大学体育・特修体育学科沿革史、京都教育
大学体育学科25周年・特修体育学科15周年記念
事業会、昭和49(1974)年、pp32-33

京都工芸繊維大学繊維学部七十年史記念会、七十年
史、1971、p138

草深直臣、体育・スポーツにおける戦後改革の実証
的研究、平成2年度科学研究費補助金(一般研究
B)研究成果報告書、2001

三高：三高百年史、p141

生祥国民学校：『生祥110年』、p73

桃蔭国民学校：桃蔭校百年史、p58

同志社山脈編集委員会編、同志社山脈、晃洋書房、
2003、pp216-219

同志社大学、100年史

鳥養利三郎京都帝国総長資料57-D-2,TENTATIVE
SCHEDULE of U.S. EDUCATION MISSION、京都
大学文書館 {本誌への掲載後、同文書館へ本誌
を寄贈する条件である}

鳥養利三郎京都帝国総長資料239β-2,敗戦の痕 京
都帝国大学総長鳥養利三郎(仁友会代表)記 昭
和43年1月

奈良女子大学:資料名「一 会議録」 会議事項録(昭
和16年9月 - 昭和21年3月)(特27) {なお本誌
への掲載許可を得ている。本誌の同図書館への
寄贈が条件である}

平安女学院、平安女学院八十五年史、1960年、pp180-181

京都滋賀体育学会へ発展の節目にあたり

日本体育学会・日本発育発達学会・京都滋賀体育学会名誉会員
八木 保
(京都大学名誉教授)

日本体育学会京都支部が昭和27年(1952)に発
足し、それより60年を経て、日本体育学会京都滋
賀支部(地域)に、昭和44年からはその名称を京

都体育学会としていたが、平成24年からは京都滋
賀体育学会と改名された。

筆者が本学会に入会したのは昭和37年、本学会

発足10年後のこととなる。年に4回は研究会が行われていた。赴任した職場では、旧制高校から残る木造校舎の一棟で、体力測定の数値を集計表に鉛筆で記入し、算盤で計算していた。その年の初めの研究会は立命館大学であり、その会場が近代的で立派であることに感じ入った。その翌年には滋賀大学でも研究会が行われた。

本学会には舞鶴のように遠方からの会員もおられるが、研究会の会場は京都市内の大学が多かった。やがて専門分科会が発足しそれぞれが研究会をもつようになつたが、定例の学会(研究会)では分科会の別なく参加会員全てが一會場に集まり、他の分科会の研究も共に体育学の見地から討論し理解を深めるという場となり、これは今日までも続く本学会のよいところである。

なお、昭和38年には日本体育学会第14回大会を、同志社大学を会場として、京都支部が主管した。専門分科会が発足し勢いづく頃の学会であった。翌39年に当支部会でも専門分科会が発足した。

昭和53年頃から京都体育学会30年史の準備が始まり同57年には発行されるに至るが、この頃は発足当初からの先輩先生方が指導しておられた。

この間の本学会については各専門分科会の活動を含めて「京都体育学会三十年のあゆみ」に詳し

い。先輩たちの立ち上げられた本会が、さらに引き継がれて前進するさまが、よくまとめられた貴重な書である。

昭和47年に当時の理事松浦義之先生が「京都体育学会だより」を発行し、同48年には「日本体育学会京都支部だより」として発行。その後、間隔をおき、昭和55年に当時の理事伊藤一生先生が「日本体育学会京都支部通信」として復活させ、庶務任期の同56年つづいて「同通信」として発行。これを引き継ぎ、昭和57、58年度の理事庶務担当八木保は「京都体育学会だより No.5」とし、「同 No.6」まで発行、それまでの総会報告やお知らせなど事務的な内容に加え、特別講演の要旨を載せ、読める会誌を試みた。

この頃、会報からさらに発展して本学会の学術誌を作ろうとの機運が生じ、当時の理事竹内京一先生を委員長に京都体育学会紀要の検討委員会がスタートした。当時の理事八木保もこの委員会に加わることとなり、やがて、昭和61年には審査を経た論文を載せる「京都体育学研究」第1巻を刊行するに至った。表紙のデザインも会員の関係筋に依頼したが、作者名は遠慮された。

このような本学会発展の節目に関わったことを仕合せに思っています。

京都滋賀体育学会創立60周年に思う

日本体育学会・京都滋賀体育学会名誉会員
藤田 登
(同志社大学名誉教授)

京都滋賀体育学会が、創立60周年を迎えて心からお祝い申し上げます。そして、この学会を創設され発展充実にご尽力されてこられました先輩の方々にあらためて敬意を表わしたく存じます。

この期にあたり、最近感じましたことを述べさせて頂きます。

昨今“たかがスポーツされどスポーツ”といわ

れますスポーツにスポットライトが強くあてられています。そのスポーツ界における体罰・暴力の問題が話題を呼んでいます。そして、新聞紙上の番組や論説において、体育・スポーツ・学校体育といった用語が使われています。そこで感じることは、体育とは、スポーツとは、という問いかけが十分になされず、その概念・理念を明確に認識されていないのではないかということあります。

スポーツに関して、中井正一が“美と集団の論理”的なかの「スポーツ気分の構造」において次のように論述しています。「一般に遊戯と言われる人間の行為について、これまでの研究者によっていろいろ解釈がなされている。そのなかで多くの支持者をもっているのが、生産の余剰エネルギーがその生産的技術性より遊離したる特殊技術を構成すると解釈する仕方がある。その技術に関して「何々にまで」或いは「何々のため」ということの会得に対して殆んど無関心に、只その有意義性そのものを性格的に浮き立たせ明るみにもたらせるところのものなのである。スポーツとはこの遊戯に属し、主として身体的技術を基調とするところの特殊な実存である。さらに、人間とは即ち道具を作る動物、従って計画をもち労働する動物であり、その生産的技術をその生産性より一定の角

度をもって遊離して、その技術そのものの中に新しい一つの世界をもつことの出来ることもまた人間の本質的特異性として考察し得るであろう」と。

従って、スポーツといわれる人間の行為は、体育といわれる人間の行為とは本質的に異なるものであると考えます。

そして、体育学会関係者は、今一度、体育とは何か、スポーツとは何か、という問い合わせを行ない、その本質を明確に認識したうえで競技スポーツ界の体罰・暴力問題について議論と考察を行いたく思います。

おわりに、この学会が今後、自然科学・社会科学を両論としてより一層発展充実し、日本体育学会の中核的存在になることを心から祈念致しております。

日本体育学会第38回大会の取り組み

岡本 直輝
(立命館大学)

1987年9月11日～13日の3日間、立命館大学衣笠キャンパスで日本体育学会第38回大会が開催された。本大会は、京都支部(現：京都滋賀地域)が主管として実施された。大会役員(現：組織員会)の委員長が蜂須賀弘久先生(京都教育大学)、企画に関しては伊藤一生先生(京都大学)、八木保先生(京都大学)、小野桂市(京都工芸繊維大学)らをはじめとする京都体育学会の理事の先生方に担って頂いた。事務局や総務は岡尾恵市先生や草深直臣先生らをはじめとする立命館大学の先生方で業務を分担し準備が進められた。総勢75名の体制で実行委員会が組織された。当時は、大会運営の赤字を主管が負うということであったため、京都体育学会の多くの先生方が展示・広告の募集に走り回った。その甲斐あって、黒字で大会を終えることができ、収益分を京都体育学会に寄付することが出来た(現在、研究基金として利用)。

蜂須賀先生らと事務局が、第37回大会の筑波大学での取り組みを見学させて頂き、大会準備のマニュアルを作成した。しかし、会員らの学会参加の申し込みや発表抄録の入稿などは全て郵送で行っていたことからマニュアル通り進まないことが多く、5月から試行錯誤の4か月間であった。また立命館大学の実行委員ばかりでなく京都体育学会の先生方(実行委員)にもプログラムの作成や予稿集の作成に関わって頂いた。

発表演題数は、12部門(専門領域)748題であった。第37回大会(筑波大学)に比べ100演題減少したが、大会参加者数は減少しなかった。学会当日、立命館大学体育会の学生らは、リーグ戦中であったが補助学生として担ってくれた。校舎名が漢字表記のため(以学館、清心館、志学館・・)参加者はじめ京都体育学会の実行委員が混乱するといったことや、スライドを用いた発表方法が主

流であったことから、スライド映写機の調達が大変難しく、また発表中に電球が切れるといったトラブルなどがあったが、大会を無事に終えることが出来た。京都の町が夏休みを終えて一息ついた時期でもあったため、参加者らは京都観光も楽しめたという評価も頂いた。

さらに京都蹴鞠保存協会にもご協力頂き、蹴鞠行事の再現を行うなど京都らしさが出せた。会場レイアウトの特徴として、受付会場、荷物預かり場所、機器展示、ドリンクコーナー（大塚製

薬）、図書販売、物産展、休憩所、情報共有場所等の会員へのサービス全てを体育館内に設置した。このアイディアが高く評価された大会でもあった。

実行委員として参加された先生方は、蜂須賀先生をトップとして支え合った京都体育学会の団結力を懐かしくお話をされています。この力を継続して、第64回大会を準備する次第です。

60周年記念行事

第142回京都滋賀体育学会大会は60周年記念大会として開催した。記念大会の概要是下記の通りである。また、次頁以降にはシンポジウムの講演録および論文報告、記念講演の要旨、記念大会報告(短報)を掲載致した。

日 時：平成25年 3月 9日 (土) 9:00～20:00

場 所：京都工芸繊維大学(ノートルダム館 K201、K202、K203)

(60周年記念館 記念ホール、大セミナー室)

参加者：120名(会員39名、臨時会員41名、一般参加者40名)

研究発表：25題

- ・若手研究奨励賞選定対象発表23題
- ・研究助成報告 1題
- ・一般研究発表 1題

記念シンポジウム

『3月10日は京都マラソン！

大会関係者が語るマラソンブームの裏側と未来』

記念講演

『熱中症の根絶をめざして』

記念パーティ

京都工芸繊維大学60周年記念館

記念大会報告(短報)

近年、京都・滋賀地域において、健康およびスポーツ科学関連の専攻を有する大学が増え、それに伴い教員および大学院生も増加している。その結果、本会学会大会における研究発表は質・量ともに充実してきた。これらの中には、研究上記録に留める価値のある研究が数多く見られる。当然、原著論文としてさらに発展させて投稿される場合もあるが、一連の研究の部分的報告や公表の緊急性の高いデータや結果の提示が必要な場合もある。そこで60周年記念大会から短報という形式で基本的に学会発表された演題を学会発表の議論を踏まえてまとめ直し投稿していただく制度を設けた(短報としての一般投稿も可)。今回は学会大会の発表者から2件の投稿があり、クイックレビューを念頭に置きつつ、複数の査読員の審査を経て学会誌に載録することとした。



60周年記念講演要旨

熱中症の根絶をめざして

中井 誠一
(京都女子大学)

はじめに

京都体育学会は1952年に日本体育学会京都支部として創設され⁹⁾、2012年で60年を迎える。記念の大会が開催されたことに対し祝意を表する。また、60年前に創設に尽力された諸先輩の努力はもとより、その後脈々と学会活動が継続されたことは、会員ならびに関係各位の協力と努力によるものと敬意を表する。

本稿は60周年の記念大会において講演の機会を与えられた光栄に感謝し、その内容を概説する。

60年を顧みると、体育スポーツの科学研究はめざましい発展をしていると考えられる。1970年代の体育・スポーツ界では「運動中には水を飲んではいけない」と言っていた。水を飲んではいけないだけでなく「身体を冷やしてはいけない」も言っていた。いわゆる謂われもないことが実践されていた。近年では、打撲・捻挫などの処置として冷却は重要な処置である。また、運動前や運動後のクーリングも運動成績の維持向上、安全のために薦められている¹⁾。

水分補給に関する熱中症予防にとどまらず運動能力の維持には極めて重要であることは周知のこととなっている。

江戸時代の熱中症処置として、冷水はよくないとの記述がみられる^{2,7)}。しかし、炭鉱労働が盛んとなった1925年以降は生みそ、ごま塩、水の摂取が良いとしている^{2,7)}。スポーツ飲料は1965年頃、アメリカンフットボール活動時を目的に作られ、国内には1972年にアメリカから持ち込まれたようである。国産のスポーツ飲料は1980年に製造販売され、その後人気商品となり日常生活においても活用されている。

一方、2010年の夏は、熱中症による救急搬送数が多かったことは記憶に新しいところであり、熱中症死亡数は1745例で、その8割が65歳以上であった^{4,5)}。近年の地球温暖化や都市部のヒートアイランド現象による、夏季の暑熱環境の悪化に伴い熱ストレスが増大することで、熱中症による死亡の危険率が高くなっている。とりわけ、スポーツ活動時の熱中症事故は、運動の効果とは正反対の結果となるだけでなく、効果的な練習の妨げとなるので予防が必要である。

著者は1980年以降熱中症予防の研究に取り組んできたが、発生が後を絶たないことはまだ努力不足であることを認めなくてはならない。熱中症の根絶を目指して、反省の意味を込めてこれまでの取り組を紹介する。

1. 热中症に関する用語と定義

熱中症は「暑さあたり」の意味で暑熱障害の総称である。死因分類では熱中症は用いられず、熱と光の作用に分類されている。日本の高温労働—その実態と対策⁻⁷⁾では、「高温下の労働で、暑熱の作用が強く、あるいは労働が激しく、そのために体温調節や循環器のはたらきが影響をうけ、または水分塩分代謝の平衡が、著しい失調をきたしたりするほどに、影響が強く進んで、種々の高度な自覚症状を伴い、作業遂行に困難をきたし、または不能に陥った状態を、総称して熱中症という」としている。

わが国の熱中症関連の用語を探ると(図1)、明治以前においては霍乱、中暑、渴病などの語が用いられた。英語ではheatstrokeが用いられ、熱射病ないしは熱中症の訳語が用いられていた^{2,7)}。

年次	熱中症に関する資料・用語
1729	林 良適、丹羽正伯、徳川吉宗の命で、火傷の手当であり
1789	中畠 多紀元直「廣恵濟急方」 「急ぎ日陰に臥し。」炎天の農夫等
1811	平野元良、軍陣救急摘要、山藤、風通りの良い、生姜のしづり汁
1882	裏才兵衛：世俗日用撰生之早道に脈拍数変するあり・・・
1889	日射病（陸軍・日射病の実態）三浦守治
1897	森、小池、「衛生新編」 Isolation 日射病, <i>Hitzeschlag</i> 热中症
1925	南 俊治：石炭坑内に於ける気温および湿度、炭鉱夫、生嗜み、胡麻塩を携帶
1926	「鉱夫労役扶助規則」16歳未満女子、1日8時間、35度以上の就業を禁止
1937	松下正信：坑内空気の物理的の懸念条件に就いて気温34℃以上、比湿92%以上
1940	熱射病 <i>Hitzschlag</i> などの総称、暁病 飯島 茂
1940	暁病（文中に熱中症あり）熱射病、日射病 热症癆症、熱性疲はい 等の総称 石川知福
1941	炭鉱の熱中症発生、34.0℃（坑内温度）齊藤一

図1 热中症に関する用語の変遷

「熱中症」は、1898年に^{2, 7)}がheat strokeを熱中症としたことに始まるが、1940年にheat strokeを熱射病とした文献があり、それも暑熱障害として用いられたことから混乱していた。しかし、日本生気象学会は、日常生活における熱中症予防指針(2008年)で「皮膚の障害などを除外した暑熱障害を熱中症(heat disorders)」とした⁷⁾。

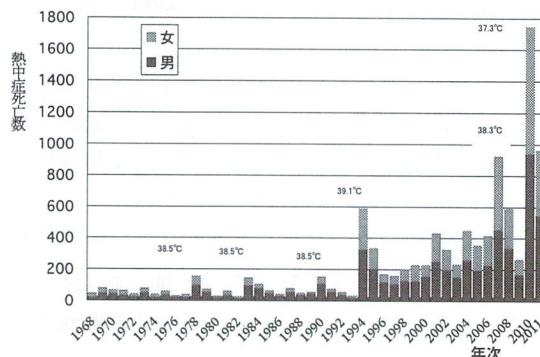


図2 热中症死亡数の年次推移（男女別）

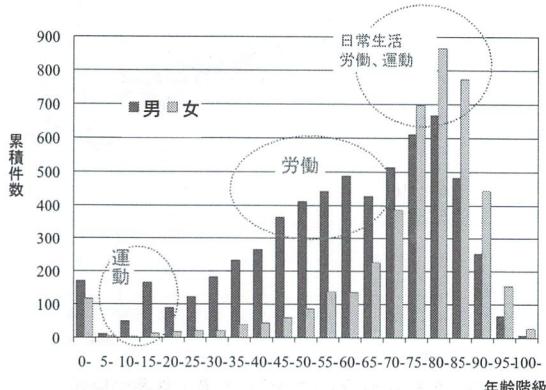


図3 热中症死亡数の年齢階級別累積数(1968年から2011年)

スポーツで主に問題となるのは熱疲労と熱射病である¹⁾。発症の機序は体温調節反応が密接に関係する。暑いときは体温上昇を防ぐために、皮膚血管の拡張と発汗により体表からの熱放散が促進される。こうした状況下で生理機能や体温調節系に過剰な負担がかかれれば、熱中症が起りやすくなる。すなわち発汗による脱水と皮膚血管の拡張による循環不全の状態が主な原因である¹⁾。

2. 热中症の実態

熱中症による死亡数は1968～2011年までの44年間で、1,033件（男6,052件、女4,279件）で、年平均では234件である（図2）。1970～1994年までの年平均は88件であるが1995～2011年は470件となり、1995年以降増加傾向を示し、2010年は1,745件であった⁵⁾。44年間の熱中症死亡数を年齢階級ごとに累積すると、0～4歳15～19歳、30～59歳及び65歳以上の群で熱中症による死亡数が多くなる（図3）。男女別の比率は、全年齢では男性は女性の1.4倍であるが、15～19歳では12.7倍と男が多く、スポーツ活動中の熱中症による死亡と考えられる。30～59歳では5.9倍でこの群でも男が多く、労働時の発生と考えられる。65～89歳では1.0倍で、この年齢群では女性の人口が多くなるので性比がなくなり、日常生活や労働（家事などを含む）やスポーツ活動と考えられる。

年齢階層別の熱中症死亡数が熱中症総数に占める割合を図4に示した。65歳以上の熱中症死亡数

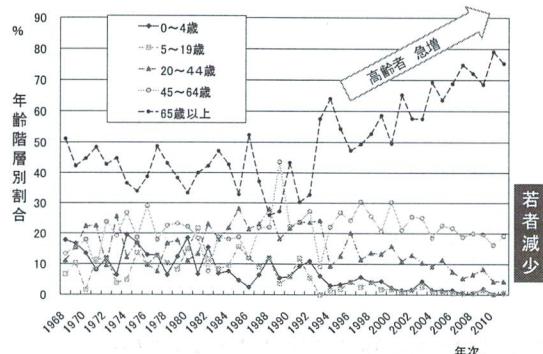


図4 热中症総数に対する年齢階級別割合の年次推移

が熱中症総数に占める割合は、1995年は54.4%であるが、2004年は69.3%、2006年は68.8%、2007年は74.9%、2010年は79.0%となり、近年増加傾向である。これは65歳以上の人口の増加も関係すると考えられるが、人口を考慮して死亡率、年齢調整死亡率を算出しても確かに増加傾向である。一方、64歳以下の各年齢層では1995年以降減傾向であり、1994年にスポーツ活動中の熱中症予防ガイドブックが発表されセミナーの開催などの啓発活動が実施されたことによる保健学習の成果と考えられる。スポーツ中の熱中症死亡数は減少しているが、救急搬送される数は減少していない。予防活動を継続することが必要と考えられる。

報道記事による運動時熱中症について運動種別の件数をみると、1970年1980年では登山での死亡例が多く、1980年代でも野球の死亡が目立つがサッカー、柔道とゴルフにもみられる。しかし、1990年代になると野球やサッカー、柔道でみられることは変わらない。野球では死亡例だけでなく非死亡例がみられ、ラグビーも増加している。2000年代、2010年代では体育大会での発生が目立ち、野球も件数が多いのは1990年以前と変わらない。しかし2000年代、2010年代では死亡例が全種目を通して少なくなり、非死亡例が目立つのが特徴である^{3,4)}。

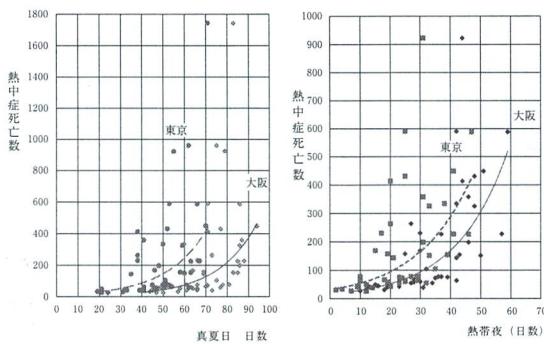


図5 热中症死亡数と真夏日・熱帯夜日数の関係

3. 発生時の環境温度

熱中症死亡数の年次推移(図1)に大阪の日最高気温を示した。図5には真夏日(日最高温度30°C以上の日)および熱帯夜(日最低温度25°C以上の日)と熱中症死亡数の関係を示したが、それぞれ相関関係が認められ、高温の日が多い年に熱中症の死亡数が多くなる。さらに熱中症死亡数と34°C以上あるいは36°C日数の相関関係を検討すると相関関係が認められ、高温の日が多いと熱中症死亡数が多くなる⁶⁾。

運動時の発生例で温度が調査できた442例について、気温と湿度の分布を図6に示した(文献4に資料追加)。その分布をみると高温の時は湿度が低くなるが、低温時は湿度が高い範囲に分布する。気温はおおむね19°Cから31°Cでの範囲である。気温と湿度の分布で、死亡例と非死亡例は明確に区別できないが、運動時の熱中症は、おおむね気温24°C以上、湿度40%以上の範囲で発生する可能性が高い。

気温20°C以下で発生した例に*印を付けたが、*4は2月の校内マラソンでの発生で気温5.7°Cである。その他、野球練習時にダッシュを繰り返したとかレスリングの減量などがある。

運動時熱中症発生時の湿度と気温の分布を5月と6月と7月と8月の発生例で区別した(図7)。5月と6月は7月と8月より明らかに低温域に分

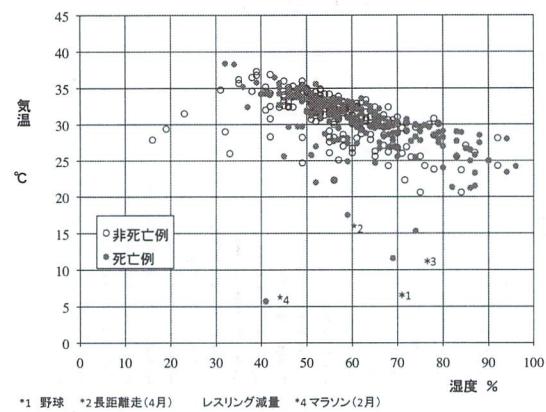


図6 運動時熱中症発生時の相対湿度と気温の関係(1970年～2012年)

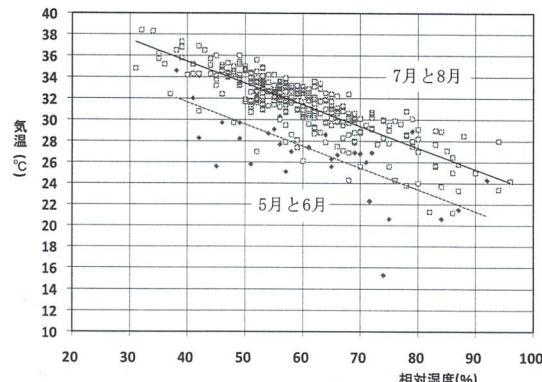


図7 運動時熱中症発生時の相対湿度と気温の分布
(5月、6月と7月、8月の比較)

布し、湿度40%ではおおむね3.8°C、湿度70%ではおおむね4.0°C低値に分布している。これは、暑さに十分慣れていない、すなわち暑熱順化が十分獲得されていないことが発生要因と考えられる。また、熱中症の発生は6月、7月、8月に集中するが2月あるいは11月にも発生している例もある。前述の気温5.7°Cの例は2月の発生である。それらはいずれもマラソン大会である。大会で競うことで運動強度が高くなることが考えられ、激しい運動では比較的低い温度環境下でも発生する危険性がある。熱中症の定義では暑熱環境における障害としているが、運動時には低温環境でも発症する可能性は十分あるので注意を要する。

4. 高温環境の評価

夏季の運動場面では気温と湿度だけでなく輻射熱(グラウンドからの照り返し)も関係する³⁾。暑さ寒さに関する環境因子は、気温、湿度、輻射熱と気流が関係するが、暑さの評価には乾球温度(気温)、湿度(湿球温度)と黒球温度(輻射熱)から計算する、WBGTが用いられる^{1,3)}。

熱中症予防の温度指標として、WBGT(Wet-bulb Globe Temperature)が用いられる。これは体温調節に関する暑熱環境の指標であり、熱中症の発生と密接な関係がある。

運動時熱中症発生時のWBGT分布は図8のようになり、WBGT 16°C以下も見られるが、発生

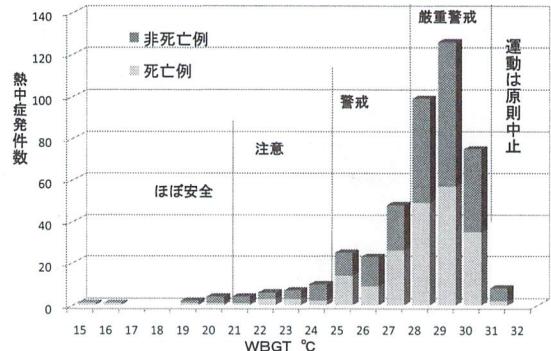


図8 運動時熱中症発生時のWBGT分布
(1970年～2012年)

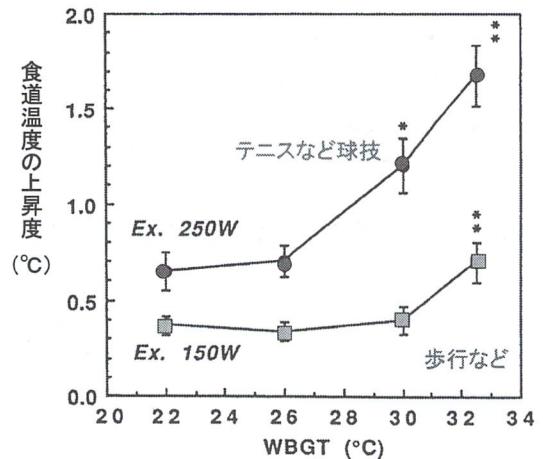


図9 運動時(60分)のWBGTを食道温度の上昇度
(寄本ほか、1992)

の頻度は19°Cからみられ21°Cから多くなり、25°Cからさらに増加、28°Cから著増する。31°C以上では少なくなるが、31°C以上の高温ではスポーツ活動が減少すると考えられる¹⁾。また、寄本ら⁸⁾は図9に示すように60分間の運動時におけるWBGTと食道温上昇度の関係を検討し、150Wの運動ではWBGT31°C以上で、250Wの運動ではWBGT28°C以上で食道温度の上昇度が大きいことを実験的に証明した。

WBGTと熱中症件数の分布およびWBGTと体温上昇度関係は熱中症の危険率と関係することを支持する資料であり、予防のための運動指針の基本となっている。図10にスポーツ活動中の熱中症予防運動指針を示した¹⁾。21°C以下は「ほぼ安

熱中症予防運動指針



図10 スポーツ活動中の熱中症予防運動指針 2013

全、21～25°Cは「注意」、25～28°Cは「警戒」、28～31°Cは「厳重警戒」、31°C以上が「運動は原則中止」としている¹⁾。

5. 热中症予防指針

热中症の発症は、体温調節反応と密接に関係するので、体温上昇を防ぐこと及び発汗による脱水を防ぐことが基本となる。体温の上昇には環境温度と関係することから、WBGTによる運動指針が示されている。図10はスポーツ活動中の熱中症予防指針¹⁾である。スポーツ活動における熱中症予防ガイドブックでは従来は8ヶ条とされていたが、に改訂(2013年4月)では5ヶ条となっている。

①暑いとき、無理な運動は事故のもと

高温多湿時は無理しない。環境条件に応じた運動強度や休憩水分補給に努める。

②急な暑さは要注意

急な暑さは暑熱順化が関係するので要注意である。

③失った水と塩分取り戻そう

発汗による体液の損失を補給するために水分と塩分を補給する。

④薄着スタイルでさわやかに

衣服は体温調節と密接である。着衣条件に十分注意する。

⑤体調不良は事故のもと

体調は体温調節と関係が深い。肥満者も危険率が高い。

また、日本生気象学会は日常生活における熱中症予防指針 Ver.3) を発表した。この指針も環境温度の指標は WBGT を用いている。

6. 热中症予防のための保健学習

热中症は複雑な要因の組み合わせで発症するので、原因と結果で発生について説明することは困難である。予防のためには主体(年齢、体調、暑熱順化など)、環境(気象、着衣など)、行動(運動様式、強度、持続時間など)に対する対策を考えられる。しかし、それらの対策を周知するための啓発活動および対策を理解し予防のための実践をすることが重要と思われる。熱中症の研究や治療に関しては詳細に検討されているが、根絶に至らないので予防活動として保健学習が重要であることを訴えたい。その内容は以下の項目と考えている。

①熱中症の理解(病型と発生機序、高温下の体温調節、特徴)

②高温環境の評価(WBGTの理解、測定方法)

③水分・塩分補給の効果(溶液の組成、温度、飲料、摂取方法など)

④安全管理・危機管理(事前点検、発生の危険性の認知、発生時の対応、連絡網)

これらについて学習するための資料の作成が望まれる。特に対象とする年齢及び行動特性(運動時、労働時、日常生活)に応じた資料が必要である。

おわりに

熱中症発生の実態とその特徴から根絶を目指して予防対策を検討した。すなわち、保健学習が重要であることを強調した。

こうした活動は、体育・スポーツの実践、研究にかかる関係者特に本学会会員諸氏のご理解とご協力を願うものである。

稿を終えるに当たり、一連の研究は、森本武利先生(京都府立医科大学)、寄本 明先生(滋賀県立大学)、芳田哲也先生(京都工芸繊維大学)、新矢博美先生(京都女子大学)はじめ多くの皆様の協力と理解による。また、実験ならびに現場調査に際しては多くの被験者の皆様の協力によるものである。ここに合わせて深甚の謝意を表します。

文 献

- 1) 川原 貴ほか：スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック，公益財団法人日本体育協会，2013.
- 2) 三浦豊彦：日本の高温労働－熱中症小史－，労

働科学，39(9)，437-456，1963.

- 3) 中井誠一，寄本 明，芳田哲也，岡本直輝，森本武利：運動時の暑熱障害発生と環境温度の関係－グラウンドの環境温度の観察から－，臨床スポーツ医学，8(1),41-45, 1991.
- 4) 中井誠一，新里寛英，森本武利：熱中症発生に関する疫学的検討－1990年～1994年の新聞記事にもとづく検討－. 日生気誌，33(2)，71-77,1996.
- 5) 中井誠一：熱中症の疫学，日本臨床，934-939, 2012.
- 6) 日本生気象学会「日常生活における熱中症予防指針」Ver.3, 日生気誌, 50(1): 49-59, 2013.
- 7) 斎藤 一、三浦豊彦編：日本の高温労働－その実態と対策－，労働科学研究所，197-218，1963.
- 8) 寄本明：WBGT を指標とした暑熱下運動時の生体応答と熱ストレスの評価. 体力科学，41, 477-484, 1992.
- 9) 芳田哲也：京都支部，日本体育学会60年記念誌，159，財団法人日本体育学会，2010.

京都マラソンシンポジウム講演録

3月10日は京都マラソン！ 大会関係者が語るマラソンブームの裏側と未来 ～京都滋賀体育学会60周年記念企画～

2013年3月9日 会場：京都工芸繊維大学

プログラム

◆京都マラソンの動向

(龍谷大学経営学部 准教授 松永敬子)

◆近年のマラソン文化の動向<広告代理店から見た市場動向>

(株式会社電通 スポーツ局スポーツ1部専任部長 坂牧政彦)

◆近年のマラソン・スポーツ用品の動向

(株式会社ワコール ウェルネス事業部 岡 智恵子)

◆京都のマラソン、駅伝を支える立場から

(一般財団法人京都陸上競技協会 常務理事 佐竹敏之 <光華女子大学准教授>)

◆京都市の新たなスポーツ文化を考える

(京都市文化市民局市民スポーツ振興室 担当部長 下間健之)

本文章は、各演者の方がお話しいただいた内容を、実行委員会の責任でテープ起こし文章を作成させて頂きました。若干、加筆修正を加えていてご理解ください。

また「京都マラソンの動向」についての松永先生のお話は、ランナー・ボランティア・市民の立場から分析した論文として別途、掲載されますので省略しています。

文責：京都滋賀体育学会会長

60周年記念行事実行委員会副委員長 岡本直輝
(立命館大学)

司会(松永)：それでは電通の坂巻様マラソンの動向についてお話を頂きます。宜しくお願ひ致します。

近年のマラソン文化の動向 <広告代理店から見た市場動向>

坂牧：私は電通でスポーツイベントに関わってきました。現在では、ジョギング・ランニングを行っている人が1,000万人を超えるまでになりました。またジョギングを習慣づけている人口が10年間で2.7倍以上にもなっています。その中で、東京マラソンが大都市マラソンのモデルになります。

した。その取り組みについてお話させて頂きます。けしてコースに妥協しませんでした。まずは、都庁からスタートして皇居、東京タワー、銀座、浅草を通るコースになっています。やはり一番見せたいところ、一番走りたいところを走らせたということが東京マラソンの特色かと思います。平成23年度、東京マラソンの参加者の結果を含めて、いわゆる三都マラソンを含めて日本陸連の公認コースの完走者が20万人を超えるました。東京マラソンが始まる前には8万3千人ということで、12万人以上のフルマラソンの大会が増えているということが言えます。

ファッションの進化ということで、最近は、ランニングウェアのファッションショーがあるぐらいの時代になっていますけど、7年前くらいではほとんどのランナーはジャージで走っているという感じで、どちらかというとファッションナブルではなかったです。今やランニングアイテムも増えてきていて、女性であればランニングスカートといったものを着ています。マラソンが苦しいというものから、楽しく綺麗にというイメージそのものが変わってきてているというのが大きな変化かと思います。

3つ目に、ランニングコミュニティの増加ということで、元々走る方々は仲間になって、ホノルルマラソンに行こうというようなツアーがあったりもしましたが、ここ数年、3、4年のソーシャルネットワーク、ツイッター、SNSを用いて、そのコミュニティがどんどん膨らんできています。今では一つの大きな組織になっていると言えます。今回、京都マラソンは日本で初めてのソーシャルマラソンということで、自分のランニング通過タイムが自動的にfacebookに載るということを始められ、ソーシャルメディアとの親和性が極めて高いスポーツ、参加型スポーツの代表イベントだと言えるかと思います。クチコミメディアとしての発信力の高さとして、スポンサーも注目していると言えるかと思います。

景気低迷傾向志向ということで、少しずつ景気が上向いてきたというのはありますけど、ずっと景気が低迷している中で、お金をかけなくともできるスポーツだということで、ランニングというのは手軽に始められるスポーツだったのかなと思います。意外とハマっちゃうとお金はかかるみたいです。あとは、メタボ対策等に取り組む人が増えたという中で、中高年層がこっそりと走っているという人たちが増えています。ただ、こういった全ての流れは、我々の中では東京マラソンから始まったと言えるでしょう。わずか6年前の様子と現在では大きな違いがあるように思っています。

東京マラソンが生み出したものということで、東京マラソン以降のいろんなマラソンへ影響し、

全国各地で市民マラソンが開催されています。代表されるのは、この京阪神地区で起きた大阪マラソン、京都マラソン、神戸マラソン、あと熊本マラソンも去年から始まっています。この4つの大会を合わせると8万人くらいの人がフルマラソンで新規に走っているというわけなんですね。これはわずか1～2年の間に急に増えています。さらに現在、北九州、広島、岡山や金沢など政令指定都市に標準装備化しているような動きがあります。横浜など、20ある政令指定都市でまだフルマラソンを持っていない都市がいくつかあるのですが、そういうところがフルマラソンを真剣に検討し始めているようです。また、経済波及効果の魅力ということで、東京マラソンの1回目、2回目について非公式に経済波及効果を計算していますが、200億円以上だと言われています。新たな観光資源を探している自治体にとっては、大きな魅力だろうと思います。自治体指導となって官民一体となった最大のイベントとなることで、自治体の税金だけで実施する訳にいきませんので、そういったことを全部含めて言うと、その地域の最大のイベントになってきているということが言えます。

私は電通で、現在の市民マラソン企画をいろいろ担当させてもらっています。千葉・東京・京都・大阪・神戸・熊本・北海道マラソンという7つの大会を我々でやらせて頂いています。今年度から来年度にかけて、さらに複数の大会が開催されつつあるということで、全国的にマラソン大会は広まっていると言えます。

都市型マラソンを目指す理由を整理をしますと、都市型マラソンは世界のスタンダードになっていると言えるでしょう。都市力をアピールするには絶好のコンテンツということですが、都市力とは「何か」というと、インフラだとか警察との連携です。交通規制をきちんと実施する為には、地域住民の理解や調整を含めた都市力というのが重要になるでしょう。東京都では、オリンピック承認を目指していますが、今回の評価委員会に対しても警察との関係等を説明し、東京マラソンを

実施しているということをアピールの材料にしているのは事実です。

世界で見ると、主要都市では大型市民マラソンというのはほぼ標準装備されていると言えます。シックスメジャーズがありますけども、大都市で市民マラソンがないところはないでしょう。すべての費用を税金で実施するということではなくて、エントリー代だと、スポンサーからの費用負担を合わせて実施するということで、東京マラソンでは東京都では1億円くらいしか支出していません。残りはエントリー代やスポンサーの負担ですが、200億円を超える経済効果を生んでいます。先ほどからの言っているスポーツツーリズムという観点からも、都市マラソンというのは、これから益々増えていくのかなと思っています。

スポンサーから見た数字のところを紹介すると、ランニングシューズの出荷量が106%で、500億円を超えてるという凄い数字になっていますし、あとはサプリメントです。習慣化してサプリメントを摂るというのが、ランナーの中では習慣化してきており、急増するラーニングステーション、ランステと言われるものも出てきています。その他、スポンサーではなくて、大会に対してパートナーとして参画するということで、協賛金を単に出すだけでなく、資産や活動を通じて大会を積極的に支えることで、スポンサーが参画しやすい大会になっています。もちろん、スポーツメーカーやいろんな意味で協力頂けますし、オフィシャルドリンク企業にもいろんな形で協力頂いています。今回もオムロンやワコールからは、実際のところ社内からボランティアを何人も出して大会を支えて頂いています。また、今日も来場されていますけど、最近の新しいビジネスとして写真サービスもあり、ランナーサービスの一環として、会社を挙げて協力していただいているフォトフレームといった会社があります。単純にスポンサーとして参加しているというだけでなく、大会を一緒に盛り上げていこうというスポンサーが大勢いるというのが、京都の街や大会が支えられているかと思います。

最後になりますけど、1000万人のポジティブランナーを刺激するということで、フルマラソンの完走者は、まだまだ増加するでしょう。アクティブに週に1回、週に2回以上走っているという人が385万人いるとするとフルマラソンへの参加者はさらに増えるでしょう。一年間に1回以上走るという1000万人のランナーがいる大きな市場は大変魅力があります。この方々が全てターゲットだとすると、市場として展開すればさらに発展するでしょう。それと、ランナーのロイヤリティを高めるということが、さきほどからのFacebookやツイッターによって、どんどん広がっているので、マーケティング的にも重要なメリットの一つになっていると考えています。このあと岡さんの説明があると思いますが、走り終えたランナーが、やっぱりCW-Xを履いていたら疲れなかつたとかをFacebookやツイッターであげることによって、それを聞いた人が、あの商品がいいんだねとか、アシックスの靴はよかったねといってくれることなどが、単なるクチコミがどんどん広がっていって、一つのマーケティング的な大きなメリットになっているということが言えると思います。

ご清聴ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。皆さん、いろいろと訊きたいこともあると思いますが、質問は最後にまとめて受けたいと思いますので、次に進ませていただきたいと思います。

それでは、株式会社ワコール、岡様、宜しくお願いします。岡様のタイトルは、「近年のマラソンスポーツ用品の動向」ということで、特にワコール製品に関してのお話をいただきたいと思います。

近年のマラソン・スポーツ用品の動向

岡：ワコール会社ビジネス事業部の岡と申します。宜しくお願いします。さきほど、電通の坂牧さんから、いろいろな市場やマーケットについて

お話をありましたので、私どもはマラソン部門の背景を探るということで、ウェアについて述べさせて頂きます。特にファッショントピックの変遷という課題を頂いておりますので、どちらかというと数字ではなく、具体的なウェアよりのお話をさせて頂きたいと思います。

まず、マラソンユーザーの過去と現在ということで、先ほども坂牧さんの方からお話をありましたけれども、過去のイメージはストイック・マニアック、それからマラソンは長い距離でハードでキツイ・辛いというイメージがあつたりします。あるいは靴さえあればとか、Tシャツと短パン、ジャージで走れるでお金のかからないスポーツであるとか、走ることは誰でもでき容易にやることができるということで、靴は儲かるけど、ウェアはそんなに儲からないというイメージがございます。しかし、現代では先ほどもありましたけども、健康雑誌、マラソン雑誌なんかも沢山出版されています。さらにファッショントピックがマラソンを取り上げるようになります。美ジョガーやランナー、すなわち走る方を美しいジョガーという風な言い方をして、格好いいとか、健康、ヘルスアップ、ビューティーというイメージをつけております。近年、走っている人はできる人、できる女、できる男、カッコイイというイメージになっております。

そして、ファッショントピックの変遷ですけれども、簡単に20年前からありますが、先ほど申しました綿のTシャツに短パン、ジャージの上下で走られるという方も多いです。トップアスリートは今もほぼ変わりないのですが、軽い素材のランパンにランシャツがほとんどでした。これは、ある意味、究極のランニングウェアだと私共メーカーは考えております。

そして、現在、ファッショントピックはどのように変わったかと申しますと、各スポーツメーカーが凌ぎを削って作ってきてるのが、体の動きをサポートする機能性のスポーツウェアです。機能性のタイツ、それからランスカ、ランドレです。ラ

ンスカというのはランニングスカート、ランニングドレスのことです。機能性のあるタイツ、ピタピタのスパッツを履いて走ることから、お腹まわりやヒップラインを隠したいということで、可愛く、ランニング用のスカートやワンピース、そしてアクセサリー、いろんな音楽を聞きながらというのもありますが、アームカバー、ウェストバッグ、レッグウォーマーなど、私が今日つけておりますバフという首や頭に巻くもので、使い勝手は9通りくらいありますが、この種の品がファッショントピックとして出てきております。

どんなイメージかというと、これが私どものホームページにあるお客様が着こなしだす。タイツは私どものタイツ、この方がランスカです。結構ベテランの方ですけれども、こんな風に可愛くコーディネートされています。どちらかと言うと、自転車ウェアが非常にファッショナブルというイメージがあります。このように自転車ウェアのようになって、スカートを履いて、機能性のタイツを履いているとか、リュックを背負っているものもあります。続いてゴーグル、アイウェアがあり、いろんなメーカーがファッショナブルなアイウェアを出されているといいます。こういうアームカバーなんかは、ファッショントピックではなくて、日焼け予防です。それから明日は午前中が20℃、午後から雨が降るという予報ですので、暑い場合には脱げる、または雨が降ったら、またつけられるといった使い勝手を考えたウェアリングが出てきています。

機能性ウェアというのはどういうものかを紹介したいと思います。コンディショニングを考慮した機能性スパッツの登場というのがあります。これはですね、スポーツウェアの業界の中に、全く新しい、新カテゴリーを創造しました。コンディショニングウェアでありますとか、体を圧迫するコンプレッションウェアを作り上げました。これが、ほぼ20年前くらいからできております。現在では、スポーツ量販店で、コンディショニングウェアコーナーとかコンプレッションウェアのコーナーというのが設けられており、スポーツ

メーカー各社が凌ぎを削って、いい研究した商品を展開するというような市場に変わってきております。

スポーツファッショングを変えた、この機能性ウェアですが、例えばランナーであれば、ジョガーやトレッキングであれば山ガールというようなことで、いずれも機能性の高いウェアを使ったコーディネートというのが新たなファッショングを作り上げて参ります。

では、この機能性スパッツはどういうものなのか、ご紹介したいと思います。まず、関節保護、筋肉疲労軽減効果があるというものが、このウェアになります。スポーツ時のコンディショニングを考慮した機能性スパッツの登場しました。こちらは、わたくし共の宣伝になりますが、1991年にワコールから発売された機能性スパッツ「コンディショニングウェア CW-X」というのが最初のものになります。これは、スポーツ時の障害予防の為にテーピングやサポーターを利用していくことからヒントを得て、開発を致しました。開発のコンセプトは、スポーツ時の障害予防と疲労軽減でございます。商品としてはこのようなもので、タイツタイプに2種類のストレッチ性のある生地をはぎあわせて、腰のあたりから膝のテーピングを応用したものです。これは元々、私どもの研究員の妹がスキーに行って転倒し、膝の靱帯を伸ばしてしまい、スキーコースの中にテーピングを巻いてもらったところ、またスキーが滑れたという事実から商品化のアイディアがでてきました。その当時は今のように誰もが簡単に巻けるようなテーピングはなかったですし、専門的じゃないとなかったです。またサポーターはズレるということで、誰もが履いたらテーピング機能が得られるものがあればいいのにという発想から商品化をし1991年に発売を始めたものです。

そして、先程もありましたけども、6年前から東京マラソンで、ランニングが空前のマラソンブームになりました。元々はスキーヤーが履いているタイプでスキーヤー向けの市場に打ち出したんですけど、ランナーの方に履かれるようになり

ました。ランニングブームの今回、なぜいいのか、美ジョガーガがうまれる秘訣は、みなさんもご存知だと思いますけど、定期的な有酸素運動であり、体を活性化させるとか、脳を活性化させる、創造性や感性を刺激する、社会性や協調性を向上させるという様々な効果があります。美ジョガーガと言われる秘密には、有名なトップのモデルさん達が、健康の為、プロポーションを維持するためにマラソンをしたり、ライフスタイルの中でトライアスロンをしたりということが、雑誌などで取り上げられたことが要因であると思います。さらに、本当に心身共に健康になります。私事ですが、マラソンやジョギングを始めまして、食生活も変えましたところ、半年ほどで8kgくらい健康的に痩せました。実際に健康的に食べて、綺麗になったとか痩せたという方がたくさんおられますので、やはりランニングというものは素晴らしいものです。アメリカの広告では、ランニングをずっと続けている方は寿命が長いという論文を使っていましたが、結構あったように思います。

一方で、ランニングによる障害というのもあります。みなさんが綺麗になりたい、健康になりたいということで、手軽に走れる、できるスポーツなので、自己流で走ってしまう。そうすると、ランナーズニー、ジャンパンズニー、オーバープロネーション、ジョガーズニップルという代表的な障害が起こってしまいます。これらは、ランナーズ膝、ジャンパー膝とか言われていますね。オーバープロネーション、これは足首ですね。ジョガーズニップルというのは、バストの乳頭がウェアと擦れて出血するものです。これは男性のランナーにも生じますね。ですから、トップアスリートの方はバンドエイドを貼って、ランシャツを着て走ったりするということがあります。これらのランナーズニー、ジャンパーズニー、膝がどちらもすごく痛くなつて、走りたくなくなるのですが、病院でレントゲンを撮ってもらっても、全く異常がないというように診断されます。ちょっと大きさですけど、こんな状態で、腸脛靱帯摩擦症候群と言いまして、腰の外側にある靱帯、膝まで

バッと長い鞄帯が擦れて、膝の外側が痛くなるのです。なぜ痛くなるかと言うと、走りすぎ、練習のしすぎ、それから体型がO脚だったり、X脚だったり、偏平足だったりといった、その方の体型の特徴によって起こる障害です。ジャンパーズニーは膝の前辺りが痛くなる障害ですが、これもレントゲンには出てこないです。医師は、痛み止めを処方し、湿布をもらって終わりみたいな感じになります。ジャンプを繰り返すことによって起こる障害なんですが、マラソンはいろんな先生方に拠ると、片足立ちで自分をもう一人おんぶしてケンケンしながらフルマラソンを走るようなものだと、それくらい膝には負荷が掛かるのだということを言っておられます。それだけ、膝に障害が掛かってくるということですね。そして、オーバープロネーションというO脚の方には内側に回内という状況が起きるのですが、歩いたり、走ったりする時に踵の外側から着地して、親指側から蹴るのですが、その時にシューズとの間隔で、こういう風に内側にねじれてしまうのです。本当はまっすぐなんです。シューズメーカーさんはこの特徴のある状態に対するシューズなんかもどんどん開発をされております。そして、ジョガーズニップルですね、私共下着メーカーですので、これがバストなんですが、合わないスポーツブラジャーをつけて走ったことによって、このように擦れて障害になったといいいます。ちなみに、この方、うちの新入社員でございまして、ブラジャーの合うとか合わないというのがまだわからない時に、合わないスポーツブラをつけて100km走って、70kmぐらいから、もうこんな状態になってしまったということでした。

そのような障害の発生の可能性があるマラソンに対して、機能性スパッツがどのように効果があるのかということを簡単にご紹介したいと思います。まず、私どものCW-Xはテーピング機能があるのですが、スクワットを100回3セットを行って、疲労度を取りました。疲労度は、履いていない時と、このタイツを履いた時で疲労度が軽減されています。そして1時間安静にした時には

運動後の疲労度が、履いていない時に比べると軽減しており、さらに回復していたというデータが出ております。さらに、膝プロセスに対する障害です。いわゆる衝撃ですね。こちらも、走った時に、膝がグッと曲がってしまう状態をバイコンという負荷がわかる機器で測定したのですが、タイツを履いている時と履いてない時とでは、膝に掛かる負担が半分くらいに軽減されたというデータが出ております。これらテーピング機能のあるタイツを履いて頂くことで快適にマラソンを走っていただけるということが言えるデータも示します。

ということで、私どもでは、体を守るウェアと体を動きやすくするというウェアに分けて商品展開をしております。もちろん、いろんなメーカーさんもそのようなことを考えておられますが、ラインナップとしては、それぞれの関節・膝・腰・股関節、お尻、それからもっと軽いウェアなどをいろいろ開発しています。特にテーピング機能のものは今では4種類ほどありますし、いろんな走力に合わせたり、スポーツのシーンに合わせて選んで頂けるようなものになっております。

今度は、トップスの方については、肩甲骨を動きやすくするということで、肩甲骨と股関節が連動しているというコンディショニングの考え方がありますので、その部分にアプローチをしたウェアの開発をしております。このように柔軟性テストについてみると、手がつく方とつかない方、このようにしてどれくらい手を上げられるかというのは、背中の筋肉の柔軟性が関わっております。そして、こちらも股関節がどのように動くか、それから腹筋がどのように強いのかというテストをしてみると、上肢や肩甲骨をサポートすることで、これらのことがサポートできるというふうになっております。少し動画をご覧下さい。

先ほどの肩甲骨をサポートするウェアを着用した時のランニングをした時ですが、どちらか片方は着ていない、片方は着た状態です。肩甲骨がスムーズに動くという体のバランスが整うということについてみると、グリーンの方がウェアを着た

方です。真ん中のブレが少ないことがわかつて頂けます。このような微妙に少ないブレなのですが、42.195kmという長距離を走った時には、データ上、疲労がしにくいとか、何分かタイムが短くなつたというデータが報告されています。ウェアにはこのようなことを謳つていませんが。

ボトムについてみると、各関節に掛かる負担をサポートしたり、動きやすくするというようなものを各メーカーは凌ぎを削って、開発をしております。これには、健康で、長生きをして、元気でポックリ死ねるようにという風なところにつながるのではないかなどと思います。そういう人たちの出会いとか、コミュニケーション、楽しさというものをサポートしていく為に、このような商品開発をしております。先ほどのプラジャーに関しましても、バストが揺れにくい、ジョガーズニップルをサポートする為に、このようなテーピング機能のあるスポーツプラジャーなどを開発して、PRをさせて頂いております。まだまだ、スポーツウェアで、こういうプラジャーが必要だという認識がありませんので、こういう場面を使ったり、スポンサーなどをさせて頂くことで、女性と男性の体を快適にする為の企業努力をさせて頂いているということをご紹介させて頂きました。

東京マラソン以来、ブームになったマラソンやランニングマーケットを拡大する中で、マラソンファッショントをさらに拡大しております。ちなみに、東京マラソンはスポンサーではないのですが、こっそりわが社のウエアを着て頂いているランナーをカウントしたところ、タイツのCW-Xの着用率20%以上でした。昨年の京都マラソンではタイツファッショントが全体の60%、内 CW-X 着用者はその半分を占めているということで、機能性のタイツは、ファッショナブルで、「完走できるタイツ」「記録を狙えるタイツ」というイメージになっております。さらに、今後も発展し続けるブームと共に、ブームに終わることなく、人々の体をサポートして、快適な生活をサポートできるメーカーとして頑張っていきたいと思っております。ありがとうございました。(拍手)

司会：ありがとうございました。私はまだCW-Xを持っておりません。検討させて頂きたいたいです。これを見ると本当にいいなあという感じがします。それでは、次の発表ですが、京都光華女子大学の佐竹先生から「京都のマラソン、駅伝を支える立場から」ということでご講演頂きます。佐竹先生は、京都府陸上競技協会の常務理事でもいらっしゃいます。佐竹先生、どうぞよろしくお願いします。

京都のマラソン、駅伝を支える立場から

佐竹：失礼致します。私は京都陸協という立場で京都で行われている駅伝とマラソンのところからお話をさせていただきます。また、私は記録情報処理部というところにおりますので、駅伝・マラソンでの記録処理がどのような形で行われているのかというようなことをお話をしたいと思います。

京都で行われているのは、三大駅伝とマラソンで、暮れに行われています高校駅伝は午前中に女子、午後から男子と、1日で2つの全国大会を行っております。これは、全国的にみても京都だけだと思います。2つ目が、年明けに全国都道府県対抗女子駅伝大会皇后杯、我々は全国女子駅伝と呼んでいます。それから車椅子駅伝、これは2月中旬くらい。それから明日、開催されます京都マラソンです。この4つを京都陸協が主催・主管しているということになります。

ちょっと駅伝のルーツを調べてみました。どうやら、飛脚かきてるらしく、宿場から宿場に手紙等を運んでいく、リレーをしていったというところがはじまりだそうです。駅伝の始まりは、大正6年に、東京に都が遷って50周年の記念イベントとして、東海道53次駅伝歩競争というものが開催されました。そのスタート地点が京都の三条大橋、フィニッシュ地点が東京上野の不忍池です。走った距離が508km、23区間と言われております。ご存知の方が多いと思いますが、駅伝発祥の地ということで、この碑を三条大橋と到着地点

の不忍池に建ててあります。2002年、日本陸連が建てております。こちらの方はこの裏面に刻まれている文字です。後で、資料でゆっくりご覧いただけたらと思います。この碑の下のところに文字がありますが小さいので、字を拡大しています。三条大橋から最後、不忍池まで、中継したところを彫ってありますが、よろしければ、またご覧ください。ちょうど、あと数年経ちますと、100年ということで、京都陸協でも新しいイベントの計画を立てている最中でございます。

高校駅伝について、少しだけ触れます。昭和25年に男子のみの大会として開催されました。最初、32km、6区間で行われていました。第3回大会から今のはじめの距離の7区間で開催されて、17回大会から京都で開催されています。たぶんここへ来られているほとんどの方は、高校駅伝と言えば京都と言ってくれるでしょう。冬の風物詩とか冬の甲子園があるというようなことが言われています。おおもとは毎日新聞社さんが主催ですので、そこをスタートとして、大阪で行われていたそうです。なぜ、京都に移ったかと言うと、実は17回大会も大阪でやる予定で10月まで予定をされていたそうです。急遽、道路を走ったらいけないということになりました。高度成長期ですので、急に車が増えて、大阪では車が一杯なのにそれを止めて走らせている場合じゃないということで京都で開催することになりました。2ヶ月くらいで準備をしたという裏話があって、かなり大変だったという話を聞いております。女子の大会は、平成元年から行われております。これは古い方はご存知でしょうが京都マラソンというものがありまして、発展的解消をして女子駅伝になり、今年で31回大会を開催することになります。

なぜ京都かというと、さきほど言いました全国高校駅伝が定着してきたということ、一定のノウハウがあって、かなり日本陸連からも評価をしていただいております。それと、ここに書きました、当時の日本陸連の会長青木伴治氏と専務理事帖佐寛章氏が京都の方ですね、ベルリンオリンピックに出られた朝隈氏、この3人が京都でやろ

うと決めたと聞いております。京都府チームは非常に駅伝が強いです。その要因の1つは、この情報が、他府県より早く強化するのが早かったようです。他の県よりも、1年以上早くから強化体制をとって準備することができたというのが一つの勝因になっていると思います。この京都女子駅伝では9区間に必ず中学生をいれることになっています。これは距離が決まっていて3km以上は走らせては行けませんので、中学生2名が走る区間が決まっています。高校生は3名以上使いなさい、社会人や学生のランナーを含めて、チームを作ることになっています。2010年から皇后盃という名前が着きました。京都府チームが目立っており、2011年に優勝して、この皇后盃を頂きました。もらったのはいいものの、管理するのが大変でした。規定がありまして、天皇盃・皇后盃受領規定が定められており、保管場所が決まっています。銀行もしくは信託会社の金庫に保管しなくてはいけないということで、最初は京都新聞社が関係していますので新聞社にお願いをしましたが、「とんでもない」ということで、銀行さんの金庫に1年間無償で置かせていただいた、という裏話がございます。

ここからが、本来の話になりますが、明日のマラソンは、アールビーズさんというところが、選手の受付から記録の発表まで全てやっていただけます。高校駅伝と女子駅伝は、我々スタッフがコンピューターでやりとりをしています。そのデータの場合は、株式会社マットさんというところの駅伝システムを使っておりますので、送られてきたデータをここで変換して、使えるように変えていくという作業をしているところです。

これは、記録センターで準備しているところです。最近では、記録のやりとりや、スタートして5km、10km、フィニッシュもすべて自動計測をしています。あとでチップをお見せしますが、選手がポイントを通ったら勝手にコンピューターに入力されて、記録センターにデータが流れてきて、発表するというシステムになっております。これは中継所に持っていくコンピューターですね。

バッテリーを充電しています。それから、もしものことがあつたら、困りますので、携帯電話を準備している映像です。これが、明日使われるトルソータグいうような呼び方をされています。これは明日使われるものと全く同じものですけれども、これに情報が入っています。明日はマラソンですので、フィニッシュ地点に2枚のマットを敷いています。たいてい、1枚で取れますぐ、もしものことがありますので、フィニッシュ地点では2枚のマットをひいて対応しています。これはスタート地点です。この写真は多分、北海道マラソンです。スタートの時は、3枚、敷いています。人数が多いですので、もし取りこぼしというか、取れなかつたら困りますので、念のために3枚敷いて対応しています。このチップは明日胸ゼッケンの前に一個つけるはずです。高校駅伝、女子駅伝では、現在横向きにありますが、もう一枚、縦向きにつけます。胸のゼッケンの裏に、高校駅伝、女子駅伝では2つ着けて対応しています。どんな形でも発信して、拾らえるようにという形で、念の為に2個付けて対応しております。これが、受ける方ですね。チップを受信する方ですが、シチズンさんのシステムです。誰が何時間何分で通過したかというタイムが測れる仕組みになっています。

これが、駅伝の方ですが、駅伝は区間賞がありますので、ライン上で取れないと困りますので、補助アンテナ、ヤギアンテナがあります。こんな形で取り組む手段もあります。これは中継所の様子です。コンピューターで記録センターに送信しているところです。

これが記録センターです。区間から入ってくるデータを3台のコンピューターを使って、中継所とやりとりします。これはたぶんNHKさんと送信しているコンピューターです。あまり時間がないので、飛ばしますが、NHKさんから直に映像をもらっています。中継所の映像ですので、オンエアされていない映像をもらひながら、万一に備えているということです。

車椅子のことも一言だけ。昭和63年に京都国体

のあとに、身障者の大会がありました。それを機に車椅子駅伝を開催しております。これは、ちょうど6日で作ったソフトを動かしております。これがスタートですね、車椅子ですので、たすきを渡すとき、危ないので、特別なルールです。これは同じチームですが、タッチしたらそれでOKです。

京都マラソンは、さきほどからも出ていますように、昔実施していた京都マラソンがちょっと不評でしたのでやめて、女子駅伝になりました。先ほど取上げましたが、平安遷都1200年記念行事の1つとして、行われたのが京都シティハーフマラソンです。我々が聞いていたのは、1回きりの大会でしたが、15回まで行われました。去年、マラソンという形で開催するようになりましたのでずっと続くハズです。続いていかないと京都陸連も困ります。

これはコースです。あまりいいコースではありません。スタートして、四条通りから鞍原堤を走りますが、風がきついとかなりキツイですね。ダラダラの上り坂。最高なのは、この近くですね。登って降りますので、結構、脚に負担がきます。ここは京都工業繊維大学付近です。たしか河川敷を通って、ここフィニッシュ地点は結構いいかなと思います。いろんなところを回るので、遠くから来られる方はいいかもしれません。

これは、10km地点です。キロ毎門と呼んでいるのですが、5km、10km、15km、ずっと5km毎にこういうマットをひいて、Aさんが通ったタイムを全部拾って、あとで選手にフィードバックしてあげるというようなこともしております。最後に協力して頂いた方々、お名前を挙げさせてもらっています。とりとめのない話で申し訳ありませんが、京都陸協として、明日のマラソンはじめ、駅伝のいくつかを協力しております。選手の皆さんに快適に走っていただけるようにお祈りいたします。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

司会：佐竹先生、どうもありがとうございます

た。本日、お忙しいところから来て頂きました。ホームページで、このシンポジウムのご案内を差し上げた時に、佐竹先生のご所属、京都光華女子大学ですが、京都という文字が抜けておりました。大変、失礼しました。

それでは、最後のご発表になります、京都マラソンの担当部長で、京都市文化民局市民スポーツ振興室、下間さん、よろしくお願ひします。下間さんの方からは、「京都市の新たなスポーツ文化を考える」ということで、明日に控えたマラソンで大変忙しいのですが、本日、来ていただきました。どうぞよろしくお願ひ致します。

京都市の新たなスポーツ文化を考える

下間：皆さん、こんにちは。私、京都市役所で京都マラソン担当部長をいたしております下間と申します。下に間と書きまして、“しもつま”と呼びます。どうぞよろしくお願ひします。京都マラソンの実行委員会の事務局長をさせて頂いております。

本日、皆さんと違って、私、アナログでございまして、レジメとかお配りしている資料に沿って、お話をさせていただきたいと思います。

まずは、私どもが主催する京都マラソンをテーマとした、このようなシンポジウムを開催して頂きまして、関係者の皆さまには心から御礼申し上げます。また、本日、「京都市のスポーツ文化を考える」というテーマを頂戴しました。私の市役所で担当しております京都マラソンについて考えていることをお話をさせて頂きます。京都マラソンはまだ2回目でございまして、まだ発展途上、試行錯誤を重ねているところです。今日は、皆さまからいろいろな知恵を頂きたい、教えて頂きたいという思いでお話をさせて頂きるので、よろしくお願ひします。

このA4の両面のレジュメに沿ってお話をさせてもらいたいといますが、最初に「走る人、応援する人、支える人」～「京都マラソン」への参画ということで、それを切り口に話しさせて頂きたい

と思います。ちょっとお尋ねしますが、この中で、明日、京都マラソンを走って頂けるという方、いらっしゃったら手を挙げて頂けますでしょうか？

ありがとうございます。10名ほど走ってらっしゃいます。ありがとうございます。もう一つ、お尋ねします。明日、何らかの形でスタッフとしてお力添え頂くという方はいらっしゃいますでしょうか？ボランティアとか。ありがとうございます。これも10数名、いらっしゃいます。ありがとうございます。もう一つ、お尋ねします。沿道で応援してやろうという方はいらっしゃいますでしょうか？ほとんどの方が手を挙げていただきまして、ありがとうございます(笑)。このようにですね、マラソンというと、ややもすれば、走る人が主役と捉える向きもありますが、先程来お話をありましたように、走る人、応援する人、支える人、みんなが主役、これが京都マラソンの考え方でございます。参加者は、15,000人なのですが、5万人近い方から申し込み頂きました。今年は、世界43カ国、全国全ての都道府県からご参加を頂くということでございます。特徴は、他都市のマラソンと比べて、京都市民が、16%くらいです。京都市内・府内を含めて2割強ということですね。実は、シティハーフマラソンを16回やっていましたが、大体、4割の方が地元からの参加でした。他都市のマラソン、プログラムなどを一度見ていただくとわかりますが、4割くらいが地元というところがやはり多いです。裏返しますと、8割くらいの方は、京都の外から来られています。それと、もう一つは、結構、関東圏が多い傾向にあります。これは京都の特徴の一つなのですが、割と東京方面に人気が高いですね。政令指定都市が20ほどありますけど、東京で全国会議があります。実は時間・距離についてみると結構、京都が遠いんですね。他の都市を見てみると、飛行機で来られることが多いです。世界歴史都市会議というのがありますと、世界的にも空港がない、港がない、こういう100万都市は京都だけなのです。逆に考えると、東京、関東方面から来

るのに新幹線が一番便利だという非常にエコな都市、都市自体が非常にエコな都市、こんな考え方もあります。京都マラソンは環境に配慮したマラソンということも謳っておりますけども、移動手段一つをとってもそういうことが言えると思います。昨年、48万2千人の方が沿道で応援して頂きました。先程、ソーシャルマラソンというお話を先生方から頂きました。電通さん、またワコールさんも独自にホームページから全国初めてのソーシャルマラソンのご説明をして頂いております。

あと、京都マラソンというのは、15,000人のランナーを15,000人で支えるという、マラソンでありまして、スタッフ15,000人、ランナーと同じくらいご協力いただいている。その内、半分以上は無償奉仕のボランティアの方に支えられています。ボランティアをされている方も、普段は地域活動されてたり、お勤めされている方、また、京都は学生の街でございます。学生さんも多く、ご参加して頂いています。ボランティアという形だけでなく、沿道盛り上げ隊というような形で、独自にランナーを盛り上げて頂くというような企画もたくさんして頂いております。そういった多くの方のお力添えで成り立っているということです。

そして、4番目は協賛企業さん、協力企業さんですね。ワコールさんはじめ、昨年は30社ほどの協賛企業でしたが、今年、90社ほど頂いております。これは、京都マラソン、昨年の予算をオーバーしてしまったということが新聞でも出ておりますが、それを挽回すべく、幅広くご協力いただいて、支えていただいているということでございます。

5つ目にノーマイカーデーへの協力というのがございます。京都でフルマラソンをするというのは、非常に交通対策に苦労するということがございます。京都マラソンを開催できるためには、マイカーを抑制して頂かなければ、成り立たないということがございます。京都市民147万人、あるいは京都都市圏という考え方がありまして、380万人ほどおられます。滋賀県や大阪の一部も含め

て380万人くらいの都市圏の方々に新聞折込などで「車に乗らないでください」というお願いをして、やっと成り立っています。そうしたことに市民の方々がお応えいただいているので、成り立っているという風に考えているところでございます。

2つ目の京都市のスポーツ政策と京都マラソンというところで、ちょっとかいつまんだご説明なるかと思いますが、スポーツを通じたまちづくりということで書かせて頂きます。このA3版の二つ折にしております資料です。これが市民スポーツ振興計画ということで、京都市がこのようにスポーツ振興はかりますという10年計画です。平成23年3月に策定しまして、松永先生には策定委員会の委員長代理という形でご参画頂きました。松永先生は「こんなに、こき使われた策定委員会は初めてです…(笑)」という風に言われておりますが…(笑)、本当に骨折頂いた計画でございます。市長の挨拶がありますが、計画を作った時の考え方や問題意識が、ここに凝縮されています。例えば、スポーツの振興は大事だと言いますが、スポーツをしている人だけがこの問題を考えているのではダメじゃないか、というのがこの考え方であります。中程にも記載しておりますが、スポーツを一つの切り口として、日々の生活を見直してみる、自分にできることから実践してみることが出来ると思います。スポーツ振興をはかることによって、環境問題・教育問題・観光や経済を考えることができます。そういったものに広がりを持たなければならないのではないかというのが、この計画の根底に流れている考え方でございます。レジュメにも引用しておりますが、その裏側に市民と行政の役割分担という、3段落目に、スポーツで「感動」、スポーツで「健康」スポーツで「子育て」と書いてあります。この“スポーツで”という言葉を、“京都マラソンで”と置き換えていただくと、わかりやすいと思います。“京都マラソンで感動”、“京都マラソンで健康”、と先程来いろいろお話がありましたようにマラソンで健康になっていくというのがございます。また“京都マラソンで子育て・教

育”、お父ちゃんが走っている、お母ちゃんが走っている、子どもが応援するとか、いろんな形で家族のコミュニケーションができます。あるいはスポーツというものを考えるというきっかけにもなるわけです。そして、危機管理、安心・安全もあります。これだけの大規模な大会でござりますので交通対策初め、警察等ともしっかりと打ち合わせをして、対策を練っております。

国際化、先程言いました世界43カ国から参加されます。これ自体が、一つの大きな国際交流事業と言える訳であります。そして、将来の夢を言いますと、京都市に9つの姉妹都市がありますが、パリとかボストンとか、そういったところと、マラソンで交流できるのではないかといったご提案を市民の方から頂いたりもしております。

京都は、ご承知の通り、議定書採択の地でございます。例えは、給水でも京都は水道水を使っています。カーボンオフセットといって大会で排出するCO₂を、他のCO₂削減に取り組んでおられる方からのクレジットを活用して、トータルとしてゼロにしてCO₂を排出していないという取り組みをしています。多くのスポーツイベント、おそらくワールドカップやオリンピックを含めて、カーボンオフセットをされていると思いますが、京都が他と違うのは、地産地消型のCO₂削減をやっています。そういうクレジット制度を京都市自体がつくっておりまます。それを自ら活用してやっていると。環境についても、マラソンを通じて、十分考えられるということであります。

京都の観光客の98%がリピーターと言われています。そのきっかけ、今まで多くは修学旅行であります。それが、京都マラソンをきっかけに、何回か京都に来ようという方がおられてもいいと思います。去年、仁和寺さんの前を通られたランナーが非常に感激して、次の日にもう一泊して行こうかと思ったけど、あまりにも脚が痛いので、一回帰ってから、また来ますと、そんなことをおっしゃっていた方がおられます(笑)。いろんな新しい京都ファンを開拓していくたいと思っております。ちょっと、そのひとつに、今、配つ

ているお風呂屋さんマップというのがあります。銭湯は京都市に登録してもらわないといけないということになっていまして、登録して頂いているお風呂屋さんに、一軒一軒、声をかけて、マラソンに何か協力してもらえませんかとお願いしましたら、かなり協力して頂けて「マラソンの日は早く開けます」とか、スーパー銭湯からは「ゼッケン持ってきたら、割引します」とか言って頂いています。このお風呂屋さんマップ自体、実行委員会からお金を出しておりません。もちろん、割引も自前でやって頂いています。

京都市というのは147万人の市ですが、11の区の連合体もある訳です。一つひとつが、自治活動が活発であり非常にそのまとまりというのは大きくて、ボランティアの方も、各学区に体育振興会というのもありますが、大体3千人くらい市内からご参加いただきます。普段は、自治活動をされている方が、このマラソンではうちの学区はここを支えようということで、そのブロックを持って頂いているような取り組みもしております。

ノーマイカーデーというのを先程申しましたが、路線バスが京都市内で185の系統があります。市バス、民間のバス含めて、3分の1くらいがマラソンで影響を受けます。この影響を受けた路線バスをどうするかというと、大阪マラソンや神戸マラソンさんは、運休されているんですね。京都マラソンはそれとは全く逆に、できる限り走っていただきたいと事業者の方にお願いしています。それはなぜかというと、マイカーを抑制しないといけないからです。マイカーに乗る代わりに、地下鉄・バスに乗ってくださいと。皆さんがあれに協力されますと、バスはスイスイ走るようになります。そうなると、マイカーが抑制され、公共交通の利用が促進される。こういう好循環を狙っておりまして、昨年は成功しております。今年も、是非、成功させたいと思っています。

経済の波及効果、坂牧先生からご紹介ありましたが、40億8,200万円という推計です。これは、実は京都市内だけであります。他のマラソンは、東京マラソンとか、全国の数字を言われたり、県

単位の数字を言われているケースがあります。しかし、この数字は新幹線代とか飛行機代を除く、京都市内での波及効果ということです。そして、トータルとして京都を盛り上げる京都マラソンで、京都ブランドとか、あるいは賑わい、潤いを作っていくことです。

少し端折りますが、「するスポーツ」「見るスポーツ」「支えるスポーツ」という話。これは、私ども京都市では、スポーツ振興に関して、この10年計画の、目標数値というのを掲げています。またご覧いただければと思いますが、京都マラソンによって、「するスポーツ」について、ランナーに占める京都市民の割合が16%と言いましたから、人数にしたら2,000人を超えます。倍率3倍以上ですから、大体7,000人くらいは走る気になられたということです。これを10年間続けると、この数値は達成できるのではないかと思っています。また、見の方も多いですし、支えるスポーツの8,000人くらいはボランティアされています。10年間、延べ8万人の方が京都マラソンのボランティアをされると。それによって、この数字は必ず上がっていくと思っております。

あと、最後に、京都マラソンを新しい財産にする為にということで、時間があればお話をしたかったのですが、また公共性につきましても、あるいは沿道住民の合意形成ということも非常に重要な特徴です。また、交通対策。京都の地理的条件としまして、京都は盆地であり、道が狭い、それから立体交差がほとんどないというのが大きな特徴です。また、職住一体であり、京都マラソンのコースはすぐ横に家がある。それは応援とランナーが近いという特徴もある訳です。交通対策は、非常に苦労しているところで、コースについてもいろんなご意見がありますが、100通り以上あり、その中から今のコースが生き残っているといえます。

あと、財務の改善ということで、昨年、かなり予算オーバーし、事業費が6億6,000万円でした。事業費がそんなに多いかと言いますと、実は神戸マラソンより少ないので、市の負担が、1

億円の予定だったのですが、3億3,000万円なりました。この点については、見込みが非常に甘かったです、予算の立て方の見込みが甘かったということです。大変反省しているところですが、第2回の予算、総事業費を5億3千万円とし京都市の負担を1億円にまず改善したんですが、合計2億6千万円の事業費、財務改善をしていくということを考えております。

松永先生からもありましたが、是非、研究者の皆さんにも京都マラソンを実施しどうだったかという評価をしていただくことも大事なことです。数字できることは、例えば経済効果とか予算とかが把握しやすいですが、でも都市の賑わいとか潤いとかあるいは健康とか、なかなか数字にできません。ここは、是非、お力添えを頂きたい。ただ、私共、京都マラソン、京都市役所の中でマラソンだけを担当しているのが12名です。12名で50万人の方が参加される事業を担当するというのは、かなり正直大変で、なかなか検証作業に手が回らない、研究活動に手が回らないというのが実情でございます。是非、お力添えを頂きたいと思っております。以上でございます。失礼いたします。(拍手)

総合討論

司会：下間さん、ありがとうございました。それでは、只今から総合討論に入りたいと思います。ちょっと準備しますので、しばらくお待ちください。では、5人の先生方、前の方に起こしください。

では準備が整いましたので、只今から総合討論に移らせて頂きたいと思います。皆さん、5人の先生方のお話を聞いて、大変興味が湧いたのではないかと思います。いろんなことを聞きたいと思っておられることでしょう。それぞれの分野・立場の方の精銳の先生方に今日は登壇して頂いておりますので、是非この機会に質問して頂ければと思います。それでは、挙手をして質問してください。よろしくお願ひします。

質問される際には、どなたへの質問かということをおっしゃって頂きたいと思います。

A(男性)：興味深い発表、ありがとうございました。電通の坂牧さんにお伺いしたいのですが、以前にもジョギングブーム、マラソンブームというのが一時あったと思ったんです。リボビタンデーのコマーシャルとかで走ろう会とか、いろいろやられていたことがあったように記憶しています。一時期低迷して、またさらに東京マラソンをブームに新しい盛り上がりが出てきたかなあと思っていますが、昔のマラソンブームと比較して、今回のマラソンブームはどういうふうなところに違いがあるのか、何かお考えになっているところがあれば教えて頂きたいのです。また今後多くのマラソンブームができてきた中で、そのまま数がどんどん増えていくのか、あるいは選別されていってもう少し縮小されていくのか、その辺の動向みたいなものをどう予測されているのか、お考えがあれば教えて頂きたいと思います。

坂牧：ご質問ありがとうございます。以前のマラソンブームというのは、実は全然わからないというか、業務に携わってなかったので、お答えするのは難しいです。ただやはりフルマラソンを完走するということが身近になったということが絶対的な違いだと思います。ジョギング…、5km、10kmジョギングをしていたというのとフルマラソンの完走とでは、絶対達成感が違います。それが身近になったところが、ひとつ今のブームを支えていると思っており、これが絶対的な違いかなと考えています。それから、今後の動向に関しては、非常に言いにくいところもあるのですが、広告代理店の立場で言うと、税金を100%使って実施する大会ではなく、東京にしても、大阪にしても、京都にても、他のイベントを参考にしながら企画しているので、3分の1が税金で、3分の1がエントリーフィーで、3分の1がスポンサーみたいな、予算化するような大会が増えてくると思います。1万人規模の大会くらいになると、数千万円から1億円ぐらいのスポンサーフィーが必要に

なってくるので、飽和状態になっていくかなという意識はあります。やはり、スポーツメーカーさんにとっても、飲料メーカーさんにとっても、もう結構一杯一杯になっているかなというところがあります。商品ベースからみれば、増えれば増えるだけいいという感じではないのかなというのが現状です。

岡：スポーツをすることとベネフィットというのが研究なされていますが、その中にももちろん身体向上は当然ですが、社会的地位の向上というのがあります。今、おっしゃったようにフルマラソンを完走するということに時間制限があったので、一般の方は出場できないというのが、今までのフルマラソンでした。今は6時間、7時間、長いところでは8時間ということになっていますと、ほとんど歩いても8時間で完走できるんですね。完歩状態ですけども。そうすると、出場機会がすごく増えますよね。社会的地位の向上というと、フルマラソンを完走したというだけで、無条件でリスクペクトされる、「すごい、すごいね」って言われるのですね。スポーツの中でも、フルマラソンっていうのは社会的地位の向上がわかりやすいと言いますが、それが8時間ほど歩いていても、出ただけで凄い、完走したと言われると言われる機会が増えたというところで、ジョギングブームとはまた違うと思います。そんなにアスリートじゃないけども、出場して完走できるというのが非常に大きいのではないかなと。いわゆるベネフィットの中の社会的地位の向上という、ちょっとわからない部分が、一般の方にも分かるようなベネフィットになってきたというのが、非常に今までのジョギングブームとは大きく違うところかと思います。

司会：ありがとうございます。

ちょっと私から、質問されて申し訳ないですが、今のお話で、坂牧先生、企業スポーツはもう一杯一杯ということですが、実際には運営が厳しい大会も出てくるということでしょうか。

坂牧：もう少し分かりやすく言うと、地元のスポンサーがきちんと支えてくれないと大会が安定化

していかないということで言うことです。今回、京都マラソンの場合は、やはりワコールさんにしてもオムロンさんにとっても、地元のスポンサーについて頂いて、大阪マラソンもケイ・オプティコムやダスキンがついている。東京も東京メゾンがついているという形で、コアになるスポンサーさんが地元なんです。やはり大会の規模って、1万人も2万人も掛かる費用は、意外と同じだったりするので、地元のスポンサーで、数億というお金が出てこないエリアもあると思います。でも、やっぱり三都マラソンと同じような形態の大会をやりたいとなると、なかなか厳しいということがあるのかなと思います。あとはナショナルスポーツセンターが、地元放送がなかつたり、全国中継がなかつたようなイベントに、全国中継があるイベントと同じだけのお金を出してくるということがありますので、総合的に考えていくと、大会運営側はスポンサーに関するリスクっていうのは結構あるのかなと感じています。

司会：このマラソンの黒字か赤字かということに対しては、皆さんも大変興味があるところかと思います。この件に関してまして、下間さん、いかがでしょうか。京都マラソンの今年度の見込みと言いますか、先程もお話ありましたけれどもお聞かせ頂けますでしょうか。

下間：そうですね。実は、赤字という言葉を主催者の方は使っていません。予算オーバーした(笑)その分を予備費と言いまして、市の予算の中で充当したことですけども、元々の見込みが非常に甘かったと言えます。実は、シティハーフマラソン第一回目、総事業費4億円なのです。京都マラソン第一回目、4億円で組んでいたのです。そこが全然違っていました。それについては、単純にハーフマラソンを倍にしたという話では済まないことが沢山ありまして、この点が非常に見込みとして甘かったと言えます。今回どうかということですが、実は元々、2回目の予算は4億円で当初組んでいました。予算というのは、前もって提案していますから、予算を補正しまして、5億3,000万円にしました。その5億3,000万

円の内訳は、市の負担金、いわゆる税金が1億円です。エントリー代金、すなわち参加料を値上げさせて頂きました、1億8,000万円。スポンサーの方から2億円。それから、寄附、市民の方からの寄付を5,000万円。この寄付にはサポートランナーということで、東京マラソンでもチャリティランナーの制度がございますが、京都市に10万円以上寄付をして頂ければ、本人が出走してもいいし、その方がご指名頂いた方に出走していただいましてもいいという、こういう特典をつけた寄付を募りました。141名、集まったのですけども、目標は500名でして届かなかったのです。ただ寄付金額は3,000万円以上集まっています。つまり、10万円でいいところをもっと寄付して頂ける方もおられます。中には、篤志家の方がおられ、個人で1,000万円を寄付してくれる方もおられるのです。そういう方に支えられながら、なんとか運営している状況です。当日、急に必要な費用もありますが、大きな予算とのズレは生じない見込みをしております。非常にその件については、新たな增收策と徹底した経費削減策、これを両方ともやってです。さらに市議会の方からは、持ち出しゼロにできないかという話もされていますが、なかなか難しいのですが挑むべき課題と思っています。

司会：もうひとつお聞かせください。お金のかからない、ボランティアの育成において無償で協力して頂く点に関しては、京都マラソンの取り組みを教えて頂けますでしょうか。

下間：そうですね。1万5,000人のスタッフで支えられていますが、そのスタッフの中にはボランティアとして支えていただく方が半分以上です。しかし、仕事として支えなければならない方もおられます。例えばガードマンですが、前回では1,000人の予定だったのですが、3,600人必要でした。今回は800人減らすのですが、ガードマンはマンパワーであるのと同時に通信網の役割を果たしてくれます。京都市内で、全域を統括できる通信網として京都市では消防局や交通局がかなり広域対応できます。ただ、それらは普段、市民の安

心安全のために使っているわけですから、それ以外の通信網を構築しないといけないとなると、ガードマンの組織は必要になってきます。その意味で、やはりプロはプロで支えてもらわないといけないという部分があります。もちろん、ボランティアの方にお願いできることは増やし、またボランティアの方々のやって良かったという成果とか、達成感というようなことも研究していきながら、経費としては削減しなければなりません。毎回、こういう努力や改善を重ねていくことが重要だと思っています。

司会：ありがとうございます。その他、ご質問ございませんでしょうか。

C(男性)：今日はどうもありがとうございます。年寄りでこんな質問をするのもなんですが、下間先生にちょっとお聞きしたいのです。数字の話を先程して頂いたので良かったのですが、特別の金額10万円で出場できるという話があって、141人が参加されたと。この分ですが、果たして10万円という金額がどうだったのか。それは、どういうお考えで10万円にされたのか、私が気になったのと、それから、先程岡本先生が2回申し込んでダメだったと。私も実は申し込んでダメだったので、先日本津川で走って体がガタガタです。この15,000人という出場者数というのは、これは現状としては、これくらいが限度なのでしょうか。それとも、若干、増やすことが可能なのかどうなのか。私、昨年京都に帰ってきて、それまで埼玉だったんです。いろんなところで、そういう大会が多くなって、若干、出させて頂いているのですが、あとから他の方の質問もあるかもしれません、ショップ等を見ますと、今日の出店予定、明日の出店予定が大変有名なところのお店がたくさんあるわけです。それでも、少ないのではと思ったりもします。これは、関係するかどうかは別にしても、応援に来られる方、走れない方が他府県からも来られる方もたくさんおられるので、もっとそういうショップが多くてもいいんじゃないかなという気もしました。この辺も含めて、お聞か

せ頂ければ幸いです。

下間：10万円の寄付によるサポートランナー制度ですが、10万円の根拠というのは、じゃあ9万円ではダメなのかという議論もしたのですが、一つの目安として、東京マラソンが先行して今年3回目を迎えており、それと千葉アクアランマラソンでも同じ制度が実施されておりました。この制度のスタンダードが10万円かなどと判断し、10万円でスタートしたんです。これが高かったのか、安かったのか、あるいは他の方法がないのかということについては、まだまだ、検討の余地があると思います。あとは、もう一つは、我々が十分に広報できていなかったと思っています。10万円と言いましても、京都市の場合は自治体への寄付なのです。ふるさとの寄付金納税制度というのがあります、これに適応されます。例えば、年収1,000万円の方が10万円寄付されたと。いろんな控除や納税状況によっても違うのですけど、大体91,000円くらいが税控除として返ってくる。確定申告してもらわないといけないのですが。ただ、実質負担は9,000円くらい。一年後に戻ってくるという話ですね。これは、さらに年収1,500万円の方が10万円寄付されても、98,000円戻ってくるんですね。自治体がやることですので、きちんと紹介しいけないということと、はじめてやるということで協議に時間が掛かって、十分なお知らせができなかつたのです。2回目からはこのメリットもしっかり伝えていこうと考えています。私が個人的に思っているのは、10万円よりも5万円×2で一人を支えて頂く、これもいいかと思ったりもしています。

それから、15,000人の定員ですけども、これは回を重ねて、仮にコースが変わらなければ、コースの運用の問題としてできるかどうかというのを今後検討していくことになるかと思います。例えば、ランナーの密度がどうかというようなことも検証しないといけないです。京都マラソンのランナー密度、一番高いところで一平米あたり、0.7人くらいです。一平米あたり、6人から7人だと危ないというのがありますが、それと比べると大

丈夫という数字になっているのです。ただ走りながらですので、それがどうかという問題もあります。また狭いところもあるので、大丈夫かということは十分に検証しなくてはなりません。現在はあのコースで15,000人ができるというマニュアルになっているんですけども、そういう条件が大丈夫だという検証ができれば、若干増やすことはできるかと思っております。あと、スポンサーとかブースの件ですが、回を重ねるごとに京都マラソンが定着する中で、よりご協力頂ける企業さんも増えていくものと願っています。これは協賛と同じなのです。先程申しましたが、前回30社から90社ぐらいまでご協力頂く企業が増えております。今後益々、裾野は広げていきたいなと思っております。

司会：ありがとうございます。

C：すみません。もう一つだけ、お願ひします。参加者の居住地の問題ですけど、この抽選の方法っていうのは、どういうことなのかわからなんのです。地区に分けて、何パーセントかの設定をされて抽選なのか、それとも全体、全国でまとめて抽選した結果が、そのパーセンテージなのか、どうなんでしょうか。

下間：後者の方でございます。結果として、こういう数字になったということで、おそらく申し込みのデータは、今、ちょっと取っておりませんけれども、申込者と大体よく似た割合になっているはずでございます。

C：何度もすみません。例えば、私は京都市民ではなく、府民なのですが、例えば地元でやるということで、京都府民に対しての優先枠を多くしていただけるということはないでしょうか。

下間：今のところ、それはやってないのですが、そういう話、ご意見もあります。ただ実際にそれをやるとなかなか難しい問題もあります。例えば、「京都市民です」「京都府民です」をどうやって証明していただくか。例えば、被災者枠があるのですが、一定の枠を無抽選で招待している枠が

あるんですが、被災証明書を提出して頂いています。じゃあ、市民や府民の方に、全部その証明書を提出頂くかとか、その確認をどうするかということになると、非常に経費的に高くついたり、実務的にも非常に難しいという議論はあり今のところは実施できていません。

司会：はい、ありがとうございます。次の方、どうぞ。

D(女性)：非常に貴重なお話を、先生方、ありがとうございます。私自身もマラソンであったり、そこにいろんな関わり方をしているので、最近のマラソンブームっていうのは、非常に嬉しい限りです。一方で、もしかしたらいろいろと課題であったり、問題っていうものもあるのかなという風に思っていました。先程、下間さんの方から、警備に関して発表が少しありましたが、もしかしたら警備体制や救急体制というのも入ってくるかもと思いました。以前はトップアスリートでなければ出られなかつたのが、基本的に意欲があって、抽選に当たればという前提になるんですけども、出られるようになったということになりますと、結構、練習をあまりしないで、いきなりレースに出られる方がいらっしゃって、途中でひっくり返ったり、脚がつったりで、救急の方にお世話になつたりということを結構多いという話を実は聞いています。いい面もありますが、制限時間が長くなつて多くの方が出られることになつたことによる弊害というのも考えていかなくてはならないのかなと思いましたが、そのあたり、どうお考えなのかお聞かせください。

あともう一点ですけども、女性の立場からということで、ワコールの岡さんのにお伺いしたいのですが、走る女性は美しいということで美ジョガーハイの話がありました。走っている女性が美しいということであれば、走らなくては…という意識とスタイルを良くしたいということで、ダイエットに走ってしまってということでの弊害等々を伺っています。ワコールさんはウェアの方なので、もしかしたらそういうことに関しては専門外

のことかもしませんけども、何か情報だとかありましたら、教えて頂きたいと思います。

司会:はい、では下間先生から先にお願いします。
下間:多くの市民ランナーの方が参加されることによる問題点ということですございますが、確かに気軽に出来る分、そういった心配があるというのはおっしゃるとおりかなあと思います。それに対してですね、まだまだこれからだと思いまけれども、いろんな講習会なども開かれるようになっていますね。私共も、講演したり一緒にさせていただいた中で、例えば京都府医師会さん、今回のマラソンに全面的にご協力頂います。独自に京都マラソンに向けてのシンポジウム、市民対象の公開講座を開かれております。私も参加させて頂きましたが、非常に有益でございまして、こういう点に気をつけて臨まないといけないということがよくわかる内容の取組が行われていますし、また京都市体育協会の方でも京都マラソンに向かって5回の連続講座を独自にされており、もう少し広がっていけばいいなと思っております。京都マラソンをきっかけに、そういった市民ランナー向けの準備講座がさらに広がっていくということを期待しております。ちょっとお答えになつていなかもしれませんが、すみません。

司会:はい、ありがとうございます。ワコールの岡先生、よろしくお願ひします。

岡:今、おっしゃって頂いたことなのですが、私どもも商品を通じて健康体というような活動をしています。先程説明したような関節の筋肉をサポートするウェアですが、例えばお店に買いに来てくださった場合には、販売員の知識として、そういうアドバイス、走り方のアドバイスをした

りとかですね、そういうトップの先生方と契約をさせて頂いています。いろんなメーカーさんも実施されていますが、私共もランニングクリニックや、初心者の方がまず歩くことから初めて、そして走って行きましょうみたいな、安全に快適にマラソンを楽しめるという働きかけはかなり積極的にやっており、それこそ、東京マラソンが始まった7年前から徐々にそういう活動を広げていっております。特に、私どもはサプリメントはないのですが、その関連のメーカーさんと一緒に協力して、横つながりでコミュニケーション活動という形式でサポートするような活動を行っております。あまりお答えになっているかどうか、わからないですけれども。

司会:ありがとうございます。皆さん、興味はつきないかと思いますが、このシンポジウムが2時半に閉会するということになっております。あと2分くらいで時刻になりますので、質問はこの辺で締め切らせていただきたいと思います。明日、いよいよ京都マラソンということで、このシンポジウムを開催させて頂きました。京都マラソンが昨年度、経済的に厳しかったということですが、今年はどうなるか、皆さんも大変興味があるかと思います。是非、明日、マラソンの成功を願っております。本日は、5名の先生方に大変興味あるお話を頂きました。皆さま、拍手をもって、お願いしたいと思います。(拍手)

それでは、これで、シンポジウムは閉会とさせて頂きます。

ありがとうございました。(拍手)

論文

京都マラソンにおけるボランティアの参加動機構造

松永敬子 *，二宮浩彰 **，長積 仁 ***

Study of volunteer motivation structure in Kyoto Marathon

Keiko MATSUNAGA*, Hiroaki NINOMIYA**, Jin NAGAZUMI***

Abstract

The purpose this study is to clarify the characteristics and volunteer motivation structure of personal registration volunteers at the 2012 Kyoto Marathon. An inventory survey was carried out using the distribution and collection survey method (delivery by hand). Out of the 697 personal registration volunteers of the marathon to whom the survey was administered, 631 returned the survey (a response rate of 90.5%). The results of this study showed that Community Kyoto citizens accounted for 54.5% of the personal registration volunteers at the 2012 marathon. It was also revealed that there was a lack of experienced sports volunteers; 68.1% of New Kyoto citizen volunteers confirmed what was able to find sports volunteer of new voluntary enforcement with holding of Kyoto marathon 2012. In addition, the Kyoto citizen volunteer participant has the component(Social Relationships, Ability Improvement, Community(kyoto)contribution, Sports(marathon), privilege) of five participation motive, and, as for the volunteer participation motive about the participation in Community (kyoto) contribution the thing that was higher than volunteer participant outside Kyoto became clear for the multiple comparison of the factor score. An understanding of volunteer participation from the area's inhabitants was necessitated from a human resource management point of view it was confirmed that the characteristics and motives of Kyoto citizens differed from those of outsiders and to plan the organization of sports volunteers.

* 龍谷大学経営学部スポーツサイエンスコース
Ryukoku University, Faculty of Business Administration
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
67 Tsukamoto, Fukakusa, Fushimi, Kyoto City, Kyoto, 612-8577 JAPAN

** 同志社大学スポーツ健康科学部
Doshisha University, Faculty of Health and Sports Science
〒610-0394 京都府京田辺市多々羅都谷1-3
1-3Miyakodani, Tataro, Kyotanabe, Kyoto, 610-0394 JAPAN

*** 立命館大学スポーツ健康科学部
Ritsumeikan University, College of Sport and Health Science
〒525-8577 滋賀県草津市野路東1丁目1-1
1-1-1 Noji-higashi, Kusatsu, Shiga, 525-8577 JAPAN

I. 緒 言

都市型大規模マラソンの1つである京都マラソン2012は、「東日本大震災復興支援」「京都・日本の活性化」を大会メインコンセプトとして2012年3月11日に開催された。大会趣旨は、1. 市民スポーツの振興に資する大会、2. 参加者、応援者、市民が一体となって楽しめる大会、3. 京都の魅力を国内外に発信する大会、4. 「DO YOU KYOTO?」を実践する環境に配慮した大会とし、地元の企業であるオムロン株式会社と株式会社ワコールが特別協賛となっている。同大会には14,094名が出走し、6時間の制限時間内に13,440名が完走を果たした。マラソン大会運営に欠かせないのが運営スタッフであり、京都マラソン2012においても、ほぼ参加ランナーと同数の約14,500人のスタッフが運営に携わり、そのうちボランティアは7,334名であった。この数字をみても分かるように、都市型大規模マラソンには多くのボランティアスタッフが必要不可欠であり、募集から研修そして当日の有益な活動はもちろん、その後の継続的なスポーツボランティア活動へと繋げていく、ヒューマンリソースマネジメント(人的資源管理)は非常に重要となる。

ボランティアとは、ラテン語の *Voluntas* (ボランタス：自発) が語源であることから分かるように、「自発性、無償性、利他性」の3つの特徴があるといわれている(田尾, 1999, 2004)。また、スポーツボランティアとは、「地域社会やスポーツ団体・クラブ、各種スポーツイベントなどにおいて、個人の自由意思に基づき、その技能や時間などを進んで提供し、社会に貢献する活動」であり、日常的なボランティアと非日常的なボランティアに分類される(スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議, 2000)。しかし、自発性や自由意志という言葉とは裏腹に、我が国のスポーツボランティア参加者はほとんどが組織や団体として依頼を受けて実施しており、自主的な実施はわずか12%のみという全国調査の報告もある(SSF 笹川スポーツ財団, 2004)。特に、非日常的なスポーツイベントでは常にボランティアを募集しているが、その多くは団体でボランティア参加をしているケースが多く、全員が自主的な実施であると

は言い難い。京都マラソン2012においても、7,334名のボランティアのうち、団体ボランティア参加者が全体の約90%を占めている。団体ボランティア参加の場合、15歳以上の10名の団体につき1名のリーダーを選出し、リーダーのみがボランティアリーダー説明会に参加することが義務付けられ、他の参加者への伝達講習を依頼している。そのため、リーダー以外はマラソン大会当日のみの参加となり、全国調査の報告と同様に必ずしも自主的なボランティア参加ではない者も存在する。一方、京都マラソン2012に個人で登録をしたボランティア参加者(以下、個人ボランティア参加者)である697名は、事前説明会に参加することが全員に義務付けられており、96.4%の参加者が自主的な実施であることが分かっている(松永, 2012)。京都市市民スポーツ振興計画(京都市, 2011)の大きな柱としても取り上げられているスポーツボランティアの確保と養成の実現に向けて、京都マラソンの個人ボランティア参加者のような自主的な実施者は非常に重要な人的資源となる。特に地域住民である京都市民ボランティア参加者の特性などについて分析を深めことは、京都市のスポーツボランティアの確保・養成などの組織化を図る上で大きな指針を与えることになる。そこで、本研究は、京都マラソン2012の個人ボランティア参加者に注目し、京都市のボランティア参加者の特性とボランティアの参加動機構造を明らかにすることを目的とした。

II. 先行研究の検討

ボランティアの動機を大きく2つに分類すると、利他的動機(altruistic incentives)、つまり、自分への見返りに関係なく他人のためにボランティア活動を行うということと、利己的動機(egoistic incentives)、自分に何らかのベネフィットがあるためにボランティア活動を行うということに分けることが可能であるといわれている。さらに、Chelladurai (1999) は、スポーツ&レクリエーションの視点から、利他的動機として規範的動機(Normative)、利己的動機として実益的動機(Utilitarian)と感情的動機(Affective)の3要素モデルを提唱した。その後、スポーツにおけるボランティア

の動機に関する研究は進み、松岡・松永(2002)は、FIFA ワールドカップ日本組織委員会 (JAWOC) のボランティア参加者では、「社会的義務」、「能力・経験活用」、「地域奉仕」の3つの利他的動機、「社交」、「学習」、「キャリア」、「自己改革」の4つの利己的動機、そして、「スポーツ」、「イベント」、「国際交流」の3つのイベント特有動機など10要素のボランティア参加動機で構成されていることを明らかにした。また、松永・松尾(2007)は、J クラブのホームゲーム運営補助などの地域スポーツボランティア参加者に注目し、「社会(地域)貢献」、「経験活用」の2つの利他的動機、「能力向上」、「交流」、「時間の有効活用」の3つの利己的動機、そして「スポーツ」、「特典」の2つのイベント特有動機の7要素のボランティア参加動機で構成されていることを報告している。しかし、これまでの研究の多くはマラソン大会以外のものが多いこと、また、日本国内の都市型大規模マラソンのボランティア参加者に着目した研究はいくつかみられるようになつたが、個人ボランティア参加者、つまり、自主的なボランティア参加者のみの参加動機に注目した研究は皆無である。

さらに、McLean, J. and Hamn, S. (2007) は、スポーツイベントのボランティアの動機とコミットメントに着目した研究を報告し、参加動機に関する他の複合的な要素の1つに地域に対するコミットメントを取り上げている。また、地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感の関連性を示した坂野ら(2004)の研究報告からも、地域住民の参加動機をより深く分析し、継続的かつ定期的なスポーツボランティアを確保・養成することは重要であることが確認できた。

III. 方法

3.1居住地による地域住民の設定

地域住民である京都市民の特性およびボランティア参加動機に焦点を当てるため、調査対象者の居住地に着目し、京都市、京都府(京都市外)、京都府外の3つのカテゴリーに分類した。分析にあたっては、必要に応じてLevene検定による等分散性の確認を行った。

3.2 ボランティア参加動機に関する測定項目

本研究では、ボランティア参加者の動機構造を把握するにあたり、Chelladurai (1999) がスポーツ&レクリエーションの視点から提唱した、利他的動機として規範的動機 (Normative)、利己的動機として実益的動機 (Utilitarian) と感情的動機 (Affective) の3要素モデルを基軸とし、松岡・松永 (2002) が示したメガスポーツイベントのスポーツボランティア参加動機測定項目と、松永・松尾 (2007) が示した地域スポーツイベントのスポーツボランティア参加動機測定項目を援用した。さらに、マラソン用の測定項目を設定するためには、京都マラソンの前年度となる2010年12月に開催された奈良マラソン2010のボランティア参加者に42項目のマラソンボランティア参加動機でプレテスト(留置法(手渡し)調査)を実施した。主因子法による因子分析の結果、マラソンボランティア参加動機構成要素は35項目に絞られ、Cronbach の α 係数を算出し信頼性の検証を行った結果、各因子は .80 以上の値を示し、比較的安定した因子構造であった。そこで、地域名を京都、イベント名を京都マラソンと置き換えて、京都マラソン2012の調査版として35項目のボランティア参加動機を測定項目として設定した。

3.3分析方法

本研究では、京都マラソン2012のボランティア参加者の居住地を独立変数とし、ボランティア活動への関与、ボランティアへの参加動機を従属変数として分析を行う。活動の関与については、クロス集計により分析しカイ二乗検定を行う。また、ボランティア参加動機については、主因子法によるバリマックス回転での因子分析により因子構造を明らかにし、Levene 検定にて等分散性の確認を行い、一元配置分散分析にて等分散性の検定、および多重比較検定を行う。

3.4 データ収集

本研究のデータの収集は、京都マラソン2012の開催直前にみやこめっせ(京都市勧業館)にて実施された、個人ボランティア説明会において、参加者全員に質問紙調査を実施した。調査期間は2012年3月9日(金)・10日(土)の2日間で、説明会参加者は697名で

あった。調査方法は留置法(手渡し)による質問紙調査を全員に実施し、有効標本数は631部。回収率は90.5%であった。

IV. 結果

4.1 対象者の特性

表1は調査対象者の特性を示したものである。対象者の居住地に着目した結果、京都市が54.5%、京都府(京都市外)が9.8%、京都府外が35.7%という割合となつた。主な特性は京都市では女性の個人ボランティア参加者が48.9%と約半数を占め、他地域のボランティア参加者よりも1割ほど高い傾向にあり、有意が認められた。全国調査(SSF 笹川スポーツ財団、2012)では、スポーツボランティア参加者および希望者は共に男性の方が倍近く多い傾向にあるため、京都市では女性ボランティアのさらなる確保と養成などのマネジメントが重要となる。また、年代では京都市と京都府外では、40歳代、50歳代が最も多く、京都府内(京都市外)では60歳代が多い傾向にあった。また、他の地域に比べて京都市は10歳代・20歳代の学生世代の割合が高く、京都市の職業では会社員・団体職員の33.3%

に次いで学生が18.6%であった。一般のボランティアでは学生、女性、高齢者がターゲットとされてきたが、京都マラソンの場合も同様の傾向がみられた。また、現在の定期的な運動・スポーツ実施率(週1日以上)は、京都府(京都市外)が82.8%と突出しており、次いで京都市65.4%、京都府外60.5%であった。具体的な参加動機に抽選に外れたからという方も含まれていることも影響しているものと考えられるが、運動・スポーツ実施率は全国平均よりも高い数値を示していた。地域住民の特性を示す上で大きな要素となる平均居住年数は、すべての地域において約20年以上で、京都に対する愛着心は京都府(京都市外)、京都市が京都府外よりも高い数値を示した。

4.2 京都マラソンボランティアの業務内容と過去の経験

表2は、京都マラソンボランティア参加者の業務内容を示したもので、コース(沿道)整理、ランナー救護、緊急交差点対応が多いことが分かる。担当業務については約半数が第1希望であるが、第3希望までの業務にすら就くことができなかつたボランティア参加者も27.2%にのぼるため、今後の継続性を考慮すると

表1 対象者の特性

			(%)				
性別	京都市 (n=321)	京都府(京都市外) (n=58)	京都府外 (n=210)	職業	京都市 (n=312)	京都府(京都市外) (n=57)	京都府外 (n=204)
男性	51.1	62.1	63.3	会社員・団体職員	33.3	47.4	56.2
女性	48.9	37.9	36.7	公務員	7.4	7.0	6.4
合計	100.0	100.0	100.0	自営業	6.1	3.5	2.0
年代	京都市 (n=320)	京都府(京都市外) (n=59)	京都府外 (n=208)	アルバイト・パートタイム	12.5	17.5	11.3
10歳代	5.6	3.4	1.4	学生	18.6	5.3	11.3
20歳代	19.4	10.2	16.8	主婦	9.6	7.0	2.0
30歳代	11.6	18.6	15.9	無職	10.3	12.3	8.8
40歳代	24.1	20.3	22.6	その他	2.2	0.0	2.0
50歳代	20.0	15.3	22.6	合計	100.0	100.0	100.0
60歳代	14.1	27.1	16.3	現在のスポーツ実施状況	京都市 (n=318)	京都府(京都市外) (n=58)	京都府外 (n=208)
70歳以上	5.3	5.1	4.3	週3回以上	26.4	27.6	29.3
合計	100.0	100.0	100.0	週1~2回	39.0	55.2	31.2
婚姻	京都市 (n=310)	京都府(京都市外) (n=58)	京都府外 (n=203)	月1~2回程度	11.6	8.6	17.3
未婚	37.7	25.9	43.8	3ヶ月に1~2回程度	5.3	3.4	7.2
既婚	62.3	74.1	56.2	年1回	3.5	0.0	6.3
合計	100.0	100.0	100.0	行わなかつた	14.2	5.2	8.7
子どもの有無	京都市 (n=189)	京都府(京都市外) (n=42)	京都府外 (n=110)	合計	100.0	100.0	100.0
半既婚者のみ				居住年数	京都市 (n=294)	京都府(京都市外) (n=58)	京都府外 (n=186)
いる	81.5	90.5	89.1	mean	23.10	19.22	23.16
いない	18.5	9.5	10.9	S.D.	18.79	14.00	16.45
合計	100.0	100.0	100.0	京都に対する愛着心	京都市 (n=320)	京都府(京都市外) (n=58)	京都府外 (n=211)
余暇時間	京都市 (n=268)	京都府(京都市外) (n=54)	京都府外 (n=169)	mean	5.82	5.95	5.36
平日:	mean	3.95	3.30	S.D.	1.20	0.98	1.32
	S.D.	2.63	2.52				
	(n=240)	(n=46)	(n=162)	多重比較	京都府>京都府外、京都府(京都市外)>京都府外		F(2, 586)=10.27, p<.001
休日:	mean	7.38	6.96				p<.001, p<.01
	S.D.	3.81	3.45				
							※京都に対する愛着心は、「1. 全く当てはまらない」から「7. 非常に当てはまる」までの7段階評定尺度で回答を求め、得られた回答を数値化し、その平均値の差の検定を行つた。

表2 当日の担当業務

	京都市 (n=316)	京都府(京都市外) (n=56)	京都府外 (n=211)	(%)
ランナーへの給水・給食	2.5	3.6	2.8	
コース(沿道)整理、ランナー救護、緊急交差点対応	75.7	83.9	75.9	
手荷物預かり・返却	0.3	0.0	0.0	
スタート・フィニッシュ会場でのランナーサービス	2.8	0.0	5.2	
スタート・フィニッシュ会場での誘導案内	18.7	12.5	16.1	
合計	100.0	100.0	100.0	

表3 スポーツボランティアの経験

	京都市 (n=310)	京都府(京都市外) (n=58)	京都府外 (n=209)	(%)
定期的な活動経験あり	12.3	20.7	17.2	
不定期だが経験あり	19.7	24.1	32.6	
経験なし	68.0	55.2	50.2	
合計	100.0	100.0	100.0	

$\chi^2 = 18.71, \text{d.f.}=4, p < .001$

改善が必要となる。さらに、表3に示した過去のスポーツボランティア経験については、京都市の68%の個人ボランティア参加者が経験なしと回答し、今回の京都マラソンボランティアがスポーツボランティア初体験であることが明らかになり、この数値は他地域よりも高く1%水準で有意が認められた。さらに、スポーツ以外のボランティア経験も京都市では58.1%が未経験であることが明らかになり、京都マラソンの開催が契機となり、京都市をはじめ他地域においても、自主的なボランティア実施を促進させていることが明らかとなった。

4.3 京都マラソン2012のボランティア参加動機の因子構造

表4は、京都マラソン2012のボランティア参加動機の因子構造を示したものである。先行研究から京都マラソン版として作成したマラソンボランティアの参加動機項目35項目のそれぞれに対して、「1.全くあてはまらない」から「7.非常によくあてはまる」までの7段階評定尺度を用いて回答を求めた。そして、その尺度が間隔尺度を構成するものと仮定して、それぞれの尺度の番号をそのまま得点化し、平均値の算出ならびに主因子法による因子分析を行った。尚、固有値は1.1以上の数値を基準とし5因子を採用した。5因子の累積寄与率は、60.64%で、バリマックス回転後の各項目の因子負荷量は.43を基準として項目の取捨選択を行った結果、5因子が抽出された。抽出された各因子の内的整合性を明らかにするためにCronbachの α 係数を算出し、信頼性の検証を行った結果、第1因子から第5因子まで.82以上の値を示し、比較的安定した因子構造であった為、第5因子までを採用することとした。各因子の構成項目を考慮し、多くの人の出会いや交流などを深めるという11項目で構成された第

1因子を「社交 ($\alpha = .94$)」と命名した。第2因子は、現在または将来の仕事に役立つことや自身の能力や知識を得るなどの成長を示した8項目で構成されたため、「能力向上 ($\alpha = .91$)」命名した。第3因子は、京都や地域への貢献について示した6項目で構成されたため「地域(京都)貢献 ($\alpha = .86$)」と命名した。第4因子は、マラソンやスポーツが好きだから関わりたいという意思を示した5項目で構成されたため、「マラソン(スポーツ) ($\alpha = .86$)」と命名した。第5因子は、マラソンランナーや有名選手に会えるなどのイベント特有の4項目で構成されたため、「特典 ($\alpha = .82$)」と命名した。抽出された5因子を概観すると、京都マラソン2012のボランティア参加動機の因子構造は、先行研究で得られたメガスポーツイベントのボランティア参加動機と定期的な地域スポーツイベントでのボランティア参加動機の因子が混在する構造となった。分類すると「地域(京都)貢献」のみの利他的動機、「社交」、「能力向上」の2つの要素からなる利己的動機、そして、「スポーツ(マラソン)」、「特典」の2つの要素からなるイベント特有動機の新たな複数動機の5つの構成要素を示したといえる。

4.4 京都マラソン2012のボランティア参加動機の因子得点比較

表5は、京都マラソン2012のボランティア参加動機から抽出された5つの因子得点を地域別で比較するため、一元配置分散分析にて等分散性の検定、および多重比較検定の結果を示したものである。Levene検定にて等分散性の確認がなされたことも含め、京都市では「地域(京都)のために貢献したい」という利他的動機が高く、京都府(京都市外)とともに京都府外のボランティア参加者を上回り、1%水準で有意差が認められた。一方、マラソン(スポーツ)因子につい

ては、京都市が低い傾向にはあたったが、Levene検定にて等分散性の確認されなかつたため参考データとする。多重比較の結果をみても分かるように、京都市と京都府(京都市外)のボランティア参加者の参加動機は地域(京都)に貢献するためという要因が大きく有意であった。つまり、居住地域によってボランティア参加動機は異なり、特に京都市では地域、つまり京都への貢献などを募集や研修の際に強調し、実際の配置についても配慮が必要となることが示唆された。さ

らに、京都府(京都市外)参加者は、地域(京都)貢献とマラソン(スポーツ)のイベントに関わるという点でメリットとして打ち出すことが重要となる。また、京都府外の参加者は、地域(京都)貢献以外の4つの因子得点がすべて高いため、交流や能力向上についてもアピールすることが必要である。以上のように地域別のセグメントに特徴をまとめ、各地域での募集及び配置、そして研修などに役立てるこことや京都マラソン終了後にもボランティアを継続する仕組みをマネジメ

表4 ボランティア参加動機の因子構造

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	Cronbach's α
【因子名: 社交因子、固有値: 15.8, 寄与率: 16.10%, 累積寄与率: 16.10%】						
多くの人と会いたい	0.72	0.24	0.15	0.15	0.12	
様々な人々と交流を深めたい	0.71	0.33	0.20	0.13	0.14	
同じボランティア精神を持った仲間と出会える	0.63	0.44	0.22	0.23	0.27	
様々な人々と協力して仕事ができる	0.60	0.39	0.27	0.19	0.30	
同じ志を持った人たちと目的を達成して喜びを感じたい	0.58	0.27	0.19	0.32	0.32	
人の為に役立ちたい	0.57	0.10	0.30	0.26	0.05	.94
ボランティアを通して何か新しい発見ができる	0.55	0.41	0.23	0.20	0.36	
視野を広げることができる	0.53	0.40	0.38	0.25	0.06	
ボランティアに楽しみを見出したい	0.51	0.36	0.23	0.14	0.38	
生涯学習の機会になる	0.46	0.38	0.35	0.13	0.06	
自分の生活を充実させることができる	0.46	0.36	0.32	0.09	0.37	
【因子名: 能力向上因子、固有値: 2.6, 寄与率: 15.64%, 累積寄与率: 31.74%】						
現在の仕事や将来の就職の為に役立つ能力が得られる	0.15	0.79	0.09	0.08	0.08	
組織やイベントの運営に関わることが現在や将来の仕事に役立つ	0.22	0.77	0.17	0.09	0.25	
様々な分野・職種の人々と接することで、現在や将来の仕事に役立つ	0.31	0.73	0.20	0.10	0.23	
自分を変えるきっかけになる	0.28	0.62	0.33	0.03	0.17	.91
自分の能力や知識を活かしたい	0.41	0.55	0.08	0.27	0.18	
新しい知識や能力を得ることができる	0.39	0.55	0.29	0.10	0.33	
自分が成長し向上できる	0.44	0.55	0.37	0.08	0.19	
過去の仕事やボランティアでの経験を活かしたい	0.32	0.43	0.04	0.17	0.10	
【因子名: 地域(京都)貢献因子、固有値: 1.6, 寄与率: 10.78%, 累積寄与率: 42.54%】						
京都で行われる大きなイベントの成功に貢献したい	0.24	0.14	0.70	0.29	0.19	
京都のアピールをしたい	0.25	0.31	0.60	0.10	0.15	
「京都マラソン2012」に興味・関心がある	0.19	0.05	0.57	0.39	0.30	.86
地域社会へ貢献したい	0.48	0.19	0.55	0.22	0.14	
府外から来る人々をサポートしたい	0.35	0.22	0.47	0.22	0.16	
一生に一度の記念になる	0.12	0.36	0.44	0.03	0.29	
【因子名: マラソン(スポーツ)因子、固有値: 1.4, 寄与率: 10.37%, 累積寄与率: 52.89%】						
マラソンが好きだから	0.00	-0.04	0.06	0.78	0.13	
マラソンに関わる活動(イベント)がしたい	0.16	0.21	0.17	0.75	0.12	
スポーツに関わる活動(イベント)がしたい	0.26	0.28	0.22	0.68	-0.01	.86
スポーツが好きだから	0.22	0.06	0.12	0.66	0.05	
マラソンランナーのサポートをしたい	0.26	0.08	0.23	0.60	0.31	
【特典因子、固有値: 1.1, 寄与率: 7.76%, 累積寄与率: 60.64%】						
マラソンランナーの姿を近くで見ることができるものかもしれない	0.19	0.22	0.20	0.21	0.64	
有名な選手などに会えるかもしれない	0.15	0.37	0.19	0.10	0.55	.82
大きなイベントに関わりたい	0.30	0.31	0.36	0.21	0.48	
人気のあるマラソンのイベントの雰囲気を体感したい	0.16	0.13	0.47	0.25	0.47	

KMO=.95, Bartlett test=p<.001

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiserの正規化を伴うハーマックス法 8回の反復で回転が収束。

「人からの親切をボランティアとい形で恩返しあり (.55)」が因子への収束へ至らなかった為、除外した。

表5 ボランティア参加動機の因子得点比較

	京都市 (n=288)		京都府(京都市外) (n=51)		京都府外 (n=190)		F値	d.f.
	mean	S.D.	mean	S.D.	mean	S.D.		
第1因子(社交因子)	-0.04	0.90	-0.06	1.00	0.07	0.88	0.94	2 n.s.
第2因子(能力向上因子)	-0.08	0.91	-0.01	0.88	0.12	0.93	2.59	2 n.s.
第3因子(地域(京都)貢献因子)	0.13	0.87	0.18	0.86	-0.25	0.82	12.41	2 p<.001
第4因子(マラソン(スポーツ)因子)	-0.15	0.96	0.11	0.86	0.20	0.83	9.24	2 p<.001
第5因子(特典因子)	-0.08	0.89	0.07	0.69	0.10	0.78	2.90	2 n.s.
【多重比較】	第3因子: 京都市>京都府外, 京都府(京都市外)>京都府外						p<.001, p<.05	
	第4因子: 京都市<京都府外						p<.001	

ントすることが争論となる。

5.まとめ

本研究は、京都マラソン2012の個人ボランティア参加者に注目し、自主的なボランティア実施者の特性とボランティア参加の動機構造を明らかにすることが目的であった。特に、居住地別のボランティア参加者の特性およびボランティア参加の動機構造の解明のための実証研究を行ったことにより、以下の知見を得ることができた。

研究成果の1つ目は、京都マラソン個人ボランティア参加者は、スポーツボランティアのみならずスポーツ以外のボランティア経験も少ないことが明らかになり、京都マラソンを開催したことで、新たな自主的実施のスポーツボランティア参加者を発掘できたことが確認できた。特に、京都市においてはスポーツボランティア初体験者が最も多く、新たに確保したボランティアをどのように養成し、継続へと導くのかということが大きな課題となる。さらに京都市では、女性と学生ボランティアの参加者が多いこと、京都府(京都市外)では中高年が多いことが特徴で、今後の組織化に向けて貴重なカテゴリーとなる。

2つ目のボランティアの参加動機構造解明については、「地域(京都)貢献」の要素からなる利他的動機、「社交」、「能力向上」の2つの要素からなる利己的動機、そして、「スポーツ(マラソン)」、「特典」の2つの要素からなるイベント特有動機の新たな複数動機の5つの構成要素が示された。特に、京都市と京都府(京都市外)ボランティア参加者では、地域や京都に貢献したいという強参加動機が浮き彫りとなり、京都

府外からのボランティア参加者とはボランティア参加動機構造が異なることが確認された。

これまでの研究では、自主的実施ではないボランティア参加者も含めたものが多く、本来の「自発性、無償性、利他性」を持ち備えたスポーツボランティアの特徴を示した報告は少なかったが、京都マラソン個人ボランティア参加者はまさにこの3つの要素で構成されていることを検証することができたことも大きな成果である。本研究から得られた知見はスポーツボランティアを地域住民から確保し、養成していくうえで学術的な貢献をすることになろう。

今後は、地域住民におけるボランティア活動への参加動機が高いほど、満足感が高くなるという坂野ら(2004)らの研究報告からも、地域住民の参加動機をより深く分析し、スポーツボランティア活動の継続およびコミットメントについての研究に繋げる必要がある。特に、モチベーションから活動継続を促す誘因は、業務内容、集団性、エンパワーメントの3つがキーワードとなるため(田尾, 川野, 2004), その点にも着眼していきたい。

さらに、スポーツイベントなどの開催が地域活性化に果たす役割には、①人々の生活の質を高め、健康的でアクティブな生活を実現可能にするスポーツやレクリエーションのための施設や空間を社会資本としてストックする「社会資本を蓄積する機能」、②イベントへの参加やツーリストの活発なスポーツ施設使用料や飲食・宿泊などの関連支出を促すなどの消費活動を誘導し、地域経済を活性化する「消費を誘導する機能」、③スポーツへの参加や観戦によって、地域に連帯感が増し、共通の話題が人々のコミュニケーション

を深め、社会的交流や地域への帰属意識が高まる「地域の連帯性を向上する機能」、④スポーツが生み出した感動や興奮を体感したり、メディアが伝えたりすることによってイベント開催地域の都市のイメージが明るく友好的なものになる「都市のイメージを向上する機能」の4つがあると指摘されているが(原田, 2002), 本研究の結果についても地域貢献がキーワードとなり、特に③「地域の連帯性を向上する機能」を中心とする4つのすべての役割にもボランティアのヒューマンリソースマネジメントは大きく関係するものと考えられる。

そして、本研究は、京都市民の定期的かつ継続的なボランティアへの参加促進や、その養成システムなどを構築するなどの組織化も終局的な目的の1つであり、京都市スポーツ振興計画を具現化するための礎にもなるものと考えられる。

謝辞

本研究は、京都マラソン実行委員事務局と多くの京都マラソン個人ボランティアのみなさまに多大なご協力をいただいた。ここに記して感謝意を表する。

参考文献

- 1) Chelladurai , P. (1999) Human resource management in sport and recreation. Human Kinetics.
- 2) 原田宗彦 (2002) スポーツイベントの経済学, 平凡社新書, pp.52-56.
- 3) 京都市 (2011) スポーツの絆が生きるまち推進プラン 京都市市民スポーツ振興計画.
- 4) 松永敬子 (2012) 「京都マラソン2012」におけるボランティア参加者の動機に関する研究：自発的参加と非自発的参加との比較. 龍谷大学経営学論集, 52(2/3): 55-63.
- 5) 松永敬子・松岡宏高 (2002) 2002FIFAワールドカップにおけるボランティアの動機の比較分析 II. スポーツ産業学研究第11回学会大会号.
- 6) 松永敬子・松尾尚美 (2007) 地域のスポーツボランティア参加者の特性と動機に関する研究, Leisure&Recreation『自由時間研究』, 30, pp.46-51.
- 7) 松岡宏高・松永敬子 (2002) 2002FIFAワールドカップにおけるボランティアの動機の比較分析 I, スポーツ産業学研究第11回学会大会号.
- 8) McLean, J. and Hamn, S. (2007) Motivation, Commitment, and Intentions of Volunteers at a Large Canadian Sporting Event, Leisure, 31(2), pp.523-556.
- 9) 坂野純子・矢嶋裕樹・中嶋和夫 (2004) 地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感の関連性 東京保健科学学会誌, 7(1), 17-24.
- 10) スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議 (2000) スポーツボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書.
- 11) SSF 笹川スポーツ財団 (2004) スポーツ・ボランティア・データブック, 2004, pp.8.
- 12) SSF 笹川スポーツ財団 (2012) スポーツライフ・データ2012－スポーツライフに関する調査報告－, pp.20, 94-98.
- 13) 田尾雅夫 (1999) ボランタリー組織の経営管理, 有斐閣.
- 14) 田尾雅夫・川野祐二編著 (2004) ボランティア・NPOの組織論, 学陽書房, pp.15-20.

論 文

京都マラソン開催の社会的インパクトに対する 市民の認識と大会開催意図との関係

長積 仁 *, 松永敬子 **, 二宮浩彰 ***

The Relationship between the residents' recognition to the social impact and the hosting intention toward Kyoto Marathon.

Jin NAGAZUMI*, Keiko MATSUNAGA**, Hiroaki NINOMIYA***

Abstract

The purpose of this study is to clarify about the influences which residents' recognition to the social impact toward Kyoto Marathon brings to intention of that event in the next year. Moreover, the mediation effect of the sport acceptance capability set up as parameter which specifies the both relation between residents' recognition and intention of Kyoto Marathon in the next year. It implemented a mail-back survey to the citizen of Kyoto who were 3,000 men and women aged 20 and over. They were chosen by the multistep extraction random sampling method. Then 658 effective samples acquired and the rate of collections was 21.9%.

The main results were as the following: (1) In the social impact which holding of the Kyoto Marathon brought to the area, it was extracted three factors; "the elevation of the Kyoto mind", "the vigor of the area", and an "environmental damage." (2) In the sport acceptance capability, three factors; "understanding of value", "involvement to value", and "indifference" were found. (3) It became clear that intention toward Kyoto Marathon in the next year was accounted 40% or more with three factors of the social impact and the mediation effect of the sport acceptance capability.

Based on the above results, the point of argument in this study was focused on evolution of the city marketing strategy and the strategic sport business accompanying holding of the sporting event.

* 立命館大学スポーツ健康科学部
Ritsumeikan University, College of Sport and Health Science
〒525-8577 滋賀県草津市野路東1丁目1-1
1-1-1 Noji-higashi, Kusatsu, Shiga, 525-8577 JAPAN

** 龍谷大学経営学部
Ryukoku University, Faculty of Business Administration
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
67 Tsukamoto, Fukakusa, Fushimi, Kyoto City, Kyoto, 612-8577 JAPAN

*** 同志社大学スポーツ健康科学部
Doshisha University, Faculty of Health and Sports Science
〒610-0394 京都府京田辺市多々羅都谷1-3
1-3Miyakodani, Tatara, Kyotanabe, Kyoto, 610-0394 JAPAN

I. 背景

関西地区における大規模な都市型市民マラソンのムーブメントは、2010年に開催された奈良マラソンを皮切りに、その後、大阪、神戸、京都へと広がった。そして、東北での大惨事から1年後の2012年3月11日に、市民の健康づくりとスポーツ振興とともに、「東日本大震災復興支援」「京都・日本の活性化」をメインコンセプトに掲げた「京都マラソン2012」が開催された。京都マラソンは、駅伝発祥の地である京都の都大路を舞台に、嵯峨野・嵐山をはじめ、龍安寺・金閣寺などといった7つの世界文化遺産のある観光名所を巡り、送り火の五山全てを眺望しながら、平安神宮にてゴールを迎えるコースが設定されるなど、国際文化観光都市・京都の魅力が満喫できるフルマラソンのイベントといえる。また東日本を襲った惨事を全世界の人々が忘れないために、大会セレモニーでの追悼や義援金の寄付、また市内のイベント・展示会場で震災直後の写真が掲載されたり、震災地の復興をPRする名産品の紹介や販売がされたりするなど、大会に参加するランナーのみならず、イベントに携わる全ての人々の想いが東日本の人々へ届くようにと、様々な工夫が凝らされた。

現在も開催されている国内のフルマラソンの大会の中で、日本最古の大会は、戦後間もない1946年に第1回大会が開催され、68回の歴史を積み重ねる「びわ湖毎日マラソン」だと考えられる。また日本陸上競技連盟公認のフルマラソンコースで、出場参加人数が1万人以上の大会規模で、開催回数が20回以上を重ねているのは、全国で10大会存在する(岩谷ら, 2012)。中でも「勝田全国マラソン」は、61回の大会開催回数を重ね、前述の条件を満たす市民マラソンでは最古と考えられる。そして、約35,000人という国内最多数の出場人数を誇る「東京マラソン」が2007年に開催されたことを契機に、大阪、神戸、京都といった政令指定都市や大会規模は小さいものの、地方都市でも日本陸上競技連盟公認のフルマラソンの大会が急増し始めた。

市民マラソンのような都市型スポーツイベントの開催が地域社会にもたらす社会経済的な影響については、欧米の数多くの自治体で既に認識されており、ス

ポーツ事業は、もはや地域振興や都市マーケティングの一環として戦略的に展開されている(原田, 2009; 工藤, 2009; 長積, 2009)。2011年度に開催された都市型マラソンの経済波及効果は、出場者数が約29,000人の大阪マラソンでは約133億円(関西大学による試算)、出場者数が約23,000人の神戸マラソンは約59億円(兵庫県立大学による試算)、また約14,000人が都大路を駆け抜けた京都マラソンは、約40億8,000万円(大会事務局試算)と算出された。また2013年3月14日付けの日本経済新聞では、「東京マラソン2013」の経済効果は約271億円(関西大学試算)と公表され、丸山(2012)は、経済効果は単純比較することはできず、事業費全体を占める自治体の負担額や経済波及効果以外の多面的な効果検証が必要と述べてはいるものの、実際には地域社会にもたらすインパクトの大きさは、この経済効果によって語られることが多い。

我が国において、市民マラソンにかかる現象を社会科学的にアプローチした研究は、ランニングブームが訪れた1980年代に端を発する。その先駆的な研究として、山下ら(1984a)は、イノベーションの普及過程を援用し、健康マラソンが普及するメカニズムを、非実施者を巻き込んでいく「影響者」の視点から論じ、健康マラソンの参加者(採用者)の特性を明らかにした。また山下ら(1984b)は、同様の健康マラソン参加者における継続的な参加意図を規定する要因を明らかにするため、「固定層」と「浮遊層」の弁別を試み、継続意図がより強い固定層は、浮遊層に比べて、人の競争を好み、日常的に仲間と一緒にランニングをしたり、マラソンやランニングに関する会話をしたりするという特徴を明らかにした。藤原(1987)もランニングブームを背景に、管理された現代社会において、多くの人々が何らかの拘束から解放され、主体性を取り戻すために、「走ること」がどのような意味を持つのかということを、マラソン参加者に対するアンケート調査から社会学的に論じている。以降、大衆マラソンの参加者の特性を様々な観点から明らかにした一連の研究(松沢, 1994; 松澤, 1995a; 松澤, 1995b; 松澤, 1996; 松澤・多田, 1997)などが散見されるが、マラソン参加者の特性を、スポーツ行動という現象からだけでなく、「ツーリズム」という視点から滞在日数や

支出額、支出内容について論じた野川(1992)の研究からスポーツ独自の現象を捉えるだけでなく、観光やレジャー行動との兼ね合いから市民マラソンが論じられ始めた。近年では、参加動機に関する研究がみられ、ある行動を実施することに傾く参加の誘因と特定の行き先を決定する際の動機につながる魅力誘因との2つから捉えるPush-Pull要因からランナーの参加動機を捉える研究(山口ら, 2011)や、アウトバンド・ツーリストとして、ホノルルマラソン参加者の動機と制約要因を明らかにした研究(西尾ら, 2013)、またランナーではなく、マラソン大会のボランティアに着目し、その参加動機を明らかにした研究(松永, 2012)がみられる。ただ、市民マラソンを対象にした社会科学的なアプローチによる研究は、開催地域にもたらされる経済波及効果に着目したもの(中島ら, 2010; 大窄ら, 2012)や、若干、ボランティアの参加動機に着目する研究はみられるものの、参加者であるランナーに視点を置いた研究がほとんどである。大会の開催地域で生活し、プラス面にもマイナス面にも様々な影響を受ける地域住民の視点から市民マラソンについて論じた研究は、「指宿菜の花マラソン」をケースに取り上げ、地域活性化の効果を論じた北村ら(1997)の研究以外、皆無に等しい。

そこで本研究は、上記のような先行研究の状況を鑑み、「京都マラソン2012」が開催地域にもたらした社会的インパクトを市民の目線から捉え、その認識が翌年の京都マラソンの開催意図にどのような影響をもたらすのかを明らかにすることを目的とする。なぜならば、大会の開催によって、観光名所は潤い、飲食店を始め、宿泊施設や名産品の販売にも好影響をもたらすと考えられるものの、大会開催前後には、1万人以上の大会出場者のみならず、その同伴者が京都市外や京都府外から集中的に、また多数訪れるため、世界有数の観光地とはいえ、市民の生活に様々な影響が及ぶことが予想されるからである。さらに駅伝発祥の地であり、毎年、全国高等学校駅伝競走大会や全国都道府県対抗女子駅伝競走大会が開催されるものの、駅伝のコースとは異なり、1万人を超える市民ランナーが千年の時を刻む京都の観光名所を駆け巡るため、沿道で声援を送る多数の人々や広範囲で長時間に渡る交通規

制によって、市内各所では交通渋滞が生じ、まちは混雑・混乱することであろう。特に、コース付近の在住者は、少なからず、日常生活にも様々な影響が生じることだろう。したがって、ランナー、大会運営関係者、ボランティア、そして市民が一体となった都市型マラソン開催の成否は、市民目線からの評価が不可欠であると考えられる。加えて、国際文化観光都市である京都に在住する人々が、文化としてスポーツをどのように捉えているのか、つまり、スポーツの文化的価値に対する享受能力が大会開催に対する賛否に影響をもたらすと考え、社会的インパクトに対する認識と翌年の大会開催意図との両者の関係を規定する要因として、市民のスポーツ享受能力をパラメータに設定し、その影響についても検討を試みる。

II. 方法

1. 分析の視角と概念の操作化

本研究では、都市型マラソンの開催にともなう社会的インパクトに対する地域住民の認識が、翌年のマラソン大会の開催意図にもたらす影響を明らかにすることを目的としている。またその両者の関係を規定するパラメータとして、市民のスポーツ享受能力を設定し、その媒介効果を検証する。まず、都市マラソンの開催にともなう社会的インパクトに関して、Hall(1992)は、「経済的」「観光・商業的」「物理的・環境的」「社会的・文化的」「心理的」「政治的・行政的」といった6つの要因を設定し、プラス面とマイナス面からスポーツイベントが開催都市に及ぼす影響を提示している。また財団法人地域活性化センター(1999)は、過去のスポーツイベントのケーススタディから継続型国際スポーツイベント開催によって開催地域にもたらされる成果を、「地域アイデンティティの確立」「地域の知名度」「地域経済」「情報」「文化・生活」「住民参加」「地域ホスピタリティの向上」「国際化」「環境保全」「地域スポーツ」といった要因によってまとめている。そこで、比較的詳細な効果を提示している財団法人地域活性化センターの要因を考慮しながら、Hallの6つの要因の内、現実的に開催地における住民には問い合わせらる「政治的・行政的要因」

を除き、5要因それぞれ3項目ずつの合計15項目を、独立変数となるマラソン大会開催にともなう社会的インパクトのインディケーターとして設定した。

次いで、媒介変数となる「スポーツ享受能力」については、「固有価値の継承と生産、享受能力の発達」とした池上(1993)の主張に基づき、「固有価値の理解と継承」として捉えることにした。その際、「能力」については、獲得された知識や技術の有無や程度といった狭義の解釈ではなく、物事をなしえる力として広義に解釈することにした。そして、「固有価値の理解と継承」に基づき、固有文化の享受能力を尺度化している長積ら(2008)の研究を援用し、文化としてのスポーツの価値と魅力に対する理解・探究心と、それを継承しようとする信念と意図から捉え、合計10項目のインディケーターを設定した。

最後に、従属変数となる「翌年の京都マラソンの開催意図」については、その意図を率直に回答者から問うようするため、「来年も京都マラソンを開催してほしい」という単一項目のインディケーターを設定した。独立変数、媒介変数、従属変数のいずれのインディケーターも、「1. 全くそう思わない」から「5. 全くそう思う」までのリッカートタイプの5段階評定尺度にて回答を求めた。

2. データの収集

本研究の目的を達成するために必要なデータ収集は、郵送法による質問紙調査によって得た。調査対象者は、京都市総合企画局情報推進課室が約142万人の京都市民の内、約119万人に及ぶ20歳以上の男女を多段階無作為抽出法によって3,000名を抽出したものを対象者として設定した。調査期間は、「京都マラソン2012」の開催直後にあたる2012年3月23日から2012年4月16日までの間に実施した。その結果、有効標本数は、658名、回収率は21.9%であった。

III. 結果

1. 調査回答者の特性

表1は、調査回答者の特性を示した結果である。男女の比率は、男性よりも女性の方が若干高い割合を示

し、平均年齢が55.93歳($SD \pm 16.91$)と、年齢構成の内、60歳以上の回答者が全体の約半数を占めていることがわかる。年齢に関しては、本研究の回答者の特性として、分析とその結果の解釈をする際には、考慮する必要があると推察される。年齢構成の結果に比例し、配偶者がいると回答した人が7割以上、また職業

表1 調査回答者の特性

		(n=651)
性別:	男性	43.8
	女性	56.2
	計	100.0 %
年齢構成:	20~29 歳	6.8
	30~39 歳	15.0
	40~49 歳	13.4
	50~59 歳	15.6
	60~69 歳	24.5
	70 歳以上	24.7
	計	100.0 %
平均年齢:	55.93 歳(± 16.91)	
	最小値:20 歳 最大値:96 歳	
配偶者:	いない	28.8
	いる	71.2
	計	100.0 %
職業:	フルタイム勤務	28.1
	パート・アルバイト勤務	12.7
	自営業	12.0
	主婦・主夫	19.5
	学生	3.0
	無職	22.3
	その他	2.3
	計	100.0 %
居住地域:	北区	8.6
	上京区	6.5
	左京区	14.2
	中京区	8.2
	東山区	2.5
	山科区	8.2
	南区	6.5
	下京区	6.0
	右京区	13.2
	伏見区	17.1
	西京区	9.2
	計	100.0 %
居住年数:	1~9年	11.2
	10~19年	10.3
	20~29年	11.5
	30~39年	15.9
	40~49年	15.7
	50年以上	35.5
	計	100.0 %
平均年数:	39.43 年(± 22.09)	
	最小値:1年 最大値:90 年	

は、フルタイム勤務と回答した人が28.1%，また無職と回答した人が22.3%を示した。居住地域は、伏見区、左京区、右京区の比率が他の区域の値よりも若干高く、コースの一部やゴール地点となる左京区からの回答者は全体の2.5%に過ぎなかった。居住年数は、年齢構成や平均年齢の結果に比例し、50年以上の人が全体の35.5%と顕著に高く、平均居住年数は、39.43年($SD \pm 22.09$)であった。

2. 京都マラソン開催が地域にもたらした影響

表2は、京都マラソンの開催が地域にもたらした影響についての因子分析の結果である。先行研究に基づき、5要因それぞれに対して、3項目ずつの合計15項目を設定し、各項目に対して、「1. 全くそう思わない」から「5. 全くそう思う」までのリーカートタイプの5段階評定尺度にて回答を求めた。全項目に関して、5段階評定尺度によって得られた回答が間隔尺度を構成すると仮定して、記述統計量を検討した。その結果、天井効果及び床効果が見られなかったこと、また回答者となる地域住民の負担を考慮し、5要因3項目の15項目によってリサーチを実施した状況を加味し、先行研究に基づく確認的因子分析ではなく、そのまま探索的因子分析を行い、インディケーターの収束性を検討

した。

因子分析は、主因子法を用いて、固有値1.0以上の数値を基準として、因子の抽出を図った。その結果、第1因子は、「京都市の憲章である『歩くまち・京都』を実現しようとする意識が高まった」「京都への誇りや愛着心が湧いた」「来訪者に対するおもてなしや手助けをしようとする気持ちが高まった」といった京都マラソンの開催が“京都らしさ”を示す気質を高めているという意識が示された10項目から構成されたため、「京都マインドの高揚($\alpha = .917$)」と命名した。第2因子は、「来訪者によって、ホテルや旅館などの宿泊施設がうるおった」「来訪者によって、商店街や飲食店などがうるおった」といったまちのうるおいを意識した3項目から構成されたため、「まちのうるおい($\alpha = .804$)」と命名した。第3因子は、「これまでの京都の雰囲気や景観が損なわれた」「ゴミの散乱やマナー違反によって、住民に迷惑がかかった」といった京都マラソンの開催が京都市内にもたらしたマイナスの影響に対する意識を示す2項目から構成されたため、「環境的ダメージ($\alpha = .461$)」と命名した。ただ、内的一貫性は、やや低い結果が示された。結果的に、抽出された3因子の累積寄与率は、55.441%であった。

表2 京都マラソン開催が地域にもたらした社会的インパクトに関する因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
第1因子： 京都マインドの高揚($\alpha = .917$)				
京都市の憲章である「歩くまち・京都」を実現しようとする意識が高まった	0.843	0.119	0.034	0.725
京都への誇りや愛着心が湧いた	0.814	0.176	-0.060	0.698
来訪者に対するおもてなしや手助けをしようとする気持ちが高まった	0.763	0.179	-0.059	0.618
自分が住むまちや地域の知名度やイメージがアップした	0.756	0.237	0.100	0.627
応援やボランティアでイベントを盛り上げようという意識が高まった	0.739	0.209	-0.103	0.600
京都市は、駅伝やマラソンが開催されるまちであるというイメージが定着した	0.657	0.232	-0.180	0.518
市民のスポーツや健康づくりに対する関心が高まった	0.635	0.299	-0.130	0.509
京都の観光資源や魅力をアピールすることができた	0.574	0.450	-0.137	0.550
駅伝やマラソン開催時には、自家用車を控えようという意識が高まった	0.510	0.272	-0.197	0.374
道路や標識、町並みが整備され、きれいになった	0.488	0.324	0.078	0.349
第2因子： まちのうるおい($\alpha = .804$)				
来訪者によって、ホテルや旅館などの宿泊施設がうるおった	0.245	0.841	-0.026	0.767
来訪者によって、商店街や飲食店などがうるおった	0.231	0.836	-0.067	0.756
様々な国や地域の人々との交流が促進された	0.444	0.478	0.009	0.426
第3因子： 環境的ダメージ($\alpha = .461$)				
これまでの京都の雰囲気や景観が損なわれた	-0.039	-0.053	0.801	0.616
ゴミの散乱やマナー違反によって、住民に迷惑がかかった	-0.050	-0.005	0.385	0.151
寄与率	33.661	15.596	6.184	55.441

3. スポーツ享受能力

表3は、スポーツ享受能力に関する因子分析の結果である。設定した10項目それぞれについて、「1.全くそう思わない」から「5.全くそう思う」までのリーカートタイプの5段階評定尺度にて回答を求め、5段階評定尺度によって得られた回答が間隔尺度を構成すると仮定して、記述統計量を検討した。その結果、天井効果及び床効果が見られなかつたため、探索的因子分析を行い、インディケーターの収束性を検討した。京都マラソン開催が地域にもたらした影響と同様、主因子法を用いて、固有値1.0以上の数値を基準として、因子の抽出を図った。

その結果、第1因子は、「スポーツは、人々の生活に潤いを与えてくれるものだ」「スポーツは、人々の心身の健康を保持・増進してくれる」「スポーツは、様々な人々との交流を促進してくれる」といったス

ポーツがもたらす効用に対する肯定的な態度を示す5項目から構成されたため、「価値の理解 ($\alpha = .769$)」と命名した。第2因子は、何らかの形で、スポーツという文化を守り、伝えていくことにかかわりたい」「する・みる・支える・つくるといった様々な角度からスポーツの魅力や価値にふれたい」といったスポーツに対する積極的な関与を臨む態度を示す3項目から構成されるため、「価値への関与 ($\alpha = .786$)」と命名した。そして第3因子は、「スポーツのことは、ある特定の熱心な人たちに任せておけばいい」「そもそもスポーツは、それを好きな人が勝手にすればいいものだ」といったスポーツへの無関心さや否定的な態度が示される2項目から構成されたので、「無関心 ($\alpha = .631$)」と命名した。抽出された3因子の累積寄与率は、53.566%であった。

表3 スポーツに享受能力に関する因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
第1因子：価値の理解 ($\alpha = .769$)				
スポーツは、人々の生活にうるおいを与えてくれるものだ	0.810	0.163	-0.169	0.711
スポーツは、人々の心身の健康を保持・増進してくれる	0.791	0.157	-0.152	0.673
スポーツは、様々な人々との交流を促進してくれる	0.559	0.373	-0.116	0.465
勝利へのこだわりよりも、まずは「スポーツ大好き」という気持ちを育むことが重要だ	0.414	0.266	-0.048	0.245
スポーツの楽しさや魅力を人々に説明することができる	0.377	0.333	-0.236	0.309
第2因子：価値への関与 ($\alpha = .786$)				
何らかの形で、スポーツという文化を守り、伝えていくことにかかわりたい	0.150	0.762	-0.228	0.654
スポーツは、そのまちの文化や印象を形づくるような存在だ	0.301	0.671	-0.068	0.546
する・みる・支える・つくるといった様々な角度からスポーツの魅力や価値にふれたい	0.285	0.612	-0.212	0.501
第3因子：無関心 ($\alpha = .631$)				
スポーツのことは、ある特定の熱心な人たちに任せておけばいい	-0.159	-0.111	0.936	0.913
そもそもスポーツは、それを好きな人が勝手にすればいいものだ	-0.147	-0.317	0.466	0.339
寄与率	21.489	18.901	13.175	53.566

4. 性別と年齢構成別による因子得点の比較

表4と表5は、京都マラソンの開催が地域にもたらした社会的インパクトとスポーツ享受能力のそれぞれにおいて、抽出された因子得点を性別及び年齢構成別に比較した結果である。本研究の分析に用いた回答者の特性に関して、特に平均年齢が55.93歳で60歳以上の占める割合が全体の約半数の値を示したため、年齢構成別に加え、性別において因子得点を提示し、その傾向を示した。その結果、性別においては、京都マラソンの開催が地域にもたらした社会的インパクトの

「まちのうるおい」に関して、女性の平均値よりも男性の平均値が有意に高く、スポーツ享受能力の「価値の理解」に関して、男性の平均値よりも女性の平均値が有意に高いことが明らかになった。

年齢構成別においては、京都マラソンの開催が地域にもたらした社会的インパクトの「まちのうるおい」に関して、年齢構成間の平均値に有意なばらつきが見られ、スポーツ享受能力の「価値の理解」と「無関心」とにおいて、年齢構成間の平均値のばらつきが有意であった。特にスポーツ享受能力に関して、スポ

表4 性別による因子得点の比較

	男性 (n=285)	女性 (n=366)	t値
■京都マラソン開催が地域にもたらした社会的インパクト			
京都マインドの高揚	0.011 ±.809	0.009 ±.892	0.030
まちのうるおい	0.077 ±.856	-0.063 ±.822	2.109 *
環境的ダメージ	-0.062 ±.900	0.048 ±.831	-1.612
■スポーツ享受能力			
価値の理解	-0.118 ±.960	0.086 ±.863	-2.853 **
価値への関与	0.002 ±.872	0.003 ±.891	-0.013
無関心	-0.003 ±.819	-0.003 ±.703	-0.005

* p<.05 ** p<.01

表5 年齢構成別による因子得点の比較

	20～29歳 (n=42)	30～39歳 (n=93)	40～49歳 (n=83)	50～59歳 (n=97)	60～69歳 (n=152)	70歳以上 (n=153)	F値
■京都マラソン開催が地域にもたらした社会的インパクト							
京都マインドの高揚	0.044 ±.627	0.132 ±.716	0.057 ±.832	-0.153 ±.842	-0.054 ±.903	0.009 ±.877	1.681
まちのうるおい	0.005 ±.891	-0.165 ±.885	-0.099 ±.859	-0.049 ±.784	-0.028 ±.880	-0.063 ±.762	3.439 **
環境的ダメージ	-0.074 ±.845	-0.097 ±.826	0.086 ±.890	-0.083 ±.758	-0.024 ±.810	0.048 ±.953	1.618
■スポーツ享受能力							
価値の理解	-0.189 ±.880	-0.182 ±.882	-0.254 ±.1030	-0.237 ±.882	0.127 ±.805	0.086 ±.885	8.970 ***
価値への関与	-0.187 ±.954	0.159 ±.835	0.066 ±.977	0.119 ±.777	-0.012 ±.842	0.003 ±.873	1.997
無関心	0.246 ±.863	-0.146 ±.711	0.177 ±.818	-0.099 ±.645	-0.034 ±.718	-0.003 ±.792	2.929 **

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

ツが有する「価値の理解」は、60歳以上の因子得点が高い傾向にあり、若年層ほど、その得点が低いことがわかる。また逆に、「無関心」の因子得点は、若年層ほど高い傾向にあり、スポーツ振興において鍵を握ると考えられる「固有価値の理解と継承」という文化享受能力に関しては、若干、将来への憂えを感じる結果が示された。

5. 翌年の京都マラソン開催の意図を規定する要因の検討

「京都マラソンを来年も開催してほしい」という市民の開催意図に、京都マラソン開催が地域にもたらした社会的インパクトに対する認識がどの程度規定するの

かということを明らかにするとともに、その両者の関係を媒介すると考えられるスポーツ享受能力の影響力を検討するため、階層的重回帰分析を試みる。それに先立ち、投入する変数、京都マラソンの開催が地域にもたらした社会的インパクトとスポーツ享受能力のそれぞれ3因子、合計6因子の相関を示した結果が表6である。ネガティブな解釈となる「環境的ダメージ」と「無関心」に関して、両者には正の相関が示され、逆に他の因子とは、負の相関が示されることから裏づけられるように、因子間の関係は概ね妥当であると判断した。「まちのうるおい」と「価値の理解」に関しても、相関係数が.0489と若干高いものの、分析に支障を來さないと判断し、そのまま投入変数として採用した。

表6 各因子間の相関

	京都マインド の高揚	まちの うるおい	環境的 ダメージ	価値の 理解	価値への 関与	無関心
京都マインドの高揚	—					
まちのうるおい	0.104 **	—				
環境的ダメージ	-0.053	-0.068	—			
価値の理解	0.225 ***	0.489 ***	-0.033	—		
価値への関与	0.288 ***	0.047	-0.103 **	0.074	—	
無関心	-0.238 ***	-0.048	0.129 ***	-0.037	-0.039	—

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表7 重回帰分析の結果（京都マラソン開催の意向）

投入変数	標準偏回帰係数(β)	
	モデル1	モデル2
京都マラソン開催が地域にもたらした社会的インパクト	京都マインドの高揚	0.527 ***
	まちのうるおい	0.226 ***
	環境的ダメージ	-0.272 ***
スポーツ享受能力	価値の理解	0.101 **
	価値への関与	0.120 ***
	無関心	-0.016
R^2 乗	0.436	0.455
	調整済み R^2 乗	0.433
	ΔR^2 乗	—
	F値	168.224 ***
		90.538 ***

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表7は、翌年における京都マラソンの開催意図を従属変数に設定して、階層的重回帰分析を行った結果である。まず、表中に数値は示していないものの、多重共線性の検討をした結果、モデル1においては、共線性の指標となるVIFの統計量が1.003から1.008の値が示され、モデル2においてもVIFが1.031から1.389であったため、多重共線性の恐れがない結果であると判断した。次いで、表7に示されるように、モデル1において、京都マラソンの開催が地域にもたらした社会的インパクトに関する3つの因子得点を投入した。その結果、3因子それぞれの標準偏回帰係数(β)の値は、いずれも有意であった。調整済みR2乗も.433と比較的説明力が高い結果が示された。つまり、京都マラソンの開催が京都市にもたらした影響を肯定的に捉えている人ほど、京都マラソンの開催意向が高まるという傾向が示され、京都マラソンが京都市の検証で掲げられている「歩くまち・京都」を実現すると感じ、京都マラソンが市民のおもてなしの心やまちに対する愛着心を高めていると思っている人ほど、京都マラソンの開催を望んでいることが明らかになった。また京都マラソンによってゴミの散乱やマナー違反によって、住民の迷惑がかかったり、京都の雰囲気や景観が損なわれたと感じていなかつたりする人ほど、京都マラソンの開催を望んでいる傾向も示された。言い換えれば、京都マラソン開催にあたって、環境的なダメージが与えられていないという認識を市民が持てるよう、大会運営に心がけることが、京都マラソンの開催意向を高め、それが結果的に「歩くまち・京都」のイ

メージをより定着させることにつながるものと考えられる。

さらに、モデル2の結果で示されるように、スポーツ享受能力の「無関心」以外の標準偏回帰係数は全て有意であり、調整済みR2乗も.450と、スポーツ享受能力の3因子を投入後、決定係数が有意に増加していることから、スポーツ享受能力の媒介効果が示された。すなわち、健康の保持増進や生活に潤いを与えてくれるものとしてスポーツを捉え、その価値を理解し、またスポーツが持つ魅力や価値により積極的にふれ、それにかかわろうとする意思が、京都マラソンの開催意図を高めてくれるということが明らかになった。

IV. 結語

本研究の目的は、京都マラソンを事例に取り上げ、都市型マラソンの開催にともなう社会的インパクトに対する地域住民の認識が、翌年のマラソン大会の開催意図にもたらす影響を明らかにすることにあった。またその両者の関係を規定するパラメータとして、市民のスポーツ享受能力を設定し、その媒介効果も検討した。その結果、主に以下のようなことが明らかになった。

(1) 京都マラソンの開催が地域にもたらした社会的インパクトに関しては、京都マラソンの開催が“京都らしさ”を示す気質を高めているという意識が示された「京都マインドの高揚」、来訪者による宿泊施設や飲食街がうるおったという意識が示された「まちのうるお

い」、そしてゴミの散乱やマナー違反によって、京都の雰囲気が損なわれたといった京都マラソンの開催が京都市内にもたらしたマイナスの影響に対する意識が示された「環境的ダメージ」といった3因子が抽出された。

(2) スポーツ享受能力に関しては、スポーツがもたらす効用に対する肯定的な態度を示す「価値の理解」、スポーツに対する積極的な関与を臨む態度を示す「価値への関与」、そしてスポーツへの無関心さや否定的な態度を示す「無関心」といった3因子が抽出された。

(3) 翌年における市民の京都マラソンの開催意図に関しては、京都マラソンの開催が地域にもたらした社会的インパクトの認識によって、40%以上が説明できることが明らかになり、またスポーツ享受能力の媒介効果も示された。

都市型市民マラソンは、単にツーリズム事業として経済波及効果が高いというだけでなく、ジョギングやランニングブームを背景に、健康的な都市イメージをアピールでき、交流人口の増加、観光名所や伝統産業のアピールにも繋がるひじょうに華やかな事業である。スポーツ事業と地域振興戦略の常套手段としてプロスポーツチームの設立がもてはやされたが、現在は、都市規模に関係なく、マラソンやロードレースの開催が「わかりやすい」都市マーケティングの常套手段となりつつある。ただ、「箱物」とは関係が薄いものの、リゾート開発や展覧会、またサミットや多様なイベントの開催にみられたように、総花的で、打揚花火的な行政の横並びの発想と揶揄されるような事業展開ではなく、事業の一貫性や連動性、さらには、本研究の結果に見られたように、まちの個性を活かしたり、開催地住民の能動的なイベントへの関与を促したりするようなことが今後、可能になれば、「紋切り型」のマラソンイベントに留まることにない新規性と創造性に富んだユニークな事業展開が期待できることであろう。

東京マラソンは、行政から一般財団法人へと主催団体が移行されたが、マラソンイベントの主催のほとんど行政機関である。またイベントの企画や運営には、それをアレンジする広告代理店の影響力が色濃く反映されるが、ノウハウの蓄積や組織力、また事業遂行の責任性を考慮すれば、現行の運営母体や組織間関係の

構図は、致し方ないものと思われる。Hatch and Schultz (2002) は、組織アイデンティティ・ダイナミクスモデルを提示し、組織内部の成員が分有するところの組織文化と、組織外部のオーディエンスが解釈するところの組織イメージとがダイナミックに交差するところに組織アイデンティティは構築されると述べている。つまり、駅伝発祥のまち京都といわれるよう、市民が京都マラソンというスポーツイベントに様々な期待を抱き、京都市とスポーツとのつながりに対するイメージを形づくっていくように、京都マラソンに訪れたランナーや運営にかかわったボランティア、また京都市民以外の人々は、様々な立場やコンテクストでイベントに参画し、京都でしか味わえない多様なコンテンツや文化に触れ、それを享受する。そして人々が京都をより身近に感じることによって、既存の京都に対するイメージやアイデンティティを再形成するのである。このように考えれば、大会開催回数を積み重ねたマラソンイベント、特に大規模なものではないローカルイベントでは、市民マラソン花盛りの状況下において、企画と運営にかかわる重要なステークホルダーである警察や競技団体との関係性を維持しつつ、ドラスティックな改革が図れないものか。例えば、これまで大会を陰ながら支えてきた地域内外のボランティアや地域住民を運営協力者として捉えるのではなく、パートナーとしてイベントの企画・運営に積極的に巻き込み、多様な関係性を活かし、従来のマラソンイベントには抱かれなかった事業創発を成し遂げてもらいたい。このような取り組みは、行政が掲げる政策へのかかわりを高めるばかりか、具体的な施策や事業への参画を促すものであり、「実体のある」市民参画型のまちづくりや健康増進やスポーツ参加率の向上だけに留まらない、スポーツと人との多様な関係をデザインする戦略的なスポーツ振興にも繋がるものと思われる。

謝辞

本研究は、京都マラソン実行委員会事務局のご支援とアンケートに回答して下さった京都市民のご協力による賜物である。ここに記して、感謝の意を表する。

文献

- 1) 藤原健固 (1987) 青梅マラソンの社会学的研究. 中京大学体育学論叢, 28 (2) : 77-90.
- 2) Hatch, M.J. and Schultz, M. (2002) The dynamics of organizational identity. *Human relations*, 55 (8) : 989-1018.
- 3) Hall, C.M. (1992) Hallmark tourist events: impacts, management, and planning. Belhaven: London.
- 4) 原田宗彦 (2009) スポーツ・ヘルスツーリズムの将来. 原田宗彦・木村和彦編著「スポーツ・ヘルスツーリズム」. 大修館書店: 東京, pp.227-248.
- 5) 池上 悅 (1993) 生活の芸術化: ラスキン・モリスと現代. 丸善ライブラー: 東京.
- 6) 岩谷雄介ら (2012) 国内市民マラソンの類型別発展策に関する研究. スポーツ産業学研究, 22 (1) : 63-70.
- 7) 北村尚浩ら (1997) スポーツイベントによる地域活性化への効果: 開催地域住民の評価に着目して. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 17: 47-55.
- 8) 工藤康宏 (2009) スポーツ・ヘルスツーリズムと地域振興. 原田宗彦・木村和彦編著「スポーツ・ヘルスツーリズム」. 大修館書店: 東京, pp.156-177.
- 9) 丸山智由 (2012) 市民マラソン開催による経済波及効果と今後の課題. Best Value, 28: 12-15.
- 10) 松永敬子 (2012) 「京都マラソン2012」におけるボランティア参加者の動機に関する研究: 自発的参加と非自発的参加との比較. 龍谷大学経営学論集, 52 (2/3) : 55-63.
- 11) 松澤甚三郎 (1994) 大衆マラソン参加者の意識と実態: 参加種目別の比較. 福井医科大学一般教育紀要, 14: 77-89.
- 12) 松澤甚三郎 (1995a) 大衆マラソンのタイム別にみた参加者の意識と実態. 福井医科大学一般教育紀要, 15: 67-75.
- 13) 松澤甚三郎 (1995b) 大衆マラソンの継続的参加に影響する要因の検討. 福井医科大学一般教育紀要, 15: 77-86.
- 14) 松澤甚三郎 (1996) 大衆マラソンの意識と状態: 福井マラソンの第6回大会と第16回大会の比較. 福井医科大学一般教育紀要, 16: 41-50.
- 15) 松澤甚三郎 (1997) 大衆マラソン参加者の意識と実態: 男子と女子の比較. 福井医科大学一般教育紀要, 15: 47-58.
- 16) 長積 仁 (2009) スポーツ・ヘルスツーリズムのインパクト. 原田宗彦・木村和彦編著「スポーツ・ヘルスツーリズム」. 大修館書店: 東京, pp.111-134.
- 17) 長積 仁ら (2008) 地域文化に対する享受能力がコミュニティへの帰属意識に及ぼす影響: 地域文化を活かしたまちづくりの有効性の検討. レジャー・レクリエーション研究, 60: 15-27.
- 18) 中島弘毅ら (2010) 地域スポーツイベントにおける経済波及効果の計測と地域活性化戦略の構築: 「第1回塩尻市ぶどうの郷ロードレース」の分析を中心に. 地域総合研究, 11 (1) : 97-133.
- 19) 西尾 建ら (2013) 参加型海外スポーツイベントにおけるアウトバンド・ツーリストの研究: ホノルルマラソン参加者の動機と制約要因について. スポーツ産業学研究, 23 (1) : 75-88.
- 20) 野川春夫 (1992) スポーツ・ツーリズムに関する研究: ホノルルマラソンの縦断的研究. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 7: 43-55.
- 21) 大宿貴史ら (2012) 地域スポーツイベントにおける経済波及効果及び健康増進に及ぼす影響: 「第2回塩尻市ぶどうの郷ロードレース」の分析を中心に. 松本大学研究紀要, 10: 13-44.
- 22) 山口志郎ら (2011) マラソンランナーの参加動機とPush-Pull要因に関する研究: NAHAマラソンにおける県内・県外参加者に着目して. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 4 (2) : 57-67.
- 23) 山下秋二ら (1984a) 健康マラソンの普及過程に関する研究: 影響者の経営学的機能・特性の視点から. 体育学研究, 29 (2) : 99-113.
- 24) 山下秋二ら (1984b) 健康マラソン参加者に生ずる固定層と浮遊層の弁別. 福井医科大学一般教育紀要, 4: 101-114.
- 25) 財団法人地域活性化センター (1999) 国際スポーツイベントによる地域づくりに関する調査研究事業報告書.

論文

ランニングの専門志向化からみたスポーツ消費者行動： 京都マラソン2012の参加に伴うランナーの消費支出

二宮浩彰 *, 松永敬子 **, 長積 仁 ***

Runners' sport consumer behavior and the developmental process of running specialization:
Expenditures accompanying participation in the 2012 Kyoto marathon

Hiroaki NINOMIYA*, Keiko MATSUNAGA**, Jin NAGAZUMI***

Abstract

The purpose of this research was to clarify runners' sport consumer behavior using the analysis framework of running specialization. An extensive Internet investigation was conducted for runners in the 2012 Kyoto marathon; valid responses were obtained from 3,521 runners. The findings of this study indicate that runners with a high specialization level had high expenditures in the areas of domestic travel, accommodation, food and drink, facility admission and usage, and sports equipment.

I. 緒言

レジャー白書2013(日本生産性本部, 2013)によると、スポーツ部門の余暇市場規模は3兆9,150億円で前年比0.6%のプラスとなり5年ぶりの増加となった。とくに、ランニング用品やスポーツ自転車の売上は堅調に推移していることが報告されており、健康や体力の向上を目指した余暇活動に対する関心が高まっていることがわかる。

日本産業地域研究所(2009)の調査によれば、ランナーはこだわったスポーツ用品を購入し、積極的に健康やファッショニズムに投資する意識が高いことが報告されている。また、スポーツにかかわり合うようになっ

た人は、使用的するスポーツ用具にこだわり、スポーツへの投資をする傾向にあることがわかっている(Bryan, 1979)。そして、ランニングに傾倒しているランナーほど、スポーツ用品の購入頻度が高く、スポーツ用具についての知識があることが指摘されている(Bloch et al., 1989)。このようにスポーツに対して投資を行っているランナーの市場を取り込んでいくには、ランニングに関与している度合いを探りながらスポーツ消費者行動を理解することが求められる。

スポーツ消費者行動を分析する方法には、ランニング市場を区分けするセグメンテーションのための分析枠組みとして、レクリエーションの専門志向化(recreation specialization)理論を適用することが有効で

* 同志社大学スポーツ健康科学部
Doshisha University, Faculty of Health and Sports Science
〒610-0394 京都府京田辺市多々羅都谷1-3
1-3Miyakodani, Tataro, Kyotanabe, Kyoto, 610-0394 JAPAN

** 龍谷大学経営学部
Ryukoku University, Faculty of Business Administration
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
67 Tsukamoto, Fukakusa, Fushimi, Kyoto City, Kyoto, 612-8577 JAPAN

*** 立命館大学スポーツ健康科学部
Ritsumeikan University, College of Sport and Health Science
〒525-8577 滋賀県草津市野路東1丁目1-1
1-1-1 Noji-higashi, Kusatsu, Shiga, 525-8577 JAPAN

ある。スポーツ参加者が専門志向化を高める過程のステージの違いから市場の細分化を試みることによって、スポーツ関連の商品やサービスに対して異なる期待や欲求をもつランナーのセグメントを導きだすことができる(二宮, 2011)。

そこで本研究では、京都マラソン2012の参加者を対象とした大規模調査を実施し、ランニングの専門志向化による分析枠組みを用いて類型化したスポーツ参加者のランニング活動への関与、およびマラソン参加に伴う消費支出を分析することによって、ランナーのスポーツ消費者行動を明らかにすることを目的とする。

II. 先行研究の検討

スポーツ参加者は、時間の経過とともに知識や技能を習得し活動への関与を高めていくことによって、そのスポーツへの取り組み方を深化させるようになり、より専門性を高めたレベルのステージで参加するようになる。このような行動を説明するには、アウトドアスポーツ参加者の行動を理解するための概念枠組みの一つであるレクリエーションの専門志向化という理論を応用することができる。専門志向化とは、「スポーツで使われる用具や技能、そして活動場面の選好によって反映される、一般から特殊に至る行動の連続体」(Bryan, 1977, p.175)である。

二宮(2005)は、ウインドサーファーを対象としたフィールドワーク研究において、専門志向化過程のステージが体験志向参加者、社交志向参加者、競技志向参加者、快楽志向参加者という典型的なキャリアパスで移行する傾向がみられ、ステージの違いによって行動様式が異なることを明らかにしている。

McIntyre and Pigram (1992)は、キャンパーがアウトドアスポーツへの専門志向化を高めていく過程のなかで、スポーツ参加者の活動状況といった行動局面、スポーツ参加者がもつ知識や技能といった認知局面、スポーツ参加者の興味や関心といった感情局面が、相互に影響し合い専門志向化を強化していると主張し、Bryan (1977)による専門志向化の測定にはコミットメント、自我関与、永続的関与のような感情的局面が含まれていないことを指摘した。

二宮ら(2006)は、McIntyre and Pigram (1992)による永続的関与項目が専門志向化に影響を及ぼすことを検証するため、ウインドサーフィンの専門志向化を測定する項目に採用し、主成分分析の結果から、自己表現次元、魅力次元、ライフスタイル中心性次元から構成される永続的関与の測定項目が第1主成分として抽出され強い説明力を有していることを突き止めた。

以上のように、スポーツ参加者が専門志向化過程のどの段階のステージをたどっているのかを把握するには、専門志向化構成要素の一つである感情局面に含まれる永続的関与が影響力をもつことを確認することができた。

III. 方法

3.1 専門志向化の測定項目

本研究では、スポーツ参加者の専門志向化過程を把握するにあたり、専門志向化の構成要素である感情局面に含まれる永続的関与の測定項目を採用する。McIntyre & Pigram (1992)がキャンパーの永続的関与項目として主成分分析によって抽出した魅力次元、自己表現次元、ライフスタイル中心性次元から各2項目を採用し、ランナーの永続的関与項目に改変した6項目を設定した。この永続的関与の測定項目は、二宮(2006)がウインドサーファーの専門志向化を測定する項目として採用し、強い説明力を有することを検証している。

ランニング活動に対する関与の測定に用いた項目は、魅力次元「ランニングをすることは、もっとも満足が得られるレジャー活動である。」「ランニングをすることは、自分にとってたいへん重要である。」、自己表現次元「ランニングをすることは、慌ただしい日常生活の気晴らしとなる。」「ランニングをすることは、自分がどういう人物なのかを伝えてくれる。」、ライフスタイル中心性次元「生活の大部分が、ランニングに関係していることを実感する。」「仲間とランニングについて、語り合うことが楽しい。」である。測定項目の信頼性を検討するため、クロンバッックの α 係数を算出したところ、信頼性の基準(ロドガー, 1997)を超える.843となり、内的整合性が高いと判断することが

できる。

3.2 専門志向化レベルの設定

永続的関与の各測定項目については、「まったく当てはまらない」から「ひじょうに当てはまる」までの7段階評定尺度を用い、0点から6点までの得点を付与する。専門志向化レベルの設定では、永続的関与6項目の合成得点を算出した連続変数をカテゴリー化し、0～22点のレベル1、23～26点のレベル2、27～30点のレベル3、31～36点のレベル4という4つのグループに分割して類型化した。

3.3 消費支出の測定項目

本調査では、国土交通省総合政策局旅行振興課(2004)が作成した「旅行・観光消費動向調査」調査票における旅行前、旅行中、旅行後の消費支出項目を参考にして、京都マラソンの大会準備と大会後の消費支出項目(17項目)，および大会参加の際の消費支出項目(42項目)を設定した。さらに、ランナー向け情報ウェブサイト「RUNNET」(アールビーズ、2012)が運営するオンラインショップの商品カテゴリーを参考にして、マラソン大会に参加する際に購入するスポーツ用品を検討し、スポーツ用品の消費支出項目(22項目)を独自に設定した。

3.4 仮説の設定

本研究では、専門志向化の先行研究(Bryan, 1979; Bloch et al., 1989; McIntyre and Pigram, 1992; 二宮ほか, 2005; 二宮ほか, 2006)を踏まえて、専門志向化したスポーツ参加者ほど、スポーツ活動への関与を高めてスポーツに投資するようになる、という理論仮説にもとづき次の作業仮説を設定する。

仮説1：専門志向化レベルが高いランナーはランニング活動への関与が高い。

仮説2：専門志向化レベルが高いランナーはマラソン参加にかかる消費支出額が高い。

3.5 分析方法

本研究では、京都マラソン参加者の専門志向化レベルを独立変数として、ランニング活動への関与、およ

びマラソン参加に伴う消費支出を従属変数として分析を行う。活動の関与については、クロス集計により分析しカイ二乗検定を行う。消費支出については、一元配置分散分析を用いて、Levene / Welchの等分散性の検定、およびTukey / Games-Howellの多重比較検定を行う。

3.6 データ収集

本調査は、イベント終了後の2012年3月12日から6月1日の期間にインターネット調査法を用いて実施した。京都マラソン2012公式サイト、および京都マラソン実行委員会からの参加者へのメール連絡において調査実施の案内をして調査協力依頼を行った。リンク先の「京都マラソン2012ランナー調査」ウェブサイトを介して、4,450人の参加者からの回答を得ることができた。

IV. 結果

4.1 サンプルの特性

収集したデータをクリーニングをした結果、3,521票の有効標本を得ることができた。サンプルを性別でみると、男性が84.7%、女性が15.3%であった。平均年齢は44.13歳であった。

4.1 専門志向化レベルからみた参加者の行動特性

表1には、京都マラソン参加者の専門志向化レベル別にみたランニング活動への関与についての結果を示した。

ランニング歴については、専門志向化レベル1の参加者は1年未満が比較的割合が高く、レベル2とレベル3の参加者は4～9年がもっとも多く、レベル4の参加者は4～9年と10年以上が多くなっている。

フルマラソン経験では、経験者の割合は専門志向化レベル1がもっとも低く、専門志向化レベルが高くなるほど、経験者の割合が高くなっている。

クラブ所属については、専門志向化レベル4の参加者が加入している割合がもっとも高く、専門志向化レベルが低くなるほど、未加入の割合が低くなっている。

ランニング競技力では、専門志向化レベル1の参加

表1 専門志向化レベルからみたランニング活動への関与

N=3519	ランニング歴				フルマラソン経験		クラブ所属		ランナー競技力				
	1年未満	1~3年	4~9年	10年以上	経験者	未経験者	未加入	加入	サブ3	サブ4	サブ5	5時間以上	初マラソン
専門化レベル1 n=915	147 16.1%	284 31.0%	259 28.3%	225 24.6%	650 71.0%	265 29.0%	836 91.4%	79 8.6%	26 2.8%	265 29.0%	273 29.8%	87 9.5%	264 28.9%
専門化レベル2 n=943	57 6.0%	264 28.0%	353 37.4%	269 28.5%	785 83.2%	158 16.8%	800 84.8%	143 15.2%	60 6.4%	340 36.1%	323 34.3%	64 6.8%	156 16.5%
専門化レベル3 n=892	32 3.6%	254 28.5%	348 39.0%	258 28.9%	789 88.5%	103 11.5%	716 80.3%	176 19.7%	79 8.9%	426 47.8%	232 26.0%	52 5.8%	103 11.5%
専門化レベル4 n=769	18 2.3%	203 26.4%	275 35.8%	273 35.5%	711 92.5%	58 7.5%	548 71.3%	221 28.7%	150 19.5%	379 49.3%	145 18.9%	37 4.8%	58 7.5%
合計	254 7.2%	1005 28.6%	1235 35.1%	1025 29.1%	2935 83.4%	584 16.6%	2900 82.4%	619 17.6%	315 9.0%	1410 40.1%	973 27.6%	240 6.8%	581 16.5%
χ^2 値／有意確					180,805 .000	163,069 .000	123,214 .000					391,897 .000	

者は、サブ4(4時間未満)、サブ4(3時間未満)、初マラソンがそれぞれ3割程度であり、レベル2の参加者はサブ4とサブ5の割合が高く、レベル3の参加者はサブ4が5割弱であり、レベル4の参加者はサブ4が半数近くを占めてサブ3が2割近くになっている。

以上のように、京都マラソン参加者の専門志向化レベルが高くなるほど、ランニングの専門志向化における行動局面への関与も高くなる傾向がみられ、統計的に有意な差があった。したがって、専門志向化レベルが高いランナーはランニング活動への関与が高い、という仮説1は採択された。

4.2 マラソン参加者の消費支出額

表2には、専門志向化レベル別にみた京都マラソンの参加に伴う費目ごとの平均消費支出額を示した。また、表3には、専門志向化レベル別にみた品目ごとの平均支出額を示した。

国内交通費については、専門志向化レベル1の参加者が10,837円でもっとも低い金額で、専門志向化レベル2の参加者が16,617円でもっとも高い金額となっている。専門志向化レベルが高くなるほど、国内交通費の平均支出額が高くなるという統計的に有意な差がみられた。

宿泊費では、専門志向化レベル1の参加者が4,653円であり、専門志向化レベル2・3・4の参加者との金額に開きがみられ、専門志向化レベル4の参加者が7,729円でもっとも高い金額となっている。専門志向化レベルが高くなるほど、宿泊費の平均支出額が高くなるという統計的に有意な差がみられた。

飲食費でも、専門志向化レベル1の参加者が4,705円でもっとも低い金額となり、専門志向化レベル4の

参加者が7,392円でもっとも高い金額となり、他の参加者と金額に差があった。専門志向化レベルが高くなるほど、飲食費の平均支出額が高くなるという統計的に有意な差がみられた。品目別でみると、食事・喫茶・飲酒と水産加工品の平均支出額に違いがみられた。

土産・買い物費については、専門志向化レベルによって平均支出額に統計的に有意な差はみられなかつた。品目別でみると、繊維製品(衣料品・帽子・ハンカチなど)の平均支出額に違いがみられた。

入場料・施設利用料では、専門志向化レベル1の参加者が175円でもっとも低い金額となり、他の参加者と金額に開きがあり、もっとも高い金額となったのは専門志向化レベル4の参加者であった。専門志向化レベルが高くなるほど、入場料・施設利用料の平均支出額が高くなるという統計的に有意な差がみられた。品目別でみると、立寄温泉・温泉施設・エステの平均支出額に違いがみられた。

旅行前支出については、専門志向化レベルによって平均支出額に統計的に有意な差はみられなかつた。品目別でみると、繊維製品(衣料品・帽子・ハンカチなど)と飲料・お酒・その他の食料品の平均支出額に違いがみられた。

旅行後支出、およびサービス料では、専門志向化レベルによって平均支出額において統計的に有意な差はみられなかつた。

スポーツ用品費については、専門志向化レベル1の参加者が19,104円で突出して高い金額となっており、レベル4の参加者が13,784円でもっとも低い金額となっている。専門志向化レベルがもっとも低い参加者が、2番目に専門志向化レベルが低い参加者、および専門志向化レベルがもっとも高い参加者と比べて、ス

表2 専門志向化レベルからみた京都マラソン参加に伴う費目ごとの平均消費支出額

費目	専門志向化	平均値	標準偏差	F値	有意確率	多重比較
国内交通費	レベル1	10837.34	14186.395	19.863	.000	レベル2,3,4
	レベル2	13839.28	15861.186			レベル1,4
	レベル3	14565.57	16017.526			レベル1
	レベル4	16617.82	16723.191			レベル1,2
	合計	13850.01	15806.562			
宿泊費	レベル1	4653.50	7482.469	13.729	.000	レベル2,3,4
	レベル2	6551.84	9904.370			レベル1
	レベル3	6775.39	10899.939			レベル1
	レベル4	7729.51	12348.597			レベル1
	合計	6372.26	10267.092			
飲食費	レベル1	4705.89	7227.065	11.596	.000	レベル2,3,4
	レベル2	5964.42	8543.645			レベル1,4
	レベル3	6519.94	11682.927			レベル1
	レベル4	7392.50	10763.827			レベル1,2
	合計	6090.07	9690.050			
土産・買い物代	レベル1	1309.43	5282.120	1.111	.343	-
	レベル2	1290.11	4355.119			-
	レベル3	1546.36	5614.511			-
	レベル4	1670.66	5240.117			-
	合計	1443.25	5131.339			
入場料・施設利用料	レベル1	175.14	754.895	6.827	.000	レベル2,3,4
	レベル2	341.55	1518.728			レベル1
	レベル3	422.56	1434.478			レベル1
	レベル4	474.59	2021.203			レベル1
	合計	347.89	1480.323			
旅行前支出	レベル1	14429.78	24030.243	2.228	.023	-
	レベル2	11979.48	18149.567			-
	レベル3	14250.98	29150.564			-
	レベル4	14501.95	26226.970			-
	合計	13743.61	24591.802			
旅行後支出	レベル1	4139.97	25193.507	.345	.793	-
	レベル2	3689.45	11072.569			-
	レベル3	3588.24	13975.469			-
	レベル4	4287.56	13311.627			-
	合計	3911.64	16910.528			
サービス料	レベル1	758.34	3493.264	.048	.986	-
	レベル2	805.43	3365.217			-
	レベル3	709.17	3163.545			-
	レベル4	811.95	3001.784			-
	合計	793.02	3271.851			
スポーツ用品費	レベル1	19104.00	59649.926	3.505	.015	レベル2,4
	レベル2	14558.20	22055.766			レベル1
	レベル3	15708.24	28316.752			-
	レベル4	13784.82	23986.530			レベル1
	合計	15862.69	37249.169			

スポーツ用品費の平均支出額が高くなるという統計的に有意な差がみられた。品目別でみると、ランニング用時計、インソール、ランニング関係書籍の平均支出額に違いがみられた。

以上のように、国内交通費、宿泊費、飲食費、入場料・施設利用料、スポーツ用品費の費目において、専門志向化レベルによって消費支出額に統計的に有意な差がみられた。したがって、専門志向化レベルが高いランナーはマラソンにかかる消費支出額が高い、という仮説2が採択された。

V. まとめ

本研究では、ランニングの専門志向化による分析枠組みを用いて類型化したマラソン参加者のランニング活動への関与、および都市型市民マラソンの参加に伴う消費支出を分析することによって、ランナーのスポーツ消費者行動を明らかにすることが目的であった。京都マラソン2012参加者を対象とした大規模調査を実施し、専門志向化理論に基づいたスポーツ消費者行動の実証研究を行ったことにより、以下の知見を得ることができた。

研究成果の一つは、永続的関与レベルが高いランナーは、ランニング歴、フルマラソン経験、クラブ所属、ランニング競技力、といったランニング活動への関与が高くなる、ということである。つまり、ランニングの感情局面において専門志向化したスポーツ参加者ほど、ランニングの行動局面において高く関与していることがわかった。

もう一つの研究成果は、永続的関与レベルが高いランナーは、国内交通費、宿泊費、飲食費、入場料・施設利用料、スポーツ用品費といった消費支出額が高くなる、ということである。つまり、ランニングの感情局面において専門志向化したスポーツ参加者ほど、マラソン参加に伴う消費支出が多いことが明らかとなつた。

ランニングブームの昨今、ランナーの消費者行動には、スポーツ用品へのこだわり消費や、健康やファッションへの投資が特徴としてみられることが報告（日本産業地域研究所、2009; Bryan, 1979; Bloch et al.,

1989）されているが、これまで理論的な分析枠組みを用いた実証研究は行われてこなかった。したがって、本研究から得られた知見はスポーツ消費者行動を理解するうえで学術的な貢献をすることになろう。

都市型市民マラソンを開催することによって、参加者の出費や投資を見込むことができるが、本研究では、マラソン参加に伴う消費支出額を算出したことによって、自治体やマラソン実行委員会にとって有益な情報を提供することができた。さらに、専門志向化理論による分析枠組みを用いたことによって、異なる期待や欲求をもつスポーツ消費者による消費支出傾向を把握した。このことにより、専門志向化の概念がセグメンテーションの有効な変数であることを例示することができた。

しかしながら、研究の限界としては、専門志向化の測定指標を設定する際に、永続的関与項目だけを採用していることが挙げられる。本研究において、永続的関与項目が専門志向化を測定する項目として信頼性が高いことが確認できており、感情局面である永続的関与と行動局面である活動への関与との関連性が高いことが結果として得られたとはいえる。より再現性の高いスポーツ消費者の専門志向化を測定するための多次元の測定指標を開発することが今後の課題となろう。

謝辞

京都マラソン実行委員会事務局には、インターネット調査の依頼や京都マラソン関連資料の提供において多大なるご協力をいただいた。また、たいへん多くのランナーの方々に調査へのご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表する。

参考文献

- 1) アールビース (2012) RUNNET (<http://runnet.jp/>).
- 2) Bloch, P.H., Black, W.C., and Lichtenstein, D.) 1989) Involvement with the equipment component of sport: Links to recreational commitment, *Leisure Sciences*, 11, pp.187-200.
- 3) Bryan, H.) 1977) Leisure value systems and

- recreational specialization: The case of trout fishermen, Journal of Leisure Research, 9) 3), pp.174-187.
- 4) Bryan, H.) 1979) Conflict in the great outdoors: Toward understanding and managing for diverse sportman preferences, The Birmingham Publishing: Alabama, pp.1-98.
- 5) 国土交通省総合政策局旅行振興課 (2004) 旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究IV：旅行・観光消費動向調査と経済効果の推計, pp.87-93.
- 6) McIntyre, N. and Pigram, J.J.) 1992) Recreation specialization reexamined: The case of vehicle-based campers, Leisure Sciences, 14, pp.3-15.
- 7) 日本生産性本部 (2013) 2012年の余暇関連産業・市場の動向, レジャー白書2013, 文栄社(東京), pp.65-111.
- 8) 日経産業地域研究所 (2009) ランナーは元気な消費者, 日経消費ウォッチャー, 2009) 3), pp.24-27.
- 9) 二宮浩彰 (2011) スポーツへの社会化と専門化, 原田宗彦編, スポーツ産業論第5版, 杏林書院(東京), pp.95-107.
- 10) 二宮浩彰・菊池秀夫・守能信次 (2005) レクリエーションの専門志向化過程からみたウンドサーフィン行動：レジャーの社会的世界におけるフィールドワークを通じて, レジャー・レクリエーション研究, 54, pp.1-10.
- 11) 二宮浩彰・菊池秀夫・守能信次 (2006) 専門志向化の概念枠組みによるウンドサーファーの類型化とその測定指標, レジャー・レクリエーション研究, 56, pp.1-10.
- 12) ロドガー, M.: 西澤由隆・西澤浩美訳 (1997) SPSSによるサーベイリサーチ, 丸善, pp.189-207.

傾斜板が走り高跳びの踏切動作に与える即時的效果

磯崎大二郎*, 小山宏之*, 田中康雄* 大月菜穂子, 小宗真*,
柴田篤志*, 野上大介*, 水口善文*, 山田朋花*

Immediate Effects of the Use of Modified Take-off Boards on the Take-off motion of the High Jump during Training

Daijiro ISOZAKI*, Hiroyuki KOYAMA*, Yasuo TANAKA*, Nahoko OTSUKI*, Makoto KOMUNE*,
Atsushi SHIBATA*, Daisuke NOGAMI*, Yoshifumi MIZUGUCHI*, Tomoka YAMADA*

Abstract

This investigation was aimed at clarifying immediate effects of inclined and flat boards on the take-off motion of the high jump. Six male decathlon athletes were videotaped with three high-speed cameras. Three kinds of boards were two tested, two upward-inclination boards (3° and 5°) and a flat board (30mm high). The subjects performed pre and post jumps using their own techniques before and after use of each board to test their effects. There were no significant differences of velocity of the body and motion variables during the take-off between pre and post jumps. However, in Subject N, desirable changes were observed in take-off knee flexion and backward lean of the body after using 3° board. These indicated that there were no common immediate effects on take-off motion of the high jump by the modified take-off boards, but there have a possibility to be an effective training tool by using individually.

key words: high jump, immediate effect, inclined board

I. 緒言

走り高跳びのパフォーマンスを高めるためには助走で得た水平速度を利用し、踏切動作によってより高い鉛直速度を獲得することが必要である。日本トップ選手と高校トップ選手との踏切動作を比較した研究では、踏切脚膝関節と振上脚大腿、体幹の傾きの角度に違いがあり、日本トップ選手は踏切脚膝関節の大きな屈曲伸展と振上脚大腿の素早い振上げ、そして体幹を後傾姿勢に保持して踏切を行っていた。このような日本トップ選手の動作は大きな鉛直速度を生み出すものであり、競技者はこのような動作を、トレーニングを

通じて獲得する必要がある。

トレーニング現場では、動作を獲得するために、指導やドリルの反復、そして教具といった様々な手段を複合的に活用している。小山(2009)は走り幅跳びにおいて、踏切地点に傾斜板を設置することによって、踏切局面で即時的な効果があることを報告しており、走り高跳びにおいても、踏切地点に傾斜板を設置することで、踏切局面に影響を与えることが推測される。しかし、指導書の多くは教具を用いたトレーニングに関する記述は、弾むロイター板を設置し、空中動作を獲得するものしかなく、踏切動作に関する教具は見当たらない。そこで本研究では、走り高跳びの踏切地点に

* 京都教育大学バイオメカニクス研究室
Kyoto University of Education
Fujinomori-cho, Fukakusa, Fushimi, Kyoto 612-0863

傾斜板を設置し、踏切動作に与える即時的效果を明らかにすることで指導現場に有益な知見を提供できると考えられる。

以上のことから、本研究の目的は傾斜板が踏切動作に与える即時的效果をキネマティクス的に明らかにすることとした。

II. 方法

1. 被験者及び実験環境

被験者は大学混成競技者男子6名であり、身長は $1.77 \pm 4.9m$ 、ベスト記録は $1.83 \pm 6.8m$ 、陸上歴は 7.3 ± 3.3 年であった。実験に先立ち、目的、内容について十分に説明し、参加の同意を得た。

図1は実験設定を示している。京都教育大学陸上競技場内走り高跳びピットにハイスピードカメラ(EXILIM F-1)を設置し、固定撮影を行った(300fps)。傾斜板の傾きによる動作の違いを明らかにするため、高さ3cmの平行板、傾斜3度の3度板、傾斜5度の5度板の3種類を用意した。傾斜板は全て60×90cmの大きさで作製した。

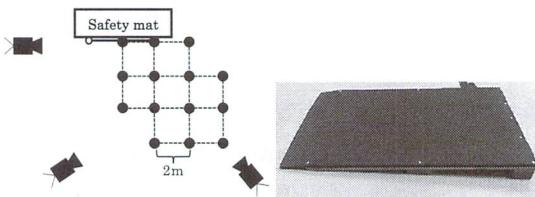


図1 実験設定（左脚踏切の場合）（左）及び傾斜板（5度板）（右）

2. 実験プロトコル

実験は3日に分けて行った。各日とも固有の跳躍を3から5本、その後に傾斜板を用いた跳躍を7から10本、最後に固有の跳躍を再度3から5本行わせた。傾斜板を用いる順番による影響を除くため被験者によって異なる順番で行わせた。分析対象は踏切板使用前後の固有跳躍において最高記録の成功試技あるいは、被験者の感覚が最もよかつたものとした。

3. データ分析及び算出項目

踏切足接地の10コマ前から踏切足離地の10コマ後までを分析範囲とし、動作解析システム(Frame-DIAS IV: DKH社製)を用いてデジタル化した。得られた座標点を同期ランプの点灯で同期し、三次元DLT法を用いて三次元座標に変換した。三次元座標は身体計測点ごとにWells and Winterの方法(1980)によって最適遮断周波数を決定し、平滑化を行った(X座標: 6~12Hz, Y座標: 9~15Hz, Z座標: 6~12Hz)。算出項目は、身体重心高、重心水平速度、重心鉛直速度、踏切脚膝関節角度、振上脚大腿角度、体幹前後傾角度であった。試技により、接地時間が異なるため、踏切足接地から離地までを100%に規格化した。なお、踏切中間は踏切脚膝関節角度の最大屈曲時とし、50%地点に相当する。各傾斜板の使用前後における動作変化を検定するため、使用前後の各パラメータ間で対応のあるt検定を行った。

III. 結果及び考察

走り高跳びの跳躍高に最も大きな影響を与えるのは、踏切離地時の重心鉛直速度である。各傾斜板の使用前後において、踏切離地時の鉛直速度に有意な差はみられなかったまた、踏切動作に関するパラメータも有意な変化はなかった。これらは、各傾斜板に共通した即時的效果がなかったことを示すとともに、傾斜板が踏切動作に与える影響が個人によって異なる可能性があることを示唆している。一方、共通した即時的效果はなかったが、被験者の中にはパフォーマンス要因の一つである離地時の鉛直速度が使用前に比べ増加した被験者がみられた。

表1は被験者Nの各板の使用前後における離地時の鉛直速度と増加率を示している。使用後の鉛直速度増加率は3度板が最も大きく100%を超えていた。このことは、3度板の使用後の鉛直速度が増加していることがわかる。そこで、3度板使用前後のキネマティクスに着目する。

図2は被験者Nの3度板使用前後の踏切脚膝関節角度、振上脚大腿角度、体幹前後傾角度を示している。3度板使用後の踏切脚膝関節が、使用前と比べ大

きく屈曲伸展していた。振上脚大腿は踏切足接地により後方の位置にあった。体幹前後傾は踏切の後半でも後傾姿勢が保たれていた。一般的に、走り高跳びの踏切では膝関節があまり屈曲しないことが望ましいとされている（深代，1990）。しかし、大きな鉛直速度を獲得するには、大きな力積を獲得する必要があり、その方法の一つとして踏切接地時間を作長する方法が考えられる。日本トップ選手と高校生を比較した研究では、日本トップ選手の踏切接地時間の方が長く、その原因として踏切脚膝関節の屈伸運動と後傾姿勢が関係したことが示されている。すなわち、一般的にいう膝関節が大きく屈曲し、つぶれたとよばれる跳躍にならない範囲では、膝関節の大きな屈伸と後傾姿勢からの起こしを利用することは鉛直速度の獲得に有効であると考えられる。これらのことから考えると、被験者Nの3度板使用後に引き出された動作の変化は、日本トップ選手の動作パターンに近くなり、鉛直速度の獲得に有効な変化であったと示唆される。

表1 被験者Nの各板使用前後の鉛直速度と増加率

	平行板	3度板	5度板
使用前	3.48	3.43	3.47 ms ⁻¹
使用後	3.50	3.50	3.21 ms ⁻¹
増加率 (%)	100	102	93

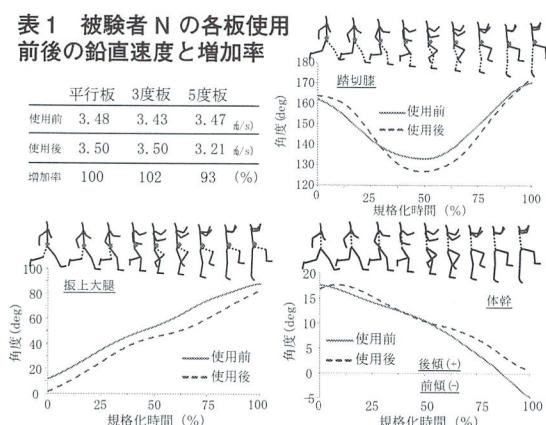


図2 被験者Nの3度板使用前後の踏切脚膝角度(右上), 振上脚大腿角度(左下), 体幹前後傾角度(右下)

IV. まとめ

傾斜板使用による全体に共通した即時的效果はみられなかった。これは、個人差が大きく影響していると考えられる。そこで、3度板使用後に鉛直速度が増加した被験者に着目すると、日本トップ選手の動作パターンに近い動作が引き出されていた。これらのことから、鉛直速度の増加を促す動作が引き出される傾斜板の即時的效果が示唆された。

V. 今後の研究

本研究では事例的に検討し、効果の高い傾斜板とそうでないものがあることが示された。しかし、指導現場での利用を考えると、今後は選手のタイプと傾斜板の効果の関係を明らかにし、個に応じた処方が提示できる研究を進めていく必要がある。また、傾斜板使用時の跳躍を分析し、使用時の動作と使用後の動作の関係もあわせて行っていく必要がある。

文献

- 深代千之 (1990) 跳ぶ科学 : 大修館書店
 小山宏之 (2009) 走幅跳の技術トレーニング手段に関するバイオメカニクス的研究 : 筑波大学博士論文
 Wells, R. P., D. A. Winter (1980) Assessment of signal and noise in the kinematics normal, pathological and sporting gaits. Human Locomotion, I, 92-93.

(受稿 : 2013.3.8; 受理 : 2013.3.18)

短 報

半構造化面接法による歩行の動作観察の比較検討 ～膝関節疾患患者における検討～

大桐将^{*1}, 弓永久哲^{*2}, 山田勝真^{*3}, 来田宣幸^{*4}

Comparison of gait analysis by the way of Semi-structured interviews
-the case of knee injury's patient-

Masaru OOGIRI^{*1}, Hisanori YUMINAGA^{*2}, Katsuma YAMADA^{*3}, Noriyuki KIDA^{*4}

Abstract

The purposes of this study were to elicit experimental knowledge from physical therapist, to elucidate motion analysis points related to gait of knee injury's patient, to classify them into categories, and to investigate any commonality among them. Semi-structured interviews were conducted to five physical therapists. Each interview was requested to comment about the gait of a knee injury's patient, which videotaped beforehand. The comments were recorded, dictated literally and divided into segments on the basis of meaning unit. Based on the properties of the various meaning units, they were gathered and classified into categories. As a result, we classified them into seven categories. It was shown that we divided common categories of the portion of injury and the therapy's portion and different categories of others irrespective of years of experience in physical therapy. It is considered that it may be occurred variant therapeutic effect to the different of ability to analyze a motion on physical therapists respectively.

key words: semi-structured interview, physical therapy, gait, motion analysis

I. 緒言

理学療法士(以下PT)は、日常の診療において患者の動作を観察し分析することを理学療法技術の核と捉え、仮説検証作業を重視している(木村, 2006)。仮説検証作業とは、患者の動作を観察・分析し、そこから問題点を予測し、予測した問題点に対し治療を実施

し、治療効果を判定するという一連の過程である。しかし、動作を観察する能力や方法は各PTにより異なり、さらには動作観察から導き出された問題点に対する治療アプローチも各PTにより様々で、動作観察の良し悪しにより治療効果が異なることがある。これは診療報酬の観点から科学性のある治療行為であるとは言い難い側面を有している。それにもかかわらず、理

*1 山田整形外科病院 リハビリテーション科
Department of Rehabilitation, Yamada Orthopedic Surgery Hospital
Honkata, Otsu, Shiga 520-0242

*2 関西医療学園専門学校 理学療法学科
Department of Physical Therapy, Kansai Vocational College of Medicine
Karita, Sumiyoshi-ku, Osaka 558-0011

*3 蘇生会総合病院 リハビリテーション科
Department of Rehabilitation, Soseikai General Hospital
Shimotoba, Fusimi-ku, Kyoto 612-8473

*4 京都工芸繊維大学 大学院 工芸科学研究科
Graduate School of Science and Technology, Kyoto Institute of Technology
Gosyokaido-cho, Matsugasaki, Sakyo, Kyoto 606-8585

学療法教育課程の中でも動作観察に関する教育方法の標準化や統一化はなされてはおらず、動作観察能力の差が何であるかを明確に示した検討も行われていないのが現状である。

先行研究では、動作観察能力が各個人の知識や経験という主観的要素により影響され、理学療法士の経験年数に依存しないという報告もされている（盆小原、2008）。そのため、本研究は動作観察能力の要因を検証するための前段階として、PTの動作観察から問題点予測までの思考過程を比較検討することを目的としてインタビュー調査を実施した。

II. 方法

対象者は、現職のPT5名であった。各PTは同一の養成校出身者で、臨床経験年数は11年目、10年目、9年目、8年目、5年目であった。

患者の動画をPT5名に観察させ、観察後各PTに対して第三者のPTがインタビュー調査を実施した。今回動画で用いた対象患者は、1ヶ月前に右膝蓋骨骨折を受傷（図1）した症例であり、観察対象動作は

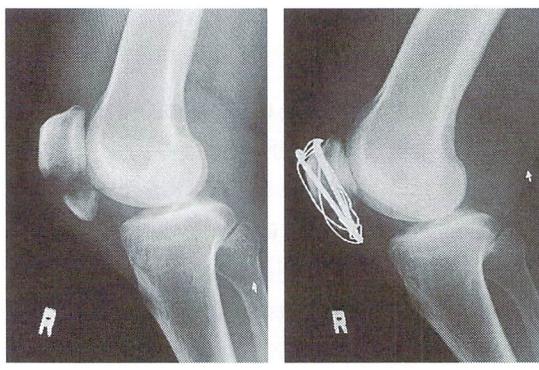


図1 膝蓋骨骨折レントゲン所見比較

歩行動作とした。動画を観察したPTには先入観を持たせないため患者の情報は一切開示しなかった。PTの動画観察時間は30秒程度の動画を前後面・左右側面共に2回ずつ計2分程度とした。

対象者であるPTへのインタビュー方法は、半構造化インタビューとした。半構造化インタビューとは、

事前に大まかな質問事項を決めておき、会話の流れを踏まえて詳細な質問を行っていく方法である。利点は質問事項に対する自由な回答が得られる点で、また短時間で調査を行うことが可能である。本研究では1人当たり約10分程度のインタビュー調査を実施した。インタビュー内容は、観察された歩行の異常性や、そこから考えられる問題点などについて質問を実施した。その理由としてPTの動作観察手法は各個人によって表現方法や考え方方が非常に異なっており、インタビュー内容がまとまらない可能性があり、分析が困難となることが予測されるからである。このため、動作観察から問題点の推測という一連の流れから逸脱しないように配慮し、今回の質問項目を考えた。

データ分析方法は川喜田二郎が提唱したKJ法のB型叙述化の方法を参考にした（川喜多、1970）。インタビュー調査で得たデータから研究内容に関連する部分を抽出し、抽出した言葉を類似性に従い分類してグループ化を行い、さらにグループ間の類似性を基にカテゴリー化を実施した。

本研究では、実験前に口頭で説明し同意を得た。また同意を得た上でインタビュー内容をICレコーダーで録音した。録音中に個人情報が特定できる発言があった場合には、その部分は削除しテープ起こしを行った。なお、動画内の患者には本研究に対しての説明と同意を得た上で、患者の安全性についても十分に配慮し撮影を実施した。

III. 結果及び考察

今回、右膝蓋骨骨折患者の歩行動作を観察し、PTとしてどのような思考過程で問題点を導くかについてインタビュー調査を用いて分析した。以下、本稿ではカテゴリー名に【】を用いた。また、発言内容について「」を用いて示した。分析結果から【予測された障害部位】、【問題と考える歩行の相】、【問題点】、【治療選択部位】、【量的評価】、【異常歩行の相】、【筋力】の7つのカテゴリーに分けることができた。これは、PTの思考過程を反映する項目が抽出された。

【予測された障害部位】とは、動作から問題点を考えいく過程で、そこから導き出された部位のことであ

る。【問題と考える歩行の相】とは、一歩行周期の各相（立脚初期・中期・後期、遊脚初期・中期・後期）の異常性から問題点を考えていくため、歩行のどの相において問題が生じているかを考えることは非常に重要である。【問題点】とは、PTは動作を改善すること目的とし治療することから、障害部位と治療対象部位である問題点が異なることがある。【治療選択部位】とは治療をする部位が、障害部位や問題点とは異なることがある、その部位を治療することにより動作が変わる可能性がある部位が治療選択部位となる。【量的評価】とは大まかに動作を捉えた場合の表現を量的評価という。【異常歩行の相】とは異常性が見られる歩行の相で、問題と考える相とは異なることもある。【筋力】とは、動作を遂行するために作用する筋の力の事である。

まず、歩行を観察し、5名全員が右膝の障害であると回答を得た。問題と考える歩行相に対しては、立脚期と遊脚期に意見が分かれた。立脚期で挙げられた回答の中には、「足部が外転位となってしまっている。」ということや「右下肢を振り出す際に体幹の右回旋が生じる。」「体幹の回旋が乏しい。」等の回答が挙げられた。遊脚期で挙げられた回答では、「右膝の屈曲がみられない。」ことや、「患側骨盤の後方回旋」、「骨盤の挙上」等が挙げられた。問題点に関しては「右膝関節屈曲可動域制限」、「右膝関節伸展筋力」という具体的な問題点を挙げたPTもいれば、「股関節周囲筋力」、「足関節背屈ROM」が問題であると挙げたPTもあり一致した見解は示されなかった。治療選択部位に関しては、ほぼ全員が「右膝関節屈曲可動域制限」を挙げており一致した見解が示された。

本研究に参加したPTの経験年数は、上から11年目、10年目、9年目、8年目、5年目であったが、経験年数に関わらず、共通する項目と考えの相違がある項目とが認められた。共通する項目は、【障害部位】と【治療選択部位】であった。一方、その他の項目に関しては、考えの相違が確認された。

これは各PTにより観察内容が異なるということと、そこから派生する治療アプローチが異なることが示唆され、治療アプローチが異なることで、治療結果が異なる可能性があり、PTによって治療効果が違うということも十分に考えられる。

理学療法は、各個人の知識や技術を駆使し患者に対しアプローチする。それが理学療法の魅力であり、患者の回復に携われることは大変有意義なことである。しかし、科学性を重視している医療職であることもまた事実であり、日本理学療法士協会も科学的根拠に基づいた理学療法(EBPT)を掲げ、根拠に基づいた治療を行うことを強調している。その中で、今回の結果が示すことは、各PTの動作観察能力により分析結果が異なり、さらにはそれにより選択される治療方法と治療効果が異なる可能性があると考えられる。

今回の結果は、各々PTによって考え方が異なっていることが示された。これは、各個人の知識や経験により理学療法技術が決定されることが原因であると考えられる。このことで、PT各個人の能力に治療効果の相違が出ることは容易に想像され、一定した治療成績が見込めない可能性があることについても十分に考えられるのではないだろうか。

IV. 結語

今回の研究目的は、動作観察能力の要因を検証するための前段階としてインタビュー調査を実施することにより、PTの動作観察時の分析から問題点の予測を検討することとした。本結果のみではPTの思考過程を理解するには不十分であるが、今回のように各PTによってこれほどまでに考えが異なることを報告した研究は現在まで無い。このため、今回の結果はPTの動作観察における思考過程を理解する一助となったと考えられる。

文献

- 木村貞治(2006) 理学療法における動作分析の現状と今後の課題. 理学療法学, 33: 394-403.
盆小原秀三, 山本澄子(2008) 観察による歩行分析の信頼性と正確性について. 理学療法科学, 23: 747-752.
川喜多二郎(1970) 続・発想法, 中央公論社 p316.
(受稿: 2013.3.8; 受理: 2013.4.18)

編 集 後 記

京都滋賀体育学会は還暦を迎えました。還暦とは、60年で干支が一回りして再び生まれた年の干支にかえることから、元の暦に「かえる」、「戻る」という意味でこのように呼ばれています。干支は本来、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の十干と、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二支を組み合わせたものをいい、60通りの組み合わせがあります。60年で干支が一回りし、生まれ年の干支に戻ることから、「還暦」というようになったようです。すなわち、新たな出発の時です。この記念号ではこれまで学会活動の報告を掲載しています。その内容は目を見張るものがあります。体育学の発展に当学会が貢献してきた事が記録されています。今後、学会がどの様に活動を行っていくかでこれから学会の真価が問われます。

「巨人の肩の上に立つ」というメタファー(隠喩)が個人の学問・研究の発展においてよく使われます。「もし私が他の人より遠くを見ているとしたら、それは巨人の肩の上に立っているからだ。」というアイザック・ニュートンの言葉です。偉大な業績を挙げたニュートンでも、「先人の業績の積み重ねという巨人の肩の上に乗った小人に過ぎない。」という彼の謙虚な姿勢を示した言葉です。我々は、過去から蓄積されてきた学問・科学の成果を活かし利用するために、過去の偉大な巨人の肩の上に登り、より遠くを見渡せる視点・視野を獲得しなければなりません。過去から蓄積されてきた研究の成果を基に、巨人の肩の上に立つこと、巨人の肩の上から新しい世界を臨む視点・視野を拓くことが学会の発展につながると考えます。この60年間に培われた業績という肩の上に立ち、研究を深め、社会へ貢献しいくことが学会にとって重要でしょう。

最後になりましたが、執筆いただいた先生方には資料を紐解きまとめて頂きこころより感謝申し上げます。

(編集委員長 寄本 明)

京都滋賀体育学研究 第29巻 第2号

平成26年2月14日印刷

平成26年2月20日発行

編集発行者 岡本 直輝

印 刷 者 サンライズ出版株式会社

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1

發 行 所 京都滋賀体育学会

〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1 京都教育大学体育学科

中 比呂志

TalkEye Lite

お求め易い
100万円台の
アイカメラです

装着式の眼球運動測定システムで、眼球検出と視野にUSBカメラを使用し、処理用パソコンに直接接続するシンプルな構成です。最新の画像処理技術を採用し、汎用PC上で眼球運動を検出します。処理用パソコンのみの電源で動作するため、フィールドへの持ち出しが簡便になり、長時間での使用が可能です。



【仕様】

検出方式	瞳孔画像処理方式
検出部形態	ゴーグル式 単眼（左右付け替え）
検出部照明光	850nm
検出範囲	左右50度、上20度、下40度
検出分解能	0.1度（ \pm 20度）、0.5度（全域）
検出誤差	1度以下（ \pm 20度）、2度以下（ \pm 40度）、3度以下（全域）
サンプリングレート	30Hz
カメラ調整機構	眼球：なし、視野：上下のみ
眼鏡使用	可（一部不可の場合あり）
CCU	寸法：約67(W) × 28(D) × 67(H)mm 質量：約80g
検出部	寸法：約190(W) × 200(D) × 90(H)mm 質量：約70g
OS/視野画像保存先	Windows7/HDD
視野画像保存形式	MJPEG形式 (.AVI)
データ保存形式	テキスト形式 (.CSV)
データメモリ数	200,000個（30Hzで約110分）



人間の可能性を科学する

竹井機器工業株式会社 <http://www.takei-si.co.jp>

大阪支店 〒532-0011 大阪市淀川区西中島6-7-8(大昭ビル7F) TEL. 06(6304) 6015 FAX. 06(6304) 1538

KYOTO AND SHIGA JOURNAL OF PHYSICAL EDUCATION, HEALTH AND SPORT SCIENCES

60th anniversary number of foundation

**Edited by Kyoto and Shiga Society of Physical Education,
Health and Sport Sciences**